

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和30年9月17日日本国官報第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・第6巻第4号

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

第3種郵便物認可・第6巻第4号・昭和36年4月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

裏窓

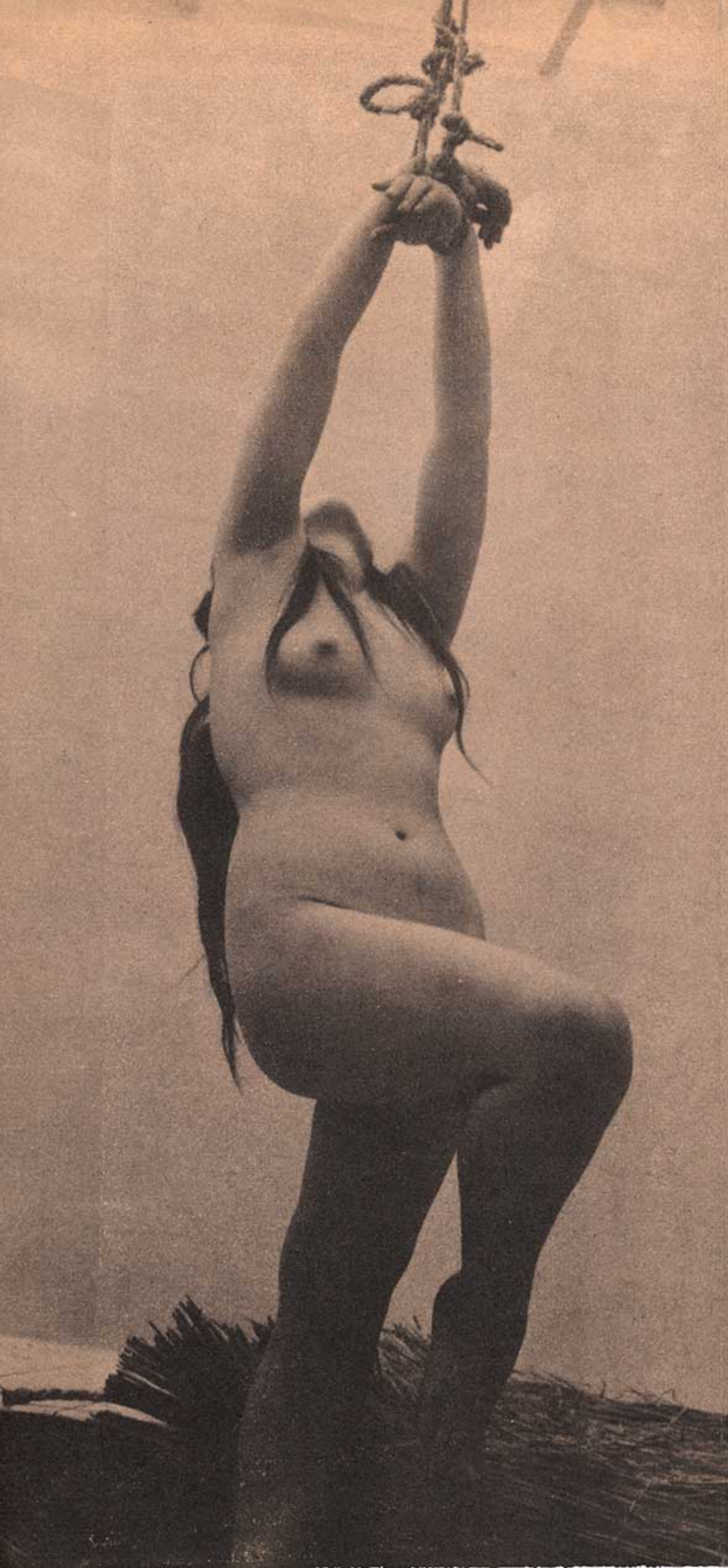
- 絵物語・責め具製造人
- 悦虐の園④女奴隷の祈り
- 絵物語・照姫呪縛
- ネオナチズムの地下組織
- 飢えた眼は階段に光る
- マゾヒズムへの誘惑④
- 奇妙な女護が島
- 呪われた乳房
- スカートの下の世界
- 悦虐フォト傑作選
- とらじを縛るべし

4月号

定価 150円

IBM 1807

東京都中野区江古田1の2302 (振替口座) 株式会社 久保書店
東京 10756



北方艶色
放浪記

ツンドラの欲情

杜山澄夫

シベリアの曠野に放浪する異民族の中に日本人がたった一人まぎれこんだ。秘境の空の下にくりひろげる赤裸々な情痴物語。

定価 130円
送料 24円

異色
監獄秘話

地獄の野良犬ども

村岡藤里

著者自身の体験による獄内の種種相！彼等は何を求め如何なる心理状態にあるのか？懲罰、脱獄、死——倒錯せる性の悶え。

定価 130円
送料 24円

世界
残酷実話

女囚地獄の十八ヵ月

宇治研介

世界を驚嘆させたナチ婦人収容所の恐るべき惨状と現代アメリカ社会の裏面に巣喰う女奴隷売買団の秘められた記録の全貌。

定価 130円
送料 24円

東京都・中野区・江古田1の2302

(振替口座・東京10756・久保書店宛)

株式会社 あまとりあ社

裏窓・四月号・目次

★表

紙……イースト・ウエスト特約★

巻頭

吊り責め……………(15)

★目次カット……………秋吉 巒★

グラビア

あぶすとおりの

責め具製造人……………

文・九十九十郎
画・沖 涉 司……………(9)

『M少年の』

悪魔の唇……………

田沼 醜男……………(20)

時代巷談

呪われた乳房……………

小田 桐 爽……………(28)

ある男の告白

★音に憑かれて★……………

作・松平 莊司
画・秋吉 巒……………(68)

読者随筆・美食ストーリー抄……………

聖 粒三……………(46)

日常生活にひそむ

マゾヒズムへの誘惑……………

黒田 史朗……………(38)

秘切支丹話

井上筑後守覚え書……………

明石 沙子……………(78)

奇妙な話

とらじを縛るべし……………

阿 里 俠 二……………(58)

★乱歩文学における耽美趣味について……文津部 三郎

(92)



ニューリス ストーリー 飢えた眼は階段に光る 永井卓二郎 (86)

グラビア

荒縄と黒髪 of 構図……………吉田 久 (99)
障子と女……………深森映士 (115)



奇妙な女護が島……………豊田一狼 (124)

オフセット 絵物語

照姫呪縛……………作・島本春雄 画・堂昌一 (107)

裏窓 タウン

◎洋画に現われたホモ◎女囚と共に三十分◎海賊島の蟹責め……………
◎黒いヒモのリンチ◎救出後のセンス◎ラバレーターとM感覚……………
◎オナラとマゾ◎監獄の名称◎さすがは女探偵◎金閣寺の雪姫…………… (134)

黒髪執着

黒髪ざんげ (続・青春編)……………志摩不二 (144)

マゾヒスト 随想録

スカートの下の世界 (3)……………阿麻哲郎 (154)

★★★★

裏窓雑報・新映画紹介……………砂路 寛 (164)
愛続者短評…………… (184)

海外 実話

ネオ・ナチズムの地下組織・森脇 光 (170)

座談会

晴雨画伯を偲んで…………… (176)

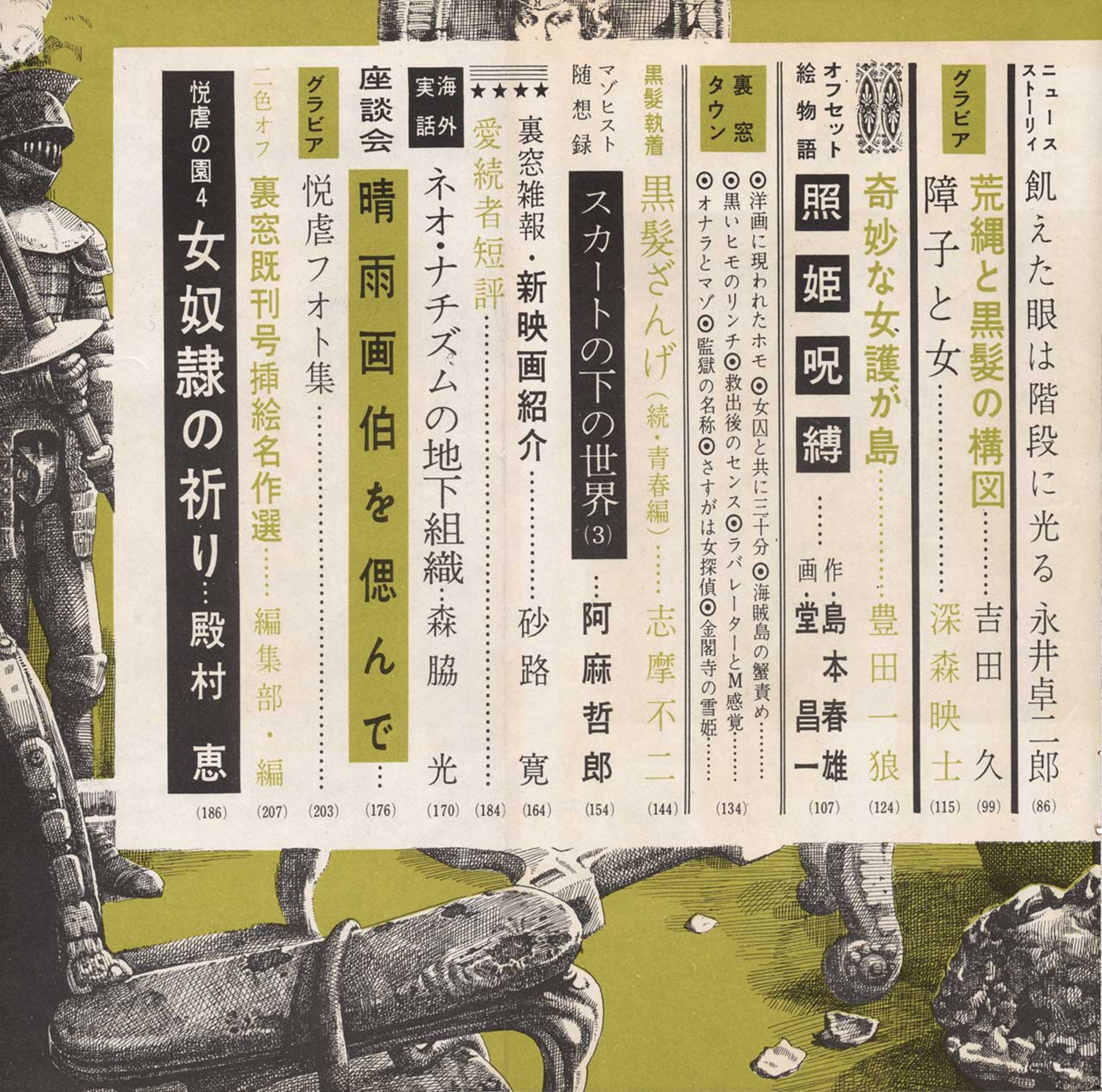
グラビア

悦虐フォト集…………… (203)

二色オフ

裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編 (207)

悦虐の園 4 女奴隷の祈り……………殿村 恵 (186)



九十^も九^つ 十郎・作 沖 渉 司・画



① 不気味な老人

近所の人たちはその老人を「ギョロリのじいさん」と呼んでいた。その呼び名が、口さがないおかみさん達のおしゃべりのサカナになることはしよっちゅうだったが、いざ本名は、となると皆口をつぐんで顔を見合わせるのだった。年令は六十から七十の間というのが大方の意見だったが、渋紙のようによれあつた皺や、薄よごれ、逆立つにまかせた白髪が、案外本当のとしより老けて見せるのかも知れなかった。

母親は夜ふけにむずかる幼ない乳のみ子を「ギョロリさんが来るよ」といってあやすのが常だったし、少女たちは路地のむこうから老人がやって来るのを見かけると、傍の家のかどに身をかくして、おそろおそろ彼の通過を見送るのだった。老人は丸くこめた背に向けられる大人たちの噂も、子供たちのおのきも知らぬげに、誰に声をかけるでもなく、ひっそりと暮していた。

「ギョロリのじいさん」と呼びならしてはい



責め具製造人



るものの、老人がその眼をギョロリと人に向けることはごくまれだった。が一度その鋭い一瞥をくらったものは、後々までも肌に粟を生ずる思いをするのだった。

「あつしがまだこんな小さなガキの頃でしたがね」と床屋のおやじは、客によく話したものだ。「十人ばかりの腕白仲間と一緒になつて、じいさんをしつこくからかったことがありましたっけ。初めはじいさんも取り合わなかったんだが、そのうち年かさの子が『ひとさらい。ひとごろし』っていったんだね。

子供にとっちゃこわいものの代名詞のつもりで何気なくいったんでしようが、じいさんは足をとめて、ふりむいた。あの時のこわさは今思い出してもゾッとしますな。

モジャモジャの白髪——その頃からもう真白だった——の下に、ほらあなみたいに落ちくぼんだ両眼がギョロつとわたしらの方をねめつけたんですよ。ひとみがほら穴の奥にチロチロ燐える燐みたいは何ともいえない青さでね。じいさんの方はそれだけでスタスタ歩いていつちまったんだが、さすがの腕白達も脚がガクガクして、しばらくは動けませんでしたよ」

そのじいさんは何をやってるの、となじみの浅い学生が尋ねた。

「指物師、ってことになってますがね。仕事場を見た者はただのひとりもないんですから、何をしているものやら」

② 荒れ土蔵

おやじは話を続けた。

「でも、腕はいいらしい。ごくごくたまに、立派な紳士風の人がおやじさんの家に車で乗りつけることがありますからね。近所の者はないかおつかない人のように思っているけど、案外ただの偏屈ものなんじゃないですか。それ、昔から名人肌の人間には変り者が多いっていうじゃありませんか」

「なるほど」
まれにその老人の家はどこかと好奇心を示す客があると、床屋のおやじは剃刃の手で入口のガラス戸越しにその老人の家を指し示してくれるのだった。

ゴミゴミした下町特有の家並みの奥、雑草がわがもの顔にのさばりかえっている空地の真中にポツンと建っている戦災で焼け残った土蔵が、老人のすみかだった。周囲を取り巻く三十坪ほどの空地も老人の所有地で、戦前はかなりの造作の屋敷だったのだが、戦後は家を建てるでもなく、ただひとつ焼け残った土蔵にひっこんで、荒れるにまかせているのだった。なぜか老人はこの空地を売ろうとはしなかった。取りたてて境界があるわけでもなかったが、丈なす雑草の波を押し分けて土蔵に近づこうという者はなかった。

いつからか、あの空地は蝮の巣だ、とまことしやかにいいふらされるようになった。

ところで――

老人の祖父は江戸伝馬町牢の雑役をしてい



た。雑役といっても、拷問蔵の諸道具の製作や修繕を主としていたらしい。老人がまだ幼なかつた頃、明治新政後隠居の身になった祖父から拷問の様子をたびたび聞かされたものだった。



③ 算 盤 責 め

「おなごちゆうもんはしぶといもんで。算盤責めの伊豆石を三枚も乗せても音をあげないものがおったわ。確か、おくらという良人殺しのあばずれじゃった。膝の上に積まれた石の上から、快楽に酔うたみたいな顔をのぞかせて、涎をだらだらたらしてのう」

幼ない彼は「快楽」が何を意味するものかもちろんわからなかったが、女のひきつった蒼白な顔を思い描いて戦慄するのだった。女の人をいじめるなんて——むごい。

はたちの年にお清という四つ下の娘を妻に娶った。出入りの華族様の屋敷で女中奉公していたのを見染めたのである。清は色白のぼちやぼちやした美人で、赤いてがらがふるいつきたいほどよく似合った。彼は溺愛した。暮しに張りができ、仕事は面白いほどもうかった。子供のないのが唯一の不満だった。

八年たった。

妻のお清が、隣家に下宿している若い学生と密通しているのを彼は不幸にも発見した。彼は激怒した。

④ 恐怖の作業

泣いて許しを乞う妻を裸に剥いて後手に縛りあげ、蒼白にゆがむ頬にこぶしを振り降した時、亡き祖父が繰返し語ってくれた言葉が霹靂のように彼の耳に轟いた。おなごちゅうもんはしぶといもんでのう——
激しい打擲に悲鳴をあげてのうちまわる白い肉塊が不死身の白蛇と眼に映じた。むなしさが彼の心を狂暴にした。
彼は妻を裸のまま土蔵の柱に縛りつけ、そ

の面前で木をけずり、木馬を作り始めた。唇からたえずもれる冷酷な言葉がふさぐ手を持たぬ妻の耳をいたぶり続けた。作業は一昼夜続いた。

耐え切れずに漏らしてしまった汚物にまみれ、恐怖と疲労に困憊しつくした女のうわずつた眼に、木馬の背の鋭角が刃もののように突き刺さってきた。

肌に食い込む荒縄の外一糸もつけぬ熟れ切った女体は、真新しい木肌を血と脂にぬら

して悶え続けた。非情に抅げられた太股が、そこだけ別の生きもののように痙攣していた。崩れ乱れた黒髪が白い背に藻のようになびいていた。清は責めに耐え切れずに死んだ。もともと丈夫でなかった心臓は心と肉体双方の苛責を負うには弱すぎたのである。かかりつけの藪医者は何の疑問も起さずに、心臓麻痺と死亡診断書に記入した。冷たい墓石の前に、どっと白髪のかえた頭を垂れた彼は、何度となく妻の名を呼んでいた。

(以下本文 50 頁へ続く)



吊り責め

カメラ・吉田 久

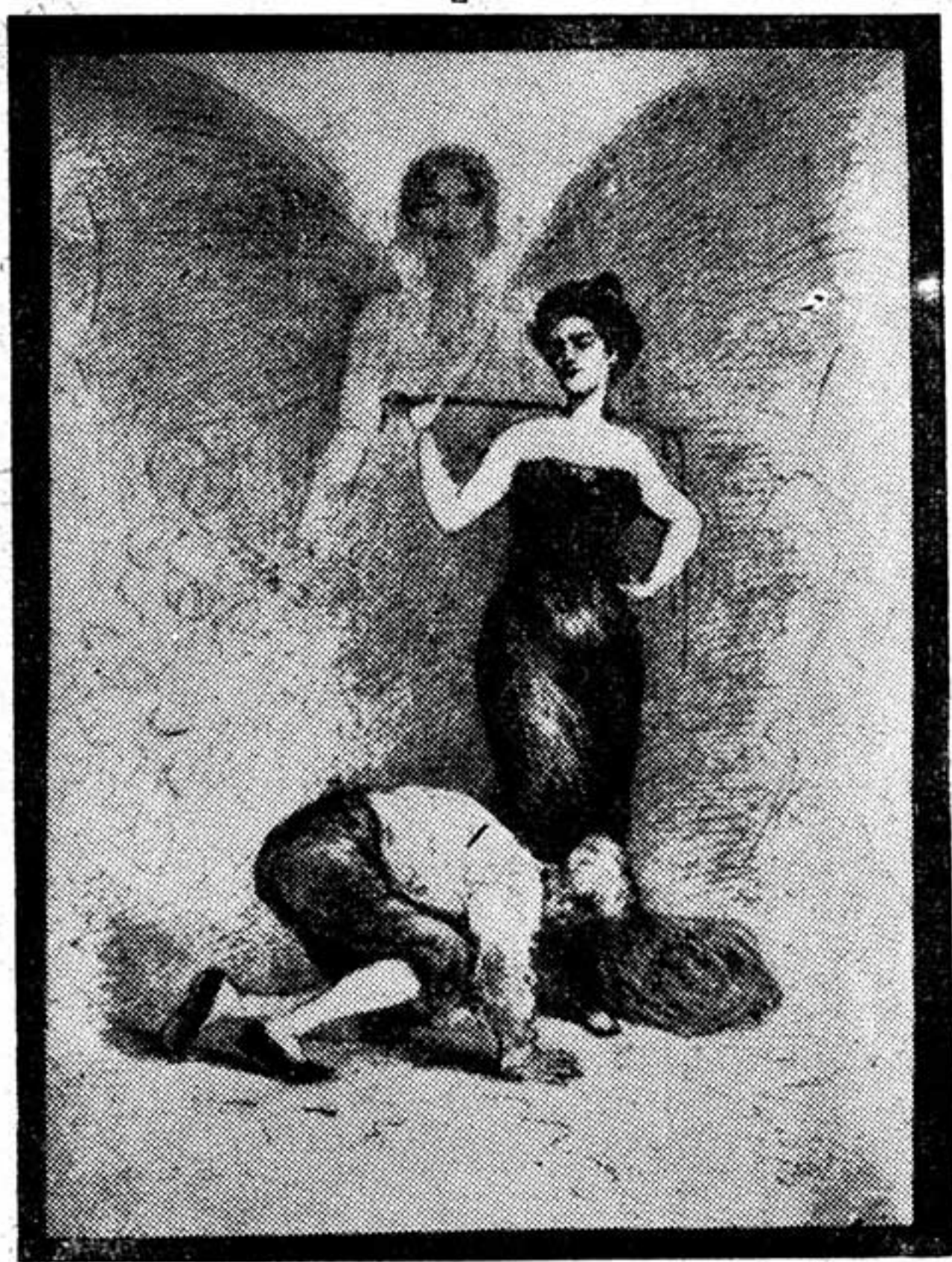








裏 窓



四 月 号

第六卷・第四号



朱実ちゃんは浅草でストリップをやっています。今年十七になったばかりですけれど五尺六寸もあってとても大きいのです。目方も凄く重くてこないだ測って見たら十五貫八百もあったと云って威張っています。僕は年上なのですが朱実ちゃんには、とても敵いません。喧嘩をしたって負けてしまうのです。

僕は小学校の頃から下級生の朱実ちゃんが

好きでした。朱実ちゃんはお転婆で綺麗でとても意地わるでした。僕は好きで好きで死にたいほど好きだったのに朱実ちゃんの方では僕なんか大嫌いだと云っていました。

だから僕は朱家ちゃんの命令なら何でもきかなければなりません。朱実ちゃんは勉強が嫌いなので宿題は全部僕にやらせるのでした。僕が一生懸命に宿題をやって持って

行くと朱実ちゃんは字が汚いとか似ていないとか云って僕をぶちました。

朱実ちゃんの手は透き通るようにまっ白で指先はほんのりとバラ色がかっていて僕はその手でぶたれるのがいい気持ちだと思いました。

中学が終ると朱実ちゃんは身体がいいのでストリップに出るようになって、そのうちにアパートを借りたので僕は朱実ちゃんの御機嫌をとって家来にして貰いました。僕は勉強して偉くなるよりも朱実ちゃんみたいに身体のいい女のひとの家来になった方が幸福だと思ったのです。朱実ちゃんは男みtainな性質なので面道臭いことが嫌いなので女中がわりに使ってやると云いました。

僕は家来でも朱実ちゃんの家来だから嬉しいのです。仕事が辛いと思うときでも朱実ちゃんの顔を思いだすと愉しくなります。家来の仕事はお料理からお洗濯からお掃除からそれこそ数えきれないくらい沢山あってとても難しいのです。朱実ちゃんは僕が勉強ばかり出来ても実際には何の役にも立たないと云っていじめますけれどたしかにそうかも知れません。

でも僕は洗濯は名人です。朱実ちゃんは大事な洋服は洗濯屋にだしてしまいますから僕

悪魔の唇

★ ★

彼女の肉づきのよい足に見下
されると、ぼくはどんなわが
ままにもさからえなくなる！

男 醜 沼 田
弘 彬 山 田
画

が洗うのは下着だけです。僕は朱実ちゃんの下着が大好きです。朱実ちゃんの下着はどれを見ても恰好がよくってスベスベしているのです。僕は自分の下着が恥しくなる位こんな綺麗な下着を毎日着ている朱実ちゃんはやっぱり凄いいと思います。

パンティというのはパンツのことです。僕のパンツはダブダブだけれど朱実ちゃんのはひどく小さいのです。朱実ちゃんは身体が大きいのにパンティは小さいのですからおヒップのところがハチ切れそうにみえるのです。それが凄く恰好がいいと思います。

僕がそう云ったら朱実ちゃんは怒って太腿で僕の頸を絞めました。朱実ちゃんの太腿はとてもふとくてはり切っていますから本気で絞められたら僕の頸なんかすぐにポキンと折れてしまうでしょう。頸が折れば息が来ないのので息が来なければ死んでしまうので僕は一生懸命に謝まって勘忍して貰いました。

でも僕は朱実ちゃんのおヒップを讃めたのにいじめられるのは不公平だと思います。

パンティにはいろんな色や形のがあって朱実ちゃんは毎日とりかえるのです。

僕はパンティが大好きなのでこっそり舐めてみますとなんだか酸っぱいような味がしました。そしてときどき舐めているうちに僕はその味が忘れられなくなってしまったので考えてみると犬が人間の唾を舐めるとそのひとに抗えなくなるように僕も朱実ちゃんのパンティを舐めて朱実ちゃんの命令には一生反抗出来なくなったのかも知れません。

ストッキングは長靴下のことです。ゴムのように伸び縮みするので朱実ちゃんの腿があらなふとくつても大丈夫なのです。

でもどうかすると糸がほつれて来て、そうすると朱実ちゃんはヒステリーみたいに怒るのです。そして僕の洗濯のしかたが悪いせい

だと言って往復ビンタをくれるのですが僕はもう慣れてしまつてあんまり痛くはないのです。

朱実ちゃんのあの力強い手がピシヤリ！

ピシヤリ！と小気味よい音をたてるたびにますます朱実ちゃんが好きになる位です。

でも平気な顔をしていると反抗するみたいなのでわざとところがあったりすると朱実ちゃんは満足して許してくれるのです。

でも僕は朱実ちゃんに痛められてばかりいるわけではありません。たまには可愛がつて貰うことだってあるのです。

年下の女の子に可愛がつて貰うというのは変ですけども朱実ちゃんは大きいし強いしどうしてもそういう具合になってしまうのです。朱実ちゃんは僕を可愛がろうと思うときにはスカートをまくるのです。

でもストッキングを脱がせようとするときも朱実ちゃんはそうやってスカートをまくる

ので僕はいつものようにしゃがみこんでガードルに手をかけようと思いました。すると朱実ちゃんはあのスナリと尖った膝小僧でカッキーン！と僕の顎を突きあげたのです。

僕は倒れたまま叱られるようなどんな悪いことをしたのだろうと思って考えていると朱実ちゃんは僕の頭をグイとまたいで立ち上がりしました。

僕はおそろおそろ見上げました。まくりあげたスカートの下には朱実ちゃんのあの太腿が二本威圧するように光っていました。

「じれったいあったらありやしない。今夜は音をあげるまで可愛がつてやるから！」
そう云った朱実ちゃんのふくらした頬つべたには笑クボがありました。僕は嬉しくなつて云いました。

「ほ、僕、痛められるのかと思って……」

「バッキヤロ！ お前みたいな奴がどうすれば嬉しいるかあたしの方がよく知ってるんだ！」

そう云って朱実ちゃんは僕の顔の上にいきなりドシンとまたがりました。その瞬間あのかたくはりきった太腿の肉壁が僕の唇におい

かぶさったのです。

「ホラ、此处を舐めさしてやる、舐めろ、舐めやがれ！」

朱実ちゃんは激越な口調で命令しました。僕はもう頭がカッとして夢中になって舐めました。

朱実ちゃんの太腿！

それは強く逞ましくそのくせまっ白で脂が乗ってスベスベしているのです。舐めても舐めても脂がどんどん湧いて来て朱実ちゃんの太腿は僕の唾でテカテカに輝きました。

その日は朱実ちゃんは黒パンティーをはいていてストッキングもつけたままでした。僕は自分の汚い唾でパンティーやストッキングをよごしてはいけないので舐めてもいいのは太腿の付け根の露出したところだけでした。

そのせまい帯状の部分を僕が犬のように舐めまわしている間朱実ちゃんは馬鹿にしきつた顔をしてニヤニヤ笑っていました。僕はこんな上等の太腿を持っている朱実ちゃんの偉さが身に泌みて判ったような気がしました。最後に朱実ちゃんはパツと勢よく立上つてその御馳走を僕の口から取りあげてしまいました。

「今日はお預け。どう、よかったら？」
「と、とっても……」





僕はかすれた声で答えました。

「これから素直に云うときくよ、あたしの命令は絶対なんだから。判った？」

「うん」

「その代りあたしの気が向いたらそのうちまた可愛がってやるからね、愉しみにしててもいいわよ」

「ほ、ほんと？」

僕は可愛がられるということがこんなにいるものだということを始めて知って、もっともっと朱実ちゃんのいつけ通りに働いて毎日でも可愛がって貰いたいものだと思いました。

お風呂の仕事では僕は失敗ばかりしています。朱実ちゃんは自分のことは自分でせよと

いう言葉の反対みたいなので僕は朱実ちゃんの手足のかわりになって何から何までしなければなりません。

それに朱実ちゃんはわざと我儘を云って僕を困らすのが面白いらしいのです。朱実ちゃんは生まれつき人をいじめるのが好きな性質ではないかと思うのですが、いじめられて辛い思いをするのは僕なのに僕は朱実ちゃんが死ぬほど好きなのです。から不思議なものです。

朱実ちゃんは僕みたいな性質をマゾヒストと云うのだと教えてくれました。朱実ちゃんは身体が大きいので朱実ちゃんにファン・レターをよこす人はマゾヒストの人が多いのだそうです。

でも朱実ちゃんはマゾヒストなんか昂奮さして悩ましてやるだけでそれこそ涙もひっかけてやらないのだと云っています。

朱実ちゃんは裸になると一層大きく見えて凄く恰好がよくってまるでアメリカの高級車みたいです。その横に並ぶと僕はまるっきりちっぽけで黄色くしなびて見えるので僕は恥しいよりも何よりも心の底から朱実ちゃんに圧倒されてしまうのです。

その僕が朱実ちゃんの身体を流さなければならぬのだからたまりません。巨大な朱実

ちゃんの肉体をすみからすみまで磨きあげるのはそれこそ並大抵の苦勞ではないのです。

そして朱実ちゃんと来たら僕が汗だくになって洗っているのも知らん顔でお湯をバチャバチャはねさしたり口笛を吹いたりしているのです。そのくせ洗い終ってから鏡を見てちよっとでも気に入らないところがあると凄く怒るのです。

「あたしの身体は売物なのよ、商品なのよ。何この洗いかた、判らないってんならトックリ判らしてやろうか！」

それでも僕は朱実ちゃんの身体を洗わされるのを嫌だなどと思っではいけないのです。

なぜかと云うとこれも朱実ちゃんに教わったのですが、ストリップのお客さんは朱実ちゃんたちの裸を見に来るので、お客さんはお金を払うのに僕はタダで朱実ちゃんの裸が見られるのだしそれに手でさわったりも出来るのですから有難いと思わなければ罰が当るのです。

ただ一つだけどうしても困ることがあるのです。

僕は朱実ちゃんの身体を洗っているとどういうわけかだんだん頭の中がボーッとして変な気持ちになって来るので僕は裸なので朱実ちゃんもそれに気がついてしまうのです。

朱実ちゃんは家来のくせに昂奮したりして生意氣だと云って怒るのです。そして朱実ちゃんにたいする尊敬の気持ちが足りないからそんなふうになるのだと云うのです。

僕はもう朱実ちゃんには心から征服され崇拜しきっているのに変な気持ちになるのですからそんな云いかたをされるのは悲しかったのですが朱実ちゃんの命令は絶対なんだからそんなふうにならないように気をつけようと思いました。

でも朱実ちゃんの巨大な身体にさわりはじめるとまるで魔法にでもかけられたみたい到头の中がかすんで来るのです。それが朱実ちゃんにみつかったらそれこそ大変です。

朱実ちゃんの眼はもともと上り眼なのですがその上り眼がなお一層キリキリとつりあがって来ていきなり足で僕の身体を踏んずけるのです。

お風呂場はタイル張りだし朱実ちゃんは十五貫八百もあるしそれに朱実ちゃんの足のマニキュアした爪が情け容赦なく肉に喰いこむのです。僕は痛くてたまらないのでヒイヒイ音をあげてしまうのです。

そうすると朱実ちゃんは眼をキラキラ光らして薄笑いを浮かべながら身体の重心を前に移してまるで汚らしい虫ケラでも踏みつぶす

みたいにギクギクと踏みにじるのです。

こうなったら僕がいくら謝っても血を見るまでは許してくれません。

いつだったか一度だけあんまり痛いので夢中で朱実ちゃんの腰に組みついて行ったことがあるのですがもともと僕と朱実ちゃんでは身体の出来が違うしそれに朱実ちゃんは毎日ストリップで鍛えているのですからたまりません。

朱実ちゃんの豊満な腰がグイッとくびれたかと思うと僕ははじき飛ばされて湯槽の角に頭をぶつけてしまいました。

朱実ちゃんの長い脚がニュッと眼の前に近づいて来たときは僕は怖しさのあまり思わずタイルにひれ伏して謝ってしまいました。

朱実ちゃんにこんなに痛められて嫌だと思ふのが当り前なのに僕はマゾヒストの性質なのでますます朱実ちゃんが好きになってしまふのです。

何と云ってもいちばん辛いのは夜の仕事です。朱実ちゃんは夜は大抵男のひとを連れて来るのです。

男のひととはほとんど外人で、朱実ちゃんは日本人なのに外人の男のひととばかり遊ぶのは変だと思っいて訊いてみますと朱実ちゃんはふざけて僕を蹴とばしました。



朱実ちゃんは日本人よりも外人の方が好き
なのです。

朱実ちゃんの云うところでは日本人は低級
な人種だからどうしたって外人にはかなわな
いのです。日本人は身体も貧弱で無恰好だし
文化だってひどく遅れていますから戦争に負

けたのは当然前なのです。だから日本人の女
のひとは心の底ではみんなアメリカ人と結婚
したがつているのです。

僕は日本人の女のひとがみんなアメリカ人
を好きになったら日本人の男はどうなるのだ
ろうと思って訊いてみますと朱実ちゃんはみ

んな僕みたいにマゾヒストの性質になって女
のひとの家来にして貰えばいいのだと云いま
した。

僕はおかしくなつて冗談に僕だってアメリ
カ人の女のひとと結婚したいのだけれど結婚
してくれそうにないし朱実ちゃんは外人みた
いに大きい身体をしているので家
来にして貰ったのだと云いますと
朱実ちゃんは転げ廻つて笑いまし
た。

朱実ちゃんは夜遅く帰つて来る
と大抵酔っぱらつていて乱暴をす
るのでこわいのです。僕は朱実ち
やんのハイヒールを脱がしてそれ
から洋服を脱がせるのですがちょ
っとでも手間どるとイライラして
外人の见ている前で僕を撲つたり
蹴つたりするのです。

僕はこういうわけだか外人の前
で朱実ちゃんにお仕置されるのは
とても恥しいのです。でも椅子に
なるのはもっと恥しいのです。

「馬鹿、椅子になりやがれ！」

朱実ちゃんがそう云うと僕は朱
実ちゃんと外人の足もとに四つん
這いにならなければならないので

す。

朱実ちゃんはキング・サイズだし外人は立派な体格をしているので僕は脊中の骨が折れてしまうのではないかと思う位です。

僕が一生懸命腕をふんばって我慢しているのに朱実ちゃんはおヒップの下に敷いた家来のことなんか忘れたみたいに外人とふざけ合いです。チュッ！　とおいしそうな接吻の音がしたり、

「ウフフ、嫌だったら、助平ねえ！」

などと朱実ちゃんの黄色い声が頭の上で聞えます。そんなとき横眼で見るとあのまっ白な太腿がバタバタ暴れていてなんだかいつもより一層逞ましくみえるので僕はつい心の底から威圧されてしまうのです。

僕が我慢しきれなくなつてつぶれてしまうと朱実ちゃんは凄く怒ります。それでも朱実ちゃん一人にお仕置されているうちはまだいいので朱実ちゃんは気が向くと外人に頼んで僕を痛めつけるのです。

僕は外人に責められるのは死ぬほど恥しい気がするのですが謝まるにも英語がしゃべれないし反抗したって外人は日本を負かした位ですからかなわないに決まっています。だから仕方なく二人の足もとに芋虫みたいに転がったまま無抵抗で外人のお仕置を受けな

ければなりません。

朱実ちゃんは同じ日本人なのに僕が外人に踏んずけられたり蹴とばされたりして悲鳴をあげると肉付きのいい脚をバタバタさして喜ぶのです。

すると僕はおかしなことにヒイヒイ泣きながら朱実ちゃんが怖しい位綺麗に見えてしまうのです。しまいには朱実ちゃんも昂奮して来て外人と二人して僕を責めるのです。

こうなったら最後行く処まで行かなければ駄目で僕が朱実ちゃんたちの足もとに頭をこすりつけて謝まっても勘忍してはくれません。

「何よ、ほんととはいじめて貰いたい癖しやがって、あたしたちはいじめたい方なんだから丁度いいんじゃないか、バッキヤロ！」

そう云われて朱実ちゃんのつりあがった眼でジーツとみつめられればたしかにその通りなので僕はやっぱり生まれつきひどい目に合わされるのが運命なのです。

揚句の果てに朱実ちゃんと外人は僕の小さな身体を床にしてダンスをするのです。

僕は普通の靴で踏まれる分には鍛えられているので割と平気なのですがストリッパで使うハイヒールは踵がとても痛くて身体中痣だらけになってしまうのです。

それに朱実ちゃんたちは靴の下の僕のこと

なんか考えてもいないらしくピッタリ身体をくっつけて踊っていて、朱実ちゃんは五尺六寸もあるので外人と踊っていると羨ましい位よく似合ってやっぱり朱実ちゃんがちっけな日本人なんかより外人の方が好きなのは自然なことだと思えて来るのです。

こないだロックンロールというのを踊ったときには死ぬかと思いました。

凄く乱暴なダンスで僕は身体中血まみれになつてうなっているのですけれど朱実ちゃんは黄色い嬌声をあげて外人と踊りまくっているのです。でも僕は乱暴なところがとても朱実ちゃんに似合うダンスだと思いました。

朱実ちゃんはその日は真ッ白なパンティをピッタリとはいってストッキングはガードルで吊っていました。はち切れそうなおヒップの肉が、僕を踏んずけるたびにブルブルと揺れて僕はこれが見納めかと思つてなつかしく見上げていました。

そのうちに外人が僕に気がついていかにも馬鹿にしたような顔をしました。僕は恥しくなつて眼を伏せましたが外人は朱実ちゃんに何か耳打ちしたらしいのです。

あつと思う間もなく朱実ちゃんのストリッパ用のハイヒールが私の顔に躍りかかり滅茶

苦茶に踏みつぶしたのです。僕は眼の前が真暗になってそのまま気を失ってしまいました。気がついたときには朱実ちゃんと外人は身体をピッタリくっつけて僕のすぐ側で接吻していました。

僕はこのときのことを思いだすといまでもカッと頭に血がのぼってどうしようもないのです。朱実ちゃんが身につけているものはスリッキングだけだったのです。スリッキングだけが逞ましい、太腿の中途まで申しわけのように包んでいてそれから上は豊かに盛りあがったあのおヒップが僕を見下ろし威圧しています。

僕はもう夢中で見惚れていました。ふと見ると朱実ちゃんたちはニヤニヤしながら僕を見下ろしていました。僕がハッと思ったときはもう遅かったのです。

朱実ちゃんは笑いながら羚羊のような脚をとばして僕の脇腹のあたりを蹴とばしました。

た。そして僕の顔の真上にスックと両脚をひらき上から唾を浴せたのです。

僕は怖しさのあまり身動きも出来ず見上げていました。朱実ちゃんはまるで与太者みたいに立ちほだかっていて太腿の中途までずり落ちたスリッキングが何故かひどく兇暴そうに見せていました。

それに僕を見つづけている朱実ちゃんの眼と云ったら凄まじいほどキリキリとつりあがっているのです。僕は殺されてしまうのだと思いました。そのときです。

「コン畜生奴、今夜は可愛がって可愛がって可愛がり殺してやるから覚悟しやがれ！」

いきなりドシンと朱実ちゃんの大きなおヒップが僕の顔の上へ落ちて来たのです。

そして朱実ちゃんのはりきったおヒップの肉で僕の顔中ゴリゴリとそれこそ面の皮がむける位こするのです。実際のところ失実ちゃんのおヒップはとても巨大なので本気になっ

て僕の顔にまたがったら僕なんかいくら一生懸命になっても顔中ふさがれて息が出来なくて死んでしまうのです。

「これがお前みたいなのマゾの天国なんだ。一辺この味を覚えたらもう死ぬまで忘れられやしないんだ。さあア見やがれ！」

朱実ちゃんの嘲弄を遙か遠くに聞きながら僕はもう犬みたいにむさぼりついて行きました。僕は朱実ちゃんのおかげでやっと自分が何のためにこの世に生まれて来たのか判ったような気がしました。

僕は悪魔の唇に接吻するために生まれて来たのです。僕は頭の上に君臨している朱実ちゃんの巨大な腰を夢中になって抱きしめました。朱実ちゃんは外人といっしょにゲラゲラ笑いこけているようでした。

この原稿の作者へ。編集部より御連絡。住所氏名、又は連絡場所を、至急編集部までお知らせ下さい。

女囚地獄の十八カ月

性の迷路にさまよう十人の不良少女・彼は地獄の売春窟に闘いを挑んだ・獄中・欲に生かされる五十人の娘たち・他六篇！

宇治研介 著

新書判・211ページ
¥ 130

世界残酷実話集

世界残酷実話集

東京都中野区江古田 1-2302

株式会社 あまとりあ社

振替・東京10756(久保書店宛)

のろ
呪われた乳房



小田桐 起

小日向一夢 絵

からすの市兵衛

「おい、見ねえ。引廻しが通るぜ」
「烏の市兵衛の引廻しだとよ」
「あれが烏の市兵衛か。なるほど
ね、凄え面構えじゃねえか」

「これで、お江戸の疫病神が一人
減るって訳だ。いい気味だなあ」
弥次馬たちは、憎悪の眼を裸馬
の上の男に向けていた。
あんな悪党はただの獄門だけじ
やあ気が済まねえ——などという

意見もとび出して、何しろ、ひど
く同情のない引廻しである。
人気——といったは妙だが、美
しい女の引廻しなどには、たしか
にそんなものが生まれるし、見物
人も大勢となる。

それに反し、男の引廻しは総じ
て不人気であり、見物人も比較的
冷淡である。
「けっ、いやなものを見ちまった
ぜ」
唾を吐いて背を向ける者もあ

る。

行列についてどこまでも歩いて行く——などというのは、よほどの暇人か物好きであろう。

いま、外神田を昌平橋の方へ進んで行く行列の、裸馬に揺られてゐる死罪人は通り名を烏の市兵衛といい、一年ほど前から江戸市内を荒し続けていた強盗だ。

トカゲのような顔に三白眼が陰惨な光りをおびて、皮膚は褐色であり、どう見ても尋常の相とは思えぬ薄気味悪さだ。

この男はただの強盗ではなく、押し入った家に不幸を植え付ける奴であった。女に対して情容赦もなく悪どい真似をした。

親兄弟の眼の前で娘を犯し、亭主の前で女房を姦する。母親の前で娘を汚し、娘の前で母を辱かしめる——とにかく、淫虐な犯行を肉親の者に、わざと目撃させるのが常だったのである。

女は裸にされ、縛り上げられた

上で獣欲の犠牲となり、家族もまた縛られて否応なしに、無残な現場を見なければならなかった。

すなわち、そういう方法は市兵衛が強く好んで行なうのであり、この男には、それでなければならなかったであろう。まさに言語道断、沙汰の限り——兇悪無比の犯行だ。

押し入った先では「俺は烏の市兵衛だ」と必ず名乗っている。威嚇のためもあったろうが、自分の悪名が高まるのを愉しんでいるようにも見えた。

こんな奴に襲われた家は災難である。

咽喉を突いて自害をした若妻、離縁となって川へ身を投げた女房、発狂した娘、等々の悲劇が諸方々で起こった。

奉行所は躍起となったが、市兵衛は忍びの術でも心得ているかの

ように神出鬼没であった。

だが——ある日、彼は実にアツケなく捕われた。訴人をした者があつたためである。

訴えて出たのは市兵衛に囲われていたお吉という女だった。江戸中の女を震え上がらせたこの兇賊は、自分の女に裏切られて悪業に終止符を打つ破目となつた。

刑は江戸市中引廻しの上、小塚原において獄門である。

訴人

（畜生！ お吉の阿魔！ この俺を、よくも売りやがったな！）

市兵衛は腸が煮えくり返る想いであつた。

安心して眠れる所を造つたのがいけなかったのだ。烏の市兵衛が巢を造つた——それが油断であり、命取りとなつた。

深川の芸者だつたお吉を落籍せ

て、浅草の鳥越に囲つた当時は「材

木問屋の大番頭」という触れ込みで、すべてが巧く行つた。

夜働きの疲れを癒やすのに、定まった女を抱いて寝るのは悪い気分のものではなく心が落着いた。

ところが——所詮、仮面は剥がれやすいものだ。他の女達と同様の方法で抱いてみたくなつたのである。

お吉の些細な手落ちをよいことにして、折檻の名目で縛ってみた。別な女が一人生まれかと思えるほど、鮮やかな魅力を感じることができた。女はこうするに限る、と思った。お吉の方も、今までにない妖しい悶え方を示したのである。

縄を解いた後——お吉がふと不審そうな顔になった。

「旦那は、いつもこんな物を持つて歩くんですか？」

手垢で汚れた細引を見つめなが

★魅込まれた若妻は見も知らぬ凶悪な罪人の前に引き据えられ乳房を襲われたのだ……

ら、そんなことをいうのだった。

たしかに、その通りだ。押し入った先のあり合わせの帯で縛った女はつまらない。

岡っ引のように縄を持って歩く必要があった。だが、その縄をお吉にも使ったことは間違いだった。

(全く、女って奴は油断がならねえ。お吉に気を許した俺が馬鹿だった……)

臍を噛む思いである。

(だが……あの阿魔はなぜ、俺を売りやがったのだろう? どうせ堅気の女じゃねえ。泥水を吞んで

育った女が、手前の旦那を盗っ人と知ったところで、そうアッサリと訴人など……)

不思議に思えるのだ。金は充分にくれてやったつもりである。

縛っておいて可愛がるのは常と

なってしまうが、お吉はそれを決して厭がりはしなかった。そういう女になつていたはずだ。

小塚っ原へ着くまでに、この謎だけは解きたい——。

金じゃない。憎しみでもない。

正体を感じて恐ろしくなった、などということでもなかろう。そんな殊勝な女であるものか。

(俺がいなくなったら、あの女は、これからどうなるのだろうか?)

そこまで考えて、市兵衛はとにかくに簡単明瞭な答を掴むことができた。

(つまり、俺がいなくなった方が、あの女には都合のいい何かがあった……ということだ。だから俺は、盗っ人として訴人された訳じゃねえ。邪魔だから消されただけなんだ!!)

あまりにも単純すぎる事柄は、かえってわからぬ場合がある。

最初に考えたことは、お吉が嫉妬に狂って前後の見境もなく訴人をしたのではあるまいか——という推定だった。とんだうぬ惚れである。

うぬ惚れをすべて捨ててみて、やっとわかった。男である。お吉には他に男がいたのだ。

「畜生め!」

思わず呻くような声となって呪た。

うと、裸馬のすぐ前を行く、罪状をしるした捨札を担ぐ非人が驚いてふり返った。

浅草まで飛んで行ってお吉を八つ裂きにしてやりたい——と市兵衛は、憤怒に身ぶるいしたが、所詮は高手小手にきびしく縄をかけられてる身である。何をするにも、もう遅い。

いまいまいげに彼は自分の周囲を見回した。

死出の途につく自分を見物して

いる娑婆の人間たちの顔は、どれもこれも憎らしかった。

「畜生め!」

再び同じ呟きを口にした時、彼はお吉の幻をすぐ近くに見た想いがして、自分の眼を疑った。

ある商家の二階の窓から自分を眺めている白い顔が、それであった。

(お吉! こんな所に……)

喰い入るような烈しい視線で見

返した市兵衛は、しかし、それが他人の空似であることをさとる。

その女は胸に抱いた赤児に自分の乳房をふくませている水々しい若女房なのである。

お吉に子供はない。明らかに別人だ。

別人だが、もしや姉妹では?——なおも見詰める市兵衛の只ならぬ視線におびえて、女はいまわしように眉をひそめ、急いで窓の障子をしめてしまった。

馬上で振り返った市兵衛は、その商家の看板が、「叶屋」という質屋のものであることを見届けた——。

好物

「……市兵衛。貴様も悪業のむくいで間もなく、笠の台が飛ぶ身だが、お上にも慈悲はあるぞ。この世の名ごりに何か好きな物を食わせてやろう。何でもいい。食いた

いものがあつたらいい。警護の役人が、そう告げた。

昌平橋際に建つ自身番の内である。

一夢

引廻しの行列は、この番小屋で
休息をとるのがしきたりであり、
その間、罪人に好物を与える慣習
が古くから続いていた。

そのため、附近には「引廻し蕎
麦」とか「引廻し芋」などと俗に
よばれる焼芋屋やそば屋があつた
ほどである。

芋やそばだけに限らず、取寄せ
ることが可能な飲食物ならば何で
も、できる限りは与えてやる――
というのが警護役としての常識に

なっている。
市兵衛もそれを知っているとみ
えて、

「旦那。食い物は欲しくねえが、
飲み物なら是が非でも飲んでおき
てえものがある。飲み物でもかま
いませんか?」

と意味ありげな口調で念を押し
た。

「酒か……」

役人は心得たようにうなずいた
が、市兵衛は不気味な笑いを浮か
べて首を振った。

「酒なんかじゃござんせん。烏の
市兵衛は仕置きがこわくて酒をく
らった……と笑われるような真似
はしたくねえ。あっしの欲しいの
はね……」

「何だ? 云ってみろ。遠慮は無
用だ」

「へい。ありがとうございます。実
は、あっしが飲みてえものという
のは……女の乳なんです」

「なに?! なんと云った?」

「女の乳が呑みてえので……へ
い」



「バカを申せ。そんなものがやれ
さんしたようで」
とつさに、市兵衛は巧く調子を
合わせた。

「旦那、あつしはわがままを願
い申している訳じゃあござんせ
ん。実は、この近くに叶屋とい
う質屋がござんす。そこのお内儀に
おさまっているお艶という女が、
以前、あつしと少しばかり訳あり
だった阿魔でござんしてね。今じ
やあ多分、名めえも変えて堅気の
御新造におさまっていることでご
ざんしょうが、あつしの頼みと聞
きやあどんなことでも承知を……
いえね、他の者の手前、いやだとか
知らねえとかはいうでしょうが、
心の中じゃあひと目あつしに会
てえはずなんで……」

「待て待て。叶屋の女房だな……」
役人は腕組みをして、何やら思
案をはじめた。思ひ出そうとする
ような眼つきとなった。

「……うむ。そうだ。叶屋とい
え去年、三人組の泥棒に押し入ら
れて大金を奪われた質屋ではない
か」

「へ？……へい、そんなこともご

写しのあの女を辱かしめてやるこ
とができない——」

「よし。よんでみるか。しかし市
兵衛。その女は乳が出るのか？」

「へい。子供を生んだという噂を
聞いておりやすから……」

さっき馬上で見たばかりだ——
とはいわなかった。

昔の女の近況を耳にしている——
——というような表情の市兵衛であ
る。

役人は蛇を思わせる眼つきにな
って幾度もうなずいた。

仕置きの迫った罪人が悪事の仲
間を道連れに引っ張り込もうとす
る心理は——そしてその結果思わ
ぬ者を召捕ったりする例は少な
らず経験している。

（こいつは拾い物かも知れねえぞ
……）
という期待が露骨に顔へ表われ
ていた。

「ひ、人違いです！ わたしは叶
屋のお近です！ 死罪人なんか
知り合ひはない……」

「薄情なことをいうものじゃね
え。見た通りだ。俺もとうとう年
貢の納め時という訳よ。この世の
名ごりに、ちと頼みてえことがあ
るんだが、きいちゃあくれめえか」

悪夢

しばらくの後。小屋の外に人の
争う気配が近づいて、市兵衛がニ

「人違いなんです！ お役人様！」
身を揉んで逃がれようとするのを、

「やい！ お艶!! いい加減にしろい！」

市兵衛が真に迫った怒声を発した。

全く、お吉によく似た女である。

芝居がしやすい。お吉の代りに、この女で腹癒せをしてやるのだ。

「もとの亭主の顔を見忘れたとでもいうのか！ この俺の頼みがきかれねえとでもいうのか！」

女——叶屋のお近は、悪夢の中にいるような表情で、市兵衛の醜怪な顔を見守った。

「……実あな、頼みというのはほかでもねえ。おめえの乳がのみてえのだ」

「な、何ですって！」

「いや、笑わねえでくれ。俺あおめえに今でも惚れているんだあな。慈悲ぶけえ旦那が何をのんでも構わねえとおっしゃったのだ。そこで俺あおめえをよんで貰った……」

お近は凍りついたような頬のあたり、言い知れぬ恐怖と激しい嫌悪を浮かべて身を震わせた。

「これ女。お艶とやら。……市兵衛 お近です」

「控えろ。市兵衛の先刻よりの申し条に嘘いつわりはないとみた。

お前は市兵衛の昔の女でお艶と申す者に相違あるまい」



「ち、違います！ 人違いです！ 何かの間違いです！ どうか、お許しくださいまし！」

「許せ……とは、語るに落ちたことになるな。まことの人違いならば許すも許さぬもあるまいに」

強引である。しかし——市兵衛が落着き振っているのに反し、女はオロオロした態度なので、見方によつてはどうとも取れる。

「あくまでも白を切るならば是非もない。縄を打つてでも乳房を出させるぞ」

「な、縄?! わたしを……縛るのですか！」

「ほかに御用の筋もあるからな」
女の顔色は紙のように蒼白と化した。

「わたしは何も、知りません！ し、縛られるようなことをした覚えはない……」

「覚えがあるかないかは、吟味にかけてみればわかることだ」

「いやです！ 理不尽な！」

「構わぬ。縛ってしまえ」

女は小さな悲鳴を洩らして逃が

れようとしたが、所詮は無理であつていた——。

復讐

引廻しの人数が休息している自身番の内は、常よりも役人達が多い。

いくつもの手で取り押えられ、たちまち早縄を打たれて行くのだつた。

後手に縛られる——ということが、どれほど大きく深い恐怖をこの女に与えたかは、そのありさまですぐに知れる。

女は、捕縛がまだ終り切らないうちに、崩れるように土間へ坐り込んでしまったのである。

女の悪夢はさらに続いた。
いまわしい手が何本も伸びて、その体を押さえつけ、左右の衿を掴み、むごたらしく胸元をあらわにして行く。

「ひッ、ひい——」

身悶えすると、白く豊かな乳房が泣くように揺れた。

つい少し前まで愛児に吸わせていた紅い乳首はまだ濡れていて、それは微かに白く、涙のように光た。

女が引廻しを見てはいけな

——といういい伝えが江戸で生まれたのは、この叶屋お近の悲劇によつて始まったことである。

烏の市兵衛は獄門と云ひ、お近は入牢した。

お近を捕えた役人、佐柄重蔵は峻烈な取調べを開始したが、お近はやはり無実であり、市兵衛の悪どい置き土産に躍らされての見込み違いであつたことがハッキリした。

お近はむろん、牢から解き放されたが、その身はすでに叶屋の御新造ではなかった。

叶屋は縄付きを家から出したことを恥じて店を閉め、芝のはずれへ移転した上、お近を離縁して新しい女房を迎えていたのである。

愛児との再会も許されずに、お近は泣く泣くいずこへか姿を消した。

その頃——江戸で新らしい流行り唄が作られ、しきりと歌われた。

金を拾うたら浴衣を染めよ、肩に鉄挺、裳裾にや碇、質においても流れぬように——

質におくなら叶屋はやめよ、からす市兵衛に、つい魅込まれて、屋根にやペンペン草はえたるそうな——

歌にまでうたわれた薄倖の女お近が、再び江戸市民の注目を集めたのは、記録によれば文化五年四月二十三日のことである。

その日の宵——京橋は八丁堀にほど近い北桜河岸とよばれるあたりで、一人の夜鷹が侍を刺し殺した。

夜鷹はただちに捕縛されたが、素性をただしてみると、これが叶屋お近であり、犯行の動機は復讐のためだった。

刺されたのは八丁堀の同心、佐柄重蔵である。短刀で幾突きも刺し通されており、不覚な死にざまというほかはなかった。

「本当は、叶屋の奴らを残らず殺

してやりたかったのですよ。でも……そんなことをしたら坊やが可哀そうで……」

とお近は泣きくずれた。

しあわせな若い母親が、一瞬にして悲運のどん底に突き落とされたのは、佐柄重蔵の軽卒な見込み違いのためである。

見込み違い——というだけではなく、凶悪無残な死罪人に乳房を吸われる美女の苦悶をこの男は好んで見ようと望んだものらしかった。

た。不埒な話であり、いわば自業自得だ。

しかし、公けの立場からすれば、捜査上の見込み違いは往々にしてあることで、それを一々気にしているようでは捕り物などなり立たない。

非は多分に佐柄重蔵にある——という意見もないではなかったが、役人殺しの罪はやはり重罪である。見せしめのため、刑は極刑でなければならぬ。

結局、天下静謐のため、お近の刑は市中引廻しの上、鈴ヶ森刑場において磔ときまった。

江戸中期の頃、女の引廻しが廃止されたことがあったが、後に至って条件つきで、これは復活された。すなわち、特に見せしめを必要とする重罪人の場合は、引廻しの附加刑を課するも苦しからず——というのである。

当日、裸馬に揺られて行くお近の哀れな姿は江戸中の涙を誘った。

はやり唄のほか、お近の悲運は



瓦版にも刷られて広く知られていたのである。

高手小手にいましめられ、きびしく本縄にかけられたお近の姿は痛ましきの限りだったが、しかしまた不思議を感じるほどに美しかった。

弥次馬たちは倦きもせず、いつまでもその姿を見守っていた。

たいそう人気の出た引廻しである。

行列が神田に入り、以前の叶屋の附近にさしかかる頃には、文字通り人垣を築くありさまとなった。

最後の願い

叶屋は、まだ空き家のままであった。

その二階は閉め切った雨戸が何やら不吉の影を漂よわせて、冷たく並んでいた。

あの窓から、ただ恐いもの見たさで市兵衛を見物した自分が、今は引き廻される罪の身となってしまった——。

見たもの聞いたもの

心理的軽サディスト

★どのデパートにも玄関入口わきに、たいてい店内案内所というのがある。あのボックスに坐っている案内嬢がやさしくて美人ぞろい。

★ところが池袋某デパートの案内嬢A子さん(19)は、たいへんな屈辱をうけて毎日苦しんでいる。というのは、1日に1回必ずA子さんの前に現われる27,8才の男の客が、「あのう、〇〇〇〇〇の売り場は何階でしょうか？」

と、いんぎん無礼にきく。

★この〇〇〇〇〇というのはウブなお嬢さんがきけば顔を赤らめずにはいられないような商品の名だそう。

★この男は以前A子さんに交際を申しこみ、それを断わられたための報復らしいのだがやり方がやや異常だ。心理的軽サディストとでもいうべきか。

お近は、さすがに心が乱れた。

自分の乳房が、恐ろしい、そして故のない呪いを招いたのである。

わたしがどうしてこんな目に遇わねばならないのか……。

口惜しさがこみ上げてきて、胸元がまた苦しくなった。きびしい縄目に緊め付けられている双の乳房は、わが子と離れて以来、豊かさを通り越して重苦しいまでの厚さをもっている。

母となった女体の哀しさは、その運命の激変とは無関係のように、今でもまだ乳が張るのである。牢で縄を打たれるたびに、乳房は疼ずき、喘いで——与えるべき相

手のない液体がむなしく獄衣を濡らすことさえあった。

(坊や……お母さんを許しておく

れ。だけど、お母さんは何もしなかった。何もしなかったのに……)

裸馬の上の、やつれた白い頬に光るものが一筋ながれたことに気づいた見物人は、大勢いたようである。

間もなく——お近は昌平橋際の

自身番の中で、しきたり通りに身を休めることになった。身を休める——とはいっても、柱に取りつ

けてある鉄環に縄尻をつながれて、土間の荒庭に引き据えられるだけである。

「女。何か願いごとはないか？」

警護の役人が、例の通りに尋ねる。

「何でも……叶えてくださるそうですね」

「できることならばな」

「一つだけ、お願いがございます」

「いつてみるがいい」

「縄をほどいてくださいな」

「うむ、それは……」

役人は当惑したらしい。彼がいうのは飲食物のことである。

「朝から縛られた儘なんです。もう……手が痛くて、辛抱できません」

手とはいったが、お近が本当に

苦痛を覚えている部分は、手よりも胸である。

しかし、役人に胸のことはいい

たくない。若い乳房を、まるで面白半分のように、寄ってたかつて無残に剥かれた記憶がある。

いま坐っている、同じ土間でだ。

そのあとで、わたしの乳房は烏の市兵衛から辱汚され、さいなまれた。市兵衛は得体の知れない執念を三白眼の奥底に宿らせて、世にもいまわしい貪婪ぶりを示したのだ。

縛られ、押さえつけられ、脅されたわたしは、あの時、どうすることもできずに、ただ血のような涙を流すばかりだった。役人など

縛られ、押さえつけられ、脅さ

「旦那……あの子供は？」

「うむ、あれか。今朝、柳原の堤に捨て児があったのだそう。暫時、この小屋で預かっているのだ

が、憐れだな。乳ほしさに、泣き疲れてはまた、思い出したように泣き出すのだそうだ……」

聞いているお近の眸の色が、限りない優しさをみせるようになってた。そして——いったのである。

「お願いでございます。旦那。どうか、あの乳呑み児に、わたしの

お乳を飲ませてやって下さいまし。わたしは、もう何も欲しくはありません。ただ、この世の名ご

りに、可哀そうな子にこのお乳を……」必死に哀願するのだった。

こうして叶屋のお近は、再びこの小屋の中で裸の乳房を男達の視線にさらしたのである。

後手の縄目も解かれぬままでお

終

発売中!!

叩けば開く……額の接吻から掘炬燵の素晴らしい利用法
昼間は賢母でも夜はボクの美しい奥さま
唇は柔肌の官能に点火する
インスタント・寝具の座蒲団とは
奥さまよ酔覚めの水と愛撫の手を
大事な局部清拭のエチケット

——外二〇篇掲載

結婚生活
の美学

■二人っきりの夜の闇にも作法がある。

楽しく悦ばしい寝室技巧百般の指南書!

原比露志著

新書判・美麗装幀

¥130 円24

東京都中野区江古田1-2302

株式会社 あまとりあ社

振替・東京10756 (久保書店宛)



★ 日常生活にひそむ ★
マゾヒズム
への誘惑 IV

1 人間並みに扱うのは残酷だ

今から六年ほど前、つまり一九五四年にインドでいとも奇怪な少年が発見され、世界中に異常な話題を投げました。有名な「狼少年事件」です。

少年は停車中のある貨車に、たまたましのびこんでいたところを保線係に発見されつかまったものですが、その少年のあまりに異様な様子が人々を驚かせました。少年はまるでしゃべることができず、野獣のような咆哮を発するだけです。もちろんすっぱだかのままで、その黒い皮膚には無数の傷があり、それは長年、全裸でジャングルをはい回った痕跡、あるいは彼を育てた狼が、幼い



黒田 史朗

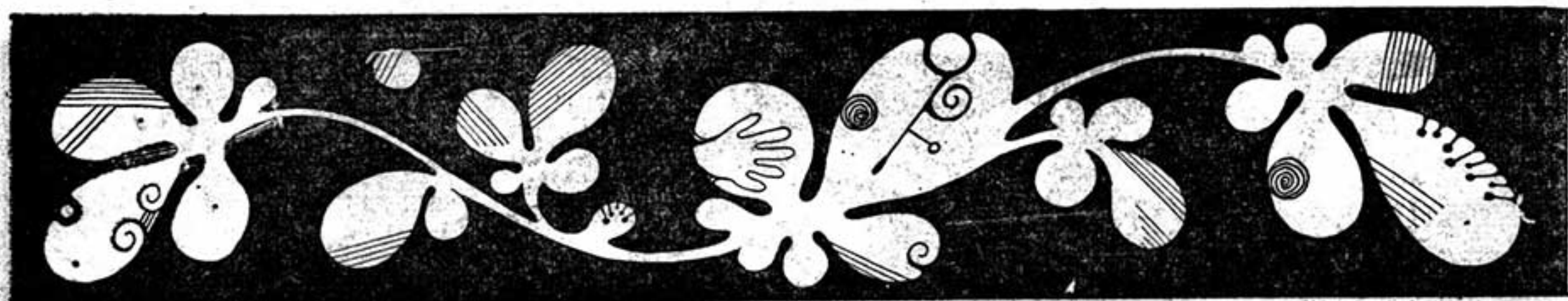
カット・佐久間 淳

その体を運ぶために口にくわえた跡であるとかいわれました。

少年はすぐに病院に運ばれましたが、近寄る者にはだれにでも激しい敵意を見せ、牙をむいてかみつこうとするので大変に危険でした。そこで病院では一計を案じ、少年を鎖でベッドにつなぎました。

彼は加工した食物を食べず、なまの肉しか食べません。水を飲むにも、獣のように舌でペチャペチャと吸い上げます。第一彼は、人間のように二本足では立てず、四つんばいではい回ることしかできません。

大小便はたれ流し、着せた衣類はたちまちその鋭い歯でズタズタに食いちぎります。



で、彼を扱うには、ちょうど獣なみの扱いしかできなくて、いつも彼は鎖でつながれました。

さて、この異様な少年を研究するために、大勢の学者が集まってきましたが、中でもロンドンからはるばるかけつけたサー・フィリップ・モーションヴァール博士などは最も有力な学者でした。博士は衛生熱帯医学の世界的権威でありました。

入念な調査、診断の結果、博士は結論としてこういいました。

「おそらく、狼か山犬のような動物に育てられたのであろうが、この少年は再び人間の生活に立ち帰ることは困難である。だから、そういった意味で、この少年を人間並みに扱うのは残酷なことだ」

これは大変にセンセーショナルなことばです。人間並みに扱うのは残酷だということは、獣として扱え、ということであります。

鎖につなが檻に入れ、時には人間になれさせるために鞭で調教する必要もあるのでしよう。食物としては生の肉、飲水はどうせ舌でしか飲めないのですから、平べったい器が使用されるでしょうが、その給餌係の役目を果たすのは、おそらく看護婦ではなかったでしょうか。

そしてなお残酷なことは、彼は明らかに人間であるにもかかわらず、生涯獣としての生活を送る運命にあり、人間にもどれる見込がほとんどないことです。

だからこそモーションヴァール博士はさらにいいます。「われわれがこの少年に最も親切であるためには、少年

の頭にピストルを打ちこみ、安楽に死なせてやることでしょう。……」

これは全くとんでもないことです。むげに生物の命を断つことにだって問題があるのに、彼はまして、立派な人間なのです。運命のいたずらが少年をそのような悲境に陥らせたので、その上ピストルでうち殺そうとは、これは明らかに殺人です。少年自身だって、せつかく生きているものを、それを早く死にたいなどは決して願ってはいなかったでしょう。

ではどうすればよいか、処置は博士の言うとおり、獣として扱ってやることです。これしか解決の手段はないはずです。

だが悲しいことに少年は、獣としての生活をすら長く続けられず、環境の激変のためか、とうとう衰弱死をとげました。哀れなことでした。

もっとよいてだてはなかったものでしょうか。たとえば、インドよりずっと医学の盛んな日本あたりへ、早く少年を連れて来たとしたら、少なくとも少年はもっと長く生きられたに違いありません。もちろん病院内の特設の檻に入れ、看護婦がその日常の飼育には責任を持ちます。学界の貴重な研究資料にもなることですし、少年の日常の生態は一般に公開される必要があります。

もっともその意味では、病院でなく動物園に入れておくことも一計です。また、奇特なご婦人でもいれば、その人に飼ってもらうことも少年にとってはどれほどの幸福かわかりません。



一説によると少年は、狼に育てられたのではなく、白痴として生まれたので両親がきらい、狭い檻にとじこめ、犬同様に飼ってきたのだ、ということでもあります。いずれにしても「人間並みに扱うのは残酷だ」というモーションヴァール博士のことばに異議はさしはさめないようです。

今ヒマラヤの怪として関心を集めている雪男がつかまったとした場合、彼がもし人間であったとしても、文明人が彼に与えることのできる生活は、獣としての処遇しかないでしょう。今でこそほとんど見られなくなりましたが、つい最近まで、祭礼の見世物小屋では、多くの不具者が獣同様に檻に入れられ、見物人の目の前にさらされていました。

マゾヒストだって同じように、彼らを人間並みに扱うのは残酷なことなんです。

2 微笑の秘密

東京御所の女官室の電話が、リリリリンと鳴りひびく。女官のひとりがあわてて受話器に飛びつく。二階の寝室から、美智子妃殿下がかけられたものです。

「ああ、名和さん——〇〇という雑誌が読みたいの。買ってきてください」

ベルが一回鳴れば殿下、二回鳴ったら妃殿下のご用命ということ、女官たちは緊張する。女官の仕事はもちろん皇太子と美智子妃のお身の回りいっさいをしてあげる、特別の任務を持つもので、女中と秘書の役目を負い

ます。

女官は東宮御所に四人います。彼女たちはオスベラカシの髪に、長袴打衣という昔の美しい宮中スタイルではなく、今の会社勤めのBGたちと少しも変わりのないワンピースにハイヒールという服装で、当たり前に出勤します。早番、泊り、泊り明けの三つの勤務体制にしたがつて、彼女たちは終始だれかがはべって殿下、妃殿下のご用事につとめます。

女官は特別職の国家公務員という肩書のお役人で、給料もごく普通に低いものです。女官長の牧野純子さんが四二、二〇〇円、名和栄子さんが二三、〇〇〇円、今村淑子さんが二二、六〇〇円、最年少の佐久間玲子さんが一五、六〇〇円というところです。

この四人の女官たちはいったいどういう素性の人たちでしょうか。まず女官長であり、五十八歳という最年長の牧野純子さんから見てみましょう。

牧野さんは元内大臣牧野伸顕伯爵の長男、故伸通氏の未亡人で、伸通氏は宮内庁式部官を勤めていられた人です。純子さん自身も佐賀の殿様鍋島直明元男爵の長女で、大正七年学習院女子部を卒業されたお姫さまで、学習院同窓会、常盤会の理事でもありました。

次に名和栄子さんですが、彼女は三十六歳、名和元男爵の末娘で、学習院を卒業したやはり立派なお姫さまです。

佐久間玲子さんは、元北海道大学理学部教授故佐久間修三氏の未亡人で、東京女子大の出身です。



今村淑子さんは元海軍中佐故今村正巳氏の未亡人で二児の母、三十九歳になります。

四人の女官の人たちについて、いったい何の必要でその素性をこのように書かねばならなかったのか、以下まことに手前勝手な感想を二、三述べてみたいのです。

四人のうち、二人の女官は元華族、特に牧野さんなどは並みのことでは、お顔をおがむこともできぬ高貴の出身で、世が世なら正田家の人たちなど、そばにもよれぬ権勢の家であります。平民出身の今村さん、佐久間さんのお二人にしても、教養高き立派な令夫人でいらっしやったのだし、やっと学校を終えられたばかりの美智子妃にとっては、あらゆる点で尊敬すべき大先輩です。

ところが現在、そのずっと後輩であり、子どものようにかわいくもある美智子さんが妃殿下という雲の上の座にすわり、一方並みいる大先輩や、本来はるかに権威を誇る名門の人たちが女官としてその座にはべり、家臣さながらにお仕えする光景が、どうにもならぬ感慨をMとしてのぼくの心に引き起こすのです。

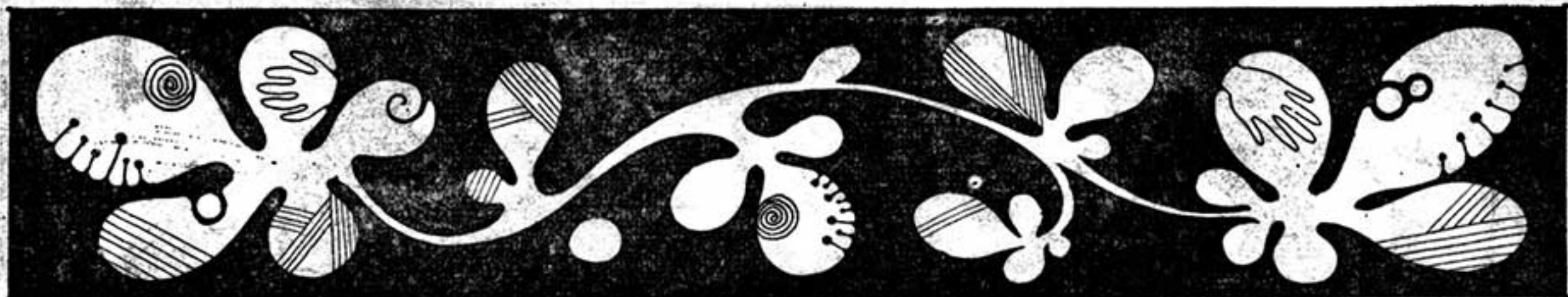
最敬礼をする両親や先輩、上長たちの列の前を、軽い会釈で素通りされる美智子妃の微笑が、そうした感慨にいつそうの拍車をかけるのです。Mの心が渴仰する最終の目標として、こうした状況におけるこうした婦人の微笑は、最高の秘密と意義をぼくの心に投げかけるのです。もはやこの際、いかに妃殿下のかつての恩師だからといって、ただそれだけでは、一介の教師風情が妃のの前にやすやすとは伺候さえできぬでしょう。

この誇り高き優雅な微笑は、すべて制度と環境の産物であり、一介の留学生が一躍王妃となったイラン王朝の出来事とも考え合わせますと、つまり一介のB・Gやタイピスト嬢にも、あらゆる婦人の心の中にこの優雅な微笑を笑む素質と願望があり、ただその微笑を笑むの機会が恵まれぬため、彼女らは大多数、普通の市井人として終わります。いっさいはただ、偶然に、という一語がすべてのカギをにぎります。

一方がお嬢さままで一方が女中か婆や、一方が奥さままであり、一方が下男か爺や、この両者の身分関係も明日になれば逆転するかもしれないのです。いっさいはただ、偶然が両者の関係をそのように規定しただけであります。

エチオピアのクーデターは、機至らず、ついに失敗に終わったようでしたが、もしそれが成功していたとしたらどうだったでしょう。昨日までの権威者、元皇帝ハイレ・セラシエも一介の亡命者として、もしかすれば日本に敗残の身をさげて、やってきたかも知れません。彼は最大の親日家であり、その可能性は小さくありません。

国賓として日本を訪れ、一国の皇帝としての権威でもって皇太子夫妻を迎えたハイレ・セラシエではありませんが、国を追われた亡命者となってみればもはや国賓どころではなく一人の厄介者に過ぎなくなるのです。そのとき彼が、あれほどねんごろに交わりを結び、敬意をささげてくれた友として、皇室をたずねてみてももはや相手にはされないのです。門前払いか、悪くすれば逮捕のう



き目にも会いかねないのです。

そうなったとき、日本皇室と交歓を交わしたいいつかの日、皇太子のうしろで控え目に、つつましく笑んでいたあのかれんな皇太子妃の微笑が、まるで意味の違ったものとして、はるか手の届かぬ高みから、元皇帝の現在の身を誇り高く見おろしていることに気づくのです。元皇帝といえども、皇太子妃の姿をば、ただ通りすがりにその行列をおがむようにのぞきみることしかできなくなつたのです。

それにつけても意義深く思い出されるのは、元満洲国皇帝溥儀、エジプトのファルク国王の身の上です。また、かつてのイギリス国王フィリップ公が、逆に今では姪のエリザベス女王に臣下としての礼をとらねばならぬ境遇や、かつての国王であり伯父である公に接する、そのときの女王の微笑が強烈な感慨をばくの心に訴えるのです。

今アメリカのフロリダ州には、キューバからの引揚者が殺到し、大きな社会問題と呼んでいるようです。金もなく職もない、キューバ在住時代には社長であり大実業家であった人たちが、今ではタクシーの運転手、ホテルのボーイや雑役などでやっとその日を暮らしているそうです。

フロリダは名だたる観光地で、令嬢や令夫人たちが各地から集まります。彼女らは、一介のホテルのボーイや雑役のかつての身の上がどうあろうと、そんなことには関心を露ほどもに払わないでしょう。

「ボーイさん、そのトランクあちらへかたづけ、……それから夜会用のわたしの靴にブラシを入れてくれた？」

「ハイ、きれいに磨き上げておきました。マダム」

「そう、どうもありがとう」

そうして婦人は、優雅な微笑を自分の使用人に笑んでみせるのです。

3 権力者と弱者

一月五日の朝日新聞の記事から――

東京・麻布署はさる三日、都立広尾病院で死んだ港区新広尾町二の一五七六工岡村寿郎さん(34)の長男恒彦ちゃんを四日午後から慶大法医学教室で解剖するとともに、岡村さんと妻の甲子子さん(34)を幼児虐待の疑いで取り調べた。

解剖の結果、全身約二十カ所のアザはつねったりなぐったりした跡で、直接の死因は肺炎とわかった。このアザについて岡村さん夫婦は、恒彦ちゃんが精薄児であつたところから、なぐったりつねったりして、恒彦ちゃんをいじめたのだという事実を認めたので、同署は近く二人を暴行と保護責任遺棄の疑いで書類送検するといっている。

このような幼児虐待の事件は、封建の昔から連綿と跡を断ちません。この場合は加害者は夫婦ふたりともですが、たいいてい女性が主役を演じるのが普通のケースであるようです。そうして多く、被害者の幼児は精薄児であ



るか、またはそれに近い知能指数のごく低い子どもが大部分のようです。

バカを見ればからかいたくなり、弱い者を見ればいじめたくなる、これは弱きを助け強きをくじくという義侠的心理の、もう一方の裏側に実在する、人間の本能です。だから本当のところ、サジズムの犠牲となって夜ごと日ごと泣き明かして暮らしているのは何も幼児であるとは限りません。立派に成人したおとなだって、力弱い不具者か精薄者であれば、当然その被害をうける可能性を多く持つものです。

ただおとなの場合は、幼児と違い、耐久力がそれだけ備わっておりますので、特に女性の力でなぐられたり、つねられたりしても、それが殺す意志を持ってさえいなければほとんど死ぬことはありません。つまり事件は永久に明るみへ出ずに終わることになります。たいていの事件は、被害者が死んだことによって問題にされるのです。

新聞に報道される事件よりも、実は海面下の氷山の部分のように、隠された虐待の事実のほうが、それは被害者が幼児であるとおとなであるとかかわりなく、無数に世間では行なわれているに違いないのです。

みじめったらしいものを見れば、さらにその上の凌辱を加えてみたくなる、これもまた人間の大きな本能です。軍隊の飯を食った経験のある中年以上の人たちは、軍隊生活の思い出を話す場合、いかにひどいいじめられ方をしたか、いかに日常茶飯事のようになぐられ通して

あったか、などの話をします。

軍隊では、いわゆる幼児虐待の事件をもっと大がかりに、集団的に、しかも合法的に地で行なわれたのです。ところが人々は、なぐられた話はするが自分がなぐった話はまるでしません。口をぬぐってそしらぬ態でいます。軍隊生活において、なぐられなかった者は一人もありません。合、新しく入ってきた初年兵に全然気合を入れたことがない、という人もこれまた一人もいないはずで

全部の人が、たとえ今ではどんなに温厚な紳士に見えても内気でせんさいなインテリも、朴訥で正直な農夫も、みんながなぐられた経験を持つと同時に、人をなぐり、あるいはいじめ抜いた体験を持つことを否定できません。人間本来の欲望が、軍隊という制度で守られることにより自由なかたちで発現していったので、止むを得ないことではありました。

精薄の幼児を自分の絶対的な支配下においた場合、女性はやすやすと残酷な女性に変じます。軍隊におけるときと同様に、人間の手に絶大な権力が与えられると、人はやすやすと残酷な支配者になります。そうしてそれを承知の上で、だれもがその権力を手に入れたいと望んでいるのです。女性でさえも、いや女性のほうがむしろ強く権力にあこがれます。権力を握れば自分の気持ちができるという風に動くであろう、ということを、心のどこかで着実に予測しながら、……

この意味において、敗者を勝者の立場から支配した、



捕虜虐待事件のかずかずは、その間の事実を端的に示します。銃剣で刺し、刀でためし斬りし、焼き殺してみたりモルモット代わりの実験に供したり、生体解剖などの残虐な事件の加害者は、実は、生まれつきの兇悪な犯罪者の犯行でなく、一般善良な市民のやったことなのです。父や兄や夫が、つい身近にいる会社の同僚や先輩がやったことです。比島でさばかれた元日本兵の捕虜虐待の犯行の一つに、こんなのがありました。

便所用のスリッパの裏を、強制的になめさせた、というのです。もちろん汚物がついていれば、それを舌で清めるのです。当然考えられることです。

かつて非行少年だった二十一歳のあるバーテンが、少年院での体験をつづって出版しようとしている『蝶と炎』と題する文中に、脱走失敗者に対してのリンチについて書いてあります。

便所の「朝顔」をなめさせられ、後架に逆さづりされて、ふんだんに悪臭を呼吸させる、というのです。その立場に立った場合、人間の本能をかきたてるサジズムの智恵は、今も変わりがないのです。

火野葦平氏の戦後の大作『戦争犯罪人』には、終戦後戦犯として米軍に捕まった元日本軍人が、監視のアメリカ兵からひどい凌辱を受ける場面を、刻明に描写してありました。

米兵は酔っぱらってきていきなり前をはだけ、「シャクハチ、シャクハチ」と叫びながら、必死にこぼむ日本兵の口中へ、巨大な逸物を無理に押しこむのです。異臭

がいっぱいに漂い目がくらむようだった、とあります。この女性版が実際にあり、親しく体験された沼氏が、一度そのことを『奇巧』誌上に発表されたことと思ひ合わせ、興味が尽きません。

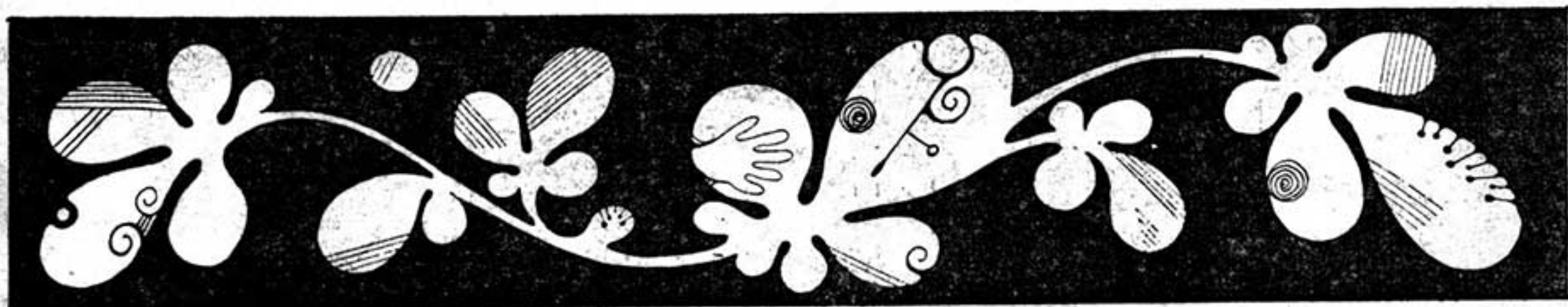
権力を握った支配者として弱者に臨むとき、人の心は異様に傾きます。その一つが跡を断たぬ女性による幼児虐待でもあります。女性は心に権力を欲し、そのことはどこかで自分の支配下に、被害者をひざまずかせてみたいという、人間本来の欲望につながっているものであります。

あら、痛いんですって

映画『サイコ』で、便器を真上から大きく写し出したシーンがありました。静止している便器の白い肌でなく、水洗の水が泡立って吸いこまれて行く、便器の動きが捕えられていました。

これほど刺激的な扱いで、便器の働きを見せつけられたことはあまりありません。自分がまるでその水といっしょに、いやその水のおぶくの一つになって吸いこまれていくような、妖しい気分にはさそわれました。

その上その便器の上を、シャネット・リーの白い素足がまたぐようによこぎるのですからたまりません。全く今までの映画では扱われたことのない、刺激的な場面でした。便器とそれをまたぐ女の足を、このように賢明な想定で画面に生かせれば、これこそ全く新しい斬新な生命を映画の中に生かすことになるでしょう。



ヒッチコックのファンであるぼくは、**△サイコ△**には大きな期待を寄せたのですが、右の場面を除き、これをたんにスリラー物として見た場合には、それほど出衆栄えだとは思いませんでした。推理とスリルの妙味では**△疑惑の影△**や**△断涯△**の域に及びませんし、サスペンスの盛り上がりにおいても**△謎の下宿人△****△暗い鏡△**我いは**△扉の陰の秘密△**といった往年の作品に追いつけないようです。

ただ、四万ドルの金を持ち逃げする、**△シャネット・リーの、あの冷たくとぎすましたような伶俐な表情、冷酷とさえ言えるような雰囲気は、あの便器のシーンと相まって、別の効果を生み出しました。シャネット・リーはもちろんのことですが、とかく考えてみれば、ヒッチコックの映画に登場する女性には、共通のあるタイプが考えられます。**

△北々西に進路を取れ△のエヴァ・マリー・セイント、△めまい△のキム・ノヴァク、△裏窓△△ダイヤルMを回せ△のグレース・ケリーなどで、これはまたマゾヒストにとっての理想的ドミナ像としてのタイプだ、と言うことができないかと思えます。

一見知的で冷静、エレガントにしてその中に色気あり、といったそのタイプについて、ヒッチコック自身が語ったことばがありますが、興味深く聞くことができます。

「彼女らはいずれもイギリス系であるが、とかくイギリス女性は一見知的で冷静で、信頼できるがごとくで信用

できない。わたしはイタリア系のごとく、女性の肉体的特徴を露出したタイプには寒気をもよおす。彼女らには何らの神秘性もないからだ。冷静にして不可解なる女性が、いざというとき情熱の火花を散らすところに特殊な女性のタイプが発見できるのだ。とかく人間というものは神秘性に興味をおぼえるものである」

このヒッチコックの女性観は、また偶然にもツルゲーネフの好んで描き出した女性像に結びついていきます。

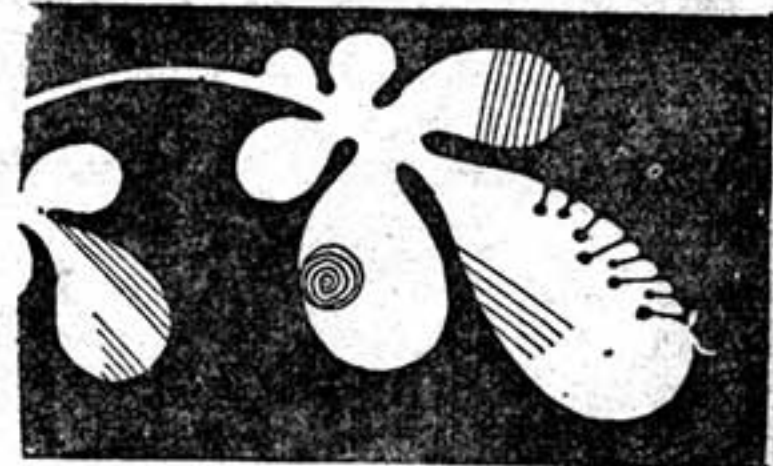
つまりそれは**△初恋△**に登場する悪魔的な少女、ジナイダに象徴されるタイプです。

彼女は明晰な頭脳と、豊かな才能と、薫香のように放散する女性的魅力を賦与されながら、しかも皮肉な冷笑的傾向と傲慢な残忍性を多量に蔵した、一個のナゾの女であります。彼女は一見空虚で冷酷なコケットであります。しかしそのずる賢く技巧的な動作の間には、一方で静かな女性的気分が交錯します。それは彼女の心の奥にひそむところの真に自由人としての誇りのためであります。

彼女は数多くの崇拜者を苦しめさいなみながら、自身は少しも心の落ち着きを失わないで、幸福な明るい気分を楽しむことができるのです。

ヒッチコックが、ジナイダのような女性のタイプに心ひかれることは、誠におもしろいもので、ツルゲーネフもさぞや地下で満足のことと思えます。

便器の白いタイルの印象は、強いおののきをマゾヒストに与えます。そのおののきに加えてヒッチコックが愛



するところの女性の足の神秘さ！ ▲サイコ▼への興味は全くこのシーンに尽きるの感じですよ。何かがあり、何かが起ころうとする、それは推理的な興味と同時に、心理的な暗示に人の心をおののかせる、背徳への誘惑です。ツルゲーネフが▲初恋▼で描出したジナイーダとは、まさしくこのようなドミナの典型であります。彼女は主人公であるわたしの髪の毛を引き回し、「痛い！」と叫ぶわたしの悲鳴を軽く聞きながし、たちまち一束の毛をむしり取って、「あら、痛いんですって……」とやさ

しげに言う女です。……彼女はおお、その取り巻きの一人であるルーシンにこう言います。

「ね、よくって、じゃ、わたしに手を出してちょうだい。わたしがピンを突き刺してあげるから。あなたは人に対して恥かしいとお思いでしょう。そして、ずいぶん痛いでしょう。それでもあなたは笑わなくちゃいけませんよ」

何と戦慄すべきことばでしょう。ドミナとは、まさに一つのナゾのタイプであります。

NHKテレビで、一九五一年製作、本邦未公開という「雪の夜の旅」となる仏映画を見たのだが、

それが大変面白くて、この種小説のマニアの私は充分たんのうしたものだ。その面白さの主要素といえば、途中何度も背筋がこそばゆくなる奇妙なサスペンスであり、つまりこの映画は死体永久隠匿法というトリックを含むドラマなのである。

「青い麦」「赤と黒」などの巨匠クロード・オータン・ララ監督作品で、日本人には少々刺激が強すぎることもあって(?)ちよっと作

れぬようなこってりした残酷味が漂っている。

まずイヴ・モンタンのシャンソンが人里離れた雪の山中の風景のなかに流れて来る。一組の馬車の旅人、それにフェルナンデルの修道士と弟子の若者が宿を見つけて大喜びで中に入るのだが、この「赤い宿」こそとんでもない宿屋だったわけ。迷ってたどりつく旅人を片っぱしから片づけて金品を強奪

がかりで仕方ない。

そこには亭主とフランソワ・ロゼエの女房とマリー・クレール・オリビアふんする娘、それに殺し屋的黒人の下男が住んでるわけだが、揃って妖気に満ちた面々ばかり。

例によって催眠薬入りコーヒードで眠らせて、仕事にとりかかることになった。あわや第一巻の終りかという恐怖と妖気に満ちみちた残酷な光景、もっともそこは映画のことだから、主人公フェルナンデルは修道士という伏線があるわけ、女房の方は修道士ばかりは恐い作業を行うのが何となく気

初めは何のことかよくわからな

現に死体は窓の外にあるといわれ、フェルナンデル歯の根も合わ

三粒聖

ず外を見るが、何もない。そのはずで死体は雪だるまに化けているわけ。食事になっても焼肉を皆からすすめられるがとてものどになど通らない。「すばらしい豚肉だ」などと感嘆するのを聞くとおさである。それもそのはず先ほどロゼエの懺悔で、後始末は豚の餌にしたと聞かされたばかりだから。

恐しい時間。どうにかしてこっそり旅人達に事情を知らそうと懸命になるのに、そんなこととは露知らぬ旅人達。

そのまどろつかしさが、残酷な話だけに天下一品のスリルを伴って、ハラハラしながらも、何となくゲラゲラ笑えて仕方なかったものである。

ところで弟子の若者は娘と恋仲になったりして、一層話をこんがらからせてやきもきさせられるがこれがかえってフェルナンデルの頓才を生ませることになり、早速神父立会いの結婚式。

読者随筆

美食ストーリー抄

これがまた傑作で、参列者の旅人一同いずれも眠り薬のために白河夜船。ユーモアと恐怖とグロテスクが奇妙に混合した傑作シーンである。

最後に神父が雪だるまに雪つぶてをぶっつけて、雪のメッキがはげた顔が現われる。かくて夫婦の悪業がばれてめでたしだが、結果はおよそ想像がつくとはいえ、ゾクゾクするようなサスペンスが、グロ味濃厚な面映さを伴って、こつてり恐がらせてくれる圧倒ぶりである。それをまたフェルナンデルやロゼエなどが心憎いほどの名

演技でやってのけるのだから、そ

の強烈な印象は一生(少しオーバーだナ)私の脳裡を去らないだろうというくらいだった。へ一月十日二日夜七時四十二分、NHKテレビ

大体探偵小説のトリック中で一番面白いものは、死体隠匿ではないかと思うのだが、どうであろうか。

「アリバイ」とか「密室トリック」も重要なトリックで面白いだろうが、こしらえごとの争えず、死体隠匿に比べたら、チャチな感じはしかたあるまい。

その中でも、「永久隠匿」が最も優秀なのはいうまでもなからうし、かつ最も難事にきまっているから、それだけ面白いというものだが、とりわけ「地中埋没」や「水中に沈める」のや「焼失」、「薬物溶解」よりもさらに面白く、グロ味強く、決定的なのは「食餌トリック」であることは論をまたない

は、この式のトリックのものとい

つまりスリラー中最上級なものは、この式のトリックのものとい

てもいい過ぎではないと思うのだ。これに比べたら他のどんな巧妙なトリックさえも色あせて見えるくらいだ。トリックなるものが奇妙で完全犯罪に決定的な程上等

ということから、これは当然だ。これをアプノルム心理からみれば、容易に「ネクロサディズムス」

を連想するわけで、(私が勝手に連想するだけでもちろんミステリーはアプノルムと元来直接関連はない)Sの極致だろう。私は奇妙な陶酔をこの種の怪奇小説に感ずる者なので、こうしたものを何よりも漁りたくなる人間だが、寡聞のためか余りお目にかかれぬのが残念だ。

本誌に「人の消える沼の家」があり、やや愁眉を開いたとはいえ、やはりミステリー小説でもアプノルムのそれでもかかるストーリーはごくまれのようだ。

残虐やグロ味も食人程になると、ゾッとしながらも、そのくせゲラゲラ笑いたくもなる、奇妙な心理をわれわれは持っているらしいので、それにふさわしい、とほけたユーモアやウィットのス마트な要素がないと、つまらなくなるわけ、そんなむずかしさを伴うことも、一つの原因だと思うが……。

私はこの種の作品に、「美食ストリー」なる語を作って自己満悦している者であるが、この「美食小説」は二つに分けることができると思う。

- ①直接的美食トリック内至テーマ。
- ②間接的美食トリック内至テーマ。

S・エリンの「特別料理」
ダンセニイの「二瓶の調味料」
乱歩の「闇にうごめく」
マージェンタールの「とっておきの料理等」
②に属するものとして、傑作は

ウィリアムスの「この手で人を殺してから」で、前述の映画「夜の旅びと」などもそうである。

この両者いずれが残虐またはグロテスクかと考えると、①の方がより怪奇残虐のようだが、よく考えてみる時どちらともいえない気がする。

寧ろ②、つまり家畜の餌にし、太らせたのを食膳に供する方が、その面倒な過程を考えただけでも、トリックとしては高級で、つまり、より上等なグロテスク味のような気がするわけだ。

さて前述の作品群は永久に怪奇サスペンスノーベル史上光彩を放つに違いない逸品ばかりだが、「二瓶のソース」と「特別料理」以外は、さして問題視されてないらしい。

いのが心外でもある。

乱歩の「闇にうごめく」にしても、このすぐれた作家の他の多くの作品群のようにはあまり論ぜられぬものだが、その約半数以上の作品の中でS・M・F・H等あらゆるアプノルムの美まで探求した作者が、さすがに「美食小説」はこれのみということだけでも貴重なものと思うのだが……。

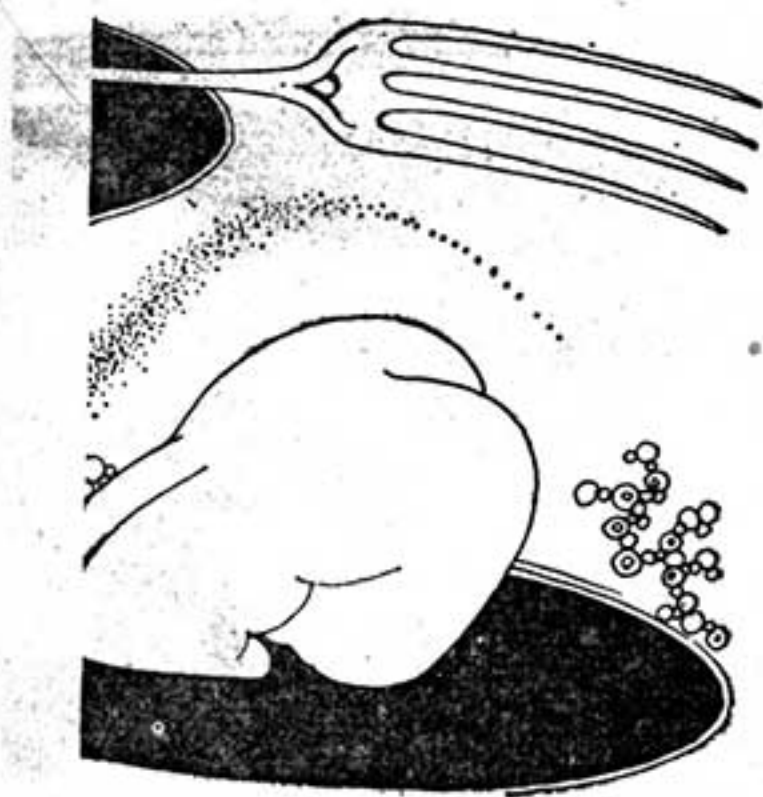
いや、そればかりではない。この「闇にうごめく」はプロットの雄大なるスペキュレーションといい、ロマンチズム、怪奇趣味といい、他の多くのすぐれた乱歩の作品群に遜色ないものだと思うがどうだろう。

この作では、太っちょのホテルの主人が、堂々たる体軀の男女に眼をつけ、みずから得意のマッサージでフェチズムをたんのうするだけでない、後その内臓などをアルコール漬けとしている。

S・エリンの「特別料理」は皮肉な美食の極致で、この作者らし

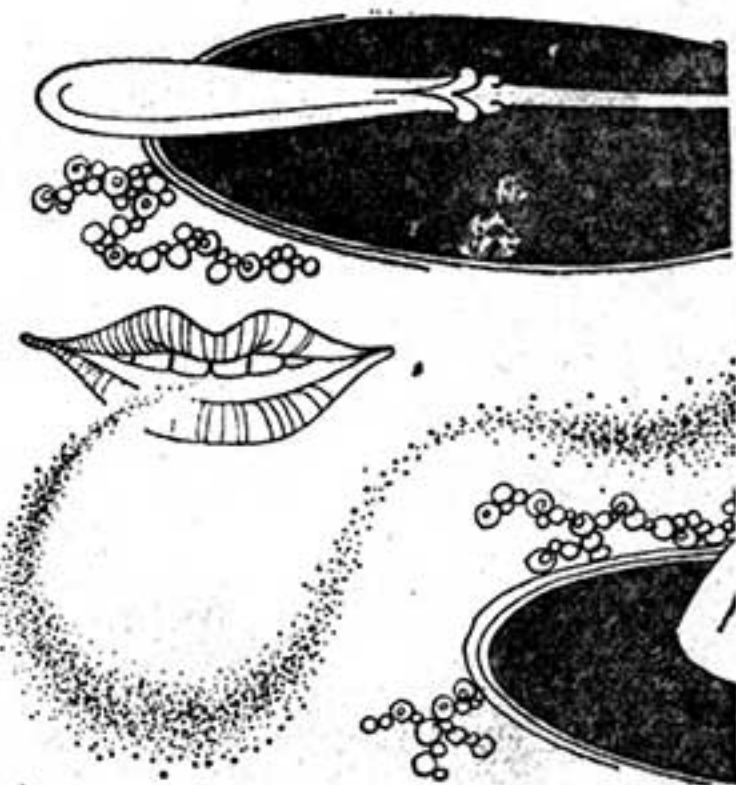
い巧妙なペースで読者を葉籠中のものに作る作風だが、グロな題材をこれ程までに高級かつ神秘的に書き表わす鬼才ぶりには圧倒されるほかはない。ペースで読ませるすぐれた作風である上に、ほとんどがいわゆる美食を暗示的な巧妙さで表現してあるので、その一部を抜萃することはとても不可能に近いし、また無意味なほどで、「二瓶のソース」とともにわが「美食小説」の一金字塔である。(これはE・Q・M・M日本版一九五八年十月号にのったもの。)

「この手で人を……」は、妻を殺した男が、いかにして巧妙に自分の犯罪をしおせたかを綴りたいわゆる倒叙スタイルのミステリーであるが、まさに文字通り人を食った話である。これも同誌一九五九年二月号にのった傑作だが、あまり注目した人が少なかったらしいのを至極残念に思っていたところ、昨年ヒッチコック氏来日の際の座談会記事によると、彼がこの



作品を高く買っているらしいのを知って、かげながらさすがヒッチ氏なるかなと快哉を叫んだものだった。「特別料理」と同じく暗示的だが、終りに近く、

『この原稿が活字になった時は、さぞ面白いだろうと、今からたのしみに行っているのである。サロン（人名）がこれを読んで、あんなによろこんで食べたひなどりの、体質や栄養分がなにかを知ったとき、彼がどんな反応をしめすかということは、私がとくに知りたいところだ……』云々と、とほけて書いてあるから全くやられた感じだが、これには実に秀抜なおちがついていて、心憎いほどである。『新しいことがもち上った。家政婦のアン・リッセンは、結局のところ、がっかりしてしまいかも知れない。彼女は私にほれこみそう



で、いや、もうほれこんでいて、退屈そのものになっている。私によけいなおせっかいをするので、閉口してしまうのだ。静かなひっそりとした生活など、とつくにどこかへけしとんでしまったようである。……彼女が親切心以上にすることを、やめろなどと言って、感情を害することはしたくない。また彼女は特技がないものだから別の仕事をやれと言って暇を出すことは、恥をかかせることになってしまいうだろう。……自分がいなくなっても、悲しんでくれる人を、彼女はもっていないのだ。そして、私は栄養豊富な、よい割合の餌をつくって、来シーズンには、とくに良いにわとりを飼育しようと、一生けんめいである。国際養鶏協会の会長が、私の養鶏場とすばらしい若どりを見たいという、意向を表明したほど、私は今や、まさしく有名な人物になっている』

これこそ「おち」の巧妙な海外サスペンス中でも、最もすぐれたものの一つだと思う。これだけでわかることだし、それをいうのは野暮というもの。「美食小説」にふさわしい詩的暗喩ではないか。ほかに終りに近く、こつてりした部分もあった。

『……私は、にわとりの骨を食べないように指示をして、料理してあるものを、売ったり贈ったりした。後で骨を回収できるように、条件をつけてである。骨粉餌が不足しているものだから、と私は言いわけをした。この骨はほかの骨と一緒に粉砕機にかけてしまった。」「永遠回帰」のまったくよい見本である。また、遠いところにいる名も知れぬ多くの人も、やはりこの悲しむべき人肉嗜食を行っているのだ。つまり、このにわとりが生んだ卵を食べている、ということを言っているのである……』

（田口実訳）

全く人を食った話が、とほけた

ユーモラスな筆致で書かれていて、そのために一層グロテスクでシリアスな印象を与えている。「とっておきの料理」（宝石一九五九年一月号）になると、筋のめまぐるしい曲折ぶりがみことで、カレーと胡しように味つけしたというエキゾチックなグラタンのも美味が客を喜ばすのだが、中から髪の毛が出て来てからが、全く快調で、グロ趣味を満足させてくれる妖気の点ではこの作品が最上のような気もしたものだ。『巧妙な会話の連続が巧みに、奇妙な恐しき光景を暗示的に曲折させている点で類がないもの。』インスタントばやりの現在のこの序文大へん笑わせて仕方ない。こうした奇妙でシリアス、しかもユーモアのある「美食小説集」でも、早くどこかの気のきいた出版社で出版してくれないかと、グロテスク讚美者の私はひそかに思いつづけるものなのだが……。



口絵よりつづく

責め具製造人

★裏切った妻への憎悪と愛執が★
★精巧な責め具を造る一念に凝★
★縮して彼の生き甲斐になった★

九十九十郎

画・沖 渉司

凄艶な世界

仕事場の片すみに、今でもその木馬が置いてある。老人は仕事にかかる前とか仕事の合間に、一服やりながら、きまってそこに行つてまるで新しい傷口にでもさわるみたいに、その背に指を当てるのだった。木肌は古びた光を放っていたが、老人には、ここ、そことしみついた血痕を指摘することができた。そうしている時、老人の瞳は底知れぬ青味をたたえて、今なお消えやらぬ、責められる女体の凄絶な美しさの幻を追うかのように、宙をさまようのだった。

彼は二度と妻を迎えなかった。そればかりか、女気を一切断った。そして、狂ったように仕事に没入していった。しかし一日の仕事を終えてくつろぐ部屋の寒々としたたたずまい、鼻につく男やもめのすえた臭いが、どうしようもない空しさといらだたしさを彼に与えるのだった。そういう時など、彼はよく土蔵に入った。重い扉を排すると、手にした蠟燭のあかりに、四肢をふん張った木馬が浮かび上った。丸くこめた背の影を壁一面に投げかけて、鋭角の背をまさぐる彼の瞳は、はじめは妖しく濡れていたものが、やがて乾いた放心へと、その輝きを変えてゆくのだった。



この、燐のようにくすぶり続けてやまない老人の熱情の火を炎にまで奔騰させるには何かが必要だった。それがついに来た。

ある夏の初め——それが大正だったか、もう昭和に入っていたのか、老人のまどろむような半生にはけじめがつかない——父の時代から出入りしているある男爵家の当主からじきじきの呼び出しに接したのである。さしまわしの人力車であたふたと駆けつけた老人は、通された離れの一室で異様な場面に直面させられたのだった。

贅をこらした床柱を背負って、根の抜けた丸髻をがっくり垂れた若い女がくくりつけられていた。長縞の緋色がまがまがしく乱れた胸に、しごきが二重三重にからみついて、固く盛り上った乳房が大きく上下していた。

開け放された縁側から差し込む青葉の光が、これらすべてをこの世のものならぬみどりで包み込んでいた。

女の前に突っ立つ男爵の右手には弓の折れが握られ、秀麗なひたいには前髪が汗にへばりついていていた。

「じい、責め道具を作ってくれい。手枷、足枷、それに木馬も頼む。お前の先祖は伝馬町でそんな仕事をしていたと聞いたぞ」

老人の体内を戦慄がつかぬいた。

「こやつを責め抜くのだ」と男爵は弓の折れで女のなで肩を小突いた。

「こ、これは、いったいどなた様で」

「わからぬか。よく面を見てやるがいい」

男爵は片手にあまる黒髪に指をからめて女の顔を邪慳に仰向かせた。女ののどがかぼそ

く鳴った。

「お、おくさま」

才媛をうたわれた夫人の血の気を失った美貌がそこにあった。

「なんでも、おくさまを——」

「お前の知った事ではないわ」

しかし、男爵の口辺にただようにがにがしさは裏切られた夫だけのものであることを老人は知っていた。

老人は夫人のほっそりとした手首足首の寸法を取った。青く静脈のしずんだ肌に刻まれた紫色のアザが責めの苛烈さを思わせて、手がふるえた。

「頸の寸法も取ってくれ。手枷と首枷を一体にしたものを作るのだ」

ためらう老人を冷たい声が叱咤した。無理やりにはだけさせられた夫人のぬめやかに白いきり足には、赤黒い鞭あとが背中の方に幾条となくのびていた。

これが運命というもののなのだ、と老人は枷にする分厚い檣板に鉤をかけながらわが身がいいきかせるのだった。（儂のこれまでの精進は神仏もみとめてくださるじゃろう）

次から次へと要求される新しい責め道具を作る老人は異常な熱意に燃え上って行った。始めのものの悲しげなあきらめの表情は完全に

跡を断った。そして、外国の文献などを男爵から手渡されるようになった頃には、もう完全に愚かれた人になってしまっていた。老人は普通の指物師の仕事を全くかえり見ず、貴道具の製作にしなびかかったいのちを賭けたのである。

やがて、男爵の紹介で、好事家の注文がぼつりぼつりと来るようになった。責めの研究会らしいものから、出席を求められた事もあったが、老人は固く辞して仕事場を離れようとはしなかった。

ただ一度だけ、お前の作った貴道具の具合をせひ見てみよという男爵の強いすすめに負けて、男爵の責めに立ち合った事があった。勝ち誇って立ちはだかる男爵の足元に、やつれたためにかえって凄艶さを増した夫人が、飼いならされた従順さでひれ伏している。みじめな自分の姿を職人風情の眼に晒すのを恥じらう夫人の豊艶な体には、ハッと胸をつかれるような媚態があった。老人は、他人のうかがう事を許されない世界を覗き見たようになうしろめたさを覚えて眼を伏せた。

儂には儂だけの世界がある。老人はそれ以後かえって隠者めいた世界に閉じこもって行った。老人は貴道具を作りながら絶えず口の中でブツブツひとり言をつぶやくようになって

た。

どうだな、お清。ここがこう痛めつけられるか——うむ。こうすればどうだ。そうか、苦しいか。よしよし、じゃこう作ってやる——。

やがて、太平洋戦争が始まった。そして一切は無に帰した。あの木馬だけを残して——

執念の歲月

戦後東京も十八世紀のパリに近づいて来た、と某作家は楽しげに語る。礎柱を分割払で分譲する製造元が東京の某所にあるという。だがそれは老人の事ではない。確かに戦後は彼の土蔵を訪れる客は多くなったが、分割払などにはしていない。老人の顧客は皆旧男爵の紹介を何かの形で通って来た富裕な者ばかりなのだから、一本何万円という礎柱も、何十万円もする精巧を極めたからくり寝台もすべてキャッシュで支払われた。

暮しは豊かになったにもかかわらず、老人は土蔵の中に引き籠ったきりで、全く世間と絶縁した一人だけの世界にひたり切っているのだった。世間から「ギョロリのじいさん」とあだ名される老人は、もはや人間の形骸にすぎなかったが、その彼に生命を——ただひとつだけ生きているかに見える、あの青く光

る眼を与えているのは、すさまじい執念のみであるといつてよい。事実、戦後とみに増加して来た需要に応える老人の研究心は壮者のそれをしのいだ。からくり寝台がその極致を示している。外見は優美な木製の寝台だが、レバーの操作ひとつで、固定した女体をさまざまな形に曲げ、伸ばし、たわめ、そして鞭打つ事ができた。そのメカニズムは洋風だったが、それを包んでいる意匠はあくまでも東洋風なのが、老人の一徹を物語っており、好事家の絶讃をあびたものである。それはもはや一個の芸術品といえた。

老人は確かな紹介状持参の者以外とは絶対に会わず、それも前もって連絡がなかった場合には長年の客に対してさえ門前払いを食わせた。こんな裏側の世界では、それがかえって信用となるのである。車を乗りつけるような客を持つ老人を、近所の者は一種畏敬の念を持って見るようにさえた。

客の中には女を連れて試しに来る者もあった。關成金のにわか社長が連れ込んだ若い女はズラリと並んだ貴道具を見て鼠のようににはしゃぎまわり、値の張る「泣かせ椅子」を買ってくれとしきりにせがんだ。さる財閥のものやわらかな御曹司が、羞らい尻ごみする新妻をなだめすかして背の丸い木馬に押しあげ



るという場面もあった。スリッパ一枚にされた新妻は白く脂肪の乗った股で木馬の背を固くはさんだまま、甘えるようなすすり泣きをもらしていた。

そんな男女を見る老人の眼はすでに炎の色をおさめて、機械の働き具合を確かめる職工の非情な眼になりきっていた。客と語る言葉もぶっきらぼうで、どこか自分の丹精こめた

作品を見知らぬ女にけがされるのを怒っているようにさえ見えるのだった。

時代の移るにつれて訪れる人も変わっていった。しかし、老人の瞳の青い輝きと、片すみにいまだに乗る人を待ちわびるかのように四肢を張っている古びた木馬のみが変らぬ物語りを語っていた。

だが、物語りには必ず終りがある。

燃える眼

夏の西陽が土蔵の中を蒸風呂と化していた、新しい紹介で訪ねて来た芸術家風の男はしきりに扇子を使い、ハンケチでたるんだ首まわりを拭いていた。

老人は枯木のような体を折って、さし出された名刺に眼を通した。そこには「××映画

SHOJI
OKI

会社監督「日下義人」とあったが、老人はこれが最近残酸ブームの波に乗って売り出した映画監督とは知るはずもなかった。

「今度撮る時代劇に、責め場をふんだんに盛り込もうと思ひましてね。聞くところによりますと、あなたの御先祖は伝馬町で拷問具を作っておられたとか。そこであなたにこの映画の責め道具を作っていたら考証の面でも面白いものになると考えたわけです」と日下監督は懇懇に出馬を乞うた。映画の小道具となると撮影所に通わねばならない。久しく世間との交際を断っていた老人はとって、それは文字通りの出馬だった。

老人は即座に断った。取りつくしまもなかった。監督も折れざるを得なかった。では必要な道具類の製作だけをお願いしましょう。現場との打ち合せその他の連絡はこちらで適当にやりますから。ようやく、老人も首を縦に振った。

手枷足枷左右四個、たたき棒三本、木馬二個、算盤責用具二揃、磔柱一本、これが注文された品だった。製作は順調に進んだ。日下監督は草いきれのむんむんする空地を泳ぐようにして足繁く土蔵に通って来た。老人の熱意はそれに拍車をかけられるように高まっていた。すべてが完成した日、監督はいった。

「明日、主演の女優を連れて来ます。具合の悪い所は直さねばなりませんから」

老人はみごとに出来上った責道具の列に満足気な視線を走らせながら、気軽にうなずいていた。

翌日の夕方、日下監督は女優を連れてやって来た。監督から旭岡田鶴子と紹介されて、ものうげな視線をあげた老人は、ほの暗い電灯の明りの中であでやかに微笑んでいる彼女を見て、棒を呑んだように体を硬直させた。銀線を思わせる白髪が細かくふるえ、眼が細くなつた。薄ものの和服をつけ、長い髪をアップに結いあげたその女優の眼、唇、頬のふくらみ——どのひとつを取っても、死んだ妻の面影を彷彿させないものはない。

こんなにも似た人間がいるものか——老人は、不思議そうに見返す田鶴子に吸いつけられるような視線をそそいでいた。

監督は老人の驚愕におかまいなく仕事にかかった。手枷、足枷、算盤木には問題はなかった。嬉々としてテストを続ける他の二人に對して、老人は平素より一層おしだまったまま機械的に事を運んだ。この暑い土蔵の中に住んでも汗の気さえ見せた事のない彼の額に玉の汗がにじみ、眼が異様な輝きを帯びていた。

二台の木馬の中、實際乗らない方のは背をとがらせてあるが、乗る方のは体を傷つけないように、体の下になる部分だけ、サドル型にしてある。その調子を見るのが今日のテストの眼目だった。

気軽に襦袢一枚になった旭岡田鶴子も、さすがに木馬にまたがると頬を染めた。ピンクの長襦袢のすそがめくれて、形のよいふくらはぎが露わになって、不安げにゆれた。

「どうだい具合は。十分間ぐらいは我慢できそうかい」と、ためつすがめつ周囲を廻りながら日下監督は尋ねた。

「え、ええ。でも、ちょっと——」と、もじもじする田鶴子。

「少しくらい痛い方が実感が出ていいよ」不意に日下監督は彼女の丸い腰を平手でどやしつけた。

「イヤッ、先生。いたずらはよしてエ」

田鶴子は嬌声を発して、木馬の背にしがみつく。

「あまり痛くもなさそうだな。よし、OKだ」ふり返って老人を見た監督は、田鶴子を見すえる老人の燐光のように燃える瞳に気づいて声を呑んだ、唇からは無意識の中に涎が垂れ流れ、何かブツブツつぶやいている。

じいさん、いかれちゃったかな——監督は



ちよつと胡散臭そうな顔をした。だが、もう用はないんだから、こっちは安心だが——。

二人が帰った後も、老人は例の古びた木馬に視線をやったまま呆然とたたずんでいた。老人の心は狂おしい想念に渦を巻いていた。

その渦の中で妻のお清と、さっきの女優はすでにけじめを失っていた。

やがて、ある決意が火花のように老人の心にひらめいた。それが次第に全身に燃えひろがり、現実が潮のように遠のいた。

老人はたどたどしい筆で撮影所の旭岡田鶴子あてに手紙を書いた。その手紙は「日下監督のある秘密について……」と、思わせぶりの誘いを語りかけ、「ここを訪れる事は誰にも秘密に……」と、事の重大性をおわせていた。老人の狡智はすでに二人の仲の普通でない事を見抜き、この文面が必ず彼女をこの土蔵におびき出し得ると信じて疑わなかったのである。

密室の木馬

老人は待った。終日、仕事も手につかず待ち暮した。すでに小道具方の人数が来て、責道具を運び去った後の土蔵は、ガランとして、眼にうつるのはあの木馬ただひとつだった。気狂いじみた焦燥のしわが、次第に老人の容貌を奇怪にゆがめていった。夜がふけて草むらにすだく虫の音が老人の耳にまでとどいてきた。

老人は耐え切れずに立ち上った。木馬をつかんで土蔵の真中に引きずり出した。黄色い乱杭歯がむき出しになって呪いの言葉を吐いた。

「来い、お清。来るんだ。あばずれ——裏切者——間男などしくさって……畜生、来るぞ、きつと来るぞ——殺してやるぞ——」

相手の時間の都合を無視した老人の手紙が
そもそも不都合なのだが、こんな時に現れた
のは彼女の不運だった。

あつという間もなかった。木馬の傍に投げ
出され、驚きの叫びをあげる隙もあられせず、
老人の骨張った腕が、つかみかかって来た。

まともな争いだったら。彼女も決して老人
にひけを取らなかつたろう。だが、事のなり
ゆきに動転した彼女は、老人の異常な狂暴さ
に更におびえあがり、手足の自由を失った。

夏帯がゆるみ、袖がちぎれ飛んだ。なまめ
かしいもみうらを見せて散り敷いた襦袢の上
を、彼女はころげまわった。

老人の狂気が、ついに勝利を占めた。解か
れた赤いしごきが、持主の柔らかなぬめ肌に
食い込み、肩先にまで絞り上げられた後手が
空を掴んで悶えた。

老人は荒々しく肩で息をつきながら、くず
れた長い髪をつかんで、女の顔を引き起した。
「なにをするのよ——このきちがいじじ
い」

女は気丈に老人をののしったが、老人の鬼
気迫るまなざしを見て慄然と息をのんだ。

入口の土の扉が閉じられ、たったひとつの
窓もふさがれた。土の密室に狂気の老人と二
人きりで閉じ込められてしまった事を覚っ

て、女の体から、へなへなと力が抜けていっ
た。猿ぐつわが息も止まれと噛まされた。

老人の細腕にとって、熟れ切った女体を木
馬に乗せる事は容易ではなかった。その上執
拗に肌にまつわりつくカサカサした皮膚のお
ぞましさと、木馬責めの恐怖に、田鶴子はた
だひとつ自由な両脚を蹴りあげて逆らった。
だが、蹴りつけられ、張り倒され、細首を絞
めあげられて半ば失心した田鶴子の体は、つ
いに木馬の上に押しあげられた。

鋭角にとがった背が、十四貫の肉体の重み
で、柔らかな肉に無情に食い込み、あらわに
なった太股が痙攣した。獣のような呻きが猿
ぐつわを漏れた。

老人は、いまいましげに女の腰にまつわり
ついているピンクの布を剥ぎ取った。その下
につつましくまもっていた薄いパンティは、
すでに裂けていた。

老人は電灯を消して、ランプに火を入れた。
あの過ぎ去った日の狂気を、どこまでも再現
しようというのである。異様に拡大された老
人の影が、白壁の上に、悪鬼の様にゆらめく。

女は豊かな乳房を木馬の背にめり込ませて
突伏していた。ぬめやかな白い背からにじみ
出た脂汗がランプの明りにテラテラ光ってい
る。なめまわすような老人の眼は、その上に

みみずのように走っている紫色のあざを見逃
さなかった。

「おお、あばずれめ、儼にかくれて、若い男
とじゃれつきくさって——この跡は何だ、何
で責められた。鞭か、それとも縄か。責め騷
られて、嬉し泣きに悶えたか——おお、責め
てくれる。よがり死にするほど責めてやる」
老人は、よれよれの革バンドを腰から引き
抜いた。

木馬の責めに鞭の呵責が加わって、田鶴子
は苦痛にのたうった。鞭にのけぞる体の重心
を取ろうとする腰を、木馬の背が電撃のよう
におそうのだ。相次ぐ恐怖と苦痛に、もはや
田鶴子は狂乱していた。日下監督との愛のプ
レイと、何と違っている事か。これが本当の
責めなのか——。だが、田鶴子は同じ木馬の
上で一人の女がかつて責め殺された事を知ら
ない。これが死に連なる責めである事を知ら
ない。それだけが不幸中の幸いといえた。
やがて、全身がしびれてしまったような虚
脱感が彼女をおそって来た。老人の怒号が遠
のき、嵐の息づかいが止んだ。

突然おそったこの不思議な静寂に、田鶴子
はかすんだ眼をあげて、周囲を見廻した。そ
して、その理由を覚った彼女は、次の瞬間、
死の恐怖に、そそけ立った。

火事だ。

ランプがひっくり返って、流れ出た油に引火したのだ。

事の張本人の老人は、火の海の中に仰向けにたおれている。

カッと見開かれた眼には、すでに生氣はなかった。

音もなく炎の舌は、老人の衣服をなめてまだヒクヒクうごめいている手足の渋紙のような皮膚をこがし始めた。

あまりの興奮と激動に、老人の脳血管が破裂し、昏倒する際にランプをはね飛ばしたのである。

田鶴子は木馬ごと横さまに体を倒した。わき腹を土間に打って息がとまった。しかしそんな事にかまっているヒマはない。股をおそ

り寄って行った。

だが、このなえ切った体で、しかも後手のままで、重い扉を開くことができるか。田鶴子は扉に身をもたせ、助けを求めて狂い叫んだ。

土の扉は炎の光を反射して、無表情に行く手を閉めている。

絶望が彼女の心をどす黒くぬりつぶした。後に迫った炎を見る彼女の眼は、飛び出さなばかりに見開かれ、瞳孔が散大して行った。

だしぬけに、扉が外から開かれた。田鶴子は、ヒヤリとした夜気の中に転げ出た。日下監督が、彼女の不在を知って探しに来たのである。

田鶴子の後を追うように、赤い炎の舌がどつと吹き出して来た。

日下監督は、失神した旭岡田鶴子を抱えて、後も見ずに草を踏み倒して走った。こんな所を他人に見られたら、身の破滅だ。

車をスタートさせる時、ちらと振り返った監督の眼に、土蔵の屋根を突き抜けた炎が、まっすぐに天に沖した。

それは、三代を執念に生きた老人を呑み込む地獄の火であった。

劫火はすべての秘密を焼き尽し、スキャンダルは灰と共に消え去った。

床屋の親父は話の新しいタネができたことで頬をほころばせ、赤ん坊をあやす母親は、その言葉に新しい一句を加える事を忘れなかった。

「ホラ、早くおねんねしないと、ギョロリさんの幽霊が出るよ」

発売中!!
セックス

婦人科
夜話

セックス博士風流譚

医学博士

小池創之介

○癢痒症のストリップバーにある夜の患者○苦悶する新婚さん○大学生の嵐を宿していた人妻○インポのくせに焼餅やき○想像妊娠が子供を得た話○婦人科医の手記○半陰陽○性交恐怖○刺青あらべすく○練れる○医学○中条流のヤミ墮胎医○媚薬考

婦人科先生の語る体験秘話!

●新書判・美麗カバー装
●定価一三〇円二二四

東京都中野区江古田 1-2302

株式会社 あまとりあ社

振替・東京 10756 (久保書店宛)

とらじを縛るべし

阿里俠二

江淵晃夫・画

■並みはずれた怪力の主とらじを支配する脳髓は別の人物に宿っていた！

怪童さがし

ながい溪谷のあいだをぬうようにして、バスはやっと村へつきました。途中、水の鼻橋なんぞという、吊り橋のようなところを渡ったりして、ヒヤヒヤさせられたものです。

ついたところは終点で、バスはそこからまた折るかえしです。そのあいだ、八分ばかり停車時間があるのに、女車掌はいそいで森かげにオシッコにいきました。幅のひろい革のベルトで胴が千切れそうになるほど、ぐっとしめあげ

ているでしょう。おまけに、悪路をながいあいだ揺られてくるのでどうしても出したくなるのです。

からだの大きな男ばかり三人、そのバスから下りたのでしたが、その中の一人が、車掌の消えた森かげを、じっとのびあがるようにして見ています。それに気がついた一人が、声をかけました。

「コレ、火吹竹よ。なにをいった見とれてるだ」

火吹竹と呼ばれる男は、ひとりごとのように

「バスガールさんがオシッコにいったんだがね。アレはズボンだ

から、やりにくかんべえと思ってね」

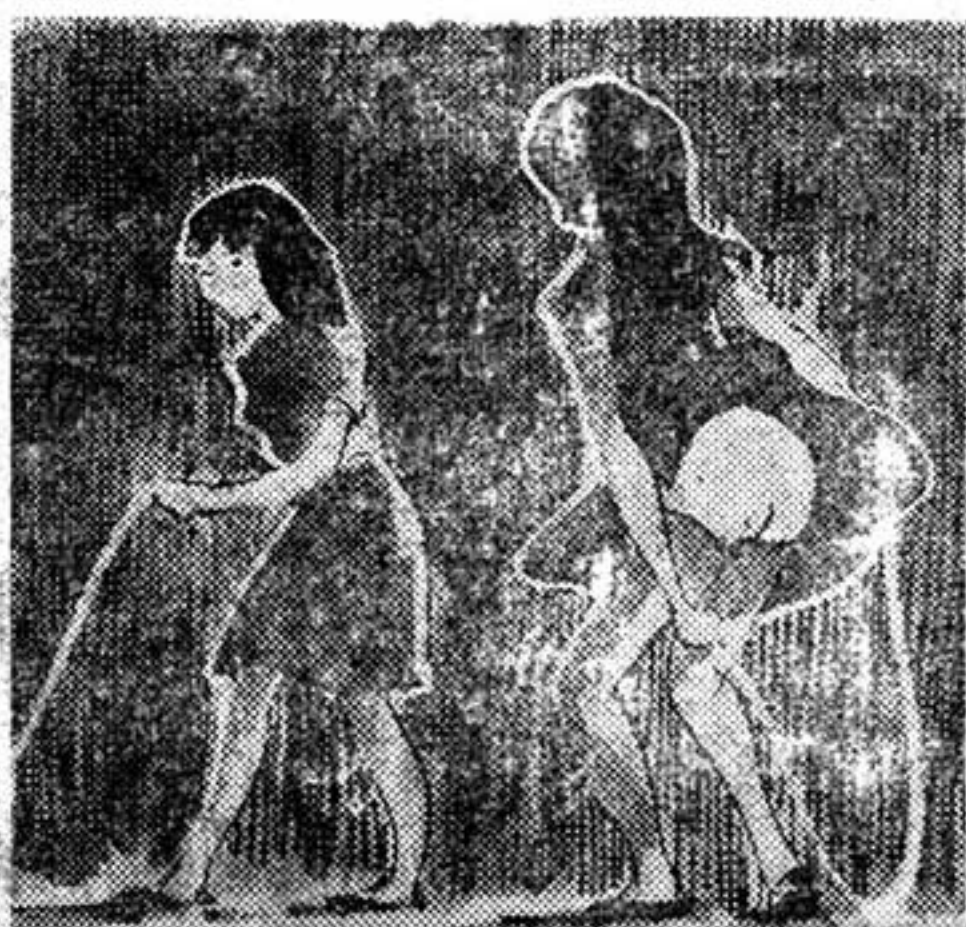
「なにをとほけたこと言ってるだ。今日の使命を忘れただか。落ち目のカラ松部屋を再興させるために、今日はスカートに來ただぞ。バスガールのシッコになぞ見とれている段じゃねえ」

するともう一人が、それをききとがめて

「コレ安心山よ。おめえはなぜスカウトと言えねえだ。いつもスカートスカートといってスケベエまらだした。人にわらわれるぞ」
「うん、そのスカ……ウトだ」

安心山が言いなおしたので、その様子がおかしいと言い、当の安心山もふくめて、三人はケタケタと腹をつきあわせるようにして笑い出しました。

安心山をたしなめたのは、カラ



松親方でした。火吹竹と安心山は、士がおかしなことです。そういえば現役の力士たちです。なるほど、そういうば三人ともりっぱな名も、あんまりマスコミではききからだで和服の着ながし。ちゃんません。しかし、そのからだはいとマゲものっています。親方は普通の人のように頭髪をわけています。スカウトにきたと言いますから、親方はいいとして、現役の力ら、力士社会の人であることはまちがいないのでしよう。「さあ、いくぞ」カラ松親方が先に立ち、三人は村のほうへあるきだしました。着物のスソをからげ、のぞかせたステテコから松の木のように太い毛脛をつきだして、ふんわりふんわ



りとかすみのおくへ消えてゆくのでした。

とらじとサダコ

とらじはそのとき、うまれて九歳になる従妹のサダコをおんぶして、小学校の庭で遊んでいました。サダコは小児マヒで赤ん坊くらいしかない、サルのような顔をした女の子です。

放課後ですが、校庭では、あっちこちに子供たちが四、五人ずつ散らばってあそんでいました。とらじの見ているのは、ナワとびをしている女の子の団でした。十七歳になるとらじは、頭は弱

身長は一メートル七〇センチで、さして大きいというほどではなかったけれど、おしつぶしたようにずんぐりしたからだつきで、体重は八〇キロばかりあります。頭や、手足がすごく大きく、畸形的な感じでした。色は白くはんぺんのようにふやけたような肌をしていました。足は土踏まずのない扁平足です。

小学校六年のとき、とらじには、もうそうした肉体的なしるしがあった。先生は、馬の品さだめでもするような目つきで、とらじを見ながら、「目が細く手足の爪なんか幅がひろくて鈍重な感じだ。ヌル湯が

好きなのはネバリづくよく、忍耐力に富んだ性格をあらわしている。とらじはいまに大物になるぞ」と、その未来を占いました。

しかし、中学にあがるころから、

この先生の予想はくずれたというです。勉強のほうがるでダメ

で、学力的にとっても他の者についていけないので、とらじは学校をやめてしまいました。そのかわり

肉体のほうは、切りきざんでも死なないうような、鈍重な、一種不思議な生命力をつけはじめました。怪力で村人の眼をそばたせたのも、この頃からのことです。俗に大人の力で三人力といわれていました。

そのとらじが、さっきから女の

子の子のナワとびを見ているのが好きでした。波のように揺れているナワの瞬間の静を見さだめながら

ヒラリと跳躍する。その瞬間に、スカートが花のようにひらき、尻のあたりまでまくれあがって、ほ

われるのです。そのパツと花が咲

くような瞬間の感じがおもしろくて、とらじは唇をダラリとゆるめたまま、首をすこしかしげるようにして見とれています。ときどき、「エッ。エッ」

息を吸いこむような、まるでシヤックリのできそこないみたいな、奇妙に動物的な笑いごえをあげます。そうしながらも、無意識にからだを揺すっているのは、背中のサダコにたいする守り心だけ。家の者は、例外なしに彼のことをバカにしていました。この育ちそこないの奇妙な従妹だけはよく彼になついていたし、二人は大人の仲よしだったのです。

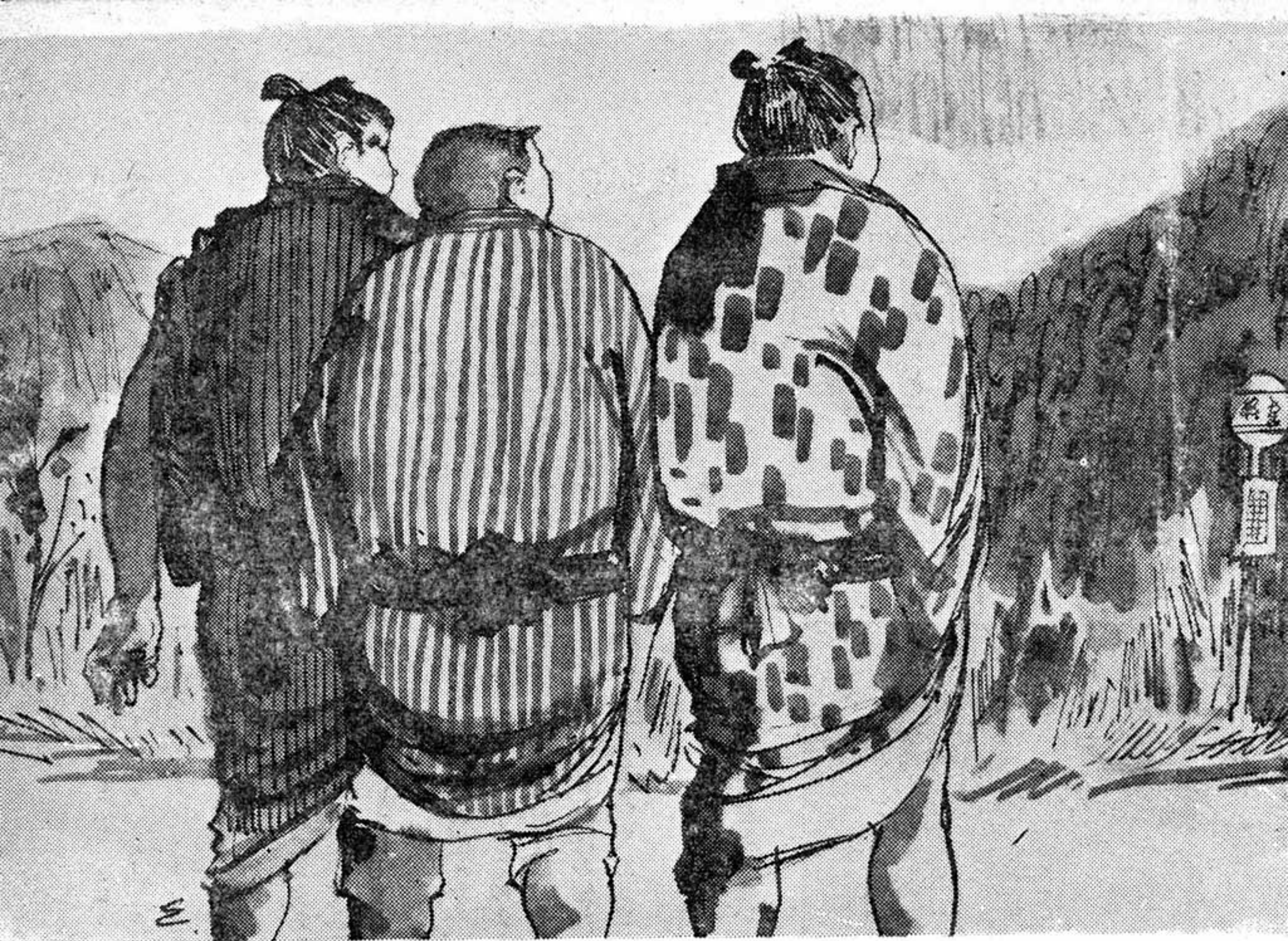
「とらじがみている」

ナワとびの女の子たちは、フツと、ときどき思い出したようにとらじを意識しました。

皮膚にかるい電気がピリピリとつたうような、なんともいえない感じです。

だが、すぐそのことをわすれて





ナワとびに熱中しました。

そのとき、誰だかが、二子山のように段々になったとらじの後頭部を、こつん、とこづきました。

それにつづいて予言者の老婆のようなふといしゃがれ声で、

「とらじよ。とらじに用のある人が家に来ていま話をしている。とらじよ家に帰れ」

というのがきこえました。だが、とらじの背後の広い校庭には誰一人としていたわけではありません。その声の主こそ、怪物めいた異能の持ち主、九歳の童女サダコだったのです。

とらじよいぐな

カラ松親方の一行は、二時間ほどとらじの家について帰っていきました。どうやらこのスカウトは失敗したようです。貧しいとらじの家にあつては、彼はやはり貴重な労働力ですし、伯父も伯母も手放したがりませんでした。

ヒマな時は子守りなんかしていますが、畠仕事の忙しい時はとら

じの手をかりなければならぬ。

それに山から材木を伐り出す仕事なんかには手間取りに出すときなんかは、その怪力がものを言います。

もう一つ、彼らは、

「うちのとらじはすもうとりなんかになっても、頭が弱いからとてもダメだ」

ということ、肉親として知っていました。

クソ力があるだけでは、とうてい力士として出世できるものではありません。フンドシかつぎのまきくさってしまうようなら、なまじ出してやらないほうがいい、と思ったのです。

カラ松親方たちも、話しているうちに、とらじの暗怪な性質にうすうす感づいたようで、それほど勧誘に熱意をしめさなくなり、「それでは、またのことにして……」
「というようなことを言いながら、腰を浮かせたのです。帰りみちに三人が、

「なんじゃいあの子供は。ウスノロじゃあないか」

などと話し合ったのも、まんざらスカウトしそこねた負けおしめばかりではなかったのです。

バスの停留場までくると、まだすこし時間があつたので、三人は村に一軒しかない森田屋という食堂で百三十円のカツどんを三ばいずつおかわりしてたべました。

「田舎はたかいのう」

そんなことを言い、チュッ、チュッと歯のスキマを鳴らしながらバスを待っていると、やがてバスがきました。さっきのバスが折り返してきたのです。

「あつ、さっきのオシッコのねえちゃんだ」

火吹竹ははやくも目の色をかえています。

彼女がさっきオシッコをした、という事実があるので、ズボンをどうかしてしゃがんだところ、そのスベスベと白い肌などを、ゆっくり想像してたのしもうというのです。火吹竹というのは、そんな空想をさせておくと、二時間でも三時間でもあきない妄想的なこ

ろがあり、まさか土俵の上でそんなことを考えるわけでもありますまいが、アッサリ寄り切られてばかりいたのです。

角力とりたちの話はこのくらいにして、とらじとその従妹である九歳のサダコについて話しましょう。

サダコは、肉体の機能ときたら赤ン坊なみですが、予言者のような異能をもっているだけに、その精神世界はちよつと奥底の知れない測のようなところがありました。

彼女は自分の肉体の不能を、とらじを操縦することと補っていた

のです。だから、とらじの背に負われ、とらじの体温をシカに感じているときは彼女の心はなごんでいるのですが、とらじと離されると、檻の中に入れられた獣のようになさくれだってくるのです。そして、

「とらじよ。とらじよ」
と泣きさけぶのでした。
角力とりたちが家にたずねてきたのを、かなりはなれた小学校の校庭にいて感づくような、不思議なカンをもったサダコですが、どういう人種が、どんな用で来たかまではわかりません。それが、力士たちの顔をみたたん、

「とらじを盗りにきたな!!」
ピンときたのです。

だから、スカウトの交渉がすめられているあいだ、力士たちにそそがれるサダコの憎悪の視線は物凄じいものがありました。交渉が不成立におわつたのも、そうしたサダコの放射能が、だいぶはたらいっていたせいもあるかも知れませんが。

ちいさな魔女

力士たちが訪ねてきた出来ごと



があつて以来、サダコの、とらじに對する執着は、いよいよつよいものになってゆきました。サダコはとらじを完全支配することによつて、とらじにのりうつろうとしていたのかもしれませんが。とらじのほうも、このちいさな魔女の通力にしばれでもしたように、サダコのいうことなら、なんでもうけいれる、という風でした。

あるとき、こんなことがありました。二人はナヤであそんでいたのです。

サダコは藁の山の上におろされ、ウトウトしていました。やがて、ふと目をさましたサダコは、おかしい光景をみたのです。とらじがゴザの上に大きく足をひらいて投げだしたまま、切腹でもするように前かがみになって、なにかしているのです。

「とらじ……」

サダコは声をかけそうになり、あわてて口をつぐみました。そして、なおもウス目をひらき、ねむ

ったふりをよそおったまま、とらじの様子を観察します。とらじの様子が、かつて見たことのないような種類のものだったので、サダコも異様に感じたのです。

とらじは、たのしげに、くるしげに、そしてせつなげに、恍惚としてある行為にふけていました。彼とても、当然そのような思春のいたずらにふける年頃だったのです。彼の成熟しきったからだつきからみて、むしろそれはおそろぎるくらいかも知れません。

サダコがそつと観察するうち、

とらじの様子は、いよいよ異様さを加えてきます。

投げ出された足が、なにかに蹴とばされでもしたように、ピリッと大きくケイレンしたり、そうかと思うと、とらじの口から、なんともいえないけだものめいたウメキ声がかれたりします。

じつとそれを見ているサダコの目に、不思議なひかりがやどりました。秘密のとびらをひらいて、一つの真実を発見したような、好奇とおどろきにみちたひかりです。そして、それは、サダコにと

っても不愉快な発見ではありませんでした。彼女はとらじの弱点をつかんだのです。いままでサダコに見せることのなかった、とらじのもう一つの裸の顔をみることで、あたらしいとらじ支配の手がかりをつかんだのでした。

「あれは、とらじがよろこぶことなのだ」

彼女はそう思いました。はじめ、とらじの様子は苦痛とまぎらわしかったので、

「病氣？」

と、思つて、彼女もすくなくならず



おどろいたのですが、それが苦痛ではなくよろこびのいとなみであることを、サダコは本能的に見てとったのです。

「とらじ」

今度は彼女はほんとうに声を出して、そっと呼びました。やさしい、いたわりをこめた声でした。

サダコがねむっているとばかり思ったとらじは、呼ばれてギョッと顔にサダコのほうへねじむけました。その顔は、泣きわらいのように歪んでいます。いたずらの現場を見つけられた子供のようでした。

「とらじ」

もういちど、サダコが声をかけました。

「あたしは、なんとも思っていないのよ。それどころか、いいことをしてあげようと思っているのよ」

そうした気持をせいっぱいあらわしたつもりの、やさしい呼びかけでした。とらじが奇妙な思いでポカンとしていると、サダコは

不自由なからだをイザるようにしてとらじのそばまできて、その膝のあたりに手をかけると、猿のような顔をいっそうクシャクシャにして、ニッと笑いかけたのです。

言葉は要りませんでした。動物的な、電気のような交流のうちに、すべては了解されたのです。サダコはとらじを自分の手でいたわってやろうというのです。

サダコのそうした微笑の意味を

さとったとき、とらじはまるで全知全能の神に自分の心の恥部を見すかされてしまったようにおそれお

のき、うなだれ、そしてついに泣き伏すような屈服の表情でサダ

コの手にゆだねたのです。その日から、サダコのとらじに対する支配はいっそう完全なものになりました。

夢 魔

このふたりの美しくも異様な愛は周囲の人にしいたげられるにつれ、いよいよ大きくその花をひらかせてゆきました。サダコはとら

じの命令者であり、とらじはサダコに

かわってその意志を行動に移す手足のような存在でした。

「とらじよ。あの花をとれ」

背中のサダコが川のほとりをゆびさす。とらじがそれをとってやる。

「とらじよ。あの山へ行こう」

サダコが、夕焼のアカネ色に染まった裏山の陵線をゆびさす。とらじはトコトコとそこへむかつてあるきだす、といったぐあいでした。

そんなサダコが、原因不明の熱で寝ついてしまったのです。むろん、貧しい親達にとって、サダコのような子供はやつかいものです。病気になるからといって、

ロクに医者に見せようともしませんでした。しかし、とらじの看病ぶりは涙ぐましいほどでした。

「サダコよ。はやく快くなれ」

そういつて枕もとで掻き口説く様子は、おろかながらの一途さがあふれていました。しかし、サダコの病気はなかなか快くならうと

はしません。その日頃、サダコは熱にうかされて、夜毎に異様な夢を見つづけて

ました。とらじが、村の女に対して誰彼となく、野良犬のようにいど

みかかつては、丸太棒などで追いはらわれているところです。九歳のサダコが、そのような夢を見る

ことは異様でした。しかし、もっと異様なことは、それがたんなる夢ではなく一種の予見の意味をもっていたことです。

たとえば、タバコ屋の後家さんがある夜胸苦しい思いで目をさまして見ると、まくらもとにモーロとしてとらじが座っているではありませんか。

「あっ誰か来て!!」

思わず悲鳴をあげると、とらじはニタリとした笑いをのこしたまま、影のように姿を消してしまっ

たのです。またある娘は、寝ているところを誰かにもものすごい怪力で抱えこまれ、そのままものもいわずに納屋につれこまれて辱かしめをうけ

たのですが、そのあと、ぼんやりと自分の寢床に帰って寝ているのです。そして、相手はたしかとらじだった、とあとになって、家人にうったえたのです。

「おかしいこともあるものだ」
くらいで、村人のあいだででききがされていましたが、その後、五回、六回と、同じような事件がつづいて起ると、

「ハテナ」

その娘が、じっさいにそんな目にあつたのか、それともそれは夢の中の出来事だったのか、それがハッキリしないのです。納屋からひとりで帰ってくる時の、寝巻を通してゾツと肌にしみる夜風の冷たさをハッキリ記憶している、

と考えるようになりました。いつも、犯人はとらじです。そして、中には夢のような話ではなく、ハッキリと、被害者である女の肉体に痕跡が残っていた場合さえあつたのです。

というところを見ると、じっさいの出来事のようにもある。あるいは、その娘が夢遊病者かも知れないのです。どっちにしても、娘のからだにハッキリした証拠が残っていたわけでもありませんから、

もつとも、相手が誰だったかは、
「たしかにとらじだった」

は、その娘が夢遊病者かも知れないのです。どっちにしても、娘のからだにハッキリした証拠が残っていたわけでもありませんから、まるで夢のような話です。しかし、夢にしる現実にしる、とらじが相手だったということだけはハッキリしていました。そういえばタバコ屋の後家さんの事件も、なんだか現実の出来ごととは思えないようなところがあります。

そんな話も、はじめのうちは、

「オレはとらじだア」

などとおどろかせてよろこんだりしています。村はようやく騒然としてきました。代表がとらじの伯父のところへ押しかけていって村の風紀のためにとらじをどうにかしろと交渉しましたが、伯父たちのおどろきをよそに、当のとらじはケロリとしています。

「おれ、知んねえよ」

彼のことにウソはなさそうです。夜は家でグウグウ寝ていて、そんな夜中に起き出したことなんかいっぺんもないというのです。

そのまま、ことはウヤムヤになりましたが、しばらくすると、また同じような事件が起りました。

「なにか、なめっこい肌がべった

りと吸いついてきて、おそろしい力で自分をおさえつけてきた。夢中でもがいたが、声を出すことも目をあくこともできなかった。そのまま気をうしなってしまったが、気がついてみたら、背骨をひき抜かれたようにグッタリとしていて、立つことはおろか身動きすることさえできなかった」

被害者である娘は、あとでそう告白しています。そのときは相手を見たわけではありませんが、現場にとらじの持物と断定できる物がおちていたのです。

とらじは見かけによらぬ器用な一面があり彫刻刀で木製の小動物などを彫つてたのしんでいましたが、その一つが現場におちていたのです。

この事件は、どうやらとらじの立場を決定的に不利なものにしてしまいました。被害者たちの身内をはじめとして、

「とらじは夢遊病者だ」

「とらじには悪魔がのりうつたのだ」

そんなウワサが、村中にひろがってゆきました。とらじは夢の中で女をおそい、その精気を吸い取るおそろしい艶魔だというのです。そして、

「とらじを縛って、頑丈な座敷牢に入れてしまえ」

という強硬意見さえ抬頭してきました。じっさいこの地方では、



精神病疾者など、そうやって終身座敷牢へ閉じこめてしまうことはじっさいにあるのです。そして、その危険が現実にとらじの身边におよんできたとき、とらじは病気のサダコを背負ったまま何処ともなく姿を消してしまったのです。この物語は、これでおしまいであらう。とらじが姿を消してから、あ

知らない間に、彼をそうした行動るサルのような顔をした童女と、にかりたてたのかも知れませんが、そのへんは山の深いところで、山に逃げこんだと思われるとらじ兄妹の消息はそれっきり知れませんが、しかしその後、東京からきたハンターが、人跡もまれな雨降り

の巨大な貯水池として永遠に没し、峠の頂上でたのしそくに唄っていた。ようとしているのでした。

読者随筆

捕物映画から

諏訪俊昭

捕物帖といえば、まず佐々木味津三の右門捕物帖、野村胡堂の銭形平次捕物控を始めとして、岡本綺堂の半七捕物帖、横溝正史の人形佐七、城昌幸の若さま侍、山手樹一郎の金さん捕物帖、黒門町の伝七と、ちょっと思いついたものだけでも十指に余るが、現在その大部分のものが映画化されている。

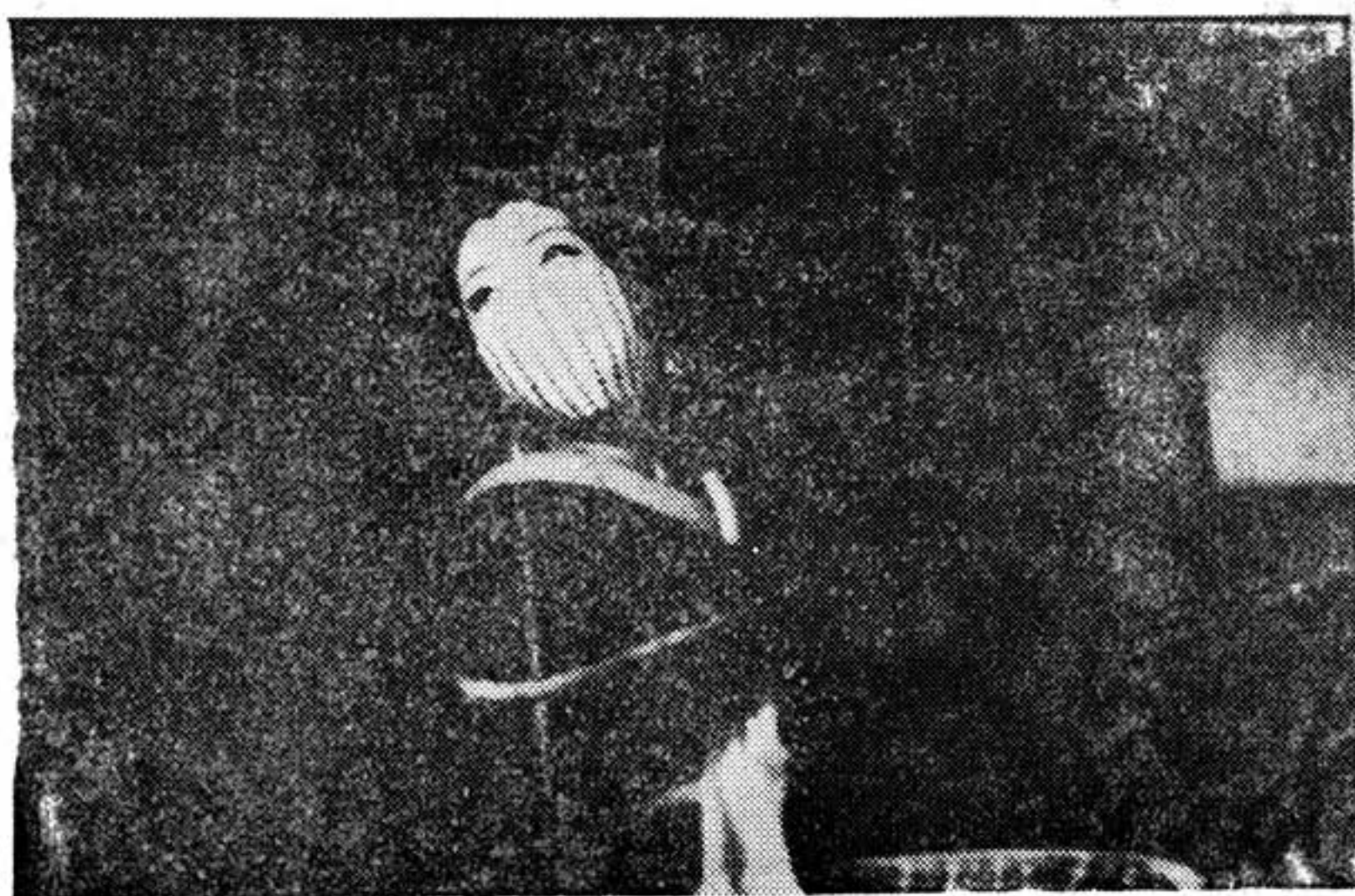
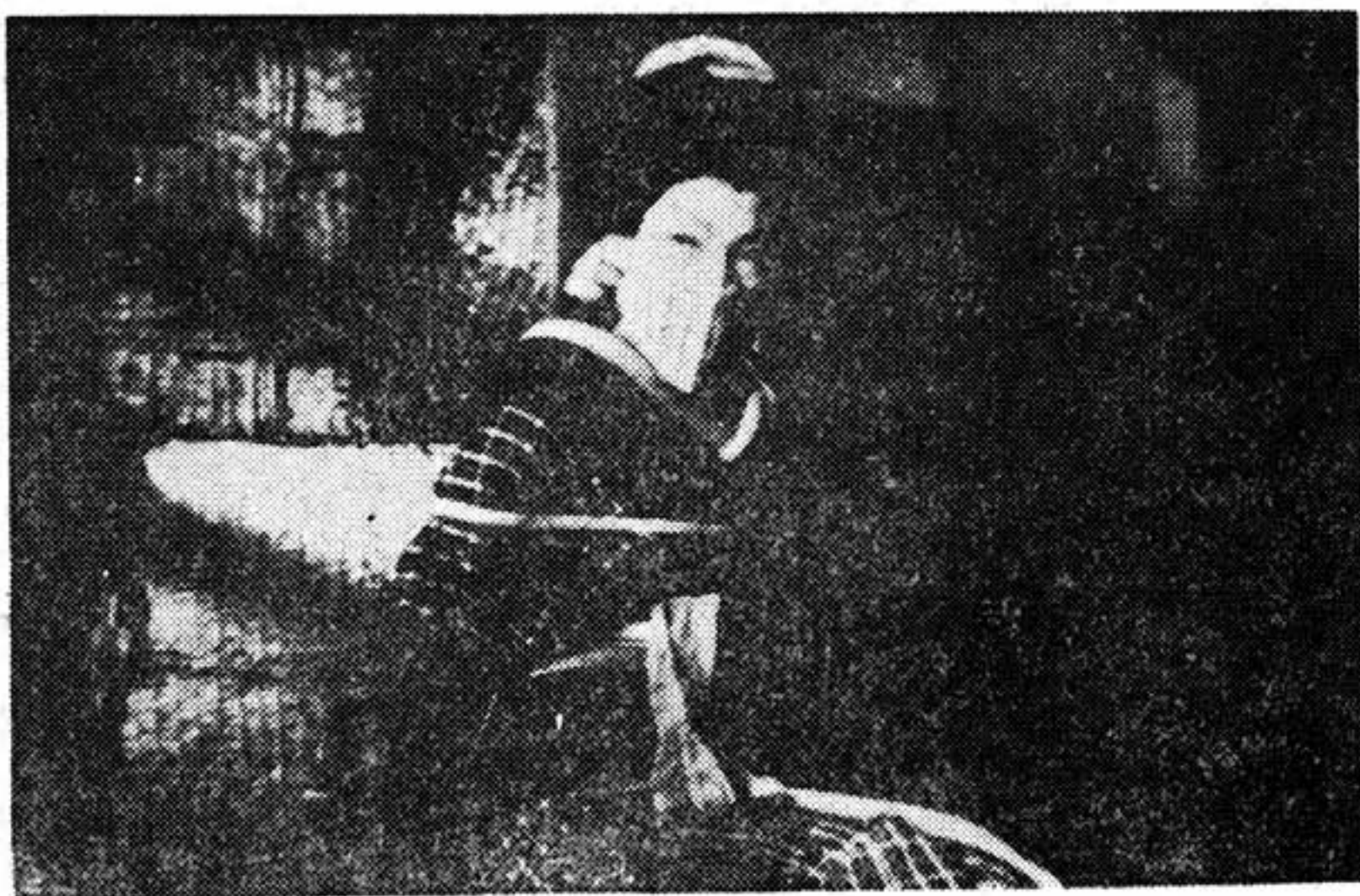
私がここで述べようとするのは、勿論捕物帖そのものの比較ではない。今までのいくつかの捕物映画の中で、幾人かの美しい女優た

ちが、後手に縛られて鞭打たれ、猿轡を噛まされて身悶えして、私たちの胸をどんなに躍らしてくれたかを考えて見たいと思う。

捕縄を主人公が持っていると言う事は、必ずしも美女の緊縛には関係がないが、おしやべり伝六とか獅子っ鼻の竹とかいう主人公側の三枚目などが、間違えて、無実の娘を縛ってくる場合とか、主人公の競争者である役人とか親分、たとえばあばたの敬四郎という様な人物が、やはり誤って犯人でもない女を縛る場面も少くないし、事件が起きると、悪事の発覚を恐れた下手人たちは、主人公の行動を封じるために、その恋人、妻、妹などを誘拐して檻禁するというのが映画の常套手段であるから、これにも女の縛られる事の多いのは当然であろう。また、番所に曳かれる女、

白洲で裁きを受ける女など、昔の映画だと、善悪にかかわらずに縄をかけられていたものだが、最近の映画ではその縛りがほとんどないのがもの足りない。

第一図 この右門捕物帖が上映されたのは、昭和二十四年頃であったが、往年の近藤



右門は、嵐寛寿郎の十八番で、寛寿郎の右門か、右門の寛寿郎かと、その颯爽とした姿が画面に現われただけでファンは満足していたものだったが志村喬があばたの敬四郎で活躍していた時分だから、戦前の作品だと思う。

江戸紫のお蘭しごきの秘密をめぐる展開する事件の中に、可憐な娘お蘭に扮した大倉千代子が、暴力団の魔手に誘拐されて縛られるが、右門によって救出される。しかしそれ

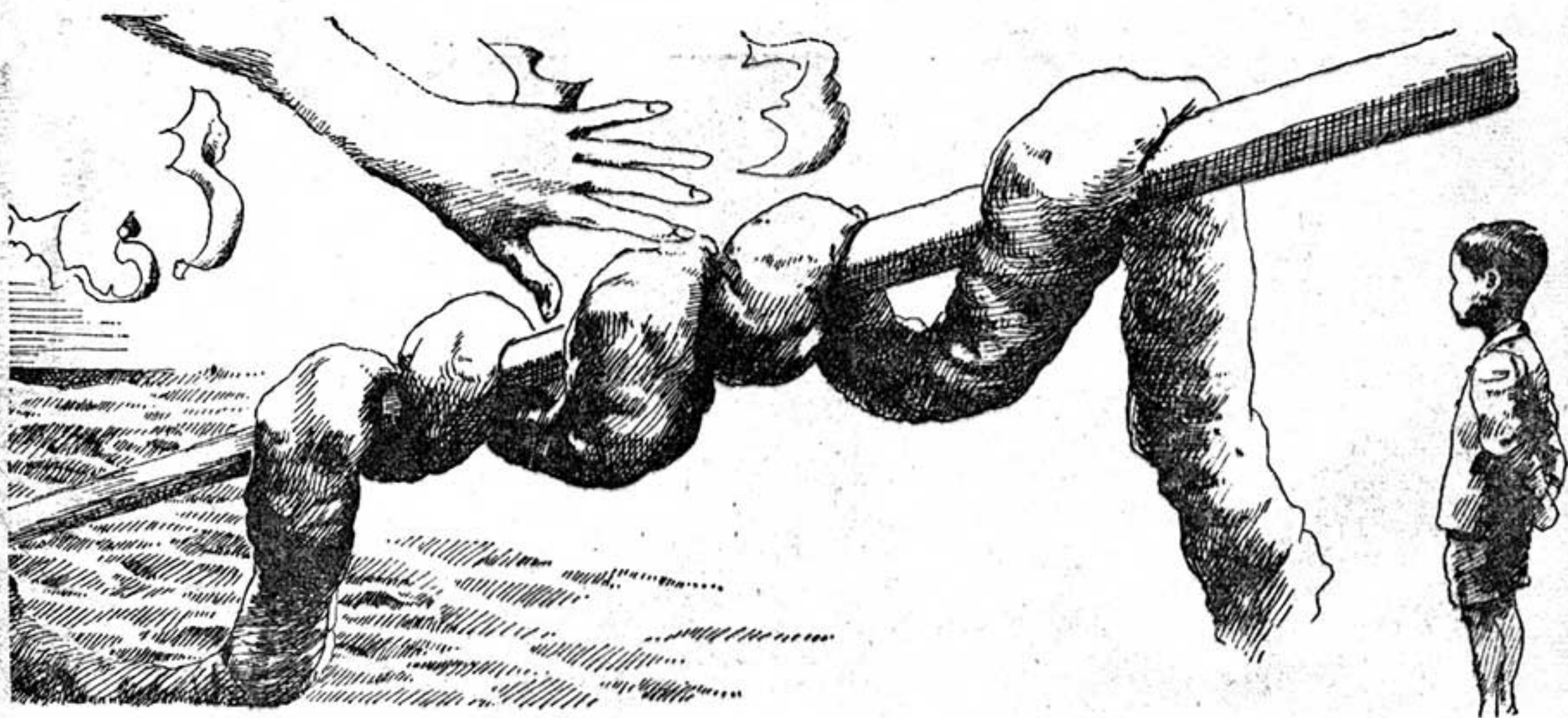
も束の間、再び襲われたお蘭は、抵抗も甲斐なく、縛り上げられて物置に檻禁される。

縛られた娘の前へ、酒を持った浪人が入って来て、「どうした」といいながらどっさり座ってみだらな目でお蘭を見つめる。娘は目をそらして身悶えするが、二重に廻された細引がふくよかな胸に食い込んで、痛々しくさえ感じる場面である。

第二図 大映長谷川一夫の銭形平次第一回作品だと記憶する。昭和二十五年頃だから、長谷川裕見子が映画に入ったばかり、平次の女房お静には若過ぎて無理と思うほどだったが、それだけに初々しさにあふれていた。やはり悪人一味に誘拐され、地下室に縛られる。真白い捕縄と、猿轡の下から見つめる恨めしげな眼差しが印象的だった。

第三図 地下室に縛られた、お静をそのまま、一味の者は放火して脱出を計る。渦巻く煙と、迫る火炎、その中に縛られたまま悶え苦しむお静の姿である。

なお、この映画には、当時時代劇出演は珍しい三条美紀が、娘役として同じ地下室の柱に縛りつけられていたのを、この映画を見られた方は記憶されているであろうと思う。



1

静やの胸には、乳の匂いがした。

そのころ、静やはまだ十六だった。だから乳なんかでるはずはなかった。それなのに、あまい匂いとふくらみを感じたのだ。

ほくは兄たちにいじめられ、泣かされるといつも台所の静やのところへ逃げていった。静やが立っている時には腰へ、坐っている時には胸のなかへ、とびこむようにして抱きつくのだ。

「また泣かされたのん？ 恵さは弱虫じゃのう」

静やはそういつて水仕事の手を休め、ほくの背をさすってくれた。ほそい白い手首だった。

「久一さも、栄二さも、いかん子じゃ。弟ばかりいじめて」

ほくの耳もとに、あたたかくささやいた。

静やの声は澄んで、おとなびていた。

静やは心のやさしい女中だった。細おもてで色白の人形のような肌をしていた。広い額には、おくれ毛が垂れていた。

ほくは静やのふところのなかに、いつも母の匂いを嗅いだ。といって、ほくに母がなかったわけではない。

継母でもなんでもない、ほんとうの母も父もいたのだけれど、ほくは孤独だった。ほくの母は、兄の久一や栄二たちにとって継母だったのだ。それだから、ほくの母は、兄たちだけを可愛がった。気の弱い女だったのだ。いつも兄たちに仕えるようにしていた。おどおどと、まるで女中のように。

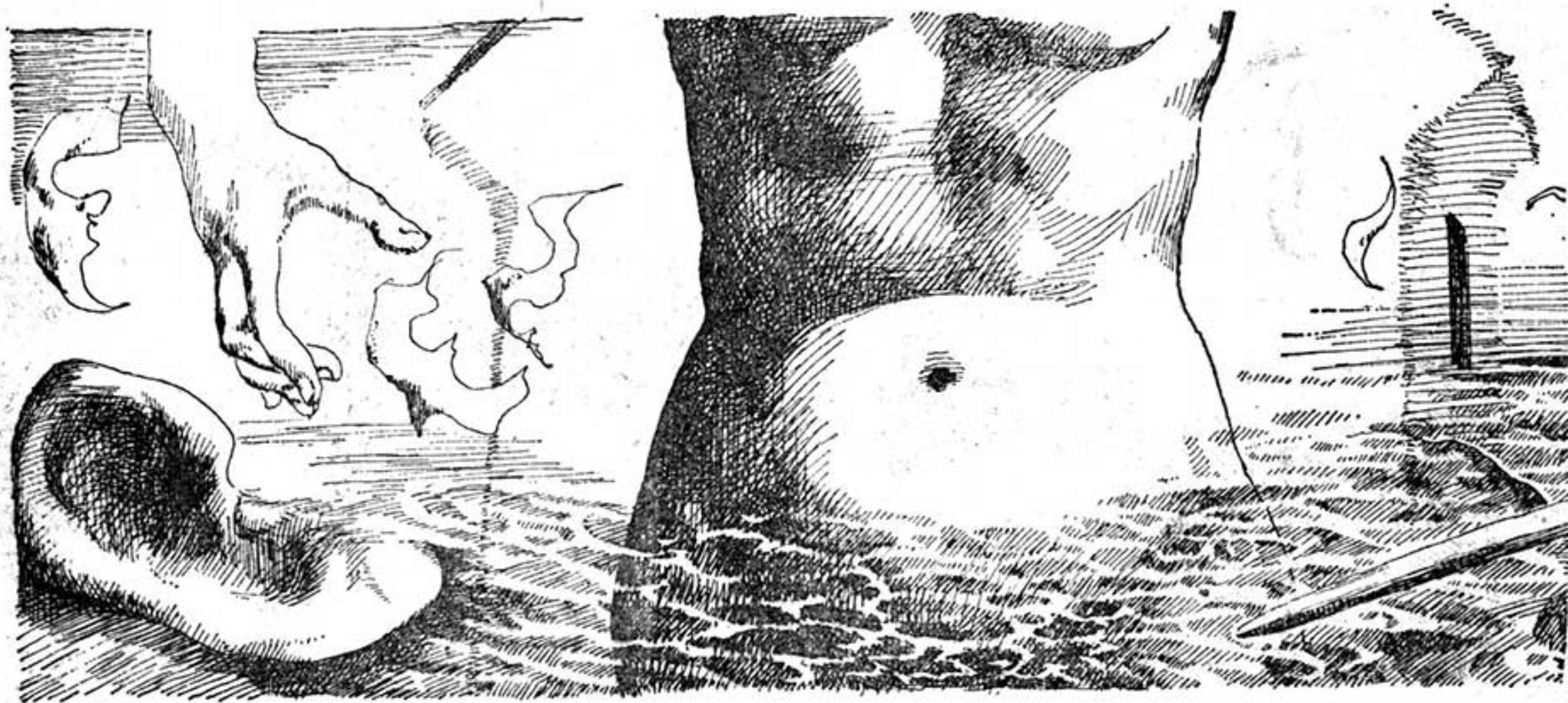
母はこの高柴家へ後妻にきて、先妻の子の久一や栄二を「継子」扱いすることを、極度に怖れたらしい。

だからまるで、逆にほくが「継子いじめ」されているみたいだった。着る物も食べ物も兄たちとほくではちがった。ほくだけは女中や奉公人たちと一緒にだった。ほくは、ひがんだ。ひねくれた子供になった。

父は無口な人間だった。啞かと思うことさえあった。口をきくのは、何かひどく怒った時だった。口から泡をふき、広い屋敷の部屋から部屋、廊下から廊下をぐるぐる歩きまわりながらどなっていた。

大きなからだをしていて、酒を飲むと首す

司 莊 平 松
画・巒 吉 秋



ある男の物語り

音に憑かれて

彼女の腹に耳をあててその妙音を楽しむ時だけ、少年の私は満ち足りた……

じから胸までが赤くなった。ほくは鳥坂観音にある仁王様を思いだしてこわかった。そうだ、考えてみれば、ほくは父に対して父らしい愛情を抱いたことは一度もない。恐怖と憎悪だけがあった。母はいつも父や兄たちにびくびくしながら仕え、ほくだけを叱った。ほくは暗い子供だ

った。子供心にも自分でそれがわかった。よく泣いた。

静やだけが、ほくの味方だった。静やさえいれば、父も母もいらなかった。

「女中わらし」——兄たちは、ほくのことをそう呼んだ。「女中ッ子」という意味だ。この地方の方言だった。

兄たちは、ほくが静やに可愛がられているのを見て、嫉妬していたのかも知れない。暗い洞窟のような台所の隅で、大きなかまどに薪をくべたり、うどんやそばをこねたり、洗濯ばかりしていても、静やは色の白い、きれいな女だったからだ。

静やにハナをかんでもらったり、抱いてもらったりしている時だけ、ほくは兄たちに優越感をもった。

2

ほくは静やから、いろいろなことを教わった。といっても、なにも静やが自分から積極的に、ほくに教えこんだわけではない。いつもほくが静やに無理強いしたのだ。だから静やに罪はない。

ほくが静やのおなかの、あの「音」に気づいたのは、いつだったろうか。たしかな記憶はない。

記憶といえ、静やのその「音」を思いだすとき、ぼくはいつも裏庭の土蔵の白壁を連想する。冬は陽当たりよく、夏は涼しい風が吹きぬけて、しかもそこは人目につかない、都合のいい隠れ場所だった。

「ねえ、静や、あそこへ行こうよ」

ぼくは誰にも知られないように、こっそりとささやく。

忙しい時には駄目だが、ひと仕事くぎりのついた時には、うす桃色の唇に、しょうがないといった笑いをみせて、静やはぼくの手をひき、その憩いの場所へ脱けだしていくのだった。

ぼくは土蔵の白壁の前に自分でむしろを敷いて、静やを坐らせる。いじけてばかりいるぼくの魂の、一番しあわせな一刻だった。

静やはむしろの上に坐り、ぼくは静やの膝の上にのった。

「ねえ、静や、鳴らしてみ、鳴らしてみ」

ぼくは、さっそく、せがむのだ。

「いやな恵坊、恥しいわ、わし」

静やは白い頬をわずかに染める。ぼくはしつこく「鳴らしてみ」をくりかえす。

ほそい指でおくれ毛をかきあげて微笑し、「しょうない恵坊じゃ」

そういつて静やは唇をむすぶ。

唇をすぼめ、息をつめて、神経をおなかのあたりに集中するような顔をする。ぼくは、胸をときめかして、片耳を静やの帯の上にもっていく。

すると静やのおなかは「ぐぐぐぐぐ」と鳴るのだ。

「鳴ったぞ、へへへ」

ぼくは奇妙なくらい、うれしくなって笑いだす。

「鳴ったじゃろう、ふふふ」

と、静やも笑うのだ。

大腸がなるのか、小腸が鳴るのか、それともそのほかの内臓が、そういう音をだすのか、ぼくにはわからない。

しかし、とにかく鳴らそうと思った時に、いつでもそういう音をだせる静やが、とてつもなく神秘的にみえるのだった。

誰でもよく空腹の時に「ぐうッ」とおなかの鳴る時があるけど、あれともちがう。静やのは「ぐぐぐぐぐ」と連続的に、まるで歌のように鳴るのだ。リズムすらあった。

「もう一度鳴らしてみ」

「もう、いやじゃ」

「もう一度鳴らしてみ」

「いやじゃったら」

「鳴らしてみたら！」

ぼくは静やの胸を拳で叩いて強くいう。すると静やは、仕方なさそうに、

「恵坊、拗ねッ子じゃのう」

と、つぶやいて、また唇をすぼめるのだった。ぼくはあわてて、片方の耳を静やの帯の上にもっていく。

「ぐぐぐぐぐ」と鳴る。ひと休みしてつぎに「るるる、ぐるる」と鳴る。

妙音だった。ぼくはうれしくて大声で笑ってしまうのだ。静やの膝からすべり落ち、むしろの上に寝っころがって青空を見あげながら、げらげら笑ってしまうのだ。幸福感に胸がはちきれそうだった。

「静かにお願いよ、恵坊、うちの人にきこえるど」

静やの手が、ぼくの口をふさぐ。

「おれ、静や、好きじゃ」

ぼくは静やにしがみつく。

「わしだって恵坊好きじゃど」

ぼくのからだを両腕で抱きしめてくれるのだった。

3

ぼくの記憶に、静やのあの「妙音」と土蔵の白壁がつながり合うのは、ただその場所で奇妙な逢引きを重ねたというだけではなく、

白壁と静やの白い肌との連想があるせいではないか。

「女中わらし」のほくは、食事をする時でも静やと一緒に、風呂へ入る時も、夜寝る時も一緒だった。ほくに対する母親の冷遇に対し、これは子供心にも反抗的な行動意識だったにちがいない。（そんなにおればっかりいじめるんなら、ほんとに女中の子になってやらい！）という――。

暗い風呂場だった。家全体が暗く重い空気に押し包まれていたが、ことに風呂場は墓穴

のように陰気な感じだった。天井からは黒い長い煤が、黒猫の死骸のようにだらりと垂れ下がっていた。

だが、静やと一緒にならばほくは平気だった。それでいつも一番最後に入った。

ほくは湯槽のなかで、静やとあの「妙音」の話をした。静やの肌は餅のようにすべすべしていた。ほくは不思議でたまらなかった。こんな白いおなかから、どうしてあんな、おかしい音がでるのだろう。――
「くすぐったいよ、恵坊」

「鳴らしてみ、な、静」
「いやじゃ、こんな湯のなかで」
「鳴らしてみ」

「こんな湯のなかじゃ、きこえやせん」
「きこえる！ 鳴らしてみ！」

ほくの強制に、静やはいつもの弱々しい微笑をうかべて、唇をすぼめ、そして下腹のほうに力をこめるのだった。

妙なる音は、かすかに湯にひびいてきこえた。

（この白い腹の皮の内側に、きつと秘密があ



るんじゃ！

ほくは確信した。

このころ、長兄の久一は中学生だった。ある日、久一はどこから借りてきたのか、色刷りの「人体解剖図」という本をほくに見せ、「どうじゃ、こわいじゃろ。人間のからだのなかは、こんなんじゃ」

得意げにいった。

風呂場で静やのおなかの鳴るのをきいたとき、ほくはそのグロテスクな内臓の図を頭のなかにうかべていた。

（この白いすべっこいおなかを切り裂いてみたら……）

そう思ったとき、ほくは体内の血がぎゅうに熱くなり、背骨のあたりがなぐられたようにしびれた。戦慄に似た感覚の裏側に、快感ともいいたいような疼きがあった。

ほくが静やの「妙音」に、単なる遊戯心や好奇心以上のものをはっきりと感じたのは、それからだった。ほくはいままでのように、無邪気にその「妙音」を楽しむことができなくなった。ほくの異性へのめざめは、静やの腸の音からだった。

ほくはいっそう注意ぶかく土蔵のかげに隠れ、ほかの人間の眼を怖れて静やにそれをせがんだ。せがむというよりも、要求になって

いた。

やがてほくはその「音」に恍惚すらをおぼえはじめていた。なんという妖しい愉悦だったか。そしてほくは夜、夢をみた。

静やの白い腹を鋭い刃物ですうッと横に撫で、切り裂いて、そこから赤紫色の腸をつかみだす夢だった。血がなまなましい赤で、傷口から溢れていた。静やは唇を強く噛み、眼尻を吊りあげていた。乳房をのけぞらせて苦

悶しているのだ。

夢のなかで声をあげるほど、それは美しい表情だった。はげしい興奮と甘美があった。眼をさました時、ほくは枕から頭をはずし、両肩を石のように固くしていた。

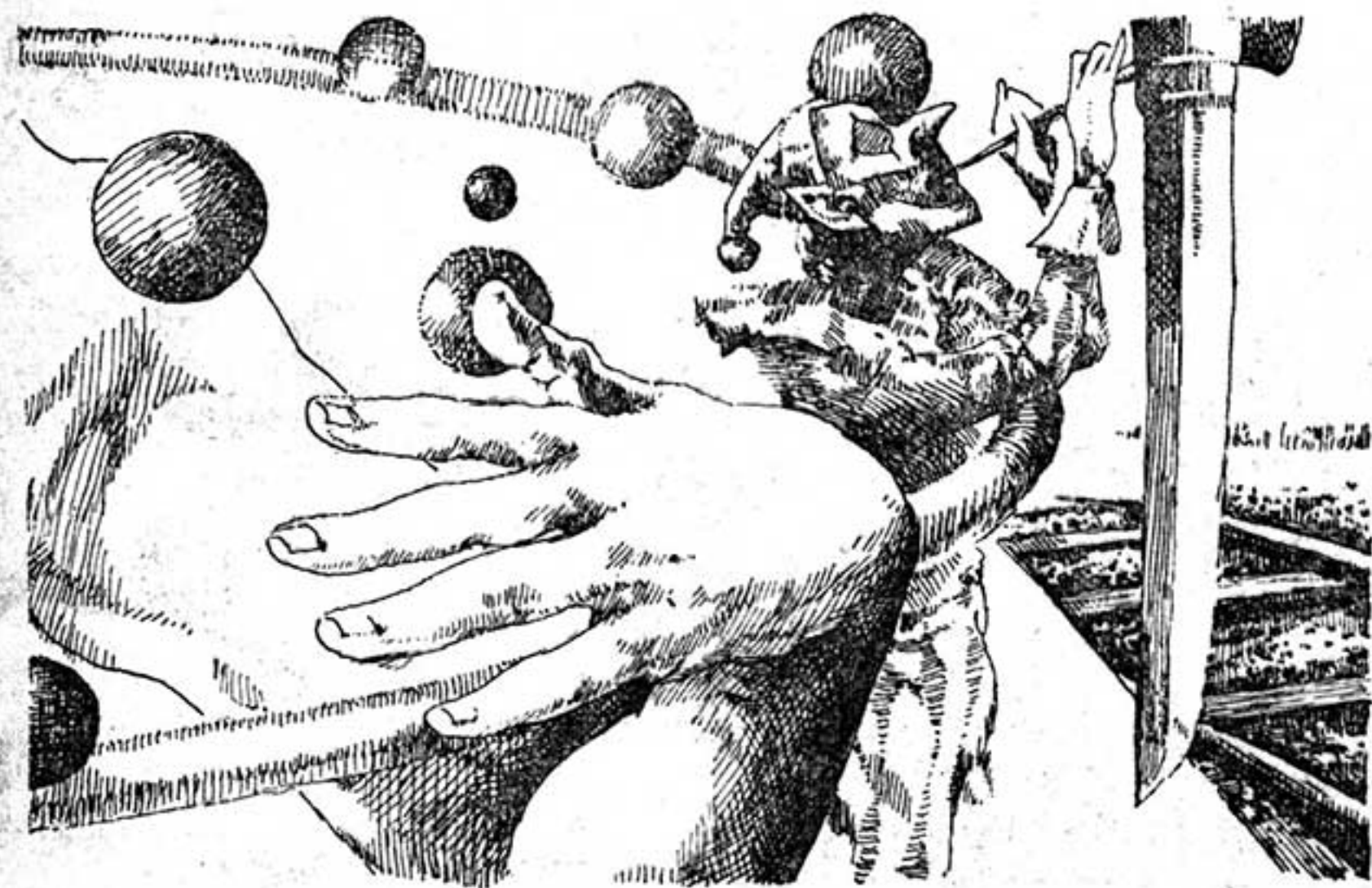
ほくは、静やのおなかのあたりを見るほくの目つきの異常さを、ほかの者に気づかれるのを怯れた。ほくは十三歳になっていた。もう静やと土蔵のかげで、その遊びにふけったり、風呂へ一緒に入ったりすることはゆるされなかった。

静やは相変わらずほくのことを弱虫の恵坊として扱っていたが、ほくにとって静やは、はっきりと異性だった。神秘的な腹部の魅力をもった「女」だった。ほくは帯の下の白くゆるやかなふくらみをもったなめらかな肌とさらにその内部の臓腑を夢想した。

4

この地方の守護神の例祭が、あと三、四日後にせまった、ある秋の日、ほくは静やと二人だけになる機会を得た。しかも、れいの白壁の土蔵の中だった。

静やは来客用の膳や碗などの什器漆器類を取りに、蔵へ入っていったのだ。それを見てほくは、あとからひそかに忍びこんだ。音た



てぬように重い扉をしめた。

「ああ、びっくりした、なんじゃ、恵坊か」
静やの顔は、くらがりに咲いた白い花のようだった。なんの警戒も不安もなく、彼女はいつもの笑顔をみせた。

そして、ほくの存在にはかまわずに踏台のつて棚へ手をのぼした。お静はこの日、黒い木綿の粗末なスカートをはいていた。スカートの裾からでた二本の素足が、ほくの眼に泌みるようだった。

踏台にのった静やの尻は、異様に大きくみえた。ほくの臉の裏は、火のかたまりでも投げつけられたように、くらんだ。

「お静——」

ほくは呼んだ。声も足もうわずついていた。

「なんじゃ？」

静やは、ふり返りもせず、こたえた。暗い埃だらけの棚を、夢中になって手さぐりしていた。黒い布地に包まれたお尻が、もこもことうごめいた。

「あれ、鳴らしてみ、お静」

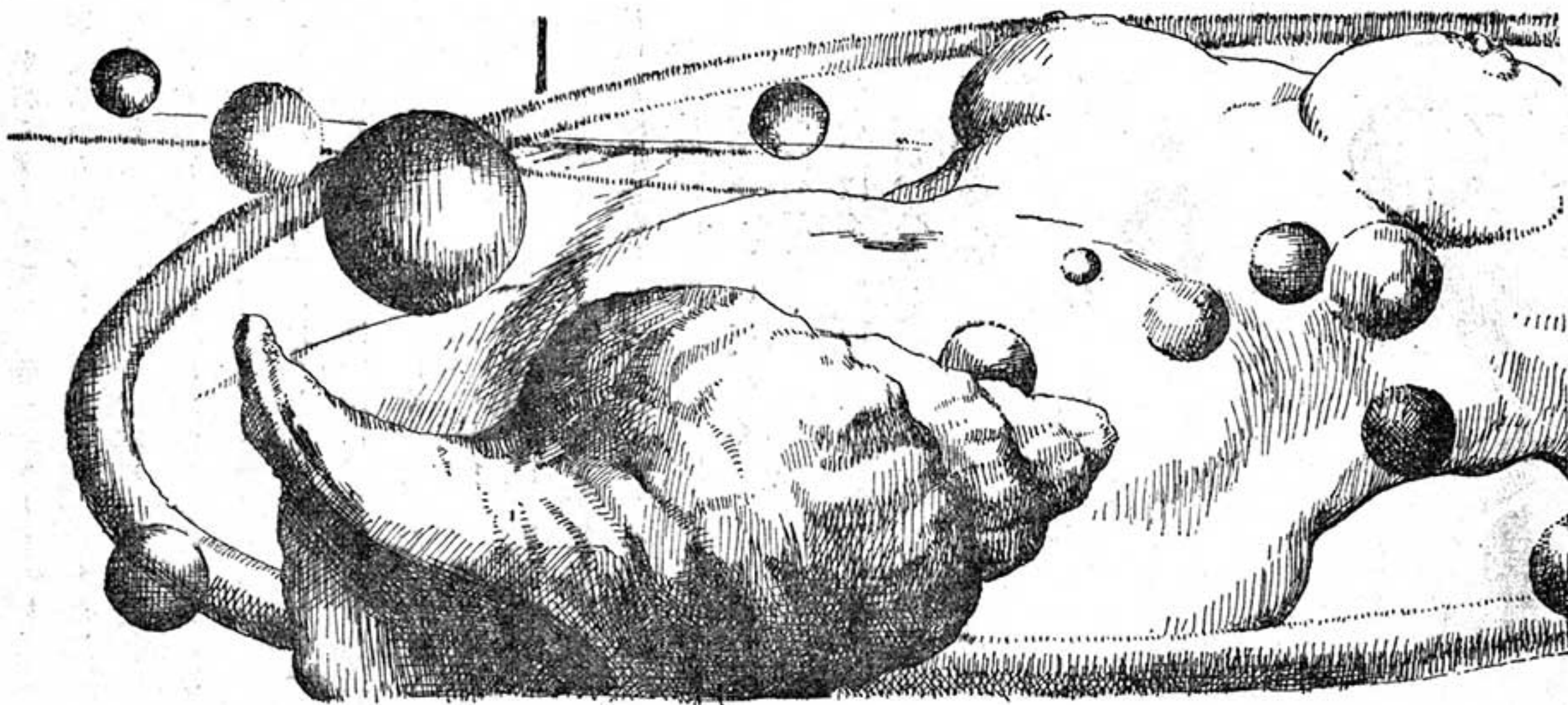
「なんじゃ、そんなことか」

「鳴らしてみ」

「あれな、鳴らんようになってしまった」

「嘘じゃ！」

ほくの血が、ふいに狂暴に煮えたぎった。



ほくは静やの腰にむしゃぶりつき、踏台からがむしゃらにひきずりおろした。

「あれ、なにをするんじゃ、恵坊」

臆病で泣き虫のほくの、どこにそんな荒々しい意志と力があったのだろう。ほくは、ふと手に触れた縄をつかむと、お静の両腕をうしろ手に縛りつけていた。

「なにをするんじゃ忙しい時に、いや、いやじゃ、恵坊」

お静は笑いながら抵抗した。ほくの熱っぽい行動も、お静にはいつもの悪ふざけとしか感じていなかった。それが、ほくの心をひそかに救った。

お静は十八になっていた。本気になって抵抗したら、ほくの手におえるはずはない。

（わがままな恵坊、祭り前の忙しい時にふざけて——）

お静の心には、そんな余裕があったのだ。

だから笑いながらほくに縛られたのだ。

ほくは縄尻を柱につないだ。

「痛いことしちやいやよ、恵坊」

お静は、ちよっと口をとがらせた。

ほくの手は朱塗りの箸をつかんでいた。静やが棚からおろした什器箱の中に入っていたものだった。祝儀用の祝い箸だった。

そのふとい角箸を握りしめ、ほくは静やの

背中にまわった。背中にへばりつくようにして、ぼくは箸を握った手をまわし、静やのおなかに、それをそつと突きたてたのだ。

箸の先はへこんだ。やわらかかった。

「くすぐったい、なにするんじや」

静やは背をまるめて笑いこぼれた。

「お静、切腹じや、切腹さしてやる」

朱塗りの角箸は、ぼくの想念のなかで短刀となっていた。

「くすぐったいよ！」

うしろ手のまま、静やは身をくねらせた。

ぼくの手は力をこめてうごき、ぼくの眼は凄絶な女の切腹をみていた。白いなめらかな腹に一筋の切り口、ふつふつと溢れる血。割れた皮膚と肉のあいだから、鮮血とともにむくむくとはれた腸。

ぼくは介添役の形になっていた。

ぼくはなまなましい幻影にうめいた。しきりに何か、うわごとのような言葉を洩らしていた。

強烈な時間が過ぎた。

「気味悪い子じや、恵坊は」

スカートについた埃を払って、お静は立ちあがった。うしろ手に縛った縄は、お静が自分で解いていた。

「ごめんな、お静」

ぼくは詫びた。一刻が去ってしまえば、たまらなく恥しかった。お静の腹を切り裂いた箸を、ぼくは投げすてた。本当に悪いことをしたと後悔して、ぼくはお静の前に頭をさげた。

「ううん、あやまらなくとも、ええけどよ」

乱れた髪をかきあげながら、お静はもう笑顔になっていた。ぼくはホッとした。

そのとき、お静はふいに真剣に、ぼくを凝視した。ぼくの瞳は、お静の瞳に吸われた。

お静の表情のなかに、いままでにないなまめいた陰影を発見して、ぼくはうろたえた。

彼女の瞳には、ぼくを「男」としてみつめる色がただよっていた。ぼくはそれを敏感に受けとめたのだ。

なぜか、ぼくは恐怖にかられた。やさしい女中の顔が、きゆうに口から耳まで裂けて、長い舌を、「バァッ」とだし、ぼくの頭を噛じりだすような錯覚に襲われた。ぼくは後ずさりして、土蔵の外へとびだした。

5

それから、十三年たった。

ぼくは二十六歳になっていた。東京の大学を卒業して、そのまま東京の三流商事会社へ勤務していた。

ぼくは独身だった。恋人もなく、相変わらず、孤独だった。

郷里には父も母も生きていた。兄たちも健在だった。一年に一度、ぼくはまとまった小遣金をせびるために帰省した。

母は年令よりも老けて、ぼくの顔をみるとすぐ涙をうかべた。だが、ぼくは母に対し、いまさら肉親の情はわかなかった。まして父や兄たちには、一片の愛情すら感じない。長兄の久一には憎しみだけがあつた。

久一は、お静を犯したのだ。地方の由緒ある旧家では、女中を長男の嫁にすることはできない。

お静はひまをだされ、やがて消息もわからなくなった。

お静が家から放逐された時、そしてその原因が久一にあると知った時、ぼくは久一を殺そうと思った。ナイフまで買ったが、さすがに実行はできなかった。その時、ぼくは高校三年だった。

(この兄を永久に憎悪し、呪ってやる!)と決意した。

ぼくの陰険な暗い性格は、あの封建制の重圧に満ちた家によって育てられたものだ。

と同時にぼくは、異性に対しても、ひどく異常な感覚を抱いていることを、やがて知っ

た。

東京に一人出て、学生時代のある日、ぼくは国電にのっていた。坐席に腰かけていた。すると、ぼくの膝の前に、一人の若い女性が立った。彼女は片手を吊皮にかけた。

ぼくの視線が、なにげなしにその女性の腹

顔の火照りを、必死になって耐えた。

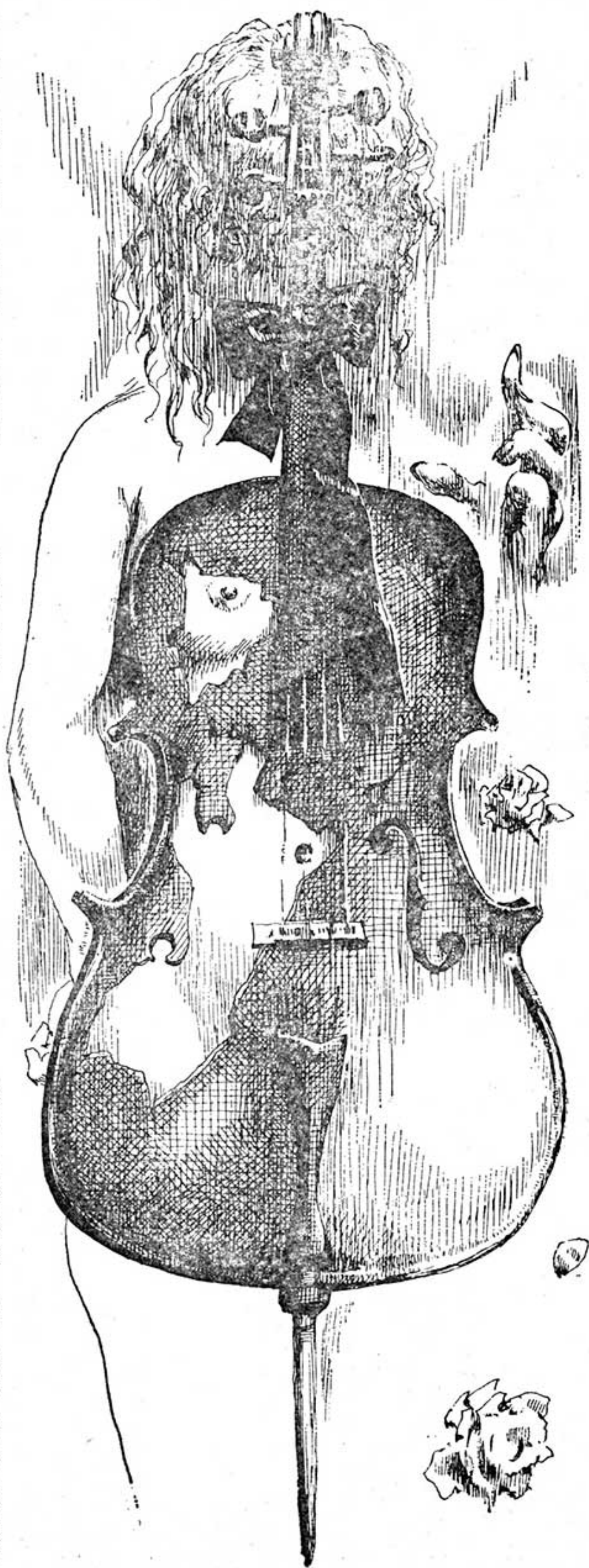
その女性の「妙音」は、空腹のためだったのかも知れない。偶然に、彼女のおなかの前に坐っていたぼくの聴覚が、それをとらえたのだ。

彼女は、そしらぬ顔で窓外を流れる景色を

れ、波うった。

少年の日の甘美な稚い憧憬が、成人してはじめての肉と血をもった女体への欲望となつてぼくにのしかかった。

その電車のなかで、ぼくはついにはじめての恍惚の絶頂を、烈しい勢いでのほりつめた



部へむいた時、ぼくの耳はきいたのだ。

「ぐぐぐう」という、あの「妙音」を。

ぼくの心臓は、寸時鼓動を停止した。四、五秒後、全身の血が逆流するのを感じた。ぼくの背筋に、鋭い快感がつかぬいた。ぼくは

眺めていた。

ぼくは眼をとじた。頭のしんには妖しい炎が渦巻いていた。ぼくは苦しい抑制の努力をつづけていた。あえぎを咽喉の奥で殺した。

瞼の裏に、急激に、お静の白い腹部が現わ

のだ。それまでぼくは、異性に対して不感症に近かったのである。

その日以来、ぼくは好んで電車にのり、坐席を占めた。わざと混雑時を狙った。女性の内臓からきこえる「妙音」に接したいだけの

期待をもって。

だが、ぼくの念願はむなしかった。車内でそれがきけたのは、その時、ただ一度の饒倖だった。

それでも、ぼくは希望をすてなかった。すてることができなかった。あの「妙音」に接し得る可能性のある場所は、ほかにどこにあるというのだ。

安サラーリマンとなって、下宿と会社への往復をラッシュアワーに揉まれることが、避けることのできない日課となった。ぼくは、いつでも耳をそばだてた。電車の走る轟音と乗客の騒音のなかから、いつでもあの「音」をききわけるときの、本能的な、犬のような努力をつづけていた。

むなしい努力だった。ぼくは疲れた。ぼくは、いつでもお静を夢みていた。

お静のような女性が、いま目の前に現われたら、陰湿な性格のぼくでも、誰にも負けないう熱烈な求愛をするだろう、と思った。

お静の影響は、ぼくの青春を狂おしいほど苦しめた。

少年期にお静から感受した異常な体験は、青年期に至って妖しい開花をし、ぼくをがんじがらめに支配したのだった。支配というよりも、とりこにしているのだ。ぬけだすこと

のできない罫だった。だが、ぼくはこの罫を断ち切らねばいけないと自覚していた。それだけの理性は、まだあった。

正常にもどらねばならない。ぼくは女を買うことをおぼえた。鳴らない女体は、ぼくに三十パーセントの満足も与えてくれなかったが……。

6

春さきのなまぬるい雨が降り続いていた。独身男の不潔な肌に、雨の夜の湿気は、べとべとと粘った。ぼくは、体内にたまった汚濁の生理を吐きだすために、その夜、街をうろついていた。給料日で、しかも土曜の夜だった。

都心を東にはずれた戦後新興の盛り場で、ぼくは女を求めた。法の目をくぐり、なにげないポーズで、彼女らは映画館裏の暗い場所に、傘をさして立っていた。

ぼくは誰でもよかった。あの「妙音」を奏でることのできない女は、誰でも同じだ。

「——お茶のみません」

女の一人が寄ってきた。

ぼくはうなずいた。女の傘のなかへ、首を入れた。安物の香水が、どぎつく匂った。ぼくと女は並んで歩き、ネオンのあかりが

傘の色を染める通りまで出た。

ぼくは、ぼくの肩にくっついていてる女の顔を見た。声をあげて立ちどまった。

「お静じゃないか」

女はたしかに静やだった。

「あんた、誰？」

女は、かすかに、ぎくりとした。肩をはなし、怪しむ眼でぼくを見すえた。

「ぼくだ、恵三だ」ぼくはいった。

「恵三さん？」

「恵坊だ、ほら、高柴の」

それから郷里の名をいった。

「ああ」

お静は思いだした。まじまじと、ぼくの顔から、足もとまでを見た。

「ほんとに恵坊らしいわ。おとなになったのね。ちょっとわからないわ」

馴れた東京弁だった。羞恥の色はない。無表情ともいえた。

「逢いたかったんだぜ、ぼくはお前に」

ぼくは、このめぐりあいに感動していた。

お静の腕をつかみ、はなさなかった。

線路わきの、安っぽい旅館の二階の一室にぼくとお静はむかいあった。電車が通るたびに、部屋は地震のように揺れた。

お静はぼくより五つ上だったから、三十一

になつてゐるはずだった。明かるい電燈の下
の容貌は、その年令にみえた。

ほくは子供じみた興奮で、過去の思い出の
あれこれを語つたのだ。お静はあいつちをう
ちながら、ときどき微笑した。その微笑だけ
には、十三年前の清潔な面影が、そっくりあ
つた。

「恵坊——」といつてから「恵三さん」と呼
びなおし、

「あんた、お金持つてゐるわね」

お静はきいた。要求の瞳の色だった。

「ああ、きょうは給料日なんだ」

ほくはお静の現在の職業を、あらためて思
ひだし、背広の内ポケットを上から叩いてみ
せた。お静は媚びた笑いをみせながら、ての
ひらをだした。その請求にたじろぎながらも
ほくは金を払つた。

「さあ」

お静は、眼をとじた。感情のない受け身の
ポーズをとつた。

「お静、鳴らしてみ」

ほくは、さつきから咽喉もとにこみあげて
いる言葉をいった。声がふるえた。

「なんのこと？」

お静は臉をひらき、いぶかしげな表情でほ
くを見あげた。

「ほら、ここさ、鳴らしてみ」

ほくはお静のおなかを軽く、てのひらで叩
いた。ぺたぺたという音がした。

「ああ、そんなこと、あんた、まだおぼえて
いたの。へんなひと」

お静は、濃くぬつた唇を、もの憂げにむす
んだ。力をいれた。かすかに、鳴つた。

ほくは狂喜した。うっせきしていた官能が
狂おしく燃えたつた。

しまいには、お静に切腹の擬態まで要求し
た。少年の日の土蔵のなかのように、ほくは
彼女の背後にまわり、嗜虐に満ちた痴戯の介
添をした。

「お静、結婚しよう、ほくと」

極彩色の幻想のなかで、ほくはうめくよう
にいった。

「うれしいこというわね、恵坊」

お静は皮肉な笑いを頬にうかべていった。

「駄目だわ、だけど。こんなこといっちゃ、
商売にさしつかえるけどさ、実はね、あたし
にはね、亭主がいるのよ。だから駄目。さん
ねん」

その言葉をきくと、ほくはむしろ悲し
くなって、かつての泣き虫三男坊のように、
お静の胸の上へいくじのない涙をこぼしたの
だった。

翌朝、眼をさました時、虚脱感と疲労感が
ほくの身心に重くかぶさつていた。

お静の姿が見えなかった。寝たままで、し
ばらく待った。それでも、彼女は部屋にもど
つてこなかった。

ズボンをはき、服を着る時、ほくは背広の
ポケットに異状を感じた。あわてて、全部の
ポケットをさぐつた。給料袋がそっくりなく
なつていた。

（やられた！）直感した。

ほくの全身から血の気がひいていった。

ほくはドアをあけ、廊下に出た。むろん彼
女がそのへんにまごまごしているはずはなか
つた。

残酷だった。ほくはうちのめされた。

部屋にもどり、ベッドに腰をおろした。

数分後、また立ちあがり、窓をあけた。

窓の外には、雨が降りつづいていた。ちょ
うど窓の高さに、土堤が見えた。草が濡れて
黒ずんでいた。雨はみしみしと降りそそいで
いた。

土堤の上に、電車の線路が銀色に光ってい
た。ほくはほんやりと、そのレールを見つめ
ていた。頭のなかには、なにもなかった。
やがて、ほくのうつろな視線を、汚ならし
い色の電車が轟然と断ち切って通過した。

切支丹秘話

井上筑後守覚之書

明石沙子

私が上様の御信任を得て、切支丹奉行に就任してこの方、七年余の間には、随分多くの切支丹信徒を捕縛し、処刑し、また、転宗せしめた。

先君、秀忠公も大御所家康さまも、豊公に習って、キリスト教を禁じてはおられたが、しかし、その取締りは、今ほどに峻烈ではなかった。

なぜに、当、上様の御代になってから、俄かに苛酷になったかという、さる幕閣の要人の許へ出入りしていた異国の商人が、ある日、酒の席で自慢げに、

「近年、私の母国の領土が広まったのは、私の母国が、宗教を活用しているからでございませう」

といい出したからである。

「ほ、ほう、お主の国の神仏は、さほどに靈驗あらたかであるか」

「いえいえ、洋の東西を問わず、信仰に凝りかたまつた人間は、財産も生命も投げ出して惜しみません。みんな、喜んで神に捧げるものでございます。で、私の母国では、布教師をどんどん海外へ派遣して、異国人をしてわが国の宗教に酔わしめ、ついには領土をも神に……つまり、私の母国にでございます……捧げたくなるように、仕向けたのでございます」

と、いったのが、上様のお耳に入ったからである。

それ以来、上様は、烈しくこの異国の宗門

をお嫌いになり、切支丹を絶滅し、わが日の本からキリスト教を追放せよとの御錠を受けて、私は切支丹奉行を拝命し、日夜、その取締りに精励して来た。そして、日を経るに従って、宗門に夢中になった人間は、命をも惜しまぬものといったという、その異人の言葉が、決して誇大ではなかったことを、痛切に悟ったのである。

私は鬱蒼としげった樹木に囲まれた、俗に切支丹屋敷と呼ばれる三千坪の広大な屋敷の表半分を奉行所に、裏半分を私宅に用いているのだが、奉行所には、白洲のほか、切支丹信徒だけではなく、世の人々をおののかせているさまざまな牢問いの設備をこらした拷問所がある。

厚さ一尺余の土蔵づくりになっているこの三棟の拷問蔵は、中で呵責を受ける囚人が、どれほど、おめき叫んでも、その泣声は決して外へもれぬように考案されている。従って、取調べに立ち合う私も、その悲鳴や咆哮の、奥に住む、女、子供をおびえさせはせぬかとの懸念など、いささかも抱かず、念入りに責め問いを続けることができた。

三棟の拷問蔵の右端は、漆喰でかためた水牢で、しかも品川沖から海水を引いてつくつ



た汐入りの水牢。で、あるから、満潮の時には、その水深は人の背丈を没するほどとなり、大方の者が恐怖のあまり、漆喰に取りつき爪を立て、なんとかして這い上り、嵩増す水から逃れようと、あがいては、またむなしく、とほんと水に落ちる。

さらに哀れなのは、天井から水面に、逆さ吊りにされている者共で、徐々にふくれ上って来る水が、五寸、三寸と、次第に頭部との間隔をちぢめて行くのを、なすすべもなく、逆さ吊りになったままカッと両眼をあけて睨んでいる。そしてついに額から眼に這い上って来た水が、ピタピタ鼻先きを洗う頃には、

鼻口から流れ込む水に悶絶せんばかりに咳き込み、むせ返り、あがいても、もがいても、どうにもならぬ縛めの身を、ぶるん、ぶるん、前後左右に蓑虫のように揺すぶって、哀号し、泣き叫ぶのだ。

私が木馬責めによって、伴天連・ネルロを転宗せしめた、その木馬は、真ん中の二番蔵の中にある。この二番蔵の入口に立って、中の情景をかいま見れば、たいがい気丈な者でも、思わず顔をおおうであろう。

今しもその二番蔵では、両手をくぐられ天井の鎖から吊り下げられた、旗本星京之進の許嫁の千世が、足裏を蠟燭の灯で焙られて、人魚のはね上るように、真白な裸身を、ぶるん、ぶるん、くねらせては悲痛な呻きをもらしている。その横のソロバン板の上では、女歌舞伎の太夫が、たおやかな体を二つ折りにして、首からぶら下げた重石に涙を流している。首の痛みに重石が膝につきそうになると、後に立った同心が、青竹で力任せに女の臀部をなぐりつける。そして

「何といい眺めではござらぬか」と、首を突き出し、尻を突き出した女の姿を、傍の同僚と笑い合っている。

また、隅の荒庭の上では、体中に魚油をぬりたくられた娘が、みだらな笑いを浮かべた

小者四人に押さえつけられ、吟味方の青山同心が連れて来た逞ましい雄犬に、ベロ、ベロ、ベロと舐められている。手足を押さえられたまま、身も世もあらず泣きもがいていた娘は、羞恥のあまりに失神をした。

氣を失って横たわった娘の足が、ほの白くのびたその爪先きの所、しめった地面に、経一尺五寸、深さ六尺余の縦穴が掘ってある。これは私の考案によるもので、私の布令により、銀一貫匁の賞金と引替えに密告された切支丹の容疑者を、私は地面に掘られた、この真暗な縦穴の中へ逆吊りにし、切支丹であることを素直に白状せねば、このまま生き埋めにするぞと嚇した。

私の嚇しがなくとも暗黒の穴の中に吊られて、浮世から隔絶された地の底へ、ただ一人置かれた者共は、本当に生きながら埋葬されたほどの恐怖を覚えたろう。ムチ打ちや針責めに屈しなかった剛の者もこの穴吊りには音を上げる例が多かった。

ところで、この穴責めは、私の考え出した責め問いの中の、ほんの一例に過ぎぬのだが、こうして、次々に新奇な責め手を案出し、眉一つ動かさず、苛酷な拷問を続けて行く私を、世の人々は、冷酷で嗜虐的な男と見ているようだが、私は決して、人を虐げることが

楽しんでなぞはいない。もっとも、多くの下役の中には、同心の青山のように、美しい女と見れば、すぐ吟味役を買って出て、わざとむごい責めようをして、その呻吟する声に、体中が熱くなるほど、昂奮し、女が苦しむ姿を見ることに、無上の愉悅を感じている者もある。が、私は、三百俵の端役から、今日の大身に取立てられ、この重職を仰せつけいだいた、上様の御信任におこたえし、ひいてはまた、さらに自身が栄達するために、好ましからぬ切支丹奉行を、いわば出世街道の一里塚の一つと思ひ、忠実に職務を果たしているに過ぎない。

ともあれ、さて、私が考え出した穴吊りに屈服した容疑者が、信徒である旨、白状すると、私は再びこの縦穴に吊り下げて、転宗を強いるのだが、転べば地獄へ落ちると教え込まれている彼等、信徒は、容易には転ばず、十数刻も吊られたまま、ついには頭部の鬱血のために、死んで行く者もあった。

私は一度、上様にも言上したが、天主の教えに殉じて死ねば、天国へ行けると信じ切っている宗徒を、転宗させることは、実に至難なわざであった。私が与力、同心を督励し、手を替え、品を替えて、さまざまな拷問を加えても、教えを捨てる者の数は、至極、少ないのである。

が、なかには伴天連・ネルロのように、異国よりはるばる布教のために密航して来て、信徒の家にかくまわれ、集る宗徒達から、神の使徒と敬まわれながらも、ただ一度の木馬責めに泣き叫んで、生命惜しさに転んだばかりか、果ては利欲につられ奉行所の手先となり、表面けいけんな神父の仮面をかぶりつつ、彼の許へ集まる信者の名を、ひそかに奉行所へ告げ知らす役目を引受けた、破廉恥な者もある。

その他に転んだ者では、幼児を枷に責められた母親や、病夫の体に加えられる苛責にいたたまらず、思わず、御教えを捨てますと叫んで、首にかけた十字架を引きちぎり、踏んで見せた若妻などがある。

切支丹宗徒を捕縛し、転宗せしめて、その根絶をはかるが職務の、切支丹奉行の私が、転宗者を憎むといえは、はなはだ矛盾した話だが、事実、私は、伴天連・ネルロを、彼を利用しつつも憎んでいる。彼の節度のなきが不快なのである。男女の別なく、心身の苦痛に負けて、簡単に、己れの節度を曲げる者を私は憎む。しかし、今いった母親や若妻など、骨肉の情に負けて転宗した者を、私は憎めない。

そしてまた、今宵ついに転宗をちかった、旗本星京之進の許嫁のお千世も、違った意味で、私はいささかも憎めないのだ。

新御番五百石取りの星京之進が、暮夜ひそかに許嫁の千世をともなつて、深川の舟宿『津村』で催されている信徒の会合に出席しているところを、例の伴天連・ネルロの密報で、われら奉行所の一隊が急襲した時、星京之進の荒れ方はすさまじかった。

私の指揮により、捕方は二手に別れ、一隊は『津村』の表入口からなだれ込み、裏手へ廻った一隊は、信徒が集まっている二階座敷へ梯子をかけておどり込んだが、不意をつかれて狼狽する信徒等の、大方は無腰の町人であつたから、京之進一人が捕方を引受け奮闘する羽目になった。そしてまた、われわれ捕方陣も、この集りでの首脳である京之進をめがけて、八方から打ってかかった。

十手の一撃を右肩に受けて、肩骨をくだかれた京之進は、左手に大刀を握み阿修羅のよう荒れ狂い、その乱戦の最中にも、背にかばった千世をなんとか逃がそうと、一步、座敷から屋根瓦の上に出る。

ソレツと庭に待受けた一隊は、彼の足許めがけて水をかけ、すべらせようとする。庭へ

飛下りた京之進の頭上へ、梯子が、袖がらみが殺到した。千世を小脇に抱いたまま、幾度か彼は転倒したが、そのたびに、人間業と思えぬ力ではね起きた。しかし、肩に受けた十手の一撃がこたえていた。斬り払い、なぎ払い、よろよろと川ぶちへ出て、そこにつないだ小舟にようよう千世を移すと、

「無事に、無事に逃げてくれいっ」

陽からしほり出すような声でいって、そのまま彼は昏倒した。その背へ、いきり立った捕方共の十手は、なおも烈しく落下したが、その時、夜目にもしろく、花のように裳裾をなびかせて、京之進の上へ身を投げたのは、



小舟から飛び下りたお千世であった。

寄合席で八百石、神田橋外に住む荒木右近の娘である千世は、年は十六。上様御寵愛のお樂の方に生き写しの、武芸できたえた筋骨たくましい京之進が、うっかり力を入れて抱けば、こわれはせぬかと余計な事まで案じられるほど、撫子の茎のように細々と華奢な体つきなのだ。

しかし、一見、風にもたえぬ風情の、か細いその体の内に、お千世は衆にすぐれた強靱な氣質をひそめていた。

星京之進がキリスト信者であることを知り、仰天した荒木右近夫婦が、娘の婚約を破談にしようと騒ぎ立てた時、

「一旦、二世の約束を取交した上は、例え、許嫁の夫の正体が、鬼であれ、蛇であれ、添い遂げるのが女の道でござりまする。お二人方に御迷惑はかけませぬ。どうぞ、今日限り私に、永のお暇をたまわり、京之進さまの許へ、つかわして下さいませ」

と、万一の場合、類を生家へ及ばさぬよう、みずから勘当を願ひ出て、千世はその夜のうちに京之進の屋敷へ移った。

そして、それまでは熱心な日蓮の信者であったのだけれど、

「お祖師さまより、貴方が大事でござります

る」

と京之進の言葉のままに、その日から題目を捨てて、天主デウスの称名をとなえるようになった千世は、京之進と共に、白洲へ引かれた時も

「何事も夫に従うが妻の道、例え、この身は八つ裂きにされましようとも、夫が天主を捨てませぬのに、妻たる私が転ぶわけには参りませぬ」

細い鼻梁の両脇に、青く静脈の浮き出た繊細な顔を上げ、絹糸のように細く澄んだ声で、しかし、きっぱりと云って、踏絵をこぼんだのである。そうした千世の姿に、私はひたむきな彼女の、京之進への愛を感じた。が、吟味役の青山同心は、

「よし、その言葉を忘れるなよ」

憎さげに千世を睨んで、二人を別々に、拷問蔵へ引っ立てて行つたのが、昨日のこと。

おもに士分の者を取調べる左端の三番蔵は、百姓、町人を吟味する二番蔵と違い、畳一枚しいてある。そうして片隅に、地下牢へ下りるせまい段梯子もついている。この中で石抱き、車責めにも屈しなかった京之進は、業をにやした青山同心に、ついに生爪をはがされた。

小柄の先きを爪と肉とのあわいへ差し込ん

で、少しずつ、少しずつ、時間をかけて引きはがされる。その疼痛は、およそ、癩疽れいじゅなぞの比ではあるまい。かつて、稲瀬川助右衛門という、力士上りの大男が、この拷問を受けたが、彼は獣のような咆哮とともに、六人がかりで両手両足を押さえている、小者達をはね飛ばし、ブカブカに浮いた小指の爪を、指ごと抱いて四股を踏み、キリキリ舞いを続けたのである。それほどに、痛いのだ。

であるのに、意志強固というるか、強情者というるか、京之進は、右手の親指、人さし指、中指と三本まではがされて、蒼白の顔にあぶら汗をにじませながらも、むずと結んだ口からは、呻き一つ漏らさなかった。

そして血にそんだ小柄を持つ青山の手が、京之進の薬指にかかった時、彼は大きく息を吸い込むと、

「孤軍奮闘、呉を破って帰る」

朗々と詩を吟じ始めたのである。

「いや、あのようにしぶとい奴は初めてでございます。この上は、彼奴の面前で、千世という、あの娘を責めるよりほか、策はないと存じます」

手こずった青山が、そう云って来た今日の日暮れ時、私は久しぶりに居間にくつろぎ、

奥の点前で薄茶をさすりながら、つい、この間まで、氷柱のさがっていた軒端に、白梅のほころんでいるのを眺めていた。

殺伐な勤務の明け暮れに、四季の推移にも風情にも、すっかり無感覚になっていた、干からびた私の胸底にも、宵闇に匂う梅花を見

れば、何かほのぼのとしたものが蘇えって来るし、そんな時に、血の匂いのする拷問の話しなぞ聞くのは、うとましかった。で、「あの娘は蠟燭責めにかけられて、大分、弱っていたが、まだ責めるのか」と眉をひそめると、



「いや、お奉行、あやつは小娘に似ぬ横着者で、第一、お上をお上とも思っておりませぬ。昨日もお白洲で、拙者が、それでは京之進が転宗すれば、そちも転ぶかと問いました時、あの女奴は、非道な奉行所の責め問いなんぞを恐れて、天主を捨ててるほど、私の夫は無節操ではございませぬと、まるで拙者を小馬鹿にしたように、セセラ笑いを致しました。お上の御用を勤める拙者を小馬鹿にするという事は、とりも直さずお上を侮どっているのです、それが憎さに拙者は、なんとしてでも京之進奴を転ばせようと、懸命になっていますので」

「道理で、美しい女と見れば、真っ先きに、吟味役を買って出るその方が、珍らしく人任せにしていると思えば」

そう笑いながら私は、風に吹かれている野菊の花のような、楚々とした千世の姿を眼の底に描いていた。もののしく拷問の道具の並べられた白洲で、臆せず、健気に涼しい眼を上げて、きっぱり踏絵を退ぞけた千世。落下する十手の雨から、身を持って京之進を庇おうとした千世。その細々とした身の内に、夫を思う情熱をいっぱいにたぎらせている可憐な千世。家を捨て、親を捨て、死の恐怖をもかえりみずに、禁制の切支丹へ入信したのも、すべては一途な夫への愛ゆえなのだ。

（許してやりたい……）

と私は思った。なろうことなら、この陰惨な切支丹屋敷から、彼女を放免してやりたい。しかし、長年の身についた馴れは恐ろしい。私はそうした心の奥の呼び声をねじ伏せると、

「唐の関羽ほどの猛き武士も、女子には心弱ったというからの」

と青山の提案を受入れ、微笑して立上っていた。この時ほど私が、飼い馴らされた犬のように、職務にのみ忠実な、出世欲の塊りのような己れを、心からうとましく思ったことはなかった。

痛々しく片足を引きずった千世が、小者に追い立てられて三番蔵へ入って来ると、しめった床上に端坐して瞑目し、凜々しい横顔に蠟燭の灯を受けていた京之進は、ハッと両眼を開いた。

「京之進さま！」

「千世！」

想いのたけをこめて呼びかけた千世を見た京之進の瞳に、一瞬、不安なものが揺れ動いた。すかさず、私は口を切った。

「どうじゃ、京之進、天主と許嫁と、いずれが、より大切じゃ」

「お奉行！」

京之進は怒りをふくんだ眼と声で、

「女子を枷に使うとは、卑怯でござろう」

「さ、それも皆、そちの一身を惜しむがゆえ。

そちほど有為の若者を、あたふ邪宗門のために失いたくない。いかなる手段を取ってでも

私はそちを転宗させたいのじゃ」

われ知らず、しんみりとした語調になり、さらに私はいったのだ。

「切支丹の教えを捨てさえすれば、権現さま以来のそちの家柄。行手には輝やかしい栄達が続いている。そうして、その美しい許嫁と共に、月雪花を楽しめる身ではないか。そち一人の不心得のために、そちの両親はじめ兄弟、一族が、どれほど、肩身せまい思いをしていることか。異端の宗旨に迷い、親兄弟を泣かせ、二度とない生涯を、若木の花を散らしてなろうか。な、考え直せ、教えを捨て、京之進」

「せっかくながら、それがしは、入信のみぎり、家をも親をも兄弟をも、捨て去ることを、天主にちかかってござる」

「ふむ、では、そこにおる、その女子をも、捨て去る覚悟か」

私が、小者に小突かれながら、京之進の後にひたと寄りすがっている千世を指さした

時、千世を見返った彼の瞳に、烈しい苦痛の色が浮かんた。しかし、それも一瞬、すぐに平静な顔色に戻ると、彼は力をこめて答えた。

「もとより、天主のためには、かえり見ませぬ」

「ほ、ほう、宗門のためには、二世を約した許嫁の妻をも、犠牲にするというのじゃな」

「されば、止むを得ぬ仕儀」

「妻よりも、天主が大事か」

無言ではあったが、京之進は深くうなずいた。そして、その時、ほの暗い蠟燭の灯にも、はっきりとわかるほど、千世の顔がとおさめたのを、私は眼の端にとらえ、

「さらば、よし」

と立ち上った。続いて青山同心が、

「兩人、立てい」

革鞭をならし、二人を地下牢へ下りる段梯子の方へ引っ立てながら、千世に、

「念のために申しておく。この下の地下牢のもてなしは、今までのように甘くはないぞ。

二番蔵での吟味とは、段違いにずんと念入りじゃぞ。そうじゃ、どれほど、丁重に扱われるか、前もって見せてやろうか」

と段梯子の上から引返し、小者に顎をしゃくって、壁際に敷かれた畳を上げさせる。そ

の下には、一尺四方ほどのあげ蓋があつて、取除くと真四角な切穴から、風と共にまぶしい灯の色が、噴水のように吹き上げた。それにまじって弱々しい女の泣き声も。

「その梯子を下りて行くと」

同心の青山は、穴の傍にひざまずかせた千世と京之進の首筋を押さえ、交る交る地下牢の光景を覗かせながら、

「下りた所に、われわれが地獄の門と呼んでいる、大きな鉄の扉がある。そこから中へ入った囚人は、生きて二度と戻れない。扉の中には、風変りな、さまざまなもてなしが待っている。女子には、まず最初に針責めの馳走じゃ。針を口にくわえた非人共に、かわるがわる戮られる。戮りながらチクチク顔中を、余す所なく針で突き刺す。美しい女ほどいねいに念入りにな。で、事果てた後は、どれほどの美女でも、とんと化物同然じゃわ」

穴の前にしゃがんでいる千世は、押さえようとしても、手が膝が脛が、細かくわなわなふるうのを、どう仕様もない。頭は鳴りつけ、めまいがする。眼の前のことが、暗く薄く影のように見えて来るのだ。そのくせ、眼は穴の中の光景に吸いついて離れない。——猫が、多くの黒猫が、とらえた鼠を弄んでいる——と千世は思った。

「針責めにも屈服せぬ時は、女は蜂責めの憂き目を見る。この地下牢の中へ、数百の蜜蜂を放ち、女の体中に蜜をぬりたくって放り込む。たちまち、うわーんとむらがる蜂にたかられて、女は真黒になって、ころがり廻る。どうじゃ、京之進、可愛い己れの女が、そのようにされても、貴様は悔いないか」

最後のダメを押すように青山がいった。最前から固く眼をとじたきり、京之進は石のように動かない。しかし、その眉宇と唇には、不動の決意がにじみ出ている。

「おのれ、強情者奴！ よし、うぬの女房がむらがる蜂にさされ、のたうち廻り、もだえ死にをするさまを、とっくり見ておれやい！」

そう罵りつて青山が、腕をのばして千世を立たせようとした時千世はその手を振り放し「私は、私は、御教えを捨てまする！」

と叫んでいた。私も青山も、思わずハッとなり、千世を見た。それ以上に京之進はおどろき、カッと眼をあいて、

「何を、何をいうのだ！」

「私はころびまする。御教えを捨てまする」

「お前は、お前は拷問が怖いのか、恐ろしいのか、臆病者！」

「いいえ、いいえ、拷問が恐ろしいのではありませぬ。私は、私は、貴方の心が、貴方の

心が……恐ろしいのです……」

千世はあえぎ、唇をわななかせた。突き上げて来る胸いっぱい激情に、その声はわななき、とぎれ、とぎれた。

「私は、貴方さまのために、一切を捨てました。一切を捨てて……悔いませんでした。家をも、親をも、信仰するお祖師さまさえ、貴方のために捨てました。貴方のためには命も惜しくはないと思いつめていました。それほどまでに私は貴方を愛しました。心身を打込んで、一筋に……一筋に愛しました。それなのに……それなのに貴方は、私よりも……私よりも天主が大事とおっしゃる。なぶり殺しになっても構わぬとおっしゃる。私は、私は……裏切られたのです……」

千世は身をもんで泣き伏した。その泣き声は、腸からしほり出すように哀切であった。京之進は化石したように動かない。うまく行きませんでしたねというように、青山が笑いかけたが、私は仮面のようにこわばった顔でいた。

自分の心の奥底にひそむ、一切を犠牲にしても、自己を貫き、己れの立場を守りたい、自己本位の冷たい男心を、私はえぐり出され突きつけられたような心地がしたのだ。

穴蔵の底では、弱々しい女の悲鳴が、まだ尾を引いて断続していた。

飢えた眼は 階段に光る

永井卓二郎

安全剃刀を持つ不審な男

その若い男は、ダスターコートのポケットに両手を突っこんだまま、エレベーターにもエスカレーターにも乗らず、一步一步、ゆっくりと階段をのぼっていった。

昨年の暮れから正月にかけて湧きたった消費景気の勢いは、まだ衰えをみせず、相も変わらぬ混雑ぶりをみせている上野松坂屋デパート。しかも土曜日なので午後一時半を過ぎる頃から勤め帰りのB・Gを混じえて、客の数は急激にふえていた。気短かで元気な若い客は、昇

降機の混雑を嫌って自分の足で、どんな階段を利用する。

だが、ダスターコートを着たその男だけは階段の端に身を寄せるようにして、妙にゆっくりした足どりでのぼっていく。

この男の名は松武律夫(25) Ⅱ都内葛飾区青戸町一丁目天神荘アパート内Ⅱという。色の白い小柄な、一見平凡な青年である。

だが、コートのポケットに突っこんだ彼の右手の指の間には、安全剃刀の片刃が、じっとりとあぶら汗に湿っていた。

松武の両眼は、異様に真剣な光りを放って、自分の横を追いついて階段をのぼっていく女性の後姿を凝視していた。

一人、また一人、あるいは連れだって一度に三人と、若い女性たちの張りきった下半身が、彼の眼の前で躍動しながらのぼっていく。あとからあとからと絶え間がない。

そのたびに彼は「駄目だ、駄目だ」とつぶやき、首をかすかに横にふった。

やがて、彼のゆっくりした足どりと、ついに屋上まで到達してしまった。すると彼は、こんどはエレベーターに乗って、一

気に地階まで降りてしまった。そしてまた、地階の階段から一階へ、二階へと、一步一步足を運んでいく。

不可解な行動だが、誰もこの青年に眼をとめる者はない。買物にくる客には、ひとのことなどかまう余裕はない。デパートの監視員も、売り場附近をうろつく怪しい人間なら、万引の疑惑をもって警戒するが、地階と屋上の階段を往復する客までは注意しようがなかった。

理想の女

何度目かの往復をくり返し、四階から五階特売場へ通ずる階

裏窓ニュース・ストーリー

段の途中で、彼の眼が輝やきを増した。

(いたぞ！)

彼の咽喉がごくりと鳴った。

右肩がびくびくと痙れんした。

彼の右横を追い越して元気よくのぼっていく十八、九才の女の子の後姿に、彼の視線が吸いついた。いや、正確に言えば、そのハイティーン女性のスラックスに包まれたゆたかなヒップに、彼の眼が吸いついたのだ。

上半身はうすいピンクのブラウスに、バルキー風のざっくりした編目の赤いカーディガンを羽織り、足はバックスキンの茶色ブーツ。頭から足もとまで、新鮮な若さがびちびちと溢れている。

(すごい、すごい、おれの理想の女だ！)

松武はうなった。獲物を狙う眼になった。ポケットの中のうすい刃が、熱く燃えるようだった。

特売場のあちらこちを忙しく



歩きまわるその女性を、彼はひそかに尾行した。

三十分後、彼女は小さな包みを抱えてデパートを出た。御徒町の駅にむかって歩いていく。

松武は尾行をつづけた。

彼女は乗車券を買い、改札口を通りぬける。彼は自動販売機に十円玉をいれ、キップをつかむとあわてて後を追った。

御徒町から秋葉原へ、そこで彼女は、総武線の下りホームへのりかえた。この線ののりかえホームの混雑はデパートどころではない。ラッシュアワーには押しあいへしあい、文字どおり殺人的になる。

(チャンスだ！)

彼は咽喉の奥でさげんだ。ホームの大時計は五時十分を示していた。かなりの乗客がホームに立っている。

中野発千葉行きの電車が入ってきた。

松武は、彼女の背後にそろりとからだを寄せていった。彼の

異常な脳髄は、このときすでに
はげしい快感に酔っていた。

彼は、右手をそっとポケット
から出した。人さし指と中指の
間にはさまっている細くうすい
刃。

電車のドアがあき、乗降客の
小さな争いがいつものようには
じまった。

彼は左手で女の背を押した。
右手を、ごく軽く、ヒップの下
部へあてた。やわらかい弾力。
体温。まるみ。そのまるみの下
から上へ、うすい刃が撫であげ
るように軽く走った。

布地を裂く感触が、彼の指さ
きから全身につらぬいた。彼は
上下の歯を噛みしめた。鋭い快
感が、感電したときのように、
しびれて伝わった。

(やったぞ、とうとうおれはや
ったぞ！)

強烈な恍惚がきた。彼の視界
は乗客も駅員も電車もなく、バ
ラ色だけになった。彼は眼をと
じた。卒倒しそうだった。

その一瞬、松武律夫の右手首

は、がっしりした第三者の手に
つかまれ、ドア口からひきずり
だされていたのだ。

が、彼の陶醉は、その非情な
第三者の腕力すらも、二、三秒
間は感じなかったのである。

「おりたまえ」

敏腕スリ係長谷川刑事の手は
手錠よりも固く松武の手首をつ

かんで放さなかった。

「すみませんが、あなたも」
狙われた女性も、被害者とし
て電車からおろされた。

一センチの傷もないスラックス

松武律夫につけまわされたこ
の不運な女性は、西川恵子さん
(仮名119) といって、江東区

扇橋三丁目に住むお嬢さん。東

(つかまった……)

我にかえった松武の顔から、
みるみるうちに血の気がひいて
いった。

銀座のKクッキングスクールに
かよう明朗活発なハイティーン
である。

不気味な男に眼をつけられ執
拗にお尻を追いまわされていた
なんて、彼女は夢にも思ってい
なかった。もちろん、松武とは
一面識もない間柄である。

松武の行動が、もしこのベテ
ランのスリ係刑事に発見され、
逮捕されなかったら、恵子さん
は自宅へ戻り、スラックスを脱
いだとしても、自分が狙われた
ことに気がつかなかったであろ
う。

なぜなら、彼女のスラックス
には、一センチほどの傷もつい
ていなかったからである。傷ど
ころか、ほころびすらない。
松武が、彼女のお尻を剃刀の



裏窓ニュース・ストーリー

刃で切ったと感じたのは、錯覚だったのだ。

実際はただ、軽く撫でただけであつた。

それだけで彼は、異常な歓喜と興奮に包まれ、卒倒しそうな恍惚に浸ったのである。

しかし、彼の指の間に剃刀の刃がかくされていたのは事実である。取調べの係官は、その点

痴漢か傷害未遂か？

「きみは、あの女性の肌を、つまりお尻をだな、切るつもりでこの刃を握っていたのかね？」

「そうです」
松武はうなずいた。素直な態度だった。一人の女性を一時近くもつけ狙っていた不気味な執念など、もうどこにもみられなかった。

「だが、あの女性の皮膚はおろか、ズボンさえも切れていなかったぞ」

係官は、松武の反応をみるようにいった。

を鋭く追究した。相手の肌をただ撫でたのと、傷つけるのでは犯罪の性質において、大きな差違がある。

「そうですか。……よかったですね。本当に、よかったです」

松武の表情には、気の弱い、むしろ善良そうな青年の暗い色がただよっていた。

「きみは、本当に女を傷つけるつもりだったのかね。それともただあんな真似を試みたかったのかね？」

係官は、なんだかじれったい思いできいた。

「切るつもりだったんです。だけど、駄目です。ほくには、やっぱり、できなかったんです。」



意気地なしなんです。駄目なんです。結局は、それだけの実行力がなかったんです……」

松武の顔には、自嘲に似た陰影がうかんだ。女性のお尻に触れるだけなら単なる痴漢にすぎ

ないが、はっきりと傷つける意志があつたとなると、傷害未遂となつて松武には不利になる。

しかし彼は、その意志をかくそうとしないのだった。自棄的になつていようにもみえる。

妙な男だな、というように係官は松武の瞳のなかをのぞきこみ、供述をうながした。低い声で彼は語りだした。

気弱なインテリ

松武律夫は、地方大学の電気工学部をでた、いわゆるインテ

リ青年だった。

現在の勤務先は、やはり電気関係の旭光無線工業KK（千代田区神田駿河台）で月給は二万五千元。二十五才の独身者としては、そんなに悪い収入ではない。むしろ、いいほうだ。勤務状態はひどくまじめで、上役たちの評判もよい。

容貌もどちらかという色の白い女性的な感じで、ハンサムの部類に属する。

これだけの条件がそろっていれば、いまだきの青年で一人や二人の異性関係があつても不思議ではない。ないほうがおかしい。

しかし彼は、女性に対しての自信がまったくなかった。これは彼の極端に内攻的な性格のためだった。人並みはずれた内気な性格なのだ。女性に対しては恐怖感すらあつた。そのくせ、からだは健康だから、欲望は一人前以上にある。

吐きだされることのない欲望



は、彼の身心の内側にこもって異常に醗酵した。

彼は、夜眠りにつく前の布団の中での空想によって、欲望をまぎらわした。

彼の空想のなかにでてくる女性、いつもぶりぶりしたヒップをスラックスに包んでいた。彼は、そのはち切れそうに盛り

あがったスラックスの臀部を、剃刀の刃でスーッと切り裂くのだった。

肌までを傷つける必要はなかった。スラックスの布地を切り裂くと、その裂け目から肉づきのいい白いヒップが、にゅうッとはみだしてくる、それを空想しただけで、彼は興奮の絶頂に

達するのだった。世間によくあるモモ切り魔のように、直接肌を傷つけることは、彼は嫌いだ。弱気な彼は血の色がおそろしかった。

「ほくは過去に、たった一度だけ、恋愛めいたものを経験しました。二年前です。キスはおろか、彼女の手すら握れないほく

の弱気な性格のため、その女性はずぐにほくから去っていきました。ほくは彼女を愛していません。ほくがスラックスの後姿に惹かれるのは、その女性がまだ潜在意識として、ほくの脳裏にあるからでしょう。彼女はいつも細目のスラックスをはき、みことなヒップをほくに誇示していました……」

と、松武は述懐する。

ところがそのうちに空想だけではがまんできなくなった。

どうしても一度、それを実際にやってみたい……。その誘惑に彼は苦しんだ。いくたびか誘惑をはねのけ、夢想だけに没頭し、ついに負けたのだ。

剃刀の刃を指の間にはさんで彼はデパートをあさり始めた。

腰部のポリウムを、ななめ下から見あげながら、理想の女性を探すのだ。それにはデパートの階段がもっとも適していた。駅の階段では、あまりに殺伐で忙しすぎる。デパートには華

裏窓ニュース・ストーリー

やかな雰囲気があった。とくに若い女性は店内へ一步入っただけで浮かれた気分になる。そこには油断も生じる。

彼は狙った。

土曜日は午前中で勤務が終わる。彼は毎週末の午後を秘密の狩猟に費した。東京じゅうのデパートをほとんど歩いた。

理想の女性を、幾度も見つけた。そのたびに、剃刀の刃を熱い汗で濡らしながら尾行した。しかし、いつも尾行だけで終わった。刃を秘めた右手を、コートのポケットからだす勇気が彼にはなかったのである。

上野の松坂屋で西川恵子さんを見つけ、秋葉原駅のホームまで追ったその日にはじめて実行に及んだのだった。

だが、毎夜の空想を完全に実現したわけではなかった。実行よりも先に、松武は興奮し、ただ恵子さんのお尻を軽く撫でただけにすぎなかったのである。

スリ係の刑事は、最初彼をス

リと間違えて御徒町駅から尾行し、秋葉原駅で捕えたのだ。

捕える寸前には「ははア、こいつは痴漢だな」と察知した。説論ぐらいですませてやろう

スラックスのヒップに憑かれた男

「でも、ぼくは捕まってよかったと思っ

りと思っ

ったのです。ご面倒をかけて申しわけありませんでした……」

「でも、ぼくは捕まってよかったと思っ

「一步まちがえば危険な犯罪になるこの行為は、たしかにいけないことにはちがいないが、松武の異常な心情のなかには、どこなく哀れっぽさと、おかしみを感じられるよ」

見たもの聞いたもの

男の裸はもてない

★ミス・ユニバースとミスター・ユニバースでは、同じ世界一でも大変な違いだ。

スになったが、ミス・ユニバースと違って優勝トロフィーを贈られただけで、現ナマの賞金ももらわなければ、これまで映画、テレビ出演の口もかかってこない。

★米国のチャールズ・シップス君(28)は二ヶ月前、カナダのモントリオールで開かれたミスター・ユニバース・コンテストで四一人の世界各国代表を向こうにまわして見事本年度ミスター・ユニバー

★シップス君は、一一年前からポスター・ビルをはじめ、一九五七年にはミスター・アメリカのタイトルを獲得した肉体美の持主だが、「男のはだかはどうも女性よりモテなくて」と不運を嘆いている。

最近本誌にしばしば大乱歩氏の文学中の特異な趣味について書かれていて、同好者にとって嬉しいことだが、いずれもマゾ趣味にふれられているだけなのはいささかも足らない気がしないでもない。そこで次の名文を今一度読んでその浪漫怪奇の境にさまよいたいものでもある。

『……今、三郎の眼前には、綿で作った巨人と見える、不思議な物体が横はっていた。

それは、一面シャボンの泡に覆はれた、お蝶の身体なのである。余りに間近な為、三郎にはそれが全身の三分の一位しか見えないのだけれど、そこに、どんな奇妙な光景が展開されつつあるかは彼自身の経験によって、十分察することが出来るのだ。蒸風呂から出たお蝶は、不思議な三助の指図によって、あの巨人の組めいた台の上に横はる。三助がシャボンをつけたスポンジで、いきなり彼女の身体を擦り始める。そして、十分シャボンの泡が立った頃に、彼は今度は、その肥え太った両手を使って、全身の按摩術に取りかかるのである。三郎の目の前を、十本の太い指が、巨大な蜘蛛の様にかけ廻ると、泡の山がモクモクと動き、お蝶の全身が水枕のように揺れるの

読者随筆

乱歩文学における 耽美趣味について

文津部三郎

だ。彼の身体に向ふには、三助のピール樽の様な、シャツ一枚の腹が、苦しそうに起伏して、ハッハッといふはげしい呼吸が聞えて来る。彼はそうしている間にも、客を恥しからせない為にか、絶えず何かと喋りつづける。彼が初めてトルコ風呂に：（中略）：彼の方でも、五十男のデブちゃんなど眼中になく、ひたすら按摩の快感に浸っているのであらう

し、三助の方でも、お客を玩具か何かの気で、自由気儘に慣れた技術をふるっているものであらう……。

ある時は、背骨が弓の様に彎曲して、腹部の皮膚がゴム鞠の様に緊張する。そしてその向側には、ホテルの主人の真赤に力んだ顔が見える。これは、彼がお蝶の肩と足首とを持って、力まかせに後方へ引き寄せているのだ。

又ある時は、仰臥した腹部の上に、豊かな二本の太股が、グッと重なり合って、不具者の様な、不思議な姿が現はれる。これは彼が、お蝶の足首を彼女の額の所へおしつけているのだ。三郎の目の前に、ムクムクと動いている巨大な肉塊は、それがお蝶だなどとはまるで考えられないし、そればかりか、人間の身体とは見えないで、何かかう、白くフワフワした不思議な生物の様に思はれるのであった』

これは「闇に蠢く」中の名文だが、この浴室描写のロマンチズムにはなん度読んでも圧倒される。大体乱歩文学の主要な特性はいくつかの彼の強烈な趣味が渾然と一体となりあの華麗凄艶な怪奇文学を形作っていることであらう。一人二役趣味、浪漫怪奇グロテスク、

畸型趣味、かくれみの趣味及び探偵文学そして国文学研究家に大体分けられると思うし、マゾヒスト趣味の人には「芋虫」や「影男」や「お勢登場」など少くないマゾ描写に陶醉するところ多大と思うが、この「闇にうごめく」中の二ページの描為からわれわれはこの作家の持ついくつかの特性を生々しく感じとらずにはいないと思う。

つまり窃視趣味、かくれみの趣味、グロテスク趣味及びフェチシズム趣味などである。大体この作は多数の傑作の影にかくれてあまり評価されることが少いようであるが、「陰獣」や「拓榴」や「パノラマ島」などに遜色ない傑作と思うがどうだろうか。それは怪奇浪漫性において最上の妖美を発散しているほか、「猟奇の果」や「孤島の鬼」などとともに素晴らしいスペキュレーションを持つスケールの大きさとそれに対して無理のないプロット構成していることにもよる。

つまり「闇に蠢く」では、浅草—信州S温泉—難破船内—洞穴の四つが巧妙に不思議な人物によって結合されている面白さが彼の傑作中で光りを放っているということである。それはさておき、この文から乱歩氏の肉体愛着及びフェチシズムを感じるとしても不自



然ではないだろう。特にお蝶という三郎の情婦の腹部に対して。……「ムクムクと動いている」……以下はその一典型のようである。「お蝶どころか人間の身体には見えないで白くフワフワした不思議な生物のように見える」は三郎といふ主人公の強い肉体フェチシズムとグロテスク趣味をうたい上げるポエジーとして驚嘆せずにはいられないものだ。お

蝶という女ばかりではない。三助役を楽しむ旅館の主人の太っちょの裸体のヴィヴィッドな描写に強いグロ趣味が発散している。

この太っちょの主人は一見マゾ的に見えるが、「三助の方でも、お客を玩具か何かの気で……」を読めば実はわざわざ三助役を買って出て日本人放れのしたお蝶の豊満な肉体を自在に手にして喜ぶサド的フェチシストなることは容易に想像できよう。

この旅館の主人は後お蝶を殺害し、その臓物をアルコール漬けの珍味として喜ぶ恐るべき人物となるので、ますますそれは明瞭である。

乱歩文学にはいろいろな残虐的人物が登場するが、「ヴァンピリスムス」を扱ったものはさすがにまれで、その点でもこの作品はユニークだといえる。しかもそれは「お蝶」に止らない。この太っちょ旅館主は以前に巨大な西洋人や角力取りを同様な方法によって彼の嗜好を満足させているし、この作品全体が「ネクロサディズムス、ヴァンピリスムス」で貫かれてもいるようなものだから凄い。

「中にやあ、よく肥ってるる荷主の旦那なぞは、一番早く腹が減るのかも知れねえ、何だ

か恥しさうに靴の皮を潮水でふやかしてゐるんだ。

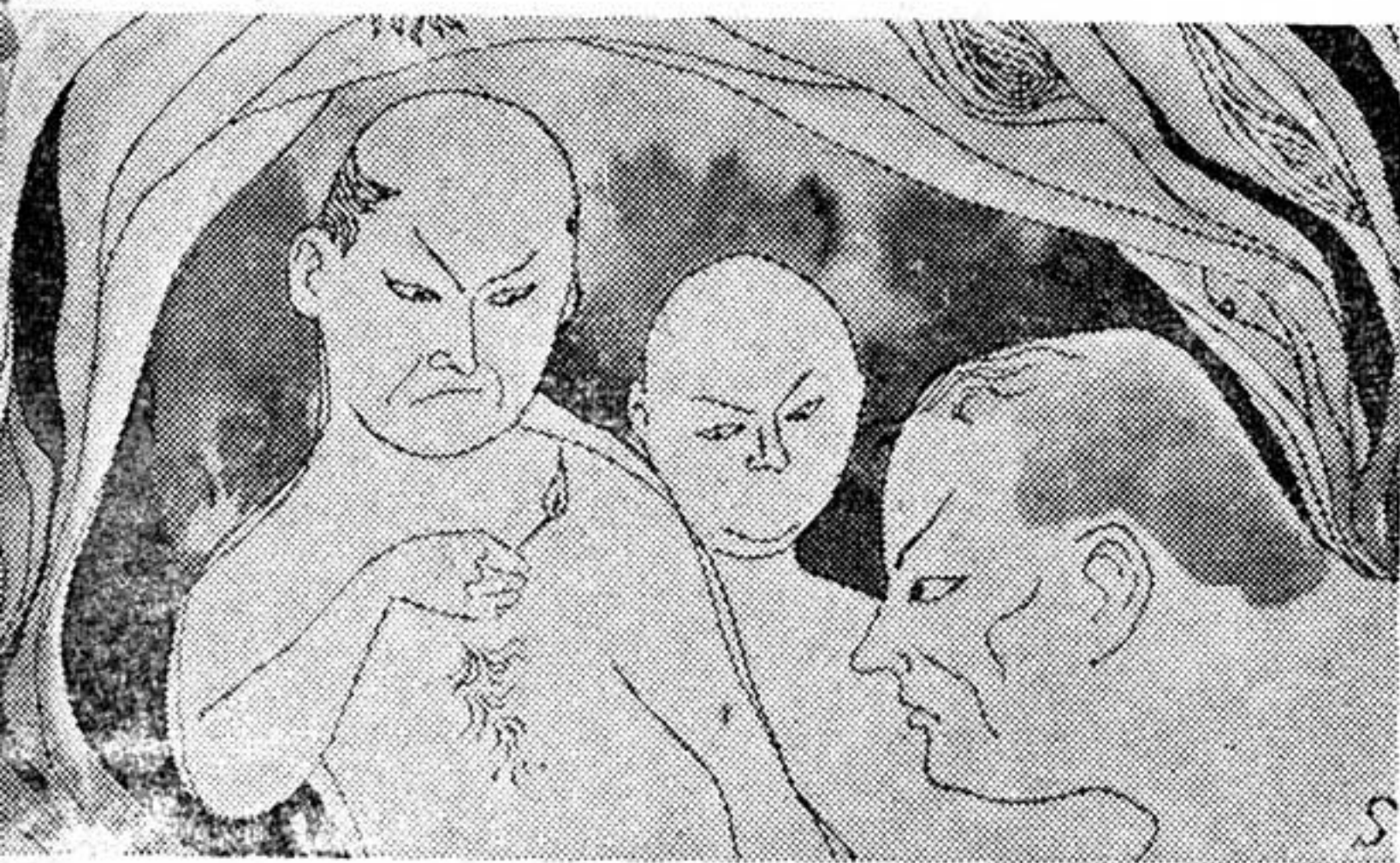
どうするのかと思って見てみると、そいつを食ふ積りなんだね。……籤をこさえて、一体どうしようと云ふんだ……妙に怖くなつてね『オイ、何をしてゐるんだ』って聞くと、

奴さん、筋ばかりになった顔を、青くして、黙つてゐるんだ。その目つきが、まるで命がけの喧嘩でもしやうって塩梅で、実に凄いだね。……でね。俺の方でも、暫く奴さんの顔を見つめてゐる内に、ハッと読めたんだ。

太っちょの荷主の旦那などは、手を出したり引込めたりして、かうして思い出して見てえと、まるつきり二輪加さね。……なにをビクビクしてるんだ。これを見ねえって調子でね、まづ第一に籤を引いた。一等短いのが殺される訳だったが、俺のはうまい工合に長い籤だ。それからコックが引いて、荷主の旦那も仕方なしに引いたんだが、皆長い奴ばかりなんだ。して見るてえと、メーツの奴、自分で籤を拵えて、自分が番に当っちゃったんだね。その時の奴の泣き面てえものは、まったく、笑つてゐるのだが泣いてゐるのだからねえ、実に不思議なものだった。……卑怯にも俺達をごまかさうとするんだ。奴の気持を考

えると、まったく可愛さうぢやあったがね。だが本当に腹の減つた気持でえものは、可愛想だとか、気の毒とか、そんなものとはまるきり別物なんだ。……手の方はひとりでに、かう奴の首をしめに伸びて行くんだ……」

これは同作の終りに近い部分の抜萃で、お蝶をS温泉に追つて来た、三郎のライバルで



あり、元水夫植村の洞穴内での思い出話。背筋のこそばゆくなるほどの地獄絵図で、身の気のよだつものを感じさせながら、何かしら甘い陶醉さえ読者に与えずにはいない作者のグロテスク趣味とそのあくなき探求精神と筆力には驚嘆するほかはない。

しかも難破船の思い出話と現実の洞穴内との対比の巧妙さはみごとである。ところが植村の、

「……俺達やあ何も、すぎ腹をかかえて、のたうち廻つてゐるこたあねえのだ。マッチは誰が持っていたっけな。すまねえが、一本だけすつてくんねえ、見当をつけるんだ。御馳走の見当をな。……なる洞穴内の叫びが出てきてギョッとさせるが、彼の意図するのは洞穴内にあった女の死骸だったという曲折もある。しかもそれはホテルの主人のかつて殺害した女房だという凄まじい景物もあつたりする。怪奇的な傑作の多い内でも、これほどの凄惨耽美かつ特異な作品は少いと思う。

こうしたグロテスク趣味は「一寸法師」や「踊る一寸法師」や「芋虫」等に畸型という醜悪の中の美を探ることで極点に達した観があるが、(多くの乱歩作品で肥満体の描写が少なく、かつみごとに描かれているのも一

種の畸型趣味ともいえるだろう』この畸型趣味の白眉は「孤島の鬼」といえる。

これは同性文学中の数少い傑作の一つとしても有名で、彼の作品中でも唯一のものだが、全作品中最も身の毛のよだつ怪奇小説ということに興味が多い。シャム双生児を登場させるのは、探偵小説のもつ怪奇性のため珍しいことではないが、この作品の特異性はその畸型製法の秘密で、秀才児だった諸戸なる人物が畸型の養父から学資をうけて医学校で勉強させられ、後畸型製法の研究命令を強制される。というわけだが、そんな遠大な計画といったものがより残酷でよりグロテスクに感ぜさせるわけである。

グロテスクの様式美を端的に示したものとして「地獄風景」を忘れることができない。そのグロテスクな遊戯はショッキングな美をこの上なく発散する。この文からナンセンスでとぼけていながらのかわどきりとさせられるあのモダンジャズの奇妙な味さえ感じてならないのは、それが残酷な地獄画であるだけに至極奇怪である。

……これもまた都合十人、紅白ダンダラ染

めのユニフォームをきせられ、胸には1から10までの番号札をつけた紳士淑女が、向ふの森の決勝点めがけて、オチニ、オチニ、息をきらして走っていた。長距離だ。一千米。彼らはすでに九百米を走った。むろん彼らも酔っぱらっていた。それゆえ苦しかった。鼻眼鏡の紳士は、鼻眼鏡が落ちそうになるのを片手で押えながら、まっ赤な顔をして、ホウホウかけ声をして威勢よく先頭を切っていた。その次には断髪のマダムが、美しい顔をゆがめ、断髪をうしろになびかせ、三十歳のお乳とお尻をダブダブさせながら、第二位を走っていた。それからやせっぽちの肺病やみの青年が、それから李のように赤くて丸くてすべっこい顔のお嬢さんが、それから、それからと、九人のユニフォームが一二間おきに続いて、ドン尻には、樽のような肥満紳士が横に転がった方が早いくせに、転がりもしないでエッチラオッチラ走っていた。感心に一人の落伍者もなかった。

彼らの足並に合せて、コースの三カ所で、「宮さん宮さん」のシンタ楽隊が、陽気に鳴り響いていた。……先頭の鼻眼鏡がついにゴールに迫った。彼の両足は疲労のためにガクンガクン今にも膝をつきそうに見えた。

「ウォーツ！」

彼は獣物のように咆哮して、白いテープに向って突進した。ギラギラと光る、幅の広いテープは、一本の棒のように伸びきって、先着者を得ちかまえていた。一間が一尺となり、一尺が一寸となり、鼻眼鏡のつき出した腹部が、テープにつき当った。……ところが、この奇妙なテープは、鼻眼鏡の腹に押されても伸びも曲りも切断されもしなかった。それどころか、実に恐しいことには、切断されたのは、勢いこんで走って来た鼻眼鏡の腹の方であつた。……

△地獄風景「恐しきランニング」より▽

まさに、グロテスクの美学であり、詩である。

テープと見えたのが、実はそれだけの長さに鍛えさせた鋼鉄の剣であつたというアイデアの素晴らしさもさることながら、悪夢的幻想をこれほど徹底してナンセンスかつ珍妙に描写した筆致には驚きのほかはない。だから一面からいえばこの地獄風景中の「恐しきランニング」こそ彼の諸作中最大のグロテスク美と残酷美を持ったものだといえるのではないだろうか。

確かに「お勢登場」や「芋虫」にみる劣敗

者的男性とそれを支配する境遇にある妻との関係はマゾヒズムを連想させるに充分だが、そして黒田氏の「かばね趣味」という考え方は独創的で面白いが、たまたま乱歩氏が「芋虫」においてそうした設定をし、その上、一流のマゾ的麗筆を揮われたのに過ぎないという見方もできるのではないだろうか、

乱歩氏がSよりもむしろM的、あるいはそれに興味のある作家かも知れないことは認めるにしても、「芋虫」の如きマゾヒスト諸氏を喜ばせ、マゾ作品とみなされている作品にしてからが、マゾ趣味を基調にして書かれたとは考えられないような気もするのだからどうであろうか。

前述の畸型趣味を持つ作家であることは、「一寸法師」、「踊る一寸法師」、「孤島の鬼」などの主役または重要な役割を演ずる男達や「地獄風景」中の相当重要な傍役の餌差宗助などを見れば誰しも違存はないと思われる。

そこでこの畸型趣味を前提とすると、「芋虫」の醜悪感への執着が彼の創作意欲を刺激した場合、芋虫的人物は容易に連想されるだろう。芋虫的人物に最も合致し、設定に無理のないものとしてはまず廃兵が考えられる。

芋虫的廃兵とその妻、となればその男性はマゾ的でなければならなくなる。当然その妻はサジスチンの、または、そのように変化させるのが最も無理がないことになる。

「生ける屍」的感覚などはこうした創作過程から副次的蓋然的に派生したのではないかと見られ、作者のマゾ趣味から「芋虫」が生まれたとは考えにくい気がする。

マゾ的代表作品の如くいわれる「人間椅子」に至ってはさらにそんな気がするわけだ。「人間椅子」について考察すると、乱歩氏のかくれみの願望趣味が基調になっていると思う。―あれほど一人二役のテーマにとり組んだ作家も珍しいくらいで、その意味で氏が「かくれみの趣味」が人一倍強い作家であることも容易に首肯できるから―椅子の中に人間がかくれていたらどんなに面白くショッキングだろうという意識が作者に人間椅子なるテーマを呼び寄せたとする。

すると椅子の中にこっそり入り得るのは誰がよい？ 特別な、または煩雑なトリックの無理を避けるなら、最もふさわしい人物は椅子造りの職人である。

椅子にひそんだ職人は当然椅子の一部となつて、尻や太腿の重圧に苦しまなくてはなら

ない。たとえ盗みが目的で椅子の中にかくれているにしろ、普通の性格の男にはあまりに苦痛で、よくなしうる所でないと考える方が自然であろう。そこで職人はマゾ男でなくてはならないという探偵作家的推理は当然起るのではないか。

つまり作者のマゾ趣味からこの「人間椅子」は創作されたのではなく、やむなくマゾ的作品になったとも考えられるのではないか。ただし、このマゾ的職人の口を借りて、重要な要素として語られるところの、自分の身体の上に薄いなめし革一枚を隔てて乗られるさまさまざまな男女の臀部やその他の身体の部分の感觸の描写は例えば、

『……人間といふものが、日頃目で見ている、あの人間とは、全然別な生きものとして感ぜられます。彼らは声と、鼻息と、足音と、衣ずれの音と、そして、幾つかの丸々とした弾力に富む肉塊に過ぎないのでございます。私は彼らの一人一人を、その容貌の代りに、肌ざわりによって識別することが出来ます。或るものはデブデブと肥え太って、腐った肴のような感觸を与えます……』

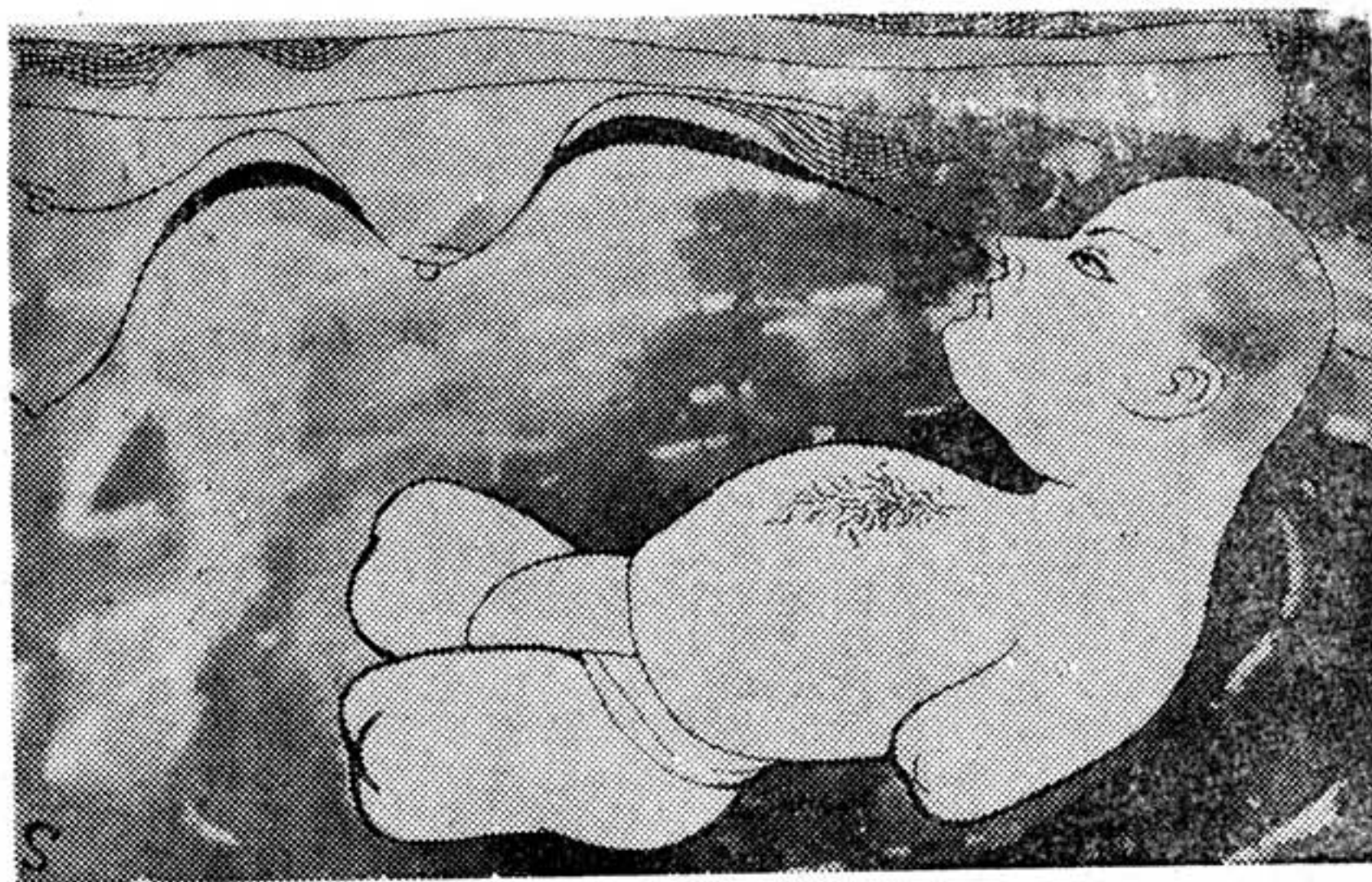
の如くはなはだ微細であるが、この文から作者のかくれみの趣味を感ずるほかマゾヒズ

ムよりもフェチシズムを感じないわけにはいかぬのだ。

「盲獣」において述べられる「触覚芸術論」と相通ずる肉体へのフェチシズムである。フェチシズムが容易にフゾヒズムに通じやすいのはもちろんだが、(サディズムにも同じ)、もともとこの両者は次元を異にしている別箇のもので「人間椅子」をフェチシズムの強い作品であることは認めるが、マゾ作品として簡単に取り扱うことは愚とはいわないまでも、副次的なものと考えずにはいられないのだ。少くともマゾ趣味が根底になっているとはどうしても考えられないのである。

「お勢登場」でもおそらく発想は「かくれみの趣味」から来ているもののように、たまたま長持の中にかくれるという幻想の楽しさ、執着、または中にいて鍵をかけられる恐怖があのような悪妻を登場させる動機と思われるのではないのだ。

劣敗者の肺病やみの男にマゾ的興味を抱くよりも、「芋虫」と同じく、あの「お勢」という女で代表される人間の持ち得る残酷性を追及している点にひかれてならないのだが。……あえて残酷なる人物の男女別などは二の次にさえ感じられるのだ。



「かくれみの趣味」がマゾヒズムの系列に根元的に属するのなら、(そうとはとても断定できない)そしてまた「探偵作家の如く常人には考案し得ない謎やプロットなどを作つて自己を苦しめる人物はマゾヒストの系統である」という精神分析学説を類型的かつ素朴に適用していいというのなら別であるが、あの作品に関してたまたますぐれたマゾ描写が

あるということ、乱歩氏の如き多様性をもつ探偵作家のその作品をマゾ文学であると簡単に断定することはやや早急の感をまぬがれないと思うのだがどうであらうか。

人もつとも「かくれみの願望趣味」→「胎内願望」→「ナルチシズム」→「マゾヒズム」という比較的強い親和性が存在するだろうことは認められないこともない。ただし比較的というだけのことだ。またナルチシズム及びマゾヒズムを例にとってもこの二つは関連を持つことが多いというだけで、元来次元が違うものと思われる。

以上あるいはややドグマ的推察のおそれもあるかもしれないわけではないかも知れぬが、(大體芸術及び作品の創作過程など第三者が、特に浅学の小生などが推察できると思うのが無理かも知れぬが——何せ作家本人でさえも自作の創造過程について未知の部分が多いと思われるのだから)以上の如き考察もなしうるのではないかと思つたわけで、これについてご教示いただければ幸甚です。つまり最近読みかえして見たところ、マゾ作品と思つていた二、三の作品が一見マゾ的スタイルで書かれているだけではないのかと疑問に思つたというわけですから。

大映映画「手錠に賭けた恋」は網走刑務所へ送られる殺人罪の女囚と、それを護送する刑事の憎悪と愛情を描いた作品。

刑事（菅原謙二）は以前、娼婦を真剣に愛したが無残にも裏切られてしまった苦い経験を持っており、女というものに本能的な憎悪を持っていて、女囚（新人、三木裕子）にも情容赦をしない。

映画はまず、朝の上野駅——発車直前の列車に間に合わせようと、刑事が片手錠をかけた女囚を乱暴に引きずりながら階段を駆け上ってくる場面から始まる。

女囚が倒れても彼は意に介さない。

車内へ入ると、乗客たちの好奇の視線が一斉に女囚へ注がれる。女囚はふてくされて通って行く。

映画の大部分は手錠で引かれる女囚と後天的セミ・サチスト（？）の刑事を描き続ける。

途中、脱走した女囚は再び囚われてしまう。荒々しく引きずって行く刑事に、

「手が痛い！ こっちの手に代えて！」

などと哀願するが、刑事は取り

合わない。

「網走へ着いたら、護送の途中で虐待されたと言ってやるから！」

と、なおも反抗するのを、刑事

は烈しく突き倒してしまふ。

雨降りの中を線路づたいに次の駅へ急ぐ刑事に、女囚は疲れ切つて、とうとう坐りこんでしまふ。

「牛や馬だって、こんなひどい扱

手錠にかけた恋

伊 吹 一 郎

いは受けないわ！ 私は人間よ。

女なのよ」

と呪う女囚に、刑事はますます

苛酷になるばかりだ。

発熱して病院のベッドへ寝た夜

——熱が下った後、女囚は肌も露

わに刑事へすがりつき「私を抱い

て！ 十年も閉じこめられるのよ

！ねえ、誰にも云わないから！」

と、色仕掛を試みるが、菅原刑事はドン・ホセとは訳が違うのである。

「根性を叩き直してやる！」と怒

って、警察の留置場へ叩き込んで

しまふ。

彼が日本版ドン・ホセになって行くのはこの後であり、大雪によ

る列車のストップ、思いがけない

出産の手伝いなどの挿話を重ねる

うち、いつしか二人の間に愛情が

芽生える。

「私を連れて逃げて！」

と願う女囚は、もはや色仕掛け

ではなく、始めての女の倅せを掴

みたい一心からだ。

刑事は動揺するが、それでもな

お役目に忠実でありたいと思い、

ジレンマに悩む。

しかし、網走に近い辺りで雪崩

のために列車事故が起こった時、

彼は遂に、失神している女囚を救

助隊の手に渡して、護送日誌を焼

却する。

女囚は意識を取り戻して、恋しい

男に誤まちを犯させてはならない

と思い、男のもとへ駆け戻る。そ

して、我と我が手へ手錠をはめる

のでアッター——というような筋。

「十年、待っているよ」という男の言葉に、女は晴ればれとした心で刑務所の門へ歩いて行く場面で幕。

有名スタアは菅原謙二が一人だけで、あとはシナリオと現地ロケの効果で勝負をする精神の映画でアリマス——と、ほめてやりたいのは山々なれど、実は、これと同じような話で、戦前のN・H・Kの放送劇台本に、懸賞募集で入選した「愛の縄」とかいふ作品があるのである。

明治か大正の話で、こちらは殺人犯の農婦を捕縛で後手に縛って連れて行く刑事の物語であり、病気になるのは刑事の方、その介抱をするのが女囚で——というような違いはあるが、アイデアとしては同じだ。

この放送劇、一、二年ほど前に花柳章太郎の女囚、伊志井寛の刑事、という配役で再放送されたことがある。ラストのセリフは、「さあ、おらを後手に、うんときつく縛ってけれ。そして、早く監獄さ連れてってけれ」というようなもので、どうも似ているのである。

荒縄と黒髪の構図



カメラ・吉田 久















照姫

呪人縛

島本春雄



① 砂絵美女

それは、なんとなく、ちぐはぐな、歪んだ眺めであった。もじやもじやに乱れた銀髪、髯——そのくせ、肌の色は茶褐色に陽焼して、皺深い顔には、畸型じみた欠点がある。右の眼が醜くく潰れた——これは、異様な隻眼の老人であった。

——が、この老人の右手から、サラサラと流れるものは、銀砂、金砂、緑砂……極彩色の砂であり、眼前の大地に画かれたのは、華麗な美女の砂絵である。

縁日で賑わう天神社の境内。

「どうじゃな。こういう顔の美女をご存知の方はおられぬかの……。十両。さよう、ご存知のお人には、十両の賞金をさしあげる用意がある」

皺枯れた声でいって、この老人の隻眼が、ぐるりと人垣を作った見物人を一瞥した。

不気味な眼であった。

それは何かに憑れたような、何かをいちずに思いつめたような——そんな眼であった。

「何だ、尋ね人かい。それにしちゃア奇妙なやりかただな。年寄りには気が短けえというが、こいつアあべこべに随分のん気であってやがる」

見物人の一人がいった。

砂絵の美人は異妖に美しい。それだけにこれを砂絵で仕上げるには、かなりの時間をかけているのだ。

「はてな。これアお照さんじゃねえか……そっくりだぜ」
老人の右肩越しに覗くようにしていた大工職らしい若者が、つぶやくようにいったのはこの時であった。



② 兇運の輪

蒼白い月が夜空にある。しかしそれは、利鎌のように細くて、大江戸の闇をあばきたてるほどの光りを送っては来なかった。

暗い露路——お姫長屋。

その黒い土を踏んで、四つの人影が滑るように歩いて来た。

——む」

先頭の影がぴたりと静止した。その足先——一軒の家の軒下に、白い丸い輪があった。見れば、白砂で画いた五寸大の砂輪である。

これが何かの符牒であつたろう。

静止した四つの影は、お互いに軽くうなずくと、ギリと腰の物を抜いていた。そして、次の瞬間には、もう行動を起している。

表戸の戸締りは音もなく破られたし、一人を見張りに残して吸い込まれるように屋内へ消えた三つの影は、やがて燃えるような緋色の寝間着一枚の女を肩に担いで、再び影のように姿を現したのである。

一切が無言無音の動きであつた。

女は当身でもくらって悶絶したのであろう。寝乱れた黒髪をゆれるにまかせ、白い素足をだらりとたれて、めくれ上った裾前から太腿の統肌が覗いているのに、羞恥の身悶えも、抵抗の動きも、いっこうに示さなかった。眼を閉じている。

しかしその美しい顔は、たしかに隻眼の老砂絵師が、大地に画きあげた砂絵美人の顔であつた。

③ 朽木野姫

「照姫！ 一棺斎の眼は一つしかないが、節穴ではないぞ。——右乳房の下にある三つ星の黒子（ほくろ）、それが何よりの証拠じゃ。おぬしは先年断絶滅亡の非運を招いた朽木野十萬石、金森丹波守が遣姫照姫に相違ないわ」

あの、ぞつとなるような皺枯れた声が、闇の中から聞こえて来た。

板敷きの上に、後手縛りにくくりあげられて転がっている女の周囲だけが、壁龕灯の照射を受けてくっきりと明るく浮き上っている。その外側は黒い霧のようにぼやけていた。

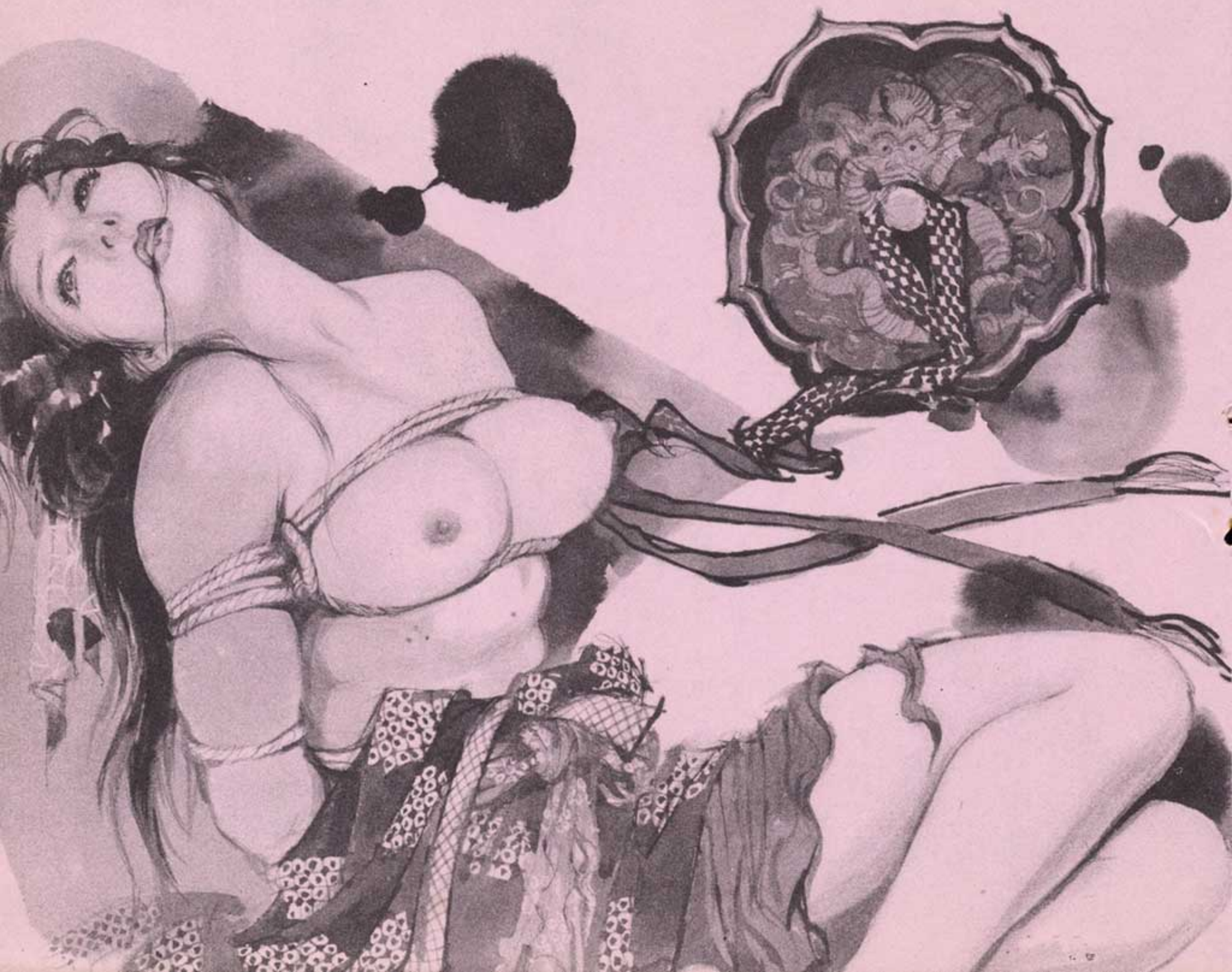
——かなり乱暴に縛りあげている。乳房の下黒子をたしかめるためであつたろう。緋色の下着は腰から上を引き剥いで、二つの豊かに成熟した大きな乳房をむき出しにし、その上下に縄目がくい込んでいて、形のよいその乳房を奇妙な形に歪めていた。

「わたしは素浪人の娘てる。そのような身分の者ではありませぬ」

女は、縄目の苦痛に、細い眉を皺め、片頬を歪めて苦しそうな声をだした。

「黙れッ！」

皺枯れた声に怒りがこもり、同時に黒蛇のような蔓鞭が闇の向うから夜気を切つて飛んだ。そしてそれは、むきだしの乳房の上で、吸いつくような粘りのある音を發した。「むうッ」女は、のけぞるように半裸身を屈伸して悶えた。





④ 地中裸女

荒れるにまかせた庭には雑草が我が物顔にはびこって
かつては美しい眺めであったに違いない築山も、今は見
るかげもない。

庭池の水も、どろんと濁って、腐臭すら発している。
これが朽木野十萬石、江戸下屋敷の現在の姿であった
——屋敷は半焼して、これまた醜い残骸を黒々と横た
えている。

兇運の屋敷として、近寄る者は絶えてなかったが、原
一棺斎と名乗る隻眼の老人と、その弟子とも見える四人
の浪人者は、江戸入府以来、ここを根城にしたようだ。
「どうじゃ、冷たかろう。骨の髄までこごえるぞ」

原一棺斎が、腐臭の池の端に立っている。虜囚の黒子
姫を焼け残りの部屋から引きずりだして、いまこの男は
第二の折檻をこころみているのだ。

湯文字一枚の朽木野照姫は、緊縛の縄目もそのままに
凍るような池中へ、その下半身を沈めていた。

「棺九郎、胸まで沈めろ」

一棺斎の声にうなずいた髭面侍は、掴んでいた照姫の
黒髪を握り直して、もみ込むように乳房の辺りまで池中
へ沈めた。

「さあ聞こう。朽木野の雲竜鏡……その所在はいずこじ
や？」

一棺斎の隻眼が、執念の色を見せてギラリと光った。
「知らぬ」

と、水中の美女は血の気を失った白蠟のような美貌を
歪めて、弱々しく否定する。

⑤ 竜虎鏡

「一棺斉め、早いとこやりアがったな……」

お姫長屋へやって来た遊び人風の苦み走ったのが、足もとの砂輪を眼にして、つぶやくようにいった。

「片眼の砂絵老人が、この江戸に現われて、砂絵美女の所在を求めていると聞いたとき、てっきり狙いは雲竜鏡と察したが、けっ、ひと足遅かった……」

唇のはしを歪めて、考える顔になった。

（お姫長屋のお照が、朽木野藩十万石金森丹波守の遺姫照姫——と知ったのは、おれの方が早かったが、せっかく隠れ住んで、ひっそりとつましく日を送っているのに今更波瀾を起しては不人情と、そ知らぬ顔をしていたのが、かえって仇になりアがった）

けっ。——舌打ちして、この男は歩きだした。猫のように足音がない。そんな歩法を身につけて、それが習性のようになっている男——こいつもむろんただ者であるうはすがない。

朽木野藩の秘金十万両というのは、一種の伝説になっていたが、その所在を秘めると伝えられる雲竜、虎吠の二つの懐中鏡はたしかに実在した。

奈良朝以来連綿と続く砂呪法の原家——その現在の当主一棺斉が、金森家滅亡の際、虎吠の鏡を奪って逃げたという風聞も、この男は耳にしていた。

しかし鏡は、竜虎合してはじめて謎を解くという。

「一棺斉め、このまま引下ったんじゃア、闇公方の名がすたる。必ず照姫は救い出してみせるぜ！」
はき捨てるようにいって、この男は足をはやめた。





⑥ 黒縄葬

「女の強情には限りがある」
一棺斎がニヤリと笑った。

「あの水責めで、あら方強情の角も折れたろう。最後の仕上げは、死棺の黒縄葬——これでネをあげぬ女はおらぬ」

疲労の色濃い照姫は、しかし、なんという悲しい美しさであろう。責めさいなまれて苦悶すれば、そこにまた一種妖しい美しさを発揮するかなしい女体……それがいま、すでに湯文字もはぎとられた白蠟の裸身を横たえておぞましい黒縄葬を待っているのだ。

黒縄葬！

それは砂呪法の一族が、連綿と伝える恐怖のしきたりだった。

「聞くがよい、照姫。おぬしのその裸身に、足の先から頭まで一寸の隙もなく、黒い縄を巻いていくのじゃ。これは不貞の女を生きながら葬むる原一族の刑習じゃが、鞭や水責めの苦痛なぞ足もとにも及ばぬ、想像を絶した恐怖じゃ」

水責めの恐怖を経て、すでに放心に近い状態の照姫——その裸身を押さえつけて、髭面侍の棺九郎が黒い縄を巻きはじめた。

姫の右の足首から、上へ上へ——と恐怖の縄は、その白い肌をどす黒く染めてゆく。

「う、うう……」苦痛に呻く姫に、

「雲竜の鏡はいずこじゃ」と、一棺斎の執念の声が、ねばっこくまといつた。

⑦ 執鬼一棺斎

葬送の黒縄は、すでに照姫の右足を巻き埋めた。

このまま放置すれば、右足は感覚を失い、やがてそこから腐りはじめるだろう。

——それは異妖な眺めであった。

「まだ吐かぬか——棺九郎、かまわぬ。足の縄はあとにして、より苦しい胸縄を先にやるのじゃ」

一棺斎の不気味な相貌に、いらだたしい焦躁の翳が走った。

「はっ」

棺九郎侍は、足責めの縄を太腿のあたりで止めて、新しい黒縄をしごいた。

「棺十郎、こやつを髪を掴んで引き起せ、転がしたままでは胸縄を巻けんわい」

「心得た」

どっちかというと、ずんぐりした棺九郎とは、対照的な瘦身の棺十郎侍が、照姫の黒髪を掴んで引き起した。その胸に、おぞましい黒縄が、ぎりぎり、ぎりぎりと喰い込みはじめた。

一条、二条、三条——盛り上った乳房の上を、黒蛇のように巻きつく縄……豊かなふくらみが歪み、また歪みさらに歪んで、白蠟の胸が次第に黒く拡がっていった。「うっ、く、くるしい——ううっ、縄を縄を……」

照姫の抵抗にも限度があった。凍るような池中の責めにも、乳肌を襲う鞭にも耐えた照姫だったが……

「雲竜の鏡はいずこじゃ？」

「竜灯籠の……下」





⑧ 呪法砂

美しい裸身に、いまわしい黒縄を巻かれたまま、照姫は悶絶した。苦痛に歪んだその頬の上を、眼尻を伝った涙の玉がほろりと走った。

「雲竜の鏡は、この屋敷の庭——竜灯籠の下にある」

一棺斎の眼が細くなった。得意の表情であつたろう。

「竜虎抱擁——十万両は手のうちぞ」

懷中から虎吠の懷中鏡を取りだしてニタリとしたが、このとき隣室の闇から声が飛んだ。

「そうは問屋がおろさねえ」

「なにやつ？」

「ふふふ、八丁堀の連中は、おれのことを闇公方と呼んでるそうだ。——なあに、ただのお泥棒様だがね」

「殺れッ」

怒声を発して一棺斎が腰をあげた。——が、あげきることはできなかった。

声が消えると、今度は、洞穴のような隣室の闇の中から、避けるに難い八方手裏剣が飛んで来たのである。

棺九郎と棺十郎の二人が、ほとんど同時に奇声を発して倒れた。別室にいた棺四郎、棺五郎の二人は、すでに闇公方の手でかたづけられていたのに違いない。

一瞬——。室内に金霧が散った。一棺斎が呪法の砂を撒いて、庭先へ逃げたのである。

「ペッ、ペッ」

頭から金砂を浴びて闇公方が隣室から姿を現したとき一棺斎の瘦軀は、すでに雑草の蔭になっていた。左頬に大きな画き痣をつけた闇公方は、クスンと笑った。(終)

障子と女

カメラ・深森映士

















元来筆不精の小生が、ともかくこうしてレターペーパーに書きにくい万年筆を走らせているのですから、その一事だけで、いかに小生が昨朝到着した裏窓叢書第四集残酷裸女絵巻を読了して興奮したか、おわかりいただけたらと思う。

最近の裏窓には、こつてりとしたS時代物が影をひそめ、そのことを残念に思い、また淋しくも感じていた小生だが、その不満は、残酷裸女絵巻三二四頁を読むことによって完全に払拭された。

時代物には夢がある。いって見ればロマンチック・サジズム（こんな用語があるかどうか知らないが……）といったものを、こよなく愛する小生は、変に現実的な、なまなましくも汚ないS読物を好まない。やはり古い時代への郷愁といったものがあるためだろう。

——開巻早くも若衆姿の美貌の女美鈴が、千賀主膳のために屈辱の悲運に泣く。ずるずると晒布は、主膳の指によって引きずり下ろされる。すると、それを待ちかねていたように、双つの乳房がむっくりとこぼれ落ちた。「ふふ、これはたまらぬ」みだらなふくみ笑いを吐き散らして、主膳の掌がむっ

ちりとした乳房を掴みこむ。羞恥に紅い乳首が戦慄する。——といった導入部を読んで、小生は所用のため外出する予定を変更してしまった。せっかくロマンチック・サジズムの世界にひたりかけたのに、このムードを中断したくなかったからだ。

淫ら雨、地獄屋敷、佝僂忍者と続いて蠟燭責めに入ると、十八娘のお千代が裸女燭台となる。「ひいっ、ゆるして、ゆるして下さい

残酷裸女絵巻

三重県四日市市

山形信一郎

まし」二本の蠟燭はしごきに緊めあげられてむっくりとふくらんだ乳房に、蠟滴とともに立てられたのである。……ああうっ、くるしい……顔を左右に振ってお千代はのたうつ。ぬらぬらとした脂汗が、胸から腹までねっとり柔肌に噴きあがった。睫毛が激しく痙攣して涙が玉になって瞳に浮ぶ——これを読んだ小生は、その光景をありありと眼前に画い

た。五九頁の挿画もいい。

縄はくびれたお千代の腰を、二巻ほど締めあげて、中をくぐった縄尻が下に降りた。固く閉じた腿の間をくぐり、双臀の割れ目に沈んだ縄は、鉄齧の手に強く引き絞られた。あろう事か、縄目はお千代の股間を縦に縛りあげたのである。脚をのばすと股間の縄は厳しく喰いこむ。柔軟な肉の丘を緊めあげ、女のもっとも恥しい縛り方——とあるが、これがそのまま五九頁の挿絵になっている。

裸女曼陀羅の巻に入ると、縄変化の項で、鉄火美女文字若が地獄縄にかけられる。柔肌に迫る針、股間をぎりぎり責めつける地獄縄、悦虐のふくみ笑いをもらす左京！ 白い肌に線香の火が近づいたのは、感覚の鋭い乳首を灼きつくす灸責め！

腥月魔風の巻に入ると、小生はドキリとした。剣鬼主膳のため、ありとあらゆる拷問を受けた美鈴が、ついに危機一髪の救出もなくその処女性を犯されてしまう。——いや、興奮のあまり、つい書きにくい万年筆ながらレターペーパーを埋めてしまったが、本当は、こういう種類の物をもっと出してほしいという注文を書くつもりだったのです。

奇妙な女護が島

女学生たちは従順にうなだれて処罰

の縄を受けるのだった。青年教

師と女学生の奇妙な青春！

豊田一狼
沖涉司・画

1

まったく、松の根ッ子掘りなんて、ばか
ことをやらされたものだ。

しかし、当時は大まじめでその命令に従
たものだ。

菊栄女子商業学校四年生徒を二クラス合併
したおよそ六十名の先頭に立って、はじめの
うち本郷圭介は夢中になってその勤勞奉仕に
取り組んだ。

可憐な女生徒たちを叱咤激励し、大きな松
の根ッこを毎日毎日つきからつきへと掘り起
こしては、なだらかな丘陵の肌に幾つもの穴
ほこをつくった。

こんな作業にかりだされたのは、圭介の学

校の女子挺身隊ばかりではないだろうし、掘
り出された根ッこも大量な数にのぼったろう
と思うが、あんな根ッこから、軍は本当に松
根油とかをしほりだし、戦争に役だてたの
だろうか。

しかし、圭介たちは——すくなくとも圭介
は、その軍命令のおかげで、空襲にもおびえ
ず、飢えることもなく、動員されてきた小さ
な山間の部落で、奇妙に充実した日々を送っ
たのである。

圭介は若くて多感で、それゆえにいけない
教師だった。不良教師、だったともいえる。

（もっとも当時「聖戦」を鼓吹し、多くの学
生を戦場に送りだして殺した先生方もいるの
だから、圭介なんかはツミの軽いほうかも知

れないが）

とにかく圭介は「お国のため」「米英撃滅
のため」という美名のもとに、生徒たちを縛
ったり、彼女らのお尻を叩いたりしたのだ。

戦争に協力する純粋な熱意で、生徒たちを
そんな目にあわせたのなら、あの緊迫した狂
ったような時代の空気のなかで、まだ弁解の
余地もあるう。

ところが圭介のは、いささか趣味的なもの
が混っていた……。

2

教師が女生徒にとくべつな関心、感情など
抱いてはいけけないのは当然だが、圭介はどう
も若く、国語を担当しているだけに、自分で

も詩の一つや二つはつくり、いささか多感な性情をもっていた。

いや、彼に同情的なみかたをすれば、いかにも非常時といったところで、東京を遠く離れ

た山間の小部落に、六十人近い少女たちに囲

まれた女護が島の生活の中には、若い圭介でなくとも、多感にならざるを得なかった

ともいえよう。

この菊栄女子挺身隊第七班の引率者は、圭介のほか、田部花子という中年で独身でヒステリックな歴史教師。

それに、学校へ配属されてきた将校で、志賀という六十才に近い老中尉。この配属将校は、学校では女生徒たちに銃剣術を教練したり、国粋主義を吹きこむのが役目だった。

以上の三人が、かましい女生徒たちの寝食日常すべての世話をみるのだから、ラクではなかった。

三人の引率者のなかでは、生徒たちの視線も、自然圭介だけにむけられる。東京にいた時分から、圭介には人気があった。

彼女らは圭介のことをけっして「本郷先生——」とは呼ばない。「圭介先生——」ならまだよいほうで、ほとんどが「ケイスケセンセ」である。

かげにまわっては「ケイスケ」と呼び捨てにされる。「ケイスケがね、こうして、ああしてね」とやっている。彼は幾度もそれをきいて苦笑した。

つまり彼は、生徒たちに親しま



れていたのだ。半分は、なめられてもいた。しかし、悪い気もちのものではない。彼女らに好かれている証拠だと思い、まんざらでもなかった。

さて、五月中旬のある日、圭介は女生徒たちの全部をひきつれて、日課どおり朝八時に宿舍の仙念寺を出発した。田部女史と老中尉は後に残って学校本部との連絡やらなにやら事務的な用事がある。作業にはでない。

生徒たちは半袖のシャツに黒いズボンの軽装である。目的地は、寺から三キロほど離れたところにある山。山というよりは、丘だった。大きなお碗を伏せたような形のよい丘陵が見渡すかぎりつづいている。

軍からの命令で、八月末までにこの丘に埋まっている松の根っこを一つ残らず掘りださねばならない。大小とりまぜて百二十くらいある。

（無理だ、女学生のやることじゃない）

と圭介は最初思ったが、とにかくやらなければならぬ。悲壮な決意だった。しかし、馴れてくると一日に二つか三つは掘りおこせた。次第に穴ぼこが増えていく。

いつのまにか、いい気候になっている。丘から丘へ、青葉から青葉へ吹きわたる初夏の風は黄金色に光ってみえた。

すこし動く汗ばんだ。生徒たちは、なまけたくて仕方がなかった。重いシャベルやツルハシで固い土をほじくっているよりも、草の上に寝っころがって白い雲でも眺めていたほうが、たしかにいい気もちだ。

圭介の眼を盗んで、それを実行した生徒がいる。渡井久美だった。神田に大きな店舗をかまえる肉屋の娘で、もともと不良少女めいていた。だが、鋭いほど利口な頭脳をもっている。教室での成績はいい。

「おい、久美！」

と、圭介はどなった。この乱暴な口調も、ざつくばらんな親しさで、生徒たちには好感がある。

サボタージュを発見された渡井久美は、ペロリと赤い舌をだした。敏捷な動作で起きあがると、圭介に尻をむけて逃げだした。

（馬鹿にしてやがる！）

圭介はカッとなった。本気になって追いかけて、しばらく鬼ごっこをしたあと、やっと久美をつかまえた。

「ごめん、ごめん、先生、ごめん……」

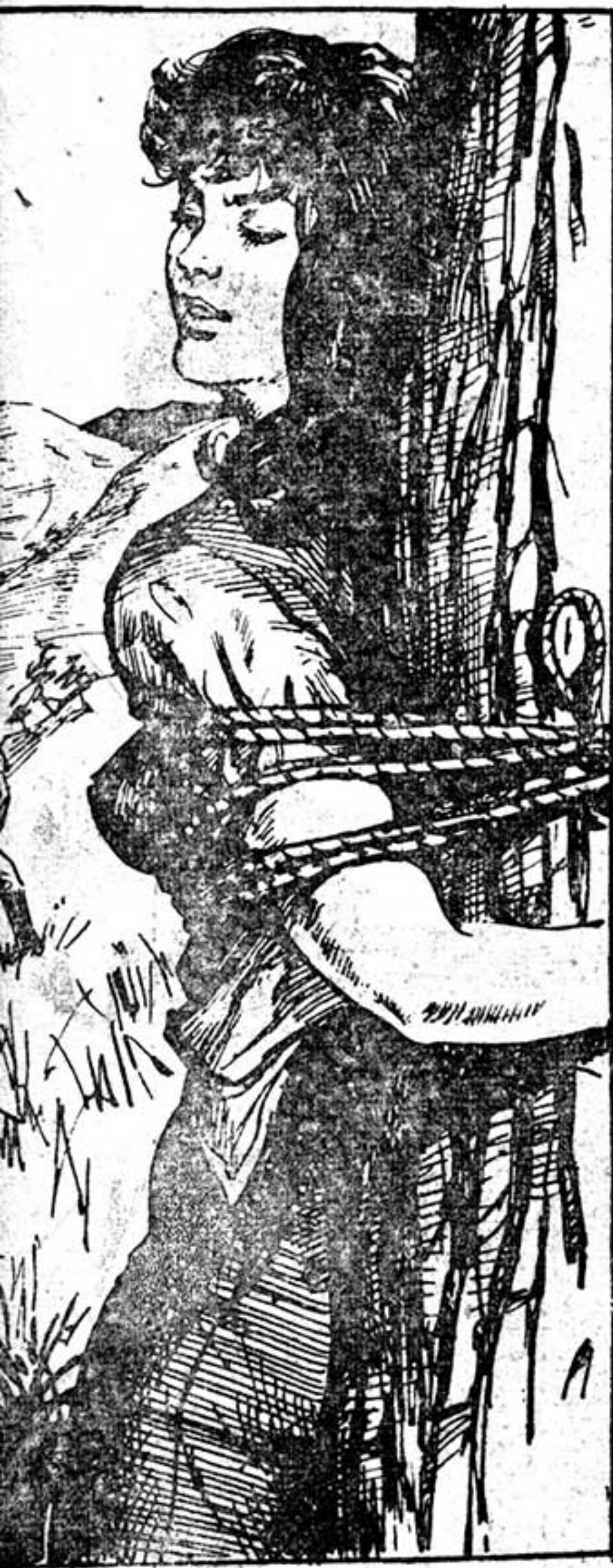
久美はキャアキャアあまったれ声をあげて笑い、もがきまわってなおも逃げようと反抗する。

圭介は、両腕をひろげ、久美を羽がいじめにした。久美の肌は熱く、汗で匂った。女の体臭を思わず吸いこんで圭介はむせた。

「こら、静かにしないか」

圭介は根っこ運搬用のもっこから縄をぬきだし、それで久美の両手をうしろで縛った。時のはずみ、というものだった。このときの圭介の心に計画的なものはない。

健康色に陽焼けした久美の二の腕から手首にかけての肉づきが、縛ったとたん、きゅうになまめかしく、圭介の眼にとびこんだ。





厳肅な声をつくった。

3

縄で縛る、という行為には、一般的にいつて暴力的な匂いがある。時と場所によっては犯罪を連想させることもある。

しかし、さんさんとふりそそぎ、きらめき溢れる初夏の太陽の下では、この仕置きも奇妙に明かるく、とほけていた。

むしろ圭介には学校の教室で、罰として女生徒を黒板の前に立たせることのほうが、陰険な虐待のように思えた。

労働をなまけた渡井久美に対しておこなった偶発的な懲罰の方法を、圭介はそれから後もつづけた。

なまけてもなまけていなくとも、生徒たちを順番に縛って樹の幹へつないだ。

「気合いをいれてやる」というやつである。

戦争中にはずいぶん流行した言葉だ。

圭介は、大沢路子をもっともひんぱんに縛った。大沢路子は教室では級長であり、この挺身隊における隊長だった。

「隊長がたるんでいるから、隊員たちがなまけるんだ」という理由で縛った。連帯責任という言葉を、たびたび利用した。

それまで圭介には、路子をとくべつに可愛

ドッキン、と圭介の心臓が鳴った。ええくそ、ついでだ、という勢いで、縄を久美の胸へ二重三重にまわして縛りあげた。縄がシャツの中へくびれこみ、すると乳房の隆起がはつきりあらわれて、いっそう女の魅力がむきでた。

「いやあ、先生ごめんなさあい！」

久美はさすがに泣き笑いと、それから羞恥をふくんだ表情になった。

圭介の手は執拗に動いて、しっかりと久美の腕をくくり終えた。

「ここへきて肥ったな、久美」

圭介は久美の肩をつかんだ。芋や雑穀混り

の飯だが、量は豊富だった。東京で飢えてい

た生徒たちは、恥も外聞もなく毎日腹いっぱい食べている。生徒たちがこの挺身隊に参加した理由は、食物がめあてだったのだ。引率の教師たちにしても同じくである。

「ゆるしてよ、ウ、センセエー」

「いや、ゆるさん」

圭介は久美をひきずっていくと、まだ伐られずに残っている松の幹へ、縄尻を巻きつけた。

「仕事をサボった懲罰だ」

あっけにとられたような顔で眺めているほかの生徒たちにむかって、圭介はできるだけ

がる傾向があるのを、ほかの生徒たちは鋭敏に感じていた。

だから、この山へ根っこ掘りにきて、きゅうに圭介が路子を目のかたきのようにいじめはじめたのを、生徒たちは不思議がった。独身教師の動向に犬のような嗅覚をもつ彼女らにしても、お気に入りだからこそ、路子をひんばんに縛るといふ、圭介の複雑微妙な心理と欲望までを、察知することはむずかしかったのだ。

大沢路子はおとなしい性格で、ヤマトナデシコの典型みたいな少女だった。級長をつとめるくらいだから頭もいいし、級友たちに人望もある。

美しい眉と眼をもち、あと二、三年たったら、どんなにすばらしく成熟するだろうか、と圭介はいつも内心ためいきをついているのだ。大柄な体格で、髪黒さと肌の白さが印象的だった。

こういう少女が、首うなだれて両手をうしろにまわすとき、圭介は胸中の興奮を隠すのにひと苦労し、喉咽のかわきすらおぼえた。

教師の命令は絶対に近い権限をもった時代だった。小学生だろうが女学生だろうが、教師の気分次第で、びしびしピンタをくらわせた軍国主義の時代だった。

路子は小さく唇を噛み、本気になって作業遅滞の責任を感じている表情で、圭介の縄に縛られた。

豊富な食糧に惹かれてではなく、皇軍の勝利を信じ、お国のためを思って挺身隊に参加しているのは、彼女だけでも知れなかった。いとおしい気もちが、つい激情になるとき、圭介の縄には力がこもり、路子は「アッ」というかすかな声をあげて肩をふるわせた。

「路子さんばかり縛るなんて、ひどいわア先生。わたしが代わってあげたいわ」

などという生徒がでてきた。あるいはその少女は圭介の瞳の色から、なにかを感じ、嫉妬したのかも知れない。

「よし、それじゃお前を縛ってやるぞ」

圭介はべつの縄をしごいて、その義侠心に富んだ生徒をうしろ手に縛りあげた。

「ナマイキなことをいうやつは、こうしてやるんだ」

といって、その生徒を松の幹に押しつけ、身動きできないほどぐるぐる巻きにくくりつけて悲鳴をあげさせた。

こんなことをしても、生徒たちに恐怖感を与えないのは、圭介の人徳とでもいうのだろうか。「ケイスケ」などと呼びすてにされるくらいだし、軽い結核を患ったために兵役を

のがれている圭介は、外見的にも柔和な感じだった。

いや、それよりも時代そのものの異常さが少女たちの正常な神経を麻痺させていたのかも知れない。

圭介のこの懲罰法に対して、もろ手をあげて賛成したのは、田部女史だった。彼女はかねてから圭介の、この非常時に生きる軍国教師らしからぬ軟弱な言動を、にがにがしく思っていたのだ。

「みなおしましたわ、本郷先生。失礼ながらあたくし、先生にそれほど意気と愛国心がおありになるとは、夢にも思いませんでしたわ。その熱情こそ、銃後に戦う学生たちの先頭に立つ日本の教師ですわ」

たまに山の根っこ掘りの現場を視察しにきた田部女史が、縛られている生徒に近眼鏡の視線を放ちながら、感激に声をふるわせていった。一片の疑心ももたず、この軍国婆さんは涙をうかべんばかりの感激ぶりなのだ。

「いやア、どうも」

圭介は頭に手をあげ、うしろめたい羞恥に顔を赤くした。

作業している生徒たちが、圭介の赤面を単なる「テレ」とみて、クスクス笑いあった。

田部女史とは逆に、心配げに眉を寄せたの

は、志賀老中尉だった。

「大丈夫ですか、先生。これでは生徒たちが反抗心をもちませんか」

と、眼をしょぼつかせながら、圭介にいった。

「いやア、なにしろ、東京への空襲も次第に激しくなってきたというらしいし、戦局はいよいよ苛烈の度を別えて、本土決戦も叫ばれているこの頃ですからね。このくらの仕置きをして気合いをいれんことには……」

どちらが配属将校だかわからないような言葉を、圭介は吐いた。自己嫌悪がチラと圭介の胸に湧いた。

「ふうむ、なるほど……」

感服したような顔で、志賀中尉はうなずいた。女学生の根っこ掘りの監督にこんな僻地へまわされてくるような老人だから、軍人精神はだいたいぶたっている。仙念寺の和尚と、朝から晩までドブクロばかり飲んでいる。この日露戦役における勇士も、田部女史にはかげで売国奴呼ばわりされていた。

4

圭介は、縛りあげた生徒の手首の縄を、さらに肩のあたりまで吊りあげておいて、十分

にむきでた臀部を、黄色く枯れた竹棒で打った。ズボンの布地をとおして、圭介の手に肉感があつた。

むろん、本気になって満身の力で打つわけ



ではない。手加減をした。圭介にしてみれば
愛撫だった。

「痛い、痛い、ひどいわア先生」

生徒たちは小鳥のようにさえずって身をく
ねらせた。

彼女らのほうでも、本気で恐怖や苦痛を訴
えているわけではない。一種のあまえに似た
嬌声が混っている。一人の青年教師と、多数
の女生徒たちの間に、いつか遊戯的な雰囲気
がたまたまよっていた。無意識のなかに、特殊な
感覚が交流していた。微妙ながらも、或る快
感があった。

隔離された環境の中の、団体生活における
強度な同化作用とでもいうのだろうか。暗黙
のうちに、ずるがしこい知恵で彼と彼女らは
ひそかに楽しみあっているかのようだった。
梅雨期をすぎ、七月に入り、日増しに輝や
きと熱度を加えていく太陽の下で、泥まみれ
の作業に汗をしたたらせながら、その合間に
遊戯的な懲罰はつづけられた。

丘の上にいるとき、かれらはふと戦争を忘
れた。戦争とはいっても、現実には癡品に近
いラシオが寺に一台あるきりで、ニュースも
よく聞こえず、新聞もめったに配達されず、
具体的な戦況は、さっぱりわからないのだっ
た。

この丘の上は、嘘のように平和だった。

「暑くなったなあ。おい、みんな、暑かった
らズボンをぬいで、パンツ一枚になれよ。か
まやしない。誰も見ているやつはいないし、
そのほうが涼しいぞ」

圭介は提案した。そして自分から巻脚絆を
とり、ズボンをぬいだ。痩せてはいるが、脛
の毛はまさしく男のものだ。

「あら、いやだわア、センセ」

嬌声をあげながらも、彼女たちは丘のかげ
へまわってズボンをぬいだ。たしかにそのほ
うが快適だし、それにズボンの布地をいたわ
ることができる。

圭介の計画は成功した。彼は彼女らの、ピ
チピチと弾む腿を見たかったのだ。望みはか
なえられた。むきだされた新鮮な素肌に、彼
はたつぷりと囲まれた。露出していた部分が
まっ黒に陽熱けしているせいで、隠されてい
た肌の白さは眼に泌みた。

成熟一步前の清純な魅惑。彼にとってこの
丘は、ますます女護ガ島めいてきた。

田部女史は、生徒たちの食糧や日用品集め
に村役場や県庁や部落の有力者の間を駆けず
りまわっていて、めったに丘までのぼってこ
ない。老中尉は和尚と将棋かドロク飲みで
ある。

「おい、みんな、がんばるんだぞ」

圭介は片腕をふりまわして、景気よくどな
った。

しかし、このころになると作業の能率はか
なり低下していた。掘りだした松の根株は、
縄でからげ、みんなでヨイショ、ヨイショと
引きずって丘のふもとの一カ所へ集めておく
のだが、六月のなかば頃から、その根ツこが
積みっぱなしになっている。工場からひき取
りにこないのだ。根株から油をしぼりだすな
んて、手間のかかることをやっていたのは間に
合わない戦況になっていたのだ。

いつまでも雨ざらしになっている根ツこの
山をみては、生徒たちの勤労意欲も衰えるは
ずだった。いくら圭介が威勢よく「がんばる
んだぞ」といっても、生徒たちのからだは、
以前ほど発刺さに欠けてきていた。

そこもまた、圭介のつけめだった。

「お前たち、またなまけ癖がでたな。いまサ
ボることは愛国精神に反する利敵行為だ。敵
のスパイと同じだぞ。ようし、たるんでいる
やつは、片っぱしから気合いをいれてやる」
などと勝手なことをいっては、圭介は縄を
つかんだ。

器量がよくて、肉体の発達している生徒を
十人ほど選びだすと、言葉どおり片っぱし



から縛りあげていくのだ。十人の中には、大沢路子と渡井久美をかならず入れた。

「ほかの者は作業を一時中止！」

圭介は号令する。その許可を与えるまでもなく、生徒たちは土掘り道具を投げだしていた。涼しい木かげを選んで腰をおろし、ニヤニヤと微笑をただよわせながら、圭介と犠牲者たちを見物するのが、習慣になっていた。

十人の娘が、自分から両手を腰のうしろにまわし、手首を重ねて縄を待つ光景は、壮観だった。馴れるということはおそろしい。異常な光景にはちがいなかったが、生徒たちはこの異常に馴れていた。どこかユーモラス

な空気さえ生まれていた。

「あまりきつく縛っちゃいやよ、先生」

「痛い、痛いわア、首なんかにまわしちやいや！」

「お手やわらかにね、先生」

鼻を鳴らしたり、あまえたり、腰をゆすったりしながら、生徒たちはつぎつぎに縛られていく。その可憐さ、いじらしさ、子ウサギのような愛らしさ。

圭介は縛りながら手がふるえ、膝がガクガクするほど興奮する。表情にだしてはいけなイと思うから、よけいに緊張するが、興奮が絶頂に近くなってくると「ワーッ！」とさけんで、地面に両膝をつきたくなるほどだ。

理性が、かろうじて姿勢をささえている。

（お、お、おれは、この娘たちを縛って、どうしようというわけではない。ただ、こうして縛っているだけなんだ。この戦火に遠い環境にいて、戦争を忘れがちな生徒たちに国家危急の意識をよみがえらせるためにやっているんだ……）

自分で自分の心に弁解している。弁解であり、ごまかしである。知りながら、そんなことを口のなかでつぶやかずにはいられない、圭介の気の弱さなのだ。悪徳教師にはなりきれないのだった。



発売中!!

ボールに包まれた女の秘密……

その一枚一枚を医学のメスが大胆に撥いでゆく。刺激のポイント・触れなば落ちん女の心理とは……

B 6判・224頁
¥ 270・〒 40

実用セツ
クス講座 ③

女体のメカニズム

押鐘 篤著

東京・中野・江古田 1-2302

株式会社 あまとりあ社
振替・東京10756 (久保書店宛)

背中にくくり合わせた白い手首は、縄目と

のむごい対照をみせて、息をのむほどの残酷美をみせる。圭介は食べてしまいたい衝動にかられるのだ。

十人ぜんぶをうしろ手に縛り終えたとき、

圭介は耐えきれずに荒い呼吸をついていた。

羞恥と軽度の苦痛に肉体を反応させて、さまたまのポーズにくねる縄つきの少女たちを、一列横隊に並べる。むごたらしくも美しい女囚の群れ。どんな命令にも服従する、いとしい捕虜たち。

圭介の血は恍惚のうめきをあげて全身を駆けめぐる。無垢の肌を噛んだ縄、腕をしめつけ、手首を吊った縄。清純な乳房は、縄目のあいだで恥しげにあえぐ。

「ようし、つぎは笞打ち一人三回。みんな俯

伏せになれ！」

圭介はうわずった声で命令する。

うしろ手の女囚たちは、不自由な姿態で膝を曲げ、傾斜している草地の上に、ざわざわと腹這いになる。パンツに包まれた十個の臀部が、こんもりと並んで空にむく。

「ククク……」と彼女たちの咽喉が笑う。

圭介は愛用の黄色い竹の棒を握りしめる。使い馴れた笞だ。その笞をふりあげ、軽く、可憐な捕虜たちのお尻を叩きはじめるのだ。キャアキャアという嬌声が、見物の生徒たちからもあがる。

「痛いわ、痛いわ、痛いわア！」

どんなに騒いでも、ほかの人間の眼や耳に触れる心配はないのだった。

悲鳴、笑声、嬌声、戦争に圧しひしがれた

青春前期のうぶぶんを、いま彼女たちは吐きだしているともいえた。

ころげまわって悲鳴をあげ、逃げながらも彼女たちは、圭介の笞に愛撫めいたものを感じているのだ。

笞は一人のお尻に三度ずつ、びしり、びしり、びしりと鳴った。若い弾力があつた。ぶりぶりゆれた。獣のように彼女たちはころがった。笞が追った。陶酔に疲れ、やがて圭介も笞を捨てて草の上に身を投げだした。菊米女子挺身隊の半日は、こうして嗜虐の祭典に暮れてしまうのだった。

5

八月十五日。その日の正午に、天皇の放送があつたことを、圭介たちは知らなかった。

見たもの聞いたもの

仙念寺のラジオは、完全にこわれてしまつて用をなさなかった。

村役場へ石嶺だのチリ紙だの手拭などの配

給を受取りに行っていた田部女史が、夕方、まっさおな顔で帰ってきて、日本の敗戦を告げたのだ。

暴力五人娘

この新東宝映画は、題名からも察せられるように、むしろM男性むきの映画である。とにかく、はじめから終わりまで、たくましい美女たちのおヒップがスクリーンいっぱいに躍動する。男が、いつも彼女たち(万里昌代、大空真弓、三条魔子)に蹴とばされ、ねじ伏せられ、なぐりとばされる。

そして最後に、特筆に価すべき美女危難のシーンが展開する。

五人娘のうち二人が、悪漢どもの巣窟に捕われる。荒縄で縛られる数カットの後、一人の娘が奇妙な機械にくくりつけられる。その機械に直立したまま、うしろ手に縛られるのだが、この場面がけっさく。

うしろ手のために両腕は肩から背後にまわった形で、正面からは見えない。その代わりに、人造の腕が彼女の肩から前にさしのべられていて、その右手にはお銚子、左手にはなにやらサカナのようなものをつかんでいる。悪漢のボスがいて盃を持っている。そして、
「いい娘だ、いい娘だ、さあ、お酌

しろ」

と、盃をさしだす。すると、娘を縛りつけた機械が、足もとから前方に倒れ、人造の右手が動いてボスに酒をつぐという仕掛け。つまり、どうしても意に従わない女を、うわべだけでも意に従わせようというボスの苦肉の考案なのである。

これはまさに、裏窓叢書第一集「狂異地獄肌」の中にでてくる「責め台」の仕掛けを現代的にしたもの。

ボスは娘から(実は人造の手から)いつでももらう酒を、悦に入って飲みほす。

「うまい、うまい、もう一ぱいください」

なんていいながら、またスイッチを押す。すると、機械はまた足もとから前へ、ぐぐぐと傾斜する。手が動いてボスの盃へ酒をつぐ。サカナを持った左手も動いて、ボスの口へなにかを運ぶ。娘は苦痛と恐怖の表情。

映画全体がドタバタ喜劇仕立てだから、凄みなどというものはないが、機械的な責め道具がスクリーンに登場したのは珍らしいことである。

(重八)

語り終えるやいなや、田部女史は手ばなしのまま「ワァーン！」と泣きだした。ドロブクに酔って眠っていた志賀老中尉が、その泣き声におどろいて眼をさました。とみるや女史は、中尉の胸ぐらをつかんで、ぴしゃぴしゃとなぐりはじめた。

田部先生は気が狂ったんじゃないか、と圭介や生徒たちはふるえあがった。

それから半月ほどたつうちに、生徒たちの家や肉親の安否もだいたい判明した。

学校の建物も教材も、さいわい戦火をまぬかれていて無事だった。

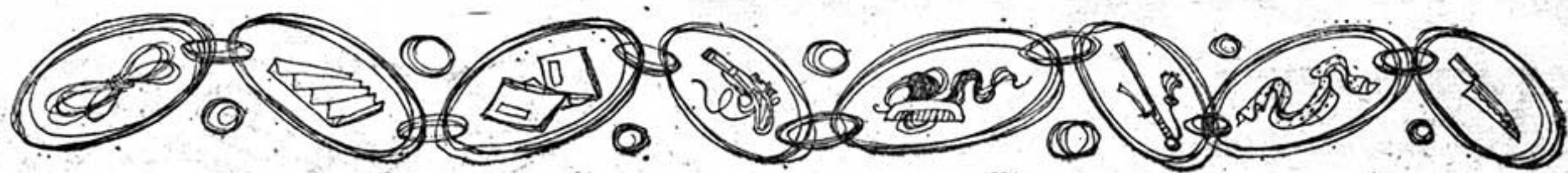
菊栄女子挺身隊は、四ヵ月間をすごした仙念寺に別れを告げて、東京に帰ることになった。

出発の日の朝、身の廻り品を詰めたリュックサックを背負って寺の玄関先に立った圭介に、これよりリュックを背負った渡井久美が、背後から近寄ってきて、そっとささやいた。

「先生。先生もあたしたちも、この土地ではずいぶん楽しんじゃったわね」

圭介は、ギクンとした思いで、久美にふりかえった。

久美の瞳は、何もかも知っているかのように、いたずらっぽく笑っていた。



洋画にあらわれ

た木モ

だいぶ前に上映されたフランス映画「現金に手をだすな」のなかで、ジャン・ギャバン扮する老ギヤングが、親友の老ギヤングと二人で隠れ家の一室に向かいあい、大きなビスケットをほりほり音させてたべながら、

「おたがいにもう年だ。こんなヤバイ商売から、そろそろ足を洗わなけりやな」

と、述懐するシーンがある。この二人の老ギヤングの仲が、ただの仲ではなく、じつは同性愛らしいというので、当時識者の間で評判になった。

フランス映画には、ときどきゲイだとか、ホモくさい人物が登場してくる。

「ヨーロッパの夜」ではクラブ「カルーセル」で歌うゲイ・タレントのコシネル嬢が奇妙な色っぽさでほかのストリップや奇術を喰っている。このコシネル君は少年時代

から、いつも女の子とまちがえられ、軍隊も九日間で帰されたという。いわば国家から公認されたゲイ・ボーイである。昨年十一月には民事法廷に「性転換認知」の訴訟を起こした。弁護士の言葉によると「彼女は最近恋人ができた。彼と結婚しようとしたが、男同志の結婚は許可されない。そこで本格的に女性と認めてもらうために」訴えてたのだという。

ブリジッド・バルドー主演の「気分をだしてもう一度」には、ゲイ連中がお色気たっぷりの活躍をする。ゲイ・バアをこれだけいてねいに描いた映画は珍らしい。

アメリカではこの関係が法律でやかましく、映画でも「男色を描いたものはいっさい駄目」という映倫の規則がある。

しかし、ちかごろ封切られたスペクタクル奴隷解放映画「スパルタカス」では、ローレンス・オリビエが、トニー・カーチスを可愛がる。ところがトニーは、カーク・ダグラスのほうへいつてしまう

ので、ひどく嫉妬するシーンがある。

「去年の夏突然に」での男色関係は、かなりはつきりしたものだったし、デボラ・カーの「お茶と同情」にも、この匂いがあつた。

さらに最近のイタリア映画、アラン・ドロンの「若者のすべて」では、兄弟でありながら同性愛の関係を描いたものだ、という見方が、一部の通(つう)の間にある。なるほど、そういう先入感でみると、この熱っぽい兄弟愛には、かなり異常なムードが感じられないものでもない。(藤)

女囚と共に三十分

日本テレビ(10チャンネル)木曜の夜十時から三十分は「ジュリー・アリスンと共に」というアメリカ製テレビ映画であり、アリスンはそのホステス役。

彼女がドラマに出演しない週はハリウッドの有名スタアが出る。一月十二日に放送された「狂った刃」はアン・ブライス主演の無

裏窓タウン

実の罪に泣く美女の物語。

一度結婚に破れたことのあるマーサ（アン・ブライス）はタイプピストとして働いている美女だが、全く身に覚えのない殺人罪で投獄される。冷酷に手錠をかけるキリアン刑事は、戦争中、従軍している時に妻に裏切られた男であり、特に女の被疑者に仮借しない性格。

女囚となったマーサは、肉親の姉からも犯人扱いにされて、鉄格子の内で悶え泣く。

絶望に打ちひしがれた彼女を慰めてくれるのは同房の女スリだけ——という調子の三十分であり、スリルやサスペンスや推理とは無関係の、とにかく美女が投獄されてから或る日の昼突然に釈放される迄を描くドラマだ。

イタリア映画の「街の中の地獄」はアンナ・マニヤーニとジュリエッタ・マシーナを女囚にした獄内映画だが、いくら演技派でも、この手の写真は美女でないといけません。

その点、アン・ブライスは申し分がなく合格でありました。（鈴）

海賊島の蟹責め

英国製のテレビ映画「バイキング」は、カーク・ダグラスの映画「ヴァイキング」で日本にも広く紹介されたように、海賊の世界にドラマの材を求めるものである。

一月八日の夜七時半より放送

（日本テレビ）された「魔女ザラ」は女奴隷二人が一人の海賊を愛して争う三角関係物語。

「船が火事になったのはザラの仕業であり、あの女の正体は魔女だ」と述べるライバルの女の証言により、ザラという女は「蟹の池」で処刑されることになる。

池の中にある柱へ後手に縛り付けられたザラを蟹の群れが襲う。ザラはグッタリと首を垂れて半死半生——。

そこへ「偽証」と気付いた男が救出にくる。

刀で縄を切ると、まず右手が自由になり、左手は柱の後ろへ回さ

れた儘で、すぐには解けない——というあたり、意識しての演出なのか、或いは偶然にそうなったものか、ともかく本当に縛られているような感じが出ていた。

編中、女二人が豊かな乳房も露わに格闘する場面もあったりして——テレビ屋さんや映画屋さんが「海賊もの」に目をつけるキモチがよくわかる仕組みになっている。

海賊ものにおける残酷描写は、一種のショウである。残酷描写の間に荒々しい恋などを混ぜましてよく掻き回して約三十分。コマーシャルを副えてお客にすすめますと、喜ばれます、ハイ。（K夫）

黒いヒモのリンチ

ラジオ東京では毎週月曜日の夜8時から30分間「目撃者の記録」という番組をやっているが、1月23日に放送した「黒いヒモ——東京の白線地帯」というルポは、異常な迫力があつた。

浅草山谷周辺の売春地帯を、十日間にわたって取材探訪したもの

でかれらの組織、女とヒモの関係を録音したという。

山谷の下や街には都立の玉姫相談所がある。その所員が、かれらのリンチの実体をこう語る。

「この間、ある若い夫婦に助けを求められたんです。その細君というのは、もと不良少女で、ある暴力団のヒモがついていた。そこを逃げだして結婚したのだが、かぎつけられて捕まり、リンチを受けたんです。麻酔をかけられて足の裏の肉をそがれたり、局部に焼け火箸を突っこまれたり……。警密に告げたら一家みな殺しだと脅迫されて、その若い夫は私に「ピストルを買う金を貸してくれ」というんです……」

暴力団のリンチなんていうのは、ギャング映画やスリラー小説の中の色どりで、実際にはあまり存在しないだろうと思っていたのだが、この録音ルポにはおどろかされた。

つくり話や観念の世界でのリンチ・シーンなら、どんな凄いこと

をやっても、それほどリアルな恐怖感はない。現実との間にあるていど美化された距離感があるからだ。しかし自分の住んでいる町から、さほど遠くもない土地で、現実にそんなむごたらしいリンチが行なわれているとなると、やはり恐怖と、いきどおりを感じずにはいられない。

いくらS小説マニアでも、こういう現実ズバリの非人道的残酷物語は、はつきりと否定する。(郁)

「救出後」のセンス

「暗黒街の弾痕」というと、古い映画ファンなら、住年のアメリカ映画、フリッツ・ラング監督のギャング活劇を思い出すところだが——題名に著作権は無い、というのが常識だそうで、今年の東宝のお正月映画で同名のアクションものがあつた。

とにかく面白い映画を作ろう——という根性を持つ東宝の新鋭監督、岡本喜八が上原謙、ジュニヤアの加山雄三と「世の中には、こ

ういう顔もございます」という佐藤允を使つての大暴れ映画だ。

従来、清純派で通してきた水野久美がキャバレーの女給でトップ屋の情婦という役柄を演じ、初の縛難場面を見せている。

加山と並んで割合にリアルな太縄の後手縛り。縄尻はスチームのパイプか何かにつないであり、両足首も縛られている。

ギャング側はガストロップのゴム管を外ずして立ち去る。このガスが大変に威勢のいいガスであり、ゴム管は蛇のように大きく左右に首を振ってスリルを出す。

加山は傍の電話を口で外すそうと努力したりするが成功せず、次第に意識が薄れてくる。

水野久美は早くもグッタリとなり加山の膝に倒れ伏してしまっている。

ドタン場でトップ屋の佐藤が救出に現われるのは定石通り。

問題はそれに続く場面だ。ギャングと対抗するために車で急行する途中、車内で水野が化粧を直し

裏窓タウン

ている場面がある。ここにセンスの閃めきがあると思う。

というのは、堅気の令嬢か何かだったら、恐怖が醒め切らない、とか、動颯の余り放心状態——などという演技が考えられる訳だがこの場合は女の役柄から、まず乱れた化粧を直すことにしたらしいのである。

縛難場面に限る映画は次第に多くなってきたが、救出後の場面にセンスをみせる例は少ない。

だいぶ前の大映の「銭形平次」で、平次の女房お静を演じた高杉早苗が、平次の留守中に犯人一味に押し入られて縛られる映画があった。亭主の長谷川平次に救われた後、片手に湯呑みを持ちながら、片手で二の腕の辺りを揉みほぐしている演技が記憶に残っているが、この場合は気持を落着けるためにお茶を呑んだ訳であり、時代劇としての「救出後」にセンスをみせていた。

なお——松竹のお正月映画「あんみつ姫の武者修行」には鰐淵晴

子の初縛難がある。

男装で後手に柱へつながれたあんみつ姫が喜劇的演技で身悶えする場面である。(三郎)

ラバレーターと

M 感覚

船橋のヘルスセンターに、こんど「ラバレーター」(動く道路)

なるものが新設された。これはエスカレーターの階段を水平にのぼしたような機械で、同センターのコマ館と南国館をつなぐ長さ五十メートル、幅一・五メートルのいわば「動くゴムのじゅうたん」。

それに乗ると、足を動かさなくともつぎの建物に行ける。ところが、ただラクなだけではなくて、そのゴムのじゅうたんの震動は全身マッサージと同じ働きがあり、とくに女性の足の形がよくなる効果がある——という宣伝文句。

乗ってみると、なるほど足の裏にゴムをとおしてグリグリと丸い棒みたいなのがあたる。連続的に波のように回転し、ちょっと形

容しがたい独特の感触である。

さて、一群の女の子が、それにキヤアキヤア騒ぎながら乗りはじめた。

「キモチわるいわア。なんだか男の人の背骨の上に乗って運ばれていくみたい」

「そんな感じね。でもこのグリグリが全身美容になるんだって」

館内は完全暖房の温泉浴場だから、その女性たちはみんな素足。

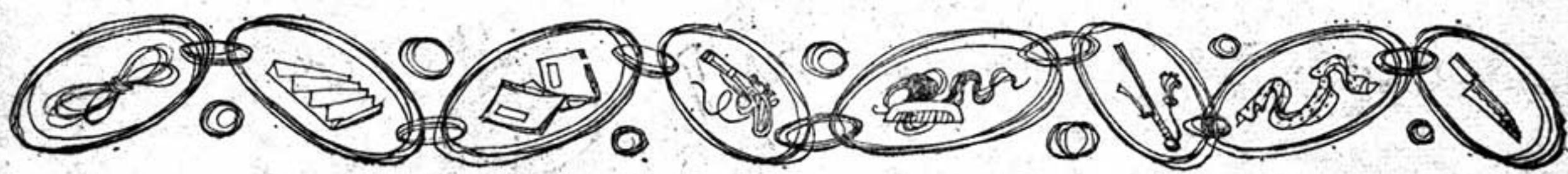
男の人の背骨に乗って運ばれていく——と確かに、そのお嬢さん方の一人は言ったのである。

なんという男性M派を刺激する言葉!

百人の男が這いつくばって一列に並び、その背中の上を自分たち女性が渡っていく感じだというのだ。

なんという、ゆたかなイメージであろうか。彼女らに前後をはさまれて、一人の男の心は妖しく疼いていた……。

以上、2月10日午後三時三十分、船橋ヘルスセンターにおける点描



である。さらにまたこの日、大ス
テージに上演されている特別ショ
ウは「浅香光代一座の女剣劇」—
。浅香光代ふんする女ザムライ
が、群がる男どもをバツバツと
となぎ倒していた……。 (蘭)

おならとマゾ心理

について

「ええー、ビロウなお噂でおそれ
います。」

しかしこの噂には人生のキビに
ふれた真実性がございますので—
。

有馬稲子は、なぜ錦之助にイカ
レたか。

それは、錦之助のおならに、グ
ツとまいったからだそうである。

「浪花の恋の物語」撮影中から、
錦之助は稲子の前で、平気でプー
プーやらかしたんだそうだ。

日本の女優のなかでは知性派を
もって知られる有馬稲子の前で、
プープーやるのは、普通の男では
ちよっと真似のできないことだ。

眼の前のインテリぶった稲子の

存在を、ねじ伏せるだけの「サデ
イシック」な下根性がなければ
できない。

「お前みたいなお女なんか、屁とも
思わないんだ、プーッ！」という
わけである。

逆に稲子のほうでは、妙に屈伏
させられたような心理状態にな
る。

まれな美貌と人気スターとして
の地位から、彼女に近づく男たち
は、それまでほとんどが彼女をあ
がめ、彼女の美をほめ讃える男ば
かりだったろう。それが、一転し
たのだ。

錦之助からその音をひっかけら
れるたびに彼女は、踏女は、踏み
にじられたような、マゾヒスチッ
クな気分におちいった。その屈伏
心理が、いつか憧憬となって……
ジャーナリズムを一時てんでこま
いさせた、あの事件に発展したの
である。

この真相をきいたやつが、思わ
ずうなりました。

「ははア、婚約発表前には二人と

も知らぬぞんせぬでシラを切りと
おしたが、やっぱり、臭い仲だっ
たか」

へい、お粗末。(一狼)

監獄という名称

松尾和子の歌で「再会」という
のがある。最初、これを聞いた時
に「小さな青空を監獄の窓から眺
めている——」というような歌詞
が出てくるので「はてな、文囚の
哀しみを歌ったサンコク調の流行
歌なのかな？」と思ったが、よく
聞いてみると実はさにあらず、み
んなは悪い人だというが、わたし
にやとてもいい人だった……」と
いう一節もあったりして、御亭主、
もしくは情人が入獄しているの
で、それが出獄し再会できる日を
待ち続ける女の歌なのである。

ところで——流行歌の中に「監
獄」という言葉が出てきたのは大
そう珍らしいことだと思う。もっ
とも「監獄ロック」だの「練鑑ブ
ルース」だのがあったことはあつ
たが、女性歌手の歌の中としては



希有のことである。

一体、監獄などという言葉がまだ残っているのか、どうか。あれは現代では「刑務所」というのではなからうか——というような疑問が出てよいところである。

そこで、調べてみると——大正十一年十月十四日、勅令第四百三十四号「監獄官制」第十三条というのに「監獄ノ名称、及び位置ハ別表ニ依ル」とあって、当時、日本全国の四十三の監獄の名前が、たとえば「小菅刑務所」とか「豊多摩刑務所」などという具合に盛大に並べてあり、従来の名称だった「何々監獄」を「何とか刑務所」に改めているのである。

これはなぜかという、監獄という言葉が非常にイヤな感じの陰惨な印象を与えるから。名称だけを「刑務所」と、いかにもお役所らしい名前に変えるぞよ——という布告である。

もとより、法律にも「監獄法」は依然として残っており、「監獄」という官庁がなくなった訳ではな

く、早い話が、たとえば中野刑務所は、名称を中野刑務所という「監獄」なのである。

「あの高い塀のある建物は何ですか？」

「あれは監獄ですよ」

「何という監獄ですか？」

「中野刑務所という監獄でして、この間、脱獄事件のあった監獄です」

というようなことに相成る訳である。

だから、松尾和子の「再会」は、多少、大正十一年以前の感覚ではあるけれど、決して誤まりではない歌詞を持つ歌——となるのである。おわかりですか？（桐）

さすがは女探偵

日本橋に佐藤探偵局をひらく佐藤みどりさん(40)の自宅(世田谷区北沢2ノ18)へ一月六日夜、二人組の強盗が入ったことは、新聞や週刊誌でかなり大きくとり扱われていたが、縛られる前後の様を改めて整理してみると、つぎ

のようになる。

二人組は主犯の前田和夫(32)と共犯の小泉金作(35)である。前田が、まず佐藤家の女中松本照子さん(24)に指をさして、

「その女から縛りあげろ」

と、小泉に命令した。小泉は登山用のザイルやネクタイで、松本さんの手足を前で縛りサルグツワをかました。

同じように、佐藤さんも縛った。

佐藤さんは「私は病気だから、あまりきつく縛らないでくれ」と小泉にたのんだ。

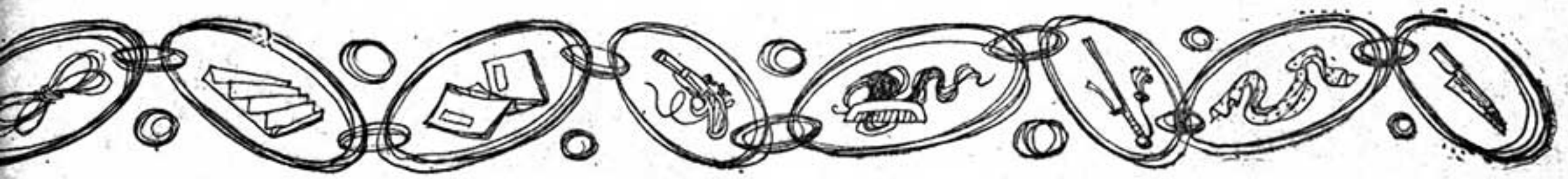
「なんの病気だ」と小泉。

「結核です」

「そうか。からだが弱ってるらしいな。同情するよ」

そこで佐藤さんは、その同情につけこんで手首のあいだをすこしあけて縛らせた。サルグツワも口のなか奥ふかく入らないうちに、強く歯でかんで防いだ。

このあたり、さすがは女探偵である。恐怖にふるえながらも、緊縛されないように、ひそかな抵抗



をこころみたのは、見事といえよう。

佐藤さんの子供肇ちゃん(3)も縛りあげた後、主犯の前田が、佐藤さんに、

「おい、お前のその指環をとれ」と命じた。小泉が佐藤さんの左手にある指環をぬきとった。右手の指にはめている方が高価な品なのだが、縛ってある縄にかくれて見えない。小泉はぬきとった指環を、うっかり取り落とす。指環はころがって、縛られている松本照子さんのお尻の下へもぐった。松本さんはお尻をずらしてその指環を隠した。

「おや、どこへいった?」

二人組は探がしたがわからないう。あきらめて、三人の縄尻を茶ダンスへ巻きつけた。それから、隣室を荒らし、ニセの金グサリ(百八十円)をだしてきて「これ、ホンモノか」ときいた。

「ホンモノです」と佐藤さん。つぎに小泉は本物の指環をだし

「こいつはどうだ」

「ニセモノです」と佐藤さん。

「それじゃ駄目だ」といって小泉はその本物を投げ捨てた……。

結局、佐藤さんの職業的な観察眼で、二人組の人相風体は写真でもとったように詳しく当局へ通報され、十分後には小泉が捕まり、翌日には前田も御用になった。

強盗に入られたら、あわてずおそれず、こういうふうに着る冷静に——という好見本である。(豊)

「金閣寺」の雪姫

東京歌舞伎座の一月公演、「寿新春太歌舞伎」と称するものは吉右衛門劇団と猿之助一座の出演であり、昼の部に「金閣寺」が出る。

宝暦七年初演の中村阿契、浅田一鳥、等の作になる浄瑠璃「祇園祭礼信仰記」の一節であり、桜の下の「雪姫の責場」で知られる芝居だ。

絵師、狩野将監の娘、雪姫と聲の狩野直信は、天下横領の野望を持って金閣寺に豪華な生活を送っ

ている松永大膳秀久に捕えられ、

天井に墨絵の雲竜を描けと命ぜられる。その絵の手本にと、大膳が刀をかざすと竜が現われる。雪姫は、この名刀を持つ大膳こそは父の仇きと知って討とうとするが、かえって庭の桜の木に縛られてしまふ。雪姫は落花を集め、足で鼠を描くと、鼠が現われて縄を食い切ってくれる。そこへ、大膳討伐の木下藤吉が到着し、悪人一味は亡ぶ——というような筋である。

大膳は要するに松永弾正であり、藤吉は豊臣秀吉だが——実は、そんなことはどうでもよいのである。歌舞伎は歴史劇じゃない。

モンダイは中村歌右衛門演ずるところの艶麗な雪姫の責場だ。太縄で後手に縛られ、縄尻を木の幹につながれているのだが、その長さが推定十五、六メートルほどもある。

立ったり坐ったり、座敷に上ったり庭へ降りたりして、かなり長い間、悩乱を続けるのだが、「これが、ごひいきの映画女優だった

裏窓タウン

ら、もっとイカスだろうになア」
と思うのは、一応、無理からぬ願
いである。歌右衛門丈は折角だが
映画を見馴れた観客の眼には割合
とグロである。

この責め場、時間が長いので縄
を手で持っている訳には行かな
い。演技の途中でほどけたりして
はマズイから、ある程度は実際に
縛っておかねばならのである。
とにかく——約二百年前の作者達
に敬意を表します。(高)

米テレビ映画二題

東京テレビが毎週日曜日の夜八
時から放送している「サンセット
・ストリップ・77」は二人のハン
サム私立探偵が活躍するハードボ
イルド調の米テレビ映画。

一時間もの(実際は四十六、七
分だが)だから見ごたえがある。
テーマ曲もおもしろく流行のきざ
しをみせている。

さて、1月15日放送の「おぼあ
ちゃん武勇伝」には、ゾクツとく
る一場面があった。

女を混えたギャング団が深夜、
銀行を襲う。一味が銀行内に忍び
こんでいるとき、その若い女は外
の車の運転台で見張りをしている。
ヴァンプ型美人である。

そこへ、一味を追跡してきた私
立探偵スチュアート・ペイリー(エ
フレム・シンバリスト・ジュニア)
が現われる。

見張り役の女ギャングはたいへ
んな色情狂で、探偵の顔をみると、
大事な役目を忘れ、うっとりして
ウイंकする。

探偵はこの車の中へ入りこ
んで女を抱く。キスする。女は陶
然として眼をつぶる。すると探偵
はキスしながら女の両手を背中に
まわし、手首を重ねて縄で縄りつ
けてしまう。縛られていく手首の
クローズ・アップ。

女は恍惚としているから気がつ
かない。探偵が唇をはなすと、や
っと気がつく。

「あらッどうしてあたしを縛るの
！」

と声をあげる。探偵は、

「ごめんよ。すこしがマンしてく
れよ」

とかなんとかいいながら、こん
どは女の口に猿ぐつわを噛ませ
る。

「ウウウッ」と無言の声でもがく
女。探偵は運転台にその女を横倒
しにして、こんどはギャング退治
にでかける。苦悶する女の表情。

縄で縛られていくうしろ手首の
画面いっぱいアップが、ちょっ
とおもしろかった。

つぎに、毎週水曜日夜八時から
やるフジテレビの「ガンスモーク」
で「野牛のような男」——。

これは保安官のマットが主人公
で活躍する西部劇だが、この回の
設定にはいささかおどろいた。徹
底的なサディストがでてくる。女
尊国のアメリカ映画には珍らし
く、女が玩具のようにいじめられ
る。

二台の幌馬車を持った男二人、
若い女一人が組んで旅をしている
流れ者。女は男の一人と夫婦らし
いのだが、はつきりしない。共有



されている匂いもある。しかし、この女はほかの男との交際をいっさい禁じられている。よその男と口をきいただけで、ひどくなくられる。

男二人に幽閉され、虐使されながら旅をつづけているのだ。そして、ちょっとしたことで、すぐなぐられる。動物的な飼育を受けている感じで、いつもおびえている。それでいて、逃げようとしてない。世の中の男は、みんな同じようなサディストだと思っているらしい。じつに異常な設定である。

保客官のマットと、助手のチェスターが、その女を救おうとするが、男二人のために逆に捕われ、馬車の車輪にうしろ手に縛りつけられてしまう。しきりにもがくが、「生皮の紐だから解けやしない。駄目だ。やつらはキチガイだ」と、絶望的になる。生皮の紐とはどんなものか？
女が助けようとしてマットのそばに寄ってくるが、発見されてまたぶんなぐられる。

「ぶたないで、ぶたないで！」と尻ごみしておびえるシーンが、ひどく陰惨である。うわごちにまで「ぶたないで、ぶたないで！」と、うめいている。

やがて、インデアンが襲撃してくる気配を感じて、サディストの男二人は、女と保安官たちを放りだしたまま、馬に乗って逃げてしまう。

結局、悪玉は倒されるのだが、西部劇も次第にネタがなくなってくると思えて、異様な人物を登場させたものである。テレビ映画だから、直接的な残酷描写は避けているが、妙に陰惨な迫力をもったドラマで、見ていてビククリした。

(松平)

刑死者十数万

小塚っ原の刑場——といえば、江戸時代の公開場として有名であり、数多くの死罪人が、斬首、磔刑、火刑、などで命を落とした所である。最初は「骨ヶ原」といったのを、後に小塚っ原というよう

になったらしい。

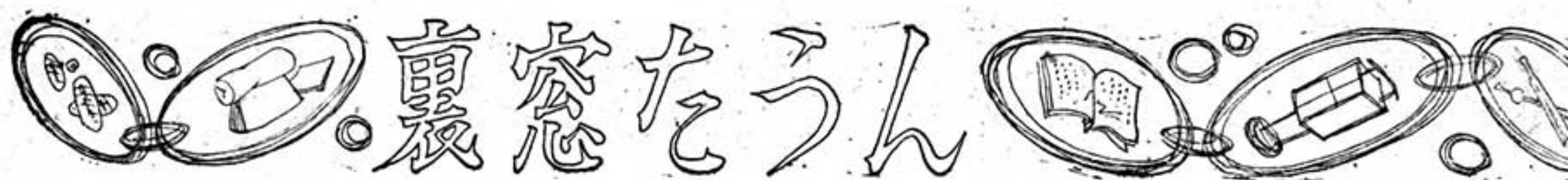
この刑場は、伝馬町牢屋敷の中で斬られた罪人の死骸を捨てる場所でもあり、とにかく気味の悪い所だった。

現代では、国電常盤線の南千住駅の手前、線路のすぐ脇に大きな地蔵尊と墓場が見えるところが、昔の刑場の跡である。

そもそも、この刑場に骨を埋めた死罪人の数はどのくらいであったか——明治二十一年四月二十八日付の東京日日新聞の記事によると「少くとも十数万以上に達せり」と伝えられている。

以下は、その年の四月二十六日に小塚っ原刑場跡で供養祭が行なわれたことを報道した記事の一部である——。

本地は徳川氏開府の始めは重罪人の死刑場にして、これを浅草磔場と称せり。而して明暦三年正月十八十九両日夜の大火に焼死せし十万余人の焦屍、本所牛島に埋め回向院を創立せし後、死刑者は皆な同寺に送り、その境内に



裏窓タウン

埋葬せり。蓋し当時は境内広く近傍皆な葭洲なりしも、日を追て人家繁殖し、随て境内漸く縮少し、且つ死刑者もまた漸く増加するを以て他日埋葬に差支ゆべきを慮り当時の寺社奉行加賀爪某幕府に稟申し、遂に寛文七年より死刑者を本地に送り、埋葬するに至れり。

以来二百二十余年間、即ち本年に至る迄、埋葬せし人員は其確實なるものは知るに由なしといえども、寛文、宝永間と維新以来は死刑者多からず、正徳より慶応正間迄およそ百四十年は毎年概ね千四百五人づつ死刑者を埋葬せし趣なるを以て、現今その人員少くも十数万以上に達せり（下略）

というのである。

大体、一ヶ月に百人以上も処刑されていたのであるから、公開刑もずい分とあったに相違なく、罪人の市中引廻しなども、そう珍しいことではなかったであろう。

タイム・マシンがもしあったら、ちよつと二百年ばかり昔へ旅行して、そんな光景を見物したいところだ——なんていうのは誰でもか。

（恵）

世界は女が支配する

世界的ハードボイルド・ミステリイほんやく雑誌「マンハント」3月号に、男性M派にとって絶対に見逃がすことのできない一ペーシがある。「おおぶあ・さ・うえいぶす」という欄。

——世界じゅうの女性が、いかにかよわい男性を迫害しているか、各地のニュースをひろってひとつ実証してみようかね。

という前説があつて、フィリピンの十六歳の女性が、ナイフを突きつけた若い男を柔道で投げとばして警察へひっぱっていったお話だの、自分のみたいテレビがみられなくて夫婦ゲンカし、あぐくのはてに奥さんにナイフで胸を刺された亭主の話だのがあつて最後に

——この小論の結論として、紳士の国イギリスの医学雑誌「家庭医師」に最近のつかった論文の要旨を紹介しよう。

「やがてこの世界はスーパー・ウーマンの支配に帰し、男性はいらなくなるのである。生物学的に考えてみても、現在のようになくさんの男性が存在する理由は、まるつきりありはしない。ミツバチを見よ。何千と巣にむらがっているミツバチのなかには、オスは数えるほどしか存在しないではないか。科学的なプランのもとになりたつ未来の世界では、ごく少数のえらばれた男だけが生存をゆるされて、精子銀行の冷凍精子の補充にあてられる。そして、この世界は、伝説のアマゾンの女勇者のごときスーパー・ウーマンが支配し、女のなかでももっとも適性をそなえた女のみが、子孫の製造をゆるされるのである」

ああ！

——というのである。なんと、M派にとって、見逃がすことのできない一文ではありませんよう。この短文のなかには、構想雄大なS・Fマゾ小説の原型が存在する。

（蘭）

黒髪執着

黒髪懺悔

(続・青春編)

志摩不二

秋吉

巒・画

★はらりと解けた黒髪から放たれた芳香が濃く甘く私の全身を襲った。

一

「おい、三好の奴あたまを分けたぜ。この間逢ったらポマードをこてこてにつけて、蜻蛉とんぼみたいな格好してやがンの」

「フーン！　すると、これで毛を伸ばした奴は平井、亀住、高橋、三好の四人か。みんな学生時代からイカレた奴ばかりだな」

「イテテ……」バリカンがひっかかって、思わず悲鳴を挙げた私の声に、ガヤガヤいっていた仲間たちが一瞬ピタリと沈黙した。

そしてしばらく私の方を見ていたが、なかのひとりが、

「プッ！」と吹きだすと、つづけて、ふふふ、はははとふたり、三人と笑いだし、とうとうみんなが、わけもなく腹をかかえて笑い出した。

「うるせえ、静かにしろい。おれの坊主頭がそんなにおかしいかッ！」

「ううん！　お、おかしくないよ」

「そ、そんなつもりで笑ったんじゃないよ」

「よ、よくお似合いでございます」

その言葉にまたみんながどっと笑った。頭を刈っていた父まで笑い出したので、

「父ちゃん、もういいいいいよ」というと、

「バカッ！　まだトラガリどころじゃない。ヒョウガリぐらいのところだ。もう少しおとなしくしておれ」と、どしりとした声でやら

れ、首をすくめた。

今日は、私たち文学同人誌仲間の集まりが私の家で行われるので、それまでにきれいにしておいてやろうという父の言葉に、私はベソを掻きながら、椅子を玄関の土間に持ち出し、父の実に堪念なバリカンの下でおとなし

くしていたのだが、そのうちに三々伍々、仲間たちがやってきて、土間つづきの私の部屋で、髪床が済むまで勝手なおしゃべりを始めたのである。すでに頭を刈り始めてから有に一時間三十分はたった。父は病的なほどきれい好きな上に、几帳面な性格で、私は町の理髪店などにはたまにしか行ったことがなかった。たいていは父が刈ってくれるのである。しかしそれが物凄くいほどいいねいなのである。はじめ面白半分で見っていた仲間たちもいつしか、私に同情をもち始めた。

「ねえ小父さん——」となかのひとりが、

「小父さんチャンバラ強いでしょう？」

「チャンバラア？」父は目をパチクリした。

「どうしてだね？」

「だって小父さん、大河内伝次郎にそっくりだもん」

ぶっ！と今度は私が吹き出した。なるほど、そういわれると父は大河内伝次郎によく似ていた。背は小さいががっしりした体格と容貌、そして重々しい口ぶりまで——。

「わっはっはっは……」父はまんざらでもなさそうに大声で笑った。

生来社交下手で、頑固で、几帳面な父は騒がしいことが嫌いであつたが、老いるに従つて角も取れてきた。また末子の私の可愛いさから私のしたい放題に甘やかして、こんな集まりを家でやることにも文句をいわなくなつていた。またそれに加えて川上葉子の黒髪切

断事件、最近の森川静子の自殺、体操教官への反抗から中学中途退学などのことから私の懊悩を恐れて、両親は一層私を放任状態に置いておいてやろうと努めていたのである。

「煙草を吸いたければ、隠ねて吸わなくてもいいんだよ」

「頭を伸ばしたければ伸ばしてもいいぞ」

両親はそういった。しかし私はできるだけ親にはいい子になろうと努力していた。不良になる余地がないのであつた。父も母も立派な人であるし、金銭的にも家庭的にも、どこにも不満の持ちようがなかった。しいて不満を探せば、その家庭内に、若い華やいだ女性の姿がないことくらいであつた。

やがて私はその苦行から脱れることができた。父の散髪が終つたのである。理髪道具などを片付け終つた時、

「やア、ごめんごめん。遅くなつて……」と叫びながら誌友の片山が入ってきた。彼はひとりの女性を連れていた。小ざっぱり



した木綿の和服を着た二十一二の色白で面長の美しいひとだった。黒耀石のような眸とそのまわりが深い湖のように青くてきれいなのが印象的だった。彼は私たちに彼女を紹介した。

「俺の隣りのおねえさんで江口千草さんというんだ。すごく詩的な名だろう？ 短歌をつくるのがとてもうまくて、今までもずいぶん雑誌なんかに掲載して入選してるんだ。この会話をしたら、ぜひ仲間に入りたいというんで……」私たちは大歓迎をした。

「よろしくお願い致します」はにかみながらあいさつする彼女に片山が私を、

「このひとがリーダーの石川君——」というのと、よろしく、といったあと、顔を近々と寄せて私の頭をみた。

「まア、きれいに刈れていますこと。どこの床屋さんでなさいました？」と聞く。

「うちでたつたいま、お父さんが刈ってくれたんだよ」

「お上手……」真底から感心したようにいった。父はすっかり照れて口ごもりながら、

「お宅の御商売は？」

「はア、私と兄夫婦とで床屋をやっております。兄は私から見たら腕はいい方なんです、それでも、剃刀よりバリカンを使う方がむず

かしいのだ、とよく申しております」

「ふーん？」と父は唸った。

「あなたのお兄さんはきつといい腕の人にちがいない。わしはどこの床屋に行っても気にいらないのだが、ぜひ今度はお宅のお兄さんにやっていただこう——」と世辞でなくいうのだった。

男ばかりの同人雑誌は彼女が入会したことによって、俄然活気づいた。

二

「なるほど、一郎さんという人、たしかにうまい職人だよ」家へ入ってくるなり、父は母と私にすべすべになった顎をしきりにこすりながらいうのだった。あれから二三日して早速父は千草の店へ行ってみたのである。

「ようやく気に入った床屋がみつかったの？」

母は気むずかしい父には、いつも困っていた。お菜や菓子を買うにも気に入らなければ一々文句をいう。銭湯へいっても、あそこの風呂屋は全くなっておらぬ、昨日は火傷するほど熱くってうめるのにひと苦労したのに、今日は水のようにぬるかった、わしは三助を呼びつけて、こんこんといい聞かせてやったよ、という調子である。何事にも一家言をも

っているつもりで、床屋にいった気にならぬものなら、剃刀はこう使うものだ、バリカンは、とあべこべに教えてくる始末だから、

「どれ髯が伸びたから、早速この間の娘さんの家へでも行ってくるか。まあ坊、あのひとの床屋はどこだ？」といい出した時、私はさア大変だ、もしも気に入らなかつたら、せっかく文学を通して友達になろうとしているあの美しい黒髪をした美人の千草さんと気まずくなってしまう、と心配した。しかし珍らしくも父は大変な気に入りようで帰ってきたので、私は体じゅうの疲れが一時に出たようなほっとした気になった。

「ありや名人だね。髯を剃るのではなくて一本々々をえぐり取るようにして剃刀を使うよ」

ふーん！ と母と私も感心した。

「そうそう忘れていた。千草さんが、お前に渡してくれて。お前たちがつくっている本の原稿だそうだ」と封筒に入っている原稿用紙を取り出した。のぞきこんだ母が、

「ずいぶん上手な字だね。それにあの娘のようによい美しい字だ」と賞めるのが、私にはわがことのように嬉しく思われた。その時私はかすかに匂う妙な香りを鼻腔に感じた。「おや？」と思つてその紙を近づけてみると

その香りは、たしかに原稿用紙から匂ってくるものだった。私はその香りを瞬間に、（ああ、これはきつとあのひとの髪の毛の香りだ……）と感じた。だがどうして、この紙にあのひとの髪の毛の香りが染みているのであろう。髪を梳きながら歌作して書いたものなのだろうか？ あの日わが家へ来た時、あの人は濡れているような濃く太い髪を無雑作に丸め、それを頭の顚頂部にドーナツを高く重ねたような感じの髪型をしていた。その時初対面だったせいもあって、私は羞かしさからそれ以上、その人の黒髪を見つめるのをためらっていたが、その黒髪はこのような優しく甘い香りをしているのだ、と思われるのだった。

私はその香りだけで、千草に対しかすかな思慕の念を抱いた。しかしその心を父母にさとられるのをおそれて、原稿に目を走らせた。彼女が寄せたのは短歌であった。

「故郷に帰る師を駅に送りて」と傍書してわづか三とせ君は都の風に追われ再び北へ去らんとすなり

わかれいまいまは静かにそのかみの君の情けをただ俤ぶべく

君賞でしわが黒髪を解き梳きつ去りし君をば切つに思へり

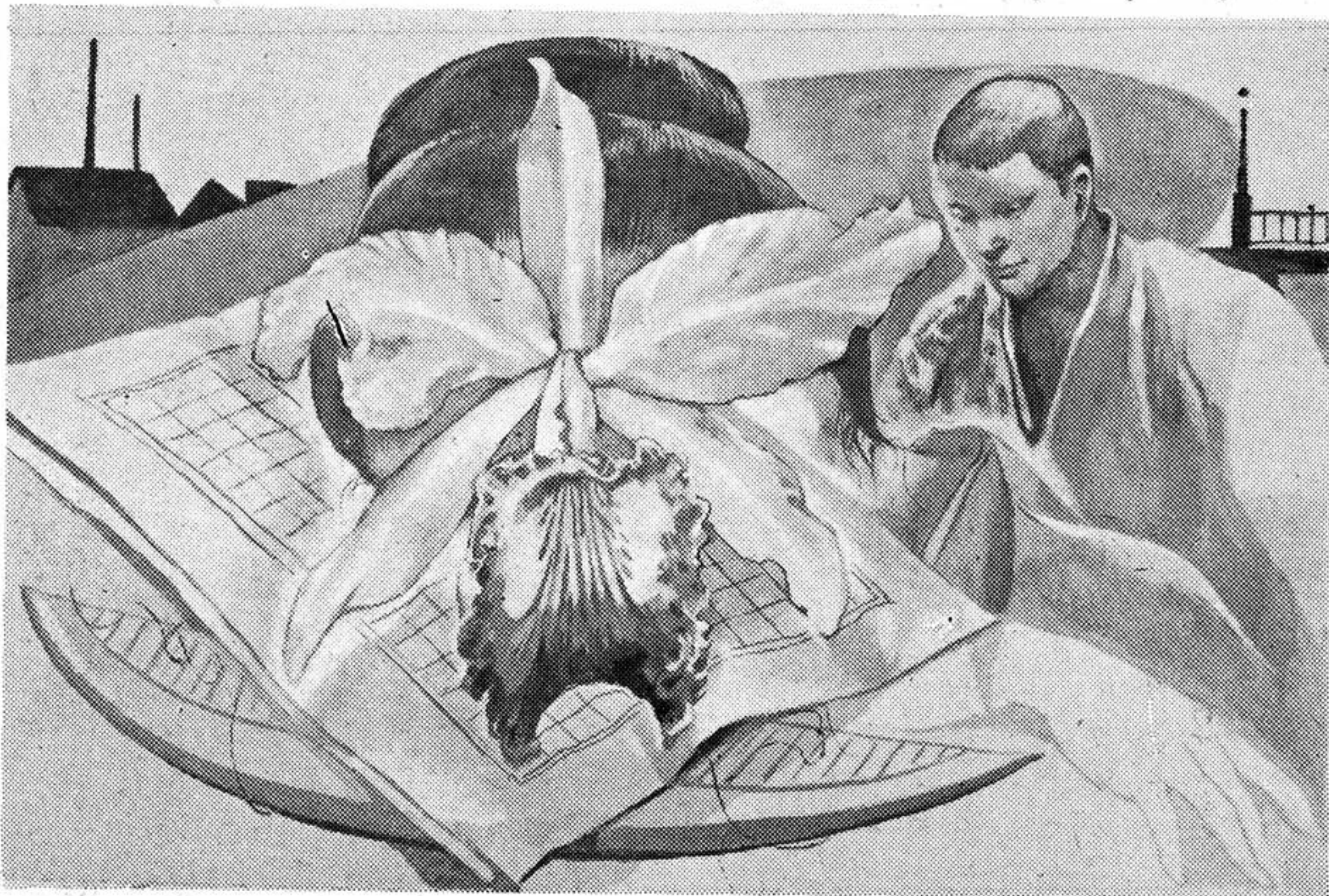
と三首記してあった。

ペンネームはただ千草としてあるだけである。「いい娘さんだね——」とぼつんと母がいった。父は私をからかって、「あれで歳がもう三つ四つ若かったら、まあ助にちょうどいいかな」と笑った。とたんに私は真っ赤になって、「よせやい、あんなの嫌いだッ！」と反射的にいうと、母はそれを真に受けて案外そうに「でもね、あの娘、とてもいい髪の毛をしているがねえ——」といった。

母は私の黒髪に対する異常な愛着を充分に識っているのだった。

三

髪には大きっぱい二つの形がある。



脂ッ気の多い脂性（オイリー）形。

バラバラとした乾性（ドライ）形。

そしてその中間（ノーマル）形。

私のような毛髪愛好者は、その形よりも性質の方を気にする。

髪が黒いか、赤いか。太いか細いか。剛いか柔かいか、である。私は漆しのように濃くて黒く、艶があつて、その艶が紺色に見えるのを最上とする。太さは余り太いのを好まない。ある調査によると頭髮の太さは平均、

男——〇・〇七五ミリ

女——〇・〇七六ミリ

別の調査では

男——〇・〇八〇・一〇五ミリ

女——〇・〇七〇・一〇九ミリ

となっている。

まだ手で触れてみたわけではないから、千草の髪がどれほどの太さなのかわからなかったが、それは毛髪愛好者の直感というものだろうか、私は彼女の髪がほどよい太さに違いないと思った。そして黒々と艶よくしなやかであると判断した。

しかし今、彼女が私のところへよこした短歌の原稿紙に染みた髪の香りに、私は形の方が気になった。

それまで私は黒髪のこれほど強い香りを知

らなかつた。幼い娘の手入れをしない黒髪が甘く蒸れた枯草のような匂いで、少し離れたところからでも強烈にその香りを知ることがある。だがそれは乾性で、他の物質に染みることのない匂いである。また中性ではその髪にじかについているもの、リボン、カチューシャ、櫛、ピンなどを取って鼻につけてみれば、長い時間に染み込んだその香りを知ることができるが、今の千草の書いた紙のように間接的なものに、これほど強く匂いが染みているということは、どういふことなのであるう？

彼女が理髪店の職人だから、髪の匂いが自然にその身にも浸み込んでいて、このようなことになるのだろうか。この前わが家に来た時は非常にさっぱりした、ただ若い女にありがちな甘い清潔な匂いしかしなない体臭であったから、私はことさら気にもしなかったのである。

私は不思議なその謎を解きたいために、彼女ともっと親しくなりたいと思った。私は友人の片山を訪ねた。彼は千草の家の隣りに住んでいる布団綿を商う家のひとり息子だった。芸術至上主義で、将来の島崎藤村をめざしてひとり力んでいるが、コチコチの頭で色気も欲気も全然気にしない奴だった。

「よく来たね、まア上りたまえ。実は僕も君と逢いたいと思っていたのだ。というのはこの前の会で論争した、漱石と鷗外のことだ。君は漱石が嫌いで、鷗外はコチコチだという意見だが、この二人を比較してみてだね。」彼は私の顔を見るなり滔々と文学論をやりだした。もちろん私も好きな道なので論争するのは厭うことではなかったが、少なからず辟易して、話題をくると千草の方に持っていった。彼女から短歌の原稿を貰ったのだが、と前置きして、

「他に彼女の書いた短い小説か随想のようなものはないだろうか？ この短歌から見て彼女なら面白いのが書けるんじゃないかと思うのだ。僕が直接行ってもいいのだが、今通りますぐりに店をのぞいたら客が五六人もいて、いそがしそうだったから、あとで君が行って頼んでくれないか？」

「うん、承知した」

「彼女の店、ずいぶん盛んだね。彼女が美人だからかな？ 兄さんという人がうまいからかな？」

「それもあるがね——」片山は不潔なもので見るような苦々しい顔をした。

「君は気がつかなかったかね？ 千草さんの眼に——」



「そういえば、眼の白いところが、異様に青くてきれいだったが……」

「彼女近眼なんだよ。それもひどいんだ。だけど眼鏡をかけるのを嫌がって、そのままやっているから、客の髻を剃るときなんか、自分の顔を客の顔にすれすれに近づけて、剃刀

を使うんだ。だから客が喜んであの通りさ。男ってどうしてあんなんだい？　そもそも色気なんてあるから小説を書いたって、トルストイやドストエフスキーのような大ロマンを作ることができないんだ。君は人間万事色と欲、しかして小説はその人間を書くのだから、

そのふたつをのぞいて、文学はありえないという主義だが、女床屋に顔をぴったりつけられて、ヤニさがっているような男を書いたって、そこから何が探り出せるというのだ。すべからく文学は人世の宏邁な……」

私はほうほうの態で片山の家を逃げ出した。

四

われわれ若い文学志望者が作っている同人誌の名は「離島」(はなれ島の意味)といった。著名な作家や学者の師もなく、また有力な文壇にも属していない、いわば中心の文壇から遠く離れている小さな島によっている文学グループの意味だった。また近くにある石島という学校の出身者が多いことと、住んでいる町名にも因^{ちな}んで、かくは名づけられた。

すでに月一回の発行も五号を重ね、誌友も三十人を越していた。私はその三号と四号に幼い日の思い出、山本美代子とのことを書いた。「桃割れ」という

小説みたいなものを載せた。すると、春先きのまだうすら寒い日のことだった。警察の者ですが「離島」という本のことでおききしたいことがあるので、息子さんに警察まで来ていただきたい、と四十五六の刑事だという男が、私の家にやってきた。父母は驚いたが、私は平気で暢気にその男に連れられて警察までいった。ところが調べ室に入るなり、

「貴様、共産党のだれに教育されているんかッ！」

頭ごなしにどなられて啞然とした。彼は同人誌の三号と四号の二冊をつかみ、机の上に叩きつけながら、

「中学校も貴様、自由主義者として放校されるところというじゃあないか！ この貴様の書いた小説はその自由主義者から共産主義、赤も赤マツカカになっている。この一節はななか

！ 芸術も恋愛も真ッ黒な溝泥の渦のなかに巻きこまれ私はもがき喘ぎながら、美代子の黒髪をただ一本の命綱として、握りしめているのだった」とは何か？ 証明してみい。どうじゃできまい。できぬはずだ。真ッ黒な溝泥とは軍国日本のこの社会のことをいっているのだろう？ 貴様が作っているこの本は、天皇制に反抗し、軍国日本を擲論する言文に満ちている。それでも貴様は日本男子か

ッ！」

乱杭歯を剥き出し、ベッベッと唾を飛ばす分厚い唇の大きな口を、私はポカンとしてみているだけだった。なにがなんだかわからぬうちに私は警察内の道場につれていかれ、竹刀で背骨をぶん撲られて目を廻し、鉄格子の独房にほうり込まれて一夜を明かした。

翌る朝、長兄と次兄がそろって私のところにやってきた。喧嘩早くて強い次兄は、

「あんちゃん、刑事さんにぶん撲られた」と云いつけると、顔を真ッ赤にして憤慨した。

「署長を呼べ署長を！ その刑事というのはどいつだ。まだ子供のこいつに、赤だとかなんとかわかる道理はないじゃないかッ！」腕をふり廻したので、調べ室は收拾つかない混乱に陥り、昼頃までゴタゴタした。私は得意の泣き戦術に出て、兄貴たちに甘えながら、わあわあと声をあげて泣いてやった。するとそこへ意外な面会者がやって来た。千草さんとその兄嫁の妙子さんという人である。妙子さんは署長と親しそうに話しながら、千草が話す私への弁明を署長や部長刑事たちに受け継ぎをした。千草は「離島」という本が決して思想的には関係ないこと。むしろこの時局に懶惰に流れている現在の文学界に、若い力と情熱で活を入れる役目をしているのだなど

と、歯切れのよい口調でしゃべりまくった。

警察の連中はまるで文学のことなどわからないらしく、千草の文学論に煙にまかれてしまった。

その日の午後、私は二人の兄と千草、妙子の姉妹に囲まれて警察の門を出ることができた。

長兄は在郷軍人会の副分会長をしており、太って大きく貫祿もあった。次兄は民生委員だった。その二人が身元引受人になり、千草姉妹の弁明で私は釈放されたのである。

兄たちは姉妹に感謝の辞を述べ、お礼にといつて、高橋の「どじょう屋」に招待した。兄たちはそれぞれ結婚していたが、美しい姉妹とこのまま別れてしまうのは、惜しかったのかも知れない。どじょう鍋を五人で囲みながら長兄が、

「署長や部長とおしたしいようでしたが、お知り合いのですか？」と聞くと千草が、「はい、死んだ私の父が前あそこの署長をしておりましたので。それにおねえさんはあの部長さんの姪に当るのです」

「それはそれは……」兄たちは私の好運を喜んだ。

二三日して私は母に連れられ、千草の家へその時の礼に行った。千草は今日は閑だから



遊んでいってください、というので私は残ることにして、母だけ先に帰った。すると千草はいたずらっぽく笑って、

「さア、そこへおかけなさい。あの時の嫌な思い出をさっぱりと剃り落してあげましょう」

とむりやり私を鏡の前に掛けさせた。

五

だれだって税務所の役人と警察官を好きなものはいないが、私は千草の父が警察署長であつたときいてから、それまで抱いていた思慕の念が一ぺんでふつとんでしまうような気がした。

彼女は本職とはいえ器用な手つきでバリカ

ンをつかいながら、

「正雄さんは頭を伸ばさないんですか？」

「うん、めんどろくさいから——」と私は答えた。毛髪フェチシストの私は自分が毛を伸ばしポマードなどをつかうと、せっかく気に入った女性の黒髪を得ても自分のつけている匂いが邪魔をしてしまったり、落ちた自分の髪と女性の髪が混同するのを恐れたから、伸ばす気にはならなかったのである。

「千草さんはここの生れ？」

「いいえ、中野駅の近くに最近までいたの」

問わず語りに彼女は身の上話をした。彼女の声は美しいとはいえなかった。少し掠れた低い声だが、かえってそれが耳もと近くでいわれるとこちらの神経に痺れるような快感をもつて響いてくるのだった。彼女は十年ほど前に母をなくし、兄の一郎と共に下町の警察署長をしている父の手ひとつで育てられた。

父は下町に長く勤めているうち、粗野ではあるが純朴で人情味のある下町の人間をこよなく愛するようになり、住むなら深川がいいぞ、と兄妹によく語っていたという。父の死後一郎は恋人であつた妙子が理髪師の免状をもっていることから自分も、官庁勤めをやめて理髪師の免状をとり、千草にもすすめて、共に深川に移り三年前にこの店を開いたのだとい

う。

店には一郎夫婦の姿はなく私と千草のふたりきりだった。煉炭火鉢のぬくもりが心よく私を睡りに誘いこんでいく。うつらうつらとしているうち、私は恐ろしかった前日の警察での出来事が、再び現在ののように思われてきた。刑事の竹刀が、拳固が私の目前にぐるぐるふりまわされた。

「やるならやれ！　いくら撲つたって、僕の気持まで撲れまいッ！」腹には思っていたが口には出せなかった憤りが、また燃え上ってきた。父は頑固者ではあるが、わけのわからぬ男ではなかった。かつて天皇が清洲橋を渡って下町に来た時、その横道のわが家まで店を閉めて行幸をおむかえしろ、と巡査がいつてきた時、天皇様は仕事にはげめとはおっしゃっても、仕事を休めとはおっしゃらないはずだ、と巡査をやりこめそのまま米搗きをやっていたというエピソードがある。父は私の気持を温い目で見てくれていた。中学校でできごと、今度のこともひとつも批判しなければおこりもしなかった。同人雑誌なんかやめろ、と長兄がいったとき、父は私に、わざわざやめることはない、つぶされるまでやってみな、といった。長兄は苦笑して黙ってしまった。しかし私は撲られた痛さに今迄、

ばくぜんとしていた自由への気持が、かえってばけしくなったのを知った。

バサリッ！　突然刑事の竹刀が私の顔にふり降ろされた。

「あっ！」叫んで閉じていた眼を開くと、私の顔一面に脂肪と香油の浸みた長い黒髪が覆いかぶさっていた。濡れているのではなく、脂と油にねっとり粘っている千草の髪であった。劇しく強い髪の匂いであった。

「ごめん。ごめん。ごめんなさい——」

あわてて、千草は頭をひとふりふって髪を背の方にまわした。ドーナツツを重ねたように束ねていた髪が、どうしたひょうしにかピンがはずれ、セルロイドの櫛を飛ばして崩れ乱れたのである。私は千米を一気に馳けたような激しい動悸に顔が火照り自分でも真ッ赤になっているのがよくわかった。あたり一面脂肪と香油の入り混った甘い髪の香りが、空気の入り込む隙もないほど濃く漂っている。

息苦しいような黒髪の霧であった。

千草はと見るとこれも激しい動悸を懸命に押え、顔を、あれほど白くなめらかだった肌を真ッ赤に充血させ、吐く息も荒く、じっと鏡に向って眼を据えているのだった。

普段は相当近くよっても余り匂わぬ千草の髪が、どうして突然に、これほどまでに強く

匂いだしたのか、私は奇蹟に近い現象に驚き声も出なかった。

私も千草も無言でしばらくはそのまま動かなかった。やがてそのままの姿勢で千草は、「驚いたでしょう？」といった。それが束ねていた髪が不意に解けて私の顔にかぶさったので私が驚いたといったのか、それとも香りの少ない髪が、急に強い香りを放つ奇異さに私が驚いたかと思っていっただのか、どちらともわからず私はとっさに返事ができなかった。

「驚いたでしょう——」と千草はまたいった。

「私にこんな変な病気があることを、人に知られたのは、正雄さんあなたが初めてです。すっかり縛りつけるように束ねておいても、一途に物を思いつめたり、興奮したりすると生命はあっても自覚も意識もないこの髪の毛が、活動力を帯びて、私の意志はかわらず勝手に動き始めるのです。その時髪の毛は自分でもよくわかるくらい、強い香りをもって匂うのです——」

「ふしぎだな。いつ頃から、そういうことが起きるようになったの？」

「恋をするようになってから……」

「ああ、北の故郷に帰った先生のこと——」

「まア、おわかりになっていたの——」

初めてもとの優しい顔に戻って、羞かしそ

見たもの聞いたもの

狙われた女子大寮

★下着フェチストの数は予想以外に多いと見えて、しばしば新聞紙上にその記事を発見する。今度のは、奈良の電話工だ

が張り込みで現行犯逮捕された。
★大和タイムス昭和35年10月3日版は、
“学大女子寮で下着盗むノ 奈良・張り込みで変態男捕える”という二段見出しで次のように報導している。

★干してある女のパンティーやシュミーズばかりを盗んで歩く変態男がつかまった。奈良署は、2日午前零時15分頃奈良市法蓮南二丁目、電話工夫、都築明(25)を現行犯逮捕した。

★奈良市後藤町奈良学芸大橋寮(女子寮47人)で毎週土曜から日曜にかけて、物干し場に干してあるパンティーやシュミーズがひんびんとなくなる。といった届出があったので、奈良署員が一日夜から張り込みしていたところ、2日午前零時頃南側のヘイ(高さ1.5メートル)をのり越えて都築が侵入、干してあったパンティーやシュミーズをひろげたり匂いをかいだりして物色したもの。



うに笑った。

「私に文学の手ほどきをしてくれた女学校時代の先生なの。でもあなたと同じように自由を守ろうとして学校を追われ、その上特高なことからひどい目にあわされ、とうとう故郷にお帰りになってしまったの——」

彼女は剃り終った私の顔に、近々と顔をよせてクリームをそりこみながら

「あなたの顔を剃っているうちに、同じように自由を守るためひどい目にあったあなたとその先生のこと

うに思われて、先生のそばにいろような気になってしまったら、あの通り髪の毛が勝手に動いて匂いだしてしまったのよ」

そして

「でもどうして正雄さん、先生のこと、知っていたのかしら？」と私に聞くでもなく、呟やくでもないような口ぶりでいった。

「だってさ、この間くれた短歌の原稿に、今の千草さんの髪の毛の強い匂いが、とても強く浸み込んでいたもの——」

「ああ……」溜息をつくように千草はふくよ

かな胸を抱きしめるように、

「そういえば、あの歌をつくっているときも髪が勝手に動きだして困ったわ——」

「それなら、あまり先生のこと考えない方がいいよ」と私がいうと千草は本当に困ったような顔を近々と私に寄せていうのだった。

「でもね、これからは私の髪の毛が、勝手に動きだして困るかもしれないわ。だってあなたが、とても先生に顔も気持も似ているんですもの——」

(未完)

スカートの下の世界

阿麻哲郎
江淵晃夫・画

■娘たちの足と足の交錯した暗がりには、長々■
■と寝そべる私をあたたかく保護してくれた■

(1)

列車の中では、それぞれが同じ条件のもとにおかれた、つまり車中の人ということで総称されたので、どの女性がタイピストであり、百貨店の売り子であり、商事会社の事務員であるかわからなかった。服装やその他の様子から、女性の職業を判別することは、大変な困難を伴う。踊り子まがいの派手な服装の女性が女子教員であつたり、教職者と思えぬ地味作りの人が実はステージを彩どる踊り子であつたり、これはと目を見張つたすばらしいお嬢さんがあやしげな素性の女であつたり、どこのイカれ娘かと思つていたらその実

ある名家の令嬢だつたりする当節、特にその上、旅する女性の身分や職業となると、なおさらその判別はむずかしくなる。女性ハイカーやスキーヤーたちの、いちように画一化された旅先での服装が、なおまたその困難さを助けて、そのために彼女たちは、日ごろ自分たちをしばっていた職業や立場や身分というものから解放されて、いちように自己本来の、生まれついたままの生地や素顔をさらしていることができた。

車内の通路に横たわる男性たちを、女性がすいすいとまたいで通る光景については前号で述べたと思うので詳述を避けるが、とにかく女性の身分や立場が分らぬということは、





また女性がわから男性を見ても同じことが言えたので、つまり通路の男性をまたぐ女性は、同じように相手は何者であるのかを、一々納得すくでまたいでいるわけではない。

ということは、実はさまざまにおもしろい現象が満員の車中では演ぜられていて、ぼくらはそれに気づかないでいるのだ、ということにもなる。看護婦が医師のからだをまたぎ、女学生が教師を、タイピストが課長を、秘書が社長のむすこを、売り子が客を、若妻が夫の先輩や上長を、といったぐあいに、日ごろは一步も二歩も譲って敬意を表さねばならぬ相手の男性のからだを、それも上半身、または顔の上を平気でまたいで通る光景が、本当のところは演ぜられているので、列車の車中であるという、ただこれだけの状況の違いでもって、女が目上の男のからだをまたぎ、足許に男の横顔を見えることが、もうごく普通の状態として納得されているのだ。

状況と環境がすべてなのだ。状況と環境に人間のすべては規定される。

ぼくはそうした状況の中にとり巻かれていたので、通路にうずくまるようにして、椅子のはしにもたせかけた頭が、女性の差し出した足の爪先に当たり、時にその足先が興に乗ってぼくの頭を愛撫しても、満員列車の身動

きもできぬ車中である、という状況と、ぼくが無能力な浮浪者だ、というもう一つの状況に女性の心も、周囲の人たちの意識もすべて規定されて、足で人の頭を愛撫するという、非礼きわまる行為が、ここではもうごく普通の状態として納得されたのだ。

新宿終発の中央線夜行列車が、甲府を過ぎて初めて乗客の数もまばらになる。車内は汚れ放題、新聞紙がぐしゃぐしゃになって散乱し、弁当のからやみかんの皮が、押しこまれた座席の下からはみだすように散らばっている。まばらになった乗客はしかし疲れ果て、ようやく襲ってきた睡魔に抗すべくもなく、この明け方近い時間を本気で眠りこんでしまふ。特に若い、元気な娘ほど健康な深い眠りに落ちる。ごく短い時間ではあるが、目的地に着く直前のこの深い娘たちの眠りは、マゾヒストにとってはまさに貴重な天与の状況なのである。人の数もまばらになり、座席が広くあきだすと、それまで一ところにかたまつて陣取っていたグループも、お互いがゆっくりからだを休めるよう、めいめい席を移して二人掛けの席をひとりで、或いは四人分全部をひとりで占領するように、離ればなれに移動する。できれば深い眠りをむさぼりたいからである。座席に空きができてきても、まだ

何人かの男たちは、通路や座席の下で身を横たえたままに眠っている。ほくもそのひとりだ。そして実際、多少の汚れや背中中の冷えをさえいとわないならば、いつそ床の上に寝たほうが、座席の上で寝るより、はるかに楽である。この列車に限り、いつまでも床の上に寝続けたい。不自然な行為だとは見られない。

ひとりの少女が、行儀よく足先を普通に座席の前にそろえて眠っていた。ほくは寝場所をそれとなく物色し、少女の足許に移動した。ほくがその床の上にそつと頭を落とすように身を横たえ、かすかにほくの横びんのあたりに少女の足の爪先がふれた。そつと見上げてみると、少女は安楽椅子にかけないように腰を前に位置させ、登山靴をぬいでそれを足台わりに靴下ばきの足先をそれに乗せ、ほくのすぐ目の前にそろえて置いていた。

少女は何も知らずに眠っていた。つい自分の足先のすぐ前に、男の顔がまるでかくわしいものにも慕いよるように、鼻づらを寄せてきているのも、そしてそうして横たわる男の体を、丁度女王のように足下に踏みしたがえている自分のそのときの権勢に満ちたもののようなポーズも、何も知らずに眠っていた。

ほくは最初、彼女の足の甲にあごを軽く乗

せてみた。それからその緑色靴下の上からまんべんなく鼻づらで両足の前後を愛撫した。これは全くすばらしい愛撫であった。女性の足先を愛撫するには、手を用いるべきでなく鼻づらか舌先を用いてなさるべきであり、またそういう愛撫を彼女にささげる時の、ほくの満ち足りた深い愛と感動は、まさしく天上のもののように高揚し、祝福されたものだった。ほくは腹ばいになって、彼女の足にほお

を当て、それからその爪先に唇を当ててみた。りした。このおごそかな時間、ほくは丁度深い眠りに落ちた白雪姫のまわりを回る小人のような気持ちになっていた。上目づかいに見上げると、まず足のすねがまっすぐそびえ立って、それからもの豊かなふくらみ、ふくらみとふくらみとが重なり合うように奥まったところで接していた。ただ惜しいことに、彼女はズボンをはいていたので、それらの生身をじかにうかがうことはできなかったがしかし、ズボンはまるで正直に、ほくの唇がその通りになぞってゆくそのままの輪郭を、円熟した盛り上がり通りの通りにふくらみ、はちきれそうにこぼれ、挑発的で静かな神の恩恵を、さながらに表現していた。

そしてそのはるかな上のほうにあって、グレイのジャンパーの襟もとに、赤いネッカチ

ーフの端をのぞかせたかわいい少女の深い眠りが仰ぎ見られた。

もし時間を止めることができたなら——と、日ごろ考えたものだ。そうしたらほくはいたい何をするだろうか。街頭にたたずむ女性のはたたずんだまま、通りを歩く女性は歩きかけたまま、ステージの踊り子はその踊りのポーズのまま、またトイレの女性はその姿勢のまま、つまりいっさいの動きは、時間の制止にあって電波の流れさえもがフィルム回転が止んだときのように止まってしまう。ああそうしたとき、ほくはまっさきに飛び出して、街頭のお嬢さんたちのスカートのひだの下から下、足と足との林の間を、本当に自由な思いで飛び回ることができであろう。

夜行列車では、往々にしてこのように、ほくは時間を止めたときのように自由であった。

こんなこともあった。やはり夜行列車のことで、車内は身動きもできぬほどこんでいた。四人がけの座席の一区画が、やはり若い娘たちで占領されていて、その区画を囲むように、これまた若い女性たちがその付近にたむろして、元気で愉快な会話を取り交わし合っていた。いずれも山に行く女性たちだ。彼女らは放胆で開放的で、周囲の聞き耳に思いわ

ずらわされることのない、自由な気分にはしやぎ回っていた。ほくは例のように、全く見捨てられた敗残者として、この活気あふれる娘たちのさ中に、押しひしがれたように、うずくまっていた。

初め彼女らの集団は、同じ一つのグループかと思われたが、会話の模様からそうでないことがじきにわかった。二人ずつ向かい合っすわっている一方の組は、まだ学生であるらしく、それから一方の組は学校を終えて働くB・Gたちであり、いわば彼女たちは先輩と後輩の関係にあり、たまたま偶然に車中でいっしょになったものらしかった。それでも

もう年来の知己のように、お互い同士、食物を交換し合ったりして打ちとけていた。その四人のグループをさらに囲んで、女性の仲間が人垣を作り、ほくはその人垣の足もとに見すほらしくうずくまっていた。そのうち停車駅で乗り込んでくる客の数がいっそうふえ、ほくは居場所すらなくなったように彼女らの足もとを奥へ押しやられ、とうとう座席の四人の間へはいりこんでしまった。二人ずつ向かい合わせになっているその間へ割りこんだとき、彼女たちは別にほくの方をいちべつもせずにおしゃべりを続けていた。男が一人、座席の間へ割りこんできて、床に直接尻をつ

けたまま、窮屈そうに、そしてまぶしそうにおどおどと目を見張り腰かけている女性の膝頭と膝頭の間から、やっとのことで頭を出している光景は、きわめて感銘深いものである。おしゃべりしながら彼女たちは、盛んに飲んだり食べたりした。そしてそのうち、一人が食べかけの握り飯の中に、虫が一匹いたとかで大騒ぎし、結局は、紙にくるんで座席の下に捨ててしまった。ほくはこの機会をのがすことなく、今捨てられたばかりの食べかけの握り飯を座席の下から引き出して、思いきって彼女らに声をかけた。

「これ、食べていい？」



さて、初めて女性たちは、いちようにこの
みすばらしい男に視線を集中した。男はまる
で見えるからにばかばかしい様子と物腰で、腰
かけた彼女たちの足と足との間の床の上で哀
願し、捨てられた泥まみれの握り飯を大事に
ささげているのであった。

お互いにさも困ったように顔を見合わせて
いたが、一人が言った。

「そんなもの、きたないわ。おなかいたくす
るわよ。それよかもっときれいなものあげる
から、これお食べなさい」

ほくはきれいなものには関心がなかった。
みんなの見ている前で、土にまみれた食べか
けの握り飯を、いきなり食べ始めた。みんな
の見ている前で、ほくは土にまみれた自分自
身を彼女たちの驚きと、クスクス笑いと、蔑
視の視線の中でさらしておきたかった。

奇妙な自己紹介をこうして終えると、あと
は比較的楽なものになる。ほくは公然と女性
たちの間の深い谷間の底で、座席と座席の間
のその床の上に、じかに横たわることができ
た。いちどきにほくの視線の位置は低くなり、
ちょうど彼女たちの靴先の位置がほくの目の
高さになった。周囲は靴と靴と靴であり、上
は彼女たちの寄せ合った膝頭などで天井をな
すように閉ざされ、ほくのいる位置は電灯の

光も射さずに暗かった。

こういう状況にあっては、女性はまだ羞恥
を感じない。足もとの男のからだや、あるい
は頭に靴先を押し付けたまま、またその体全
部をズボンやお互いの膝頭の下に包みこんだ
まま、男のことを忘れてしまったようにお互
いの会話の中に没入してゆく。

やがて疲れてくると、靴を脱ぎ、めいめい
彼女たちは、お互いの座席のほうへ足を伸ば
し合って身を休める。彼女たちは、ごめんな
さい、とも言わずに、ほくの顔の上に足を持
ち上げ、靴を脱ぎ泥を払った。おかげでほく
は彼女たちの靴底の泥を一身に浴びること
になり、目もあけていられぬ状態であった。

やがて一段落したとき、ほくのすぐ顔の上

の低い天井は、若い彼女たちの差し出し合っ
た太股と、それから豊かなお尻のふくらみで
おおわれてしまった。もし、当然の作用でお
ならでもするとなると、彼女たちはいったい
だれがそれを我慢し遠慮しただろうか。遠慮
するのは周囲の友人や乗客たちに対してだけ
であって、お尻の下の見すばらしい男に遠慮
する気持ちは、決して露ほどもおかないで
あろうが……。

(2)

マゾヒストは本来夢見ることの好きな詩人
である。マゾヒストが批評家を自分のうちに
含まぬことはこれまた不可能である……。
本能だけに導かれるマゾヒストは気の毒なも
のだ。彼らは不完全なマゾヒストに違いない。
マゾヒストとは、ヴァレリイが規定する古典
派というもののように、自己のうちにひとり
の批評家を擁し、これを自己の行為に親しく
あずからせる人間のことを言うのではなかる
うか。

スカートの下の世界に対しての思いは、一
つの詩的激情でさえある。それはまた、スカ
ートの下の世界に男を踏みしたがえ、包みこ
むことを許容する女性心理を一方に想定し、
その二つの関係を如実にながめてその不思議

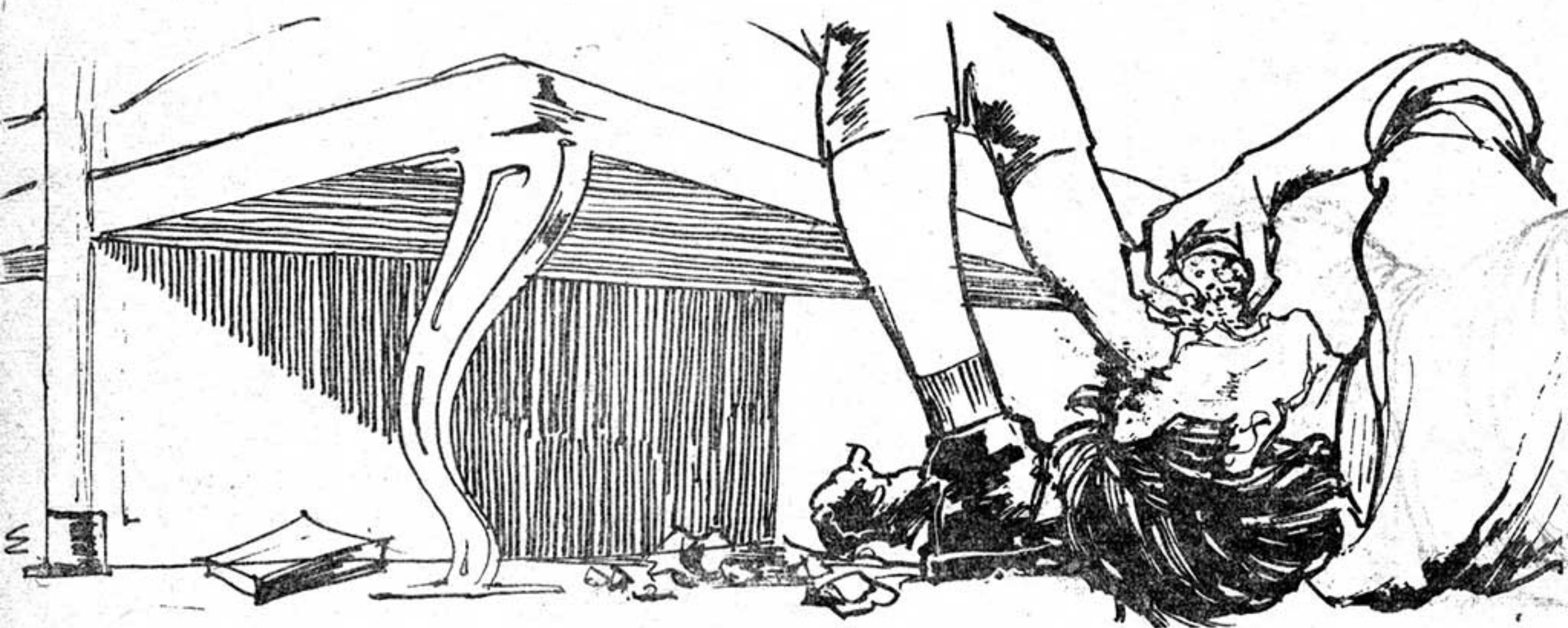


さ、こっけいさに冷徹な心を走らせる一方の自我の助けを借り、初めて奔流のようにほとばしり出る感情の嵐である。

しかしスカートの下の世界に入るとは、らくだが針の穴をくぐることでよりむずかしいことでもある。ただたんに、スカートの下に頭を差し込む、女性がだまってその行為を見のがしていてくれるというだけでは、あの灼きつくようなマゾのかわきをいやすことにはならない。それもまた一種の男性に対してのサービスとおもねりの変形であるに過ぎず、「スカートの下におはいり。そこしかお前の居る場所はないのだよ」

という、女性のことばと意識が根底のささえにならぬかぎり、マゾヒズムは成立し得ない、とすることができよう。

新宿の花園神社に近い通りに、若いぼつてりとした顔立ちの娘がやっている屋台のおでん屋があった。ぼくは彼女の顔をのれん越しに一べつするや、ついそのまま引きこまれてその床几にずるずると腰をおろしてしまった。本来ぼくは、まる顔の女を相手として選ぶことはあまりないが、この時はまた別の気持ちかわいたからである。まる顔の女というと、大抵情があつて男に親切的な向きが多いような気がして、とてもスカートの下の世界な



ど、望むべくもないので、とかく敬遠したものだ。この屋台の娘は、特にかわいい顔立ちであつたので、そのまま立ち去るにはしびなかつたのだ。床几にすわつて改めて見直すと、娘の顔はぼつてりとした肉付きの、少しばかり下ぶくれの、また別種の魅力をいっそう強く感じさせた。たとえて言うとな東映の丘さとみによく似た顔立ちであつた。

花園神社の付近は、いわゆる暴力団の多いところであり、いくら丘さとみに似たかわい娘といつても、普通の素人娘がおでんの屋台をその付近でやれるはずもなく、結構それだけのいわくとハクを持つ女であることぐらひは、まず常識であつた。

先客がひとり、妙に沈みこんで酒を飲んでしたが、いざ会計となつたとき財布がないという。代金は八百円でたいしたことなかつたが、客はポケットを全部探つたあげく、一銭も出てこない。ぼくは娘がどうこの場を処置するか、興味をもつてながめた。彼女は少し困つたような顔をして、初めてのお客さんだもん、代金はいただかなくちゃ……、何かあずけていただく品物はありますか？　と云つて客の手もとをのぞきこんだ。

客は新しいスケートぐつを持っていたが、それをカタに置こうとは言わず、ただブスブ

「金が無い、金が無い、だけを口の中でつぶやくように繰り返すだけだった。『八百円さえ持ってきていただければ、いつでもお返しするんだから、そのスケート靴、おいてってくれない』」

「どこに持ってくればいいんだ」

「ここよ。べつに靴ぐらいのことで逃げやしないわよ。いつでも、毎晩屋台は出してるんだから……さ、その靴おいてってよ。どうこうってじゃなく、ただあずかるだけだわ」

娘の言い分は正当だ。ところが客は一向にえきらない。もっとも相当に酒が回っているらしかったが、何やかとわけのわからぬことを口走るだけで、いつまでたってもうちがあかない。そのうち急に客は威張り出し、「金がなんだ、金ぐらいいつだって持ってるぞ、ばかにするな」などと、つじつまの合わないことを口走り始めた。関係のないほくでさえ、客のわけのわからなさに腹が立ったほどだから、娘さんにしてみればなおさらのことだったと思う。押し問答の聲が高くなり、そのうち、そのやりとりを聞きつけて、一見それとわかるヤクザ風の若い衆が二人、顔を出した。娘は若い衆にいちおうの説明をしたが、驚いたことに、そのかわいい娘さんはヤクザの若い衆の一人を呼ぶのに、ヤマ、ヤマ、と

呼びつけである。ヤマと呼び捨てにされて大の男はヘイとばかり首をすくめ、娘さんに、ネエさん、と恐れうやまうのであるから、新東宝の八女王蜂シリーズVを実際に見るようである。なお映画の三原葉子はそれなりの貫祿をつけた重量級の大年増であるが、実際本番のこの娘さんは、丘さとみそっくりの愛くるしさで、ネエさんぶりが映画ほどに板につかぬところがかわいくて楽しい。

さて、事がこのように急迫してきても客はあわてず、やはりわけのわからぬことをブスブス言ったり、急に声高に威張り始めたりするのだから、今度は見ているほくのほうがハラハラしだした。

案の定ヤクザ風のヤマという男は、カッとすぐに頭にきたらしく、パンパンと客の横面をなぐりとばして、とにかく金を払え、でなければ靴をおいてけ、ネエさんにタテついたらただじゃおかねえ、とすごんだ。

娘さんは見かねたように口を出し、お客さんをなぐるなんて、ヤマ、だめじゃないの、ときつくその若い衆をたしなめた。若い衆はテれたように頭をかきかき、この男が、あんまり話がわからねえんでね、つい頭にきちゃいますよ、と弁解まじりに言うのだった。

客はヤクザになぐられてたじろぐかと思っ

たら、なおのこと威猛高になり、よし、うちへついて来い。何だ、たった八百円のことぐらいで、……それにしてもなんだっておれをなぐったんだ……。

娘さんはしきりに客にあやまった。また若い衆も手のひらを返したように下手から、「お客さん、つい短気なことしちゃって、どうもすみませんでした」などとあやまるので、客はそれでようやく納得したようだった。結局この場合は、若い衆が客の家まで集金にお供することでおさまった。

ところでこの娘さんは、ネエさんぶりがどうにも板につかぬあどけなさを、まだ多分に持っていた。話をするうち、小松川高校を卒業してからそう幾年もたっていないという。高校生殺しでわたしの学校、すっかり有名になっちゃった、と彼女は素直に言ったりした。ほくはすっかり腰を落ち着けて飲み始めた。

「あなた、おとなしいわね」

「そう見える？」

「そうだわ。ずっとおとなしいんだもの」

「悩みごとがあるもんでね」

「何の悩み」

「うん。……それがね……」

「言ってごらんよ。わたし聞いたげる」

「……だって、そう簡単には言えないよ」

「どうして……」

「どうして……」

「どうしてって、つまり……」

「つまりどうした

というの。わたし、

人のいろんな話聞

くのが好きなのよ。

もったいぶらずに

話したらいいじや

ない」

「……それがね、

あんまり変なこと

なんでね」

「いいわ。どんな

変なことだって」

彼女にせかれな

くても、ぼくは話

したくてうずうず

していた。それも

彼女のような若い

かわいい娘に、マゾヒストの願いと思いを、

洗いざらいぶちまけて話したかった。

「たとえていえばね……ぼくは普通の男とま

るっきり正反対なんだ。……」

ゾヒストとしてのあらましを、熱をこめて話
すのだった。
「そんな男の人、やっぱり本当にいるのね」
「そりゃいるさ。人の気持ちって、理屈だけ

「どうしてそうなんかしら」
「どうしてなんて、本人だってわからないさ。
ただそうなんだから仕方ないよ。……それよ
か、こんなに徹底して女の人に忠実な男が実



ではどうにもならないところがあるもんでね

……」

「いつかそんな話、本で読んだわ」

「本に書いてあることより、本当はもっと徹

底したものだよ」

際にいるとしたら、どう？」

「どうだって……」

「興味はわかない？　つまりその人が夫だっ

たり恋人だったりではいやかもしれないけ

ど、ただおもちやを扱うようにほんの退屈し

ラッシュ もたのし

のぎの相手だったとしたら……」

「そりゃ面白いと思うわ」

娘の、面白いと思う、ということばは、マゾヒストを感激させるに充分な意義を持っていた。ぼくはさらにつつこんだ。

「ぼくをお客さんと思わないで、犬とおんなじに考えてくれない」

「いきなりそう言われたってむずかしいわ」

「むずかしく考えないで、簡単にああ、そんなものか、とだけ思ってくればいいのさ」

「いったいどんなにすればいいの」

「つまり、犬はこんなお皿でなど、物を食べないでしよう。犬とおんなじに、あなたが勝手におでんを食べて、その食べかけのを地面に捨てて、これお食べて言ってくれればいいの」

けないのだ。

発車のトタン、押されるショックで、手にしていたスピードケース（書類入れ）を思わず取り落してしまった。

スグそこにあるのは判りながら、からだの自由がきかないので、ひろうことができないのだ。しかし重要書類の入ったケースを、そのままにはしておけない。

私は、強引に身を屈めて、これをひろい上げようとした。そのときである。

ドサリ！ と私の右肩に、やわらかい、重みのあるものが落ちてきた――。

娘は笑った。笑っている娘を納得させるために、ぼくはさらに彼女とこっけいな押し問答を繰り返さねばならなかった。

「そんなに言うんなら、いいわ。でも、あんた、本当にそれを食べる？」

「まだ疑ってるの。本当だよ」

彼女はためらいがちに、まずコンニャクの一片を地に落とした。ぼくはむさぼるようにそれを拾って食べた。

それから、決して普通に皿につがれたおでんには、手をつけようとはしなかった。このヤクザ仲間のかわいい娘さんは、結構良家のお嬢さんのように、あきれたり気の毒がったりした。

二、三日たって、少し早目の時間にその屋台をのぞいてみた。娘さんはぼくを見るなり、「よく忘れずに来たわね」

と言った。で、ぼくはこう言おうと思い続けていたことを、床几に腰をおろすなり言った。

「あのね、この前話したとおり、ぼくは女の人に踏みつけにされるのが好き。だから、ぼく、一時間でも二時間でもいいんだけど、あなたのすわっている椅子の下に寝させてもらいたいんだけど……」

「だめよ、そんなこと言って。人が変に思う

流行のオーバーをまとった、丸い尻だ。

重みがモロに肩に加わり、更に、手を床に伸ばした私の手の平は、そのオーバーの主の黒いハイ・ヒールにもろに踏まえられて、どうしようもない。

一分…二分…三分。

次ぎの停車駅へつくまで、難行はつづく。

あまりの混雑で、もう立上ることとは不可能だ。……私は、女性のやわらかく、重い尻を肩にのせたまま、途方にくれた（ハイ・ヒールの方はさすがによけられたが）

ただ、せめて、その尻の持主が、美しいひとであることを念じながら……もつとも、その女性も、私の肩に心ならずも腰をおろしながら、うろたえているに違いない。それは、苦しく、恥づかしい数分間ではあったが、若い女性の尻の下で、多くの乗客の視線に囲まれながら、呻吟を強制されるのも案外楽しみなものだ、気のせいかな。



快よい香りまでにおって来るようで――。

電車が、カーブするたびに、尻の重みが、ぐーっと加わったり、反対に、フワッと軽くなったりする。よく注意していると、双つの丘の形までが、アリアリ判る。

……電車がやっととまる。

ようやく尻の下から解放された私は、立上ったとたんに、その尻の主を見上げた、想像の通り、肌の白い、肉づきのよい女性であった。彼女は、私の視線を意識しながらも、ツンとすまして車を下りていった。

（とやま生）

わよ」

「大丈夫だよ。こっちはその椅子の下までは見えないから、……その間、あなたはほくを足台代わりに、ふんずけていればいいの。あなたが何を踏んずけているか、お客さんが来たって絶対にわかりはしないよ。そうしてくれば場所代は払うよ。権利金だって敷金だって払うよ。……」

「あんた、何にも飲まずにそうしていてお金払うの？」

「そうだ。……でもときどき、残り物をそつと足もとに捨ててくれれば、ほくはそれを食べるよ……」

「おかしいことばかり言うのね」

「どうせおかしいんだもの。仕方ないさ、……それからもう一つ、人間ビールが飲みたいの。ほくはあなたの足台になって、そうした格好であなたのビールを飲ませてもらう。ほくはすっかり酔っ払える。あなたも一々、お手洗に行かなくてすむ……」

ほくは物の怪につかれたようにしゃべり続けた。

（注）二月号裏窓タウンに、広池秋子氏が「寶石」に発表した小説について少しふれてありましたが、あの主人公のアブノーマルな青年は実はほくのことです。いづれ機会があれば、そのいきさつを書いてみるつもりです。

「お正月映画」などと騒がれる時代はもう去った。むしろ、一月中旬から二月中旬にかけての作品は、各社ともあまり振わないのが現状だ。従ってという訳でもなからうが、今月は殊にその質において、さしてかんばしい成績とはいえないようである。

誇大宣伝に罪あり

○「ペルシャ大王」(製作・脚

本・監督 ラオル・ウオルシュ)二十世紀フォックス作品、松竹ピカデリー劇場、一月二十七日封切。

エロ場面描写に特技を有して、その道では古くから知られているベテラン監督の自主作品だが、なんともお粗末な出来である。肝心のエロ場面も、老齡のためかあまり振わない。わずかにハレムでの裸女の乱舞場面にそのおもかげを止める程度である。

主演はペルシャ大王にリチャード・イーガン、その愛妃エスターにジョーン・コリンズといったところだが、大王の残虐行為はもっぱらむくつけき男共ばかりに向けられて、虐められてしかるべき繊細で可憐なエスターの方は

報 雑 窓 裏

いとも御安泰と来ている。

開巻劈頭首吊り場面など紹介して期待させるが、後はただドラドラとらちもないお話が続くだけである。

それでも、大きな枕で前王妃を窒息死させる庄殺場面、他の王妃候補がエスターと間違えられての絞殺場面などはじっくりとカメラを据えて見せているので悶えのたうつ豊満な女体が観物である。

ほかに奴隸男の鞭打ち場面、若い女群の野外拉致場面等は一応楽しめる。

最後に、大王が拉致されて来た女達の中から、掟に従って王妃を決定する場面がある。

この場面なかなかS的で、壇上で将棋など指している大王の前に、盛装した女共が一人一人出て来て膝まずき、ひれ伏す。

大王はちらりと一瞥して、いかにも面倒臭そうに顎をしゃくる。これは不採用の合図で、女はすごすごと引き下る。こうしてエスターが、その中から選ばれる訳だがまあお金とお暇のある方になら、文字通りの暇潰しくらいにはなるはずだ。

鉄砲手錠と革製防声具の紹介

○「俺が地獄の手品師だ」

(監督 小沢茂弘) 第一東映作品、一月四週封切。

千恵蔵の「地獄シリーズ」オールスター版で徹底的にふざけた娯楽作品。例によって登場する壇原警部(片岡千恵蔵)が、バッファロー源というアメリカ人はシンシン刑務所からの送還囚で脱走前科十三犯なる大変な男に扮しての活躍を、常識なんぞクソ喰えといった調子で押しまくっている。笑いとアクションが、早いテンポで処理されているので、まあ飽きることはない、といった程度の作品にはなっている。

源さん十四回目の脱獄の相棒に桁はずれの馬吉(進藤英太郎)ファンキー小僧(中村賀津雄)、それに早射ちサブ、実は本庁の橋本刑事(鶴田浩二)がつきあっている。進藤が、達者な演技で馬吉をこなして笑わせるが、鶴田貫録の好演も見逃がせない。このほか高倉健、江原真二郎、柳永二郎、佐久間良子、久保菜穂子、小林裕子といったところが顔を並べて、精一杯のオールスター布陣である。

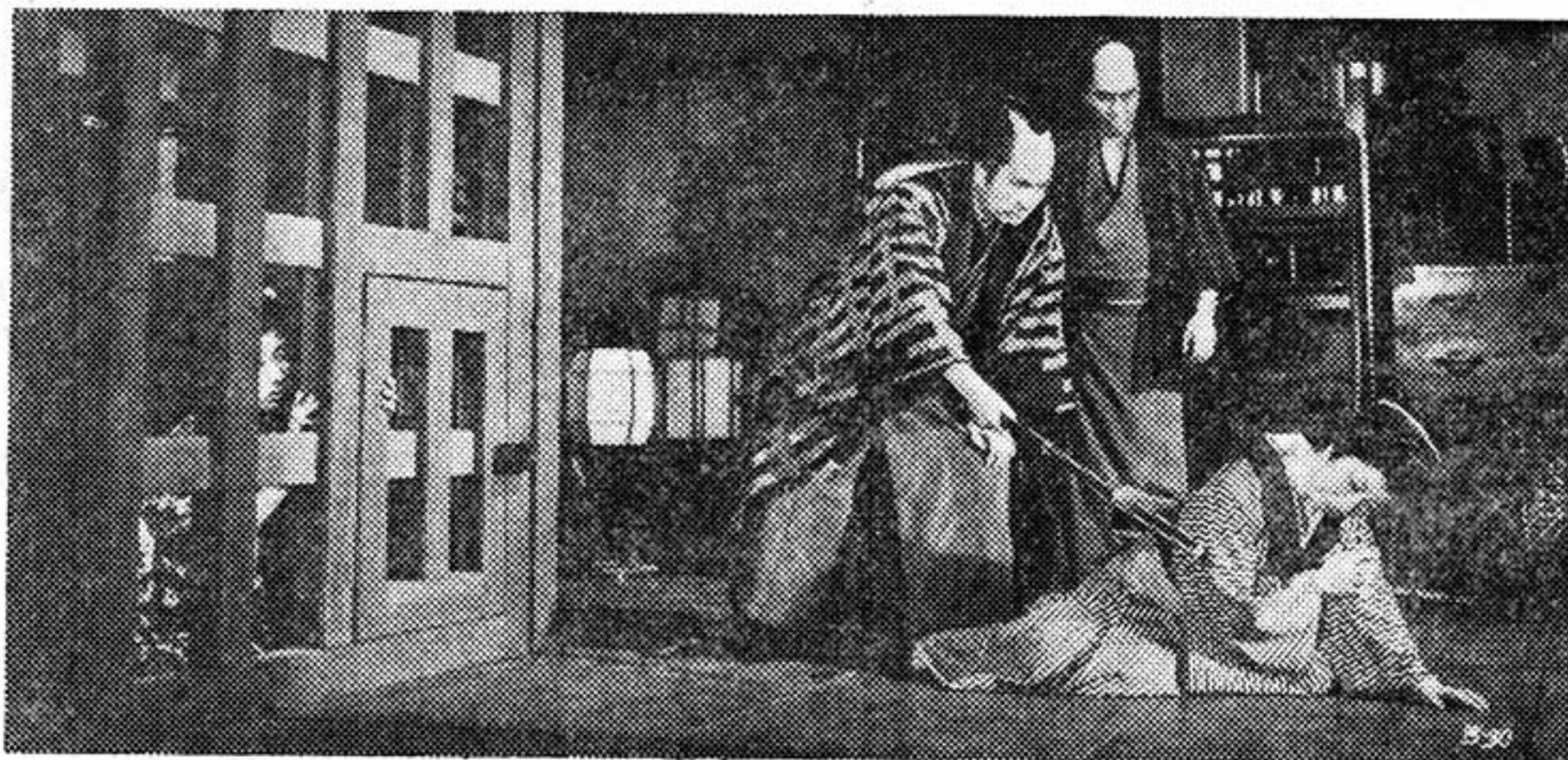
お話は、「国籍不明」と異名を取る日活アクションものに勝るとも劣らない荒唐無稽な代物でここに紹介するまでもないが、トップシーンに近く、珍しい革製拘束具を使っている。

北海刑務所なる架空の刑務所の独房内へ（特別監房あるいは懲罪房と呼ばれる）、先夜脱獄に失敗した馬吉とフアンキー小僧が、完全に自由を奪われてうずくまっている。

後頭部から顔一杯に革製の防声具をかけられ、後手錠も念入りに右腕を肩の上から、左腕は脇の下から背に廻されて、これも革製の長い拘束具をかけられている。これを嵌められると、両腕の動きを完全に殺されるという代物だが、現今ではおそらく、実際には使用されていないだろう。俗にいわれる「鉄砲手錠」というやつで、拘束具というよりはむしろ責め具に近く、こんなものを現在の警察で使用しようものなら、人権蹂躪とか何とか大変な問題になるところである。

まあ、百聞は一見にしかずとか、古今東西の映画にもちょっと珍しい光景ではある。

新映画紹介



東映京都作品「殴り込み道中」

東 龍子

長島 隆一 原

健策

戦国武士の残虐

○「鉄火大名」（監督 内出好吉）

第一東映作品、一月三週封切。

槍の豪傑後藤又兵衛（市川右太衛門）を主人公に、義に生き情に篤い一戦国武将の姿を描き、友情と主従愛の美しさを謳う、というのがこの作品の製作意図。しかし遺憾ながら、脚本・演出ともに冴えず、場内にアクリの声が聞かれようという恐ろしく時代遅れの時代劇。それともう一つ、頻発される大笑いが気になる。出て来るのが皆豪傑とあってみれば、商標の豪傑笑いも致し方ないがちとオーバーな「お笑い」ではある。

さて、縛り場面は三箇所である。

まず、又兵衛主従の脱出を黙認した柚木主計（那須伸太郎）等二人が、悪家老黒田三左（山形勲）の怒りに触れて、後手に柱に繋がれたまま斬首される。主計の妹の千春（大川恵子）は又兵衛を慕っていて、この二人のラブシーンが、前記欠伸を誘う一因になっている。

次に、又兵衛家中の鷹須の三郎（伏見扇太郎）が、三左の追撃隊に一人斬

り込んで捕えられる。髪はザンバラ、後手に縛り上げられて、最後背中を割られて絶命する。胸に掛っていた縄がバラリと落ち、その上に倒れ伏す場面は凄絶。

最後は、又兵衛があえて脱出させた二人の若い男女、鵬小次郎（河原崎長一郎）あづさ（花園ひろみ）がなおも又兵衛を慕って後を追ひ、ついには三方の間者と誤まれて豊家の忠臣淡路守（薄田研二）の家臣に捉えられてしまう。二人に再会した又兵衛は、愛情故に怒り、二人を本当の間者として扱おうとする。松の根方に後手の縄尻を取られて、小次郎、あづさの二人が引据えられる。この場面なかなか感動的だが、もちろん又兵衛の破顔一笑で一切は氷解する。

こういったお話に、又兵衛の親友でやはり槍の名手の母里太兵衛（近衛十四郎）がからんでの筋立ては、背景が西部劇ばりの戦国時代だけに、惜しい素材だった。

蛇足ながら、縛り場面に用いられる縄だが、黒白だんだらの綿紐というのは、時代考証の結果かも知れぬが、緊

報 雑 窓 裏

縛感に乏しくあまりイタダけない。

強烈な残酷ムード

○「若者のすべて」（脚本、監

督 ルキノ・ヴィスコンティ）伊・テ
イタヌス作品、イタリフィルム配給、
有楽座、三五年十二月二十七日封切。

「夏の嵐」「白夜」に続くルキノ・ヴィスコンティの新作。素晴らしい構図とコントラストの利いたジュゼッペ・ロトウニノの画調、甘い甘いニーノ・ロータの音楽もさることながら、芸術的にも凄いヴォリュームを有する作品である。その強烈な残酷ムードとともに、ぜひ一見をお奨めしたい。

ムードを説明するのはちょっとむずかしいが、あら筋を簡単に紹介しておこう。

カティナ・パキシノオ扮する後家さんと五人の息子が南伊からミラノに移住して来た駅頭の場合から話は始まりこの家族がいかに生きて行くかが、この作品のテーマになっている。主要人物は、次男のシモーネ（レナート・サルヴァトーレ）と三男のロッコ（アラ

での愛憎の対立が、激しくドラマティックに展開される。

物欲と肉欲の権化シモーネは、弟の

ロッコと旧知の娼婦ナディア（アニ・ジラルド）との逢いびきの現場をつきとめ、仲間にロッコを押えさせて置き、その目前で女を冒す。ロッコとナディアの絶望の叫びが闇に交錯して、この場面、酷烈な印象を観る者の胸に叩きつける。悲しく悶えるナディアの白い太股よりも、現代の人間関係はこれほどまでに残酷なものかと、その思いの方が観る者の胸を、眼を奪う。おそらく、「太陽の墓場」（大島渚監督作品）等の場面を凌ぐ古今東西最も残酷な場面のひとつと云ってよからう。さらにラスト近く、追いつめられたシモーネが河っぺりでナディアを刺し殺す場面も凄絶である。ヴィスコンティの計算しつくした演出力が、冷たくしかもギラギラとした素晴らしい迫力で描破している。荒涼とした風景の中で、立木に頭を凭れさせたままのナディアは、ナイフを構えたシモーネが迫って来るのをじっと待っている。抱きつくような格好で、ついにシモーネの

東映京都作品「砂絵呪縛」

右より楠本健二 千原しのぶ

中原阿津子 近衛十四郎



新映画紹介

刃がナディアの脇腹深く貫く。この時のナディアの迎えるような抱くようなその姿態は、十字架を想わせて意味深である。その後、死にたくない死にたくないといふ河っぺりを血まみれで這いずり廻る、黒いナイロン・シュミーズ一枚のナディアを、シモーネがその背に覆いかぶさるように二度、三度とナイフを突き立てる。

彼は、ついに弟の、そして彼自身の愛人を殺害してしまうのである。

傑出した演技を見せる前記の主役三人のほかにも、パオロ・ストッパ、クラウディア・カルディナーレ等が好演している。

珍しい箱詰め場面

○「若殿千両肌」(原作 森達二 郎、監督 山下耕作) 第二東映作品 一月五週封切。

江戸っ子殿様と張り切り若侍が、逆臣共を向うに廻して、銀幕狭しと暴れまわる痛快無比、断然意表を衝く明朗時代劇、と、これが宣伝文句の概略。後半の惹句はともかく、お話の紹介はこの程度で充分である。

キャストは、浪人柚木菊之丞実勝 浦藩主桐太郎に沢村訥升、故あってその逆をやるべらんめえ浪人に若山富三郎、鳥追いに身をやつす抜荷買いの女首領お幸に青山京子、おっちょこちょいの留守居役に杉狂児、といったところを中心である。

縛り場面はラスト近く、悪家老平山主膳(加賀邦男)これと結託するやくざの為五郎(阿部九州男)一味が、中国の密貿易商張(青柳龍太郎)に麻薬と引替えに日本娘十数人を売渡そうと企てる。誘拐され監禁される若い女達の中には、翻心を見破られたお幸や、酌女のお花(円山栄子)、町娘のお常(木内三枝子)お糸(久我恵子)お波(中条宏美)らがいた。

平山邸の土蔵から、失神した女達が手足を縛られて運び出される。庭先に並べられた木箱の中に一人、また一人と封じ込められて行く。とりどりの晴れ着の上から、両足を揃えて縛られ、両手は珍しく前で縛り上げられて、その上から乳房もろとも背中へと荒縄が廻っている。さらに不必要な(失神している)猿轡まで噛まされてあって、

性・生活診療室

セックス相談実例集

発売中!!

「倒錯せる性の悶え」「少女姦の夢」など五二問を
医界の權威がやさしく解決してくれる紙上診療室



■執筆メンバー

小池創之介 西島 実
太田典礼 八 郎
宇佐美正夫 以上医学博士

新書判 美麗装
本文196ページ
¥120 24

東京都中野区江古田1-2302
株式会社 あまとりあ社
振替・東京 10756 (久保書店宛)

これを上蓋が閉められるまでの一例を
長々と見せてくれる。一例というのは
一人のことであって、十数人全部見せ
てしまうと、それだけで一時間半を費し
てしまうということなのだろうが、ま
ことに残念な話。

人間荷造りが終り、「勝浦藩御用」

の立札をつけた長持が、次々と舟着場
まで運ばれて行く。じっと見守ってい
た菊之丞が、後をつける。やがて目的
地に着くと、お幸以下の娘たちが木箱
から引き出され、足の縄だけ解かれて
張の持船へと荒々しく引っ立てられて
行く。そこへ馳けつける菊之丞、桐太
郎の御兩人、後は書かずとも、お定ま
りのエンディングとなる。

他に縛り場面ではないが、裏切りが

発覚したお幸が、為五郎一味に私刑に
あう場合がある。勝気なお幸を、青山
京子が好演していて、この場面もなか
なか印象的である。

このほかちと旧作に属するが、「黒
い樹海」(原作 松本清張、監督 原
田治夫、大映作品、十二月二週封切)の
縛り場面だけ簡単に紹介しておこう。

様子(叶順子)から、確証をつきつ
けられて、狼狽した西脇(北原義郎)
は本職が医者とあって麻酔剤で様子を
昏倒させると、美術評論家実は殺し屋

で色事師の瀬尾(根上淳)を電話で呼
びつける。瀬尾は、猫をかぶって生花
家元佐敷の愛娘令子(岸正子)との結
婚披露宴の最中だったが、足許に火が
ついたとあって馳けつける。瀬尾が用

意した偽ナンバーの自家用車に、西脇
は、昏睡している様子の手足を縛って
運び入れる。続くラストシーンにも、
同様の場面が見られる。崖際に放置さ
れて転落寸前の車内に、様子は手足を
縛られたまま押し込まれている。吉井
(藤巻)潤が、ようやく駆けつける。
この場面、まず様子の足の縄が解かれ
続いて太股下半身上半身と引き出され
る。叶順子のほてった肉体系が刺
激的である。

さらに、「朝霧街道」(監督 加藤
泰、第二東映作品)「尾張の暴れ獅子」
(監督 河野寿一、原作 野村胡堂、
第一東映作品)等にも縛り場面が見ら
れるが、いずれ詳しく紹介させていた
だくことにする。(砂 路 寛)

そうね。ハッキリかぞえた事もないけど、トルコへ来るお客で十人のうち三人は、ヘンなこと目当てじゃないかしら。私もこれで、五十人ばかりご指名のお客をもつてるけど、その内十三人は、お風呂が目あてじゃないようだわ。

：何が目あてか、ですって？

営業の秘密だから、それはカンペンして頂戴、まあ折角だから、

チョッピリなら話してあげてもいいけど。：そうね。マッサージを思い切り強くやってくれという人は大抵、マゾというんですか、あれと見ていいでしょうね。濡れタオルをナワにして、背中をヒッパタイて呉れて言う人は多いわ、ピシリという音と、湯気にほてった肌にナワ目がつくのが、たままないんですって。あるお年寄りだけど、『首筋は、モムより、君の指で軽く締めてくれ』と云って、チップを沢山くれるのよ。気味が悪いけど、チップに目をつぶって

思い切って締めてやるの。そう、両手でのど元を力一杯締めつけると目を細めて『うーむ、肩のコリが治った』ですって。

タイルに寝そべって、背中一面踏んでくれなんていう人はザラよいくら女でも、ずい分踏まれりや苦しいでしょう。ね。もちろん

私のショーバイ

ミス・トルコ打明け話

トルコのお客は

マゾが好き！

I・K 生

の。面白半分に足をつき出してやり君の塩水がいい』なんて頼む人ると、嬉しそうに丁寧に洗ってくれるの。油断して、モモにキスされたこともあるわ、おこったフリして顔を足蹴りしてやったら、仰向けに引っくり返って。

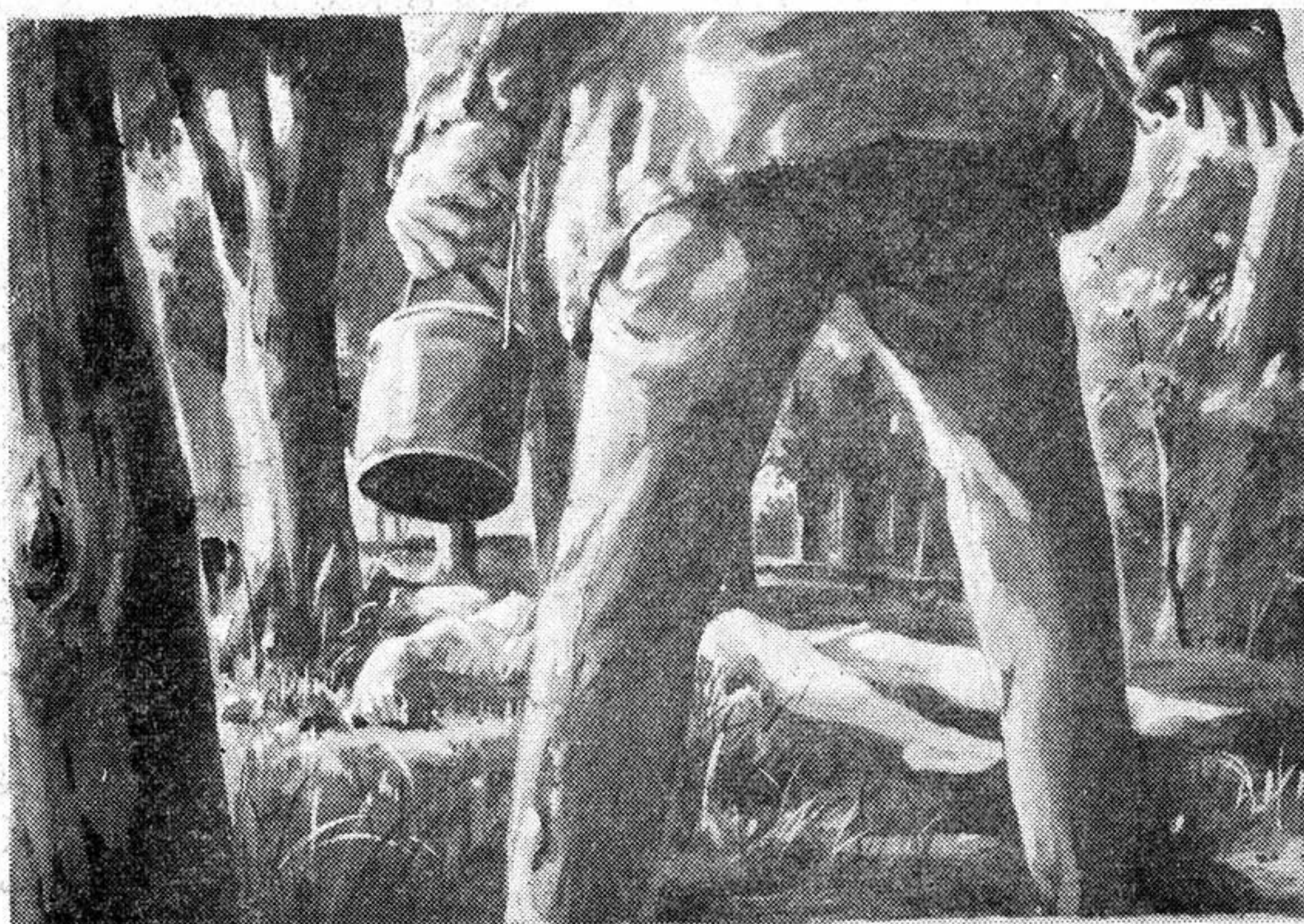
マスターがやかましくて、私達は身体を触らせてはいけけないのだう、手へキスするようにね。

うちは、スペシャルや、ズバリのサービスは絶対やりません。

うちのマスターが大体マゾ趣味だから、そういうお客さんは歓迎なのよ。

マゾのお客さんは一目でわかる

けど、胸のなかへ手を入れられるのはしょっ中よ。でも、そんな時は平手打ちをくれてやるの。打たれたくて手を出す人もあるらしいけど……。むし風呂に入っている時に、食塩水を吞ませてあげるでしょ、皆喜んで吞むわ。『食塩水なんかよ



大洞窟の奥深く狂熱の訓練と乱舞に酔う 男女たち！ ヒトラーの亡霊は蘇えるか？

瀕死の少女

一九六〇年六月のある早朝のことである。

西独バヴァリア市の郊外にある森のなかで、一人の若い女が血と泥にまみれて、息も絶えだえに倒れているのを、附近に住む老人の乞食が発見した。

しかもその娘は、むごたらしい半裸であった。乞食はあわててこのことを警察に急報した。娘はただちに病院へ運ばれ、手当てがなされた。肌には数十カ所に及ぶ、なまなましい裂傷があった。咽喉首の周囲には暗紫色の索溝がくっきりとしまついている。火傷もあった。

二十四時間後にその娘は死んだ。係官の訊問に対し、息をひきとる最後の数秒前まで、娘は

うわごとのように自分の経験した恐怖を語りつづけた。

エリカ・ハウプト——これが彼女の名である。まだ十七才の少女だった。

新興ナチズムの秘密組織の一端は、こうしてエリカの瀕死の口から、あきらかにされたのである。

ネオ・ナチズム！

あの悪魔の化身のようなヒトラーを総統とした暴虐ナチスが、戦後十六年を経過した現在ふたたび甦えったとは、あまりにも不気味な話である。

ともあれ、十七才の少女の肌には、その秘密組織の戦慄が歴然と刻みつけられていたのだ。

ナチス・ドイツが行なったユダヤ人の大量殺戮、とくにアウシュビッツや、ビルケナウなど

の強制収容所における残虐行為はあまりにも名高い。

これらの事実には「夜と霧」や「アンネの日記」さらには記録映画「十三階段への道」「わが闘争」などの作品のなかに詳しく語られている。

しかし、これらの悪魔的な組織の実態は、ナチスの崩壊とともに地上から消え去ったはずではなかったか。

ところが、エリカ・ハウプトの言葉によると、新しいナチズムはドイツ復興の地下にかくれて、ひそかに羽ばたきをはじめたというのだ。

エリカがなぜかれらの地下組織を知るに至ったか。そして、彼女はなぜ死に至るまでのリンチを加えられたか。

エリカの断片的な告白を継ぎ合わせるとつぎのような怪奇に満ちた物語になるのだ。

狂乱の洞窟

五月上旬のある夜、エリカは

ネオ・ナチズム恐怖の地下組織

光 脇 森

市内繁華街のダンスホールで遊んでいた。(彼女はいわゆる不良少女だったらしい)

すると一人の青年が彼女に近寄ってきて手をさしのべた。精悍な風貌をした、たくましい青年だった。エリカはひと目でその青年に好意をおぼえ、彼と数曲を踊った。

踊りながら、彼は自分の名をエリカに教えた。グッコウといった。

グッコウの踊りはけっしてうまいとはいえなかったが、エリカは彼の、鷹のような鋭い容貌に、すっかり魅せられてしまった。

このグッコウこそ、ネオ・ナチスの新党員スカウト係りだったのである。

彼女は、その後数回グッコウと逢って遊んだ。そして彼女はいつのまにか自分でも知らない間に、新しい女子党員の一人に加えられていたのだ。

エリカは、ナチズムそのものの

をよく知らなかった。無理もない。第二次世界大戦が終わったとき、彼女はまだ二才だった。

しかし、エリカはなぜかこのネオ・ナチズムの理論に、ひどく感心してしまった。あるいは興奮にふるえる弁舌で、執拗に説得するグッコウの熱っぽい体臭が、彼女を魅了したのかも知れない。

指導者は、戦争末期ヒットラー直属下のドイツ国防軍大佐で名はハインリッヒ・ビュルガーということを、やがて彼女は知らされた。彼は反共主義者であり、同時に反民主主義者もある。つまり熱狂的な国粹主義者なのであった。

かれらの地下組織における重要な仕事の一つに、青少年男女の実際訓練があった。それは、絶対的な秘密のもとに実施された。場所は特定の倉庫、山林、または洞窟のなかなどである。

数十名の青少年男女が、指定の場所へひそかに集合する。

訓練はまず「ハイル、ヒットラー！」と右手をあげて忠誠を誓い、

「ドイツチェランド・ユーバーアルレス——」（ドイツはすべての上に）

の西独国歌の合唱によつてはじまる。

つづいて実弾射撃、擲弾、刺殺、格闘などの実習が行なわれた。将来においてその実技を、反共のための戦闘に役立てるためであり、さらにはアメリカ、イギリスによつて与えられた民主主義を、実力をもって破壊するための訓練だった。

かれらのリーダーは、肩に驚のマークのついた黒シャツを着ていた。そして戦時中にゲーリングがいつも持っていた元帥杖によく似た丸い細杖を手にしていた。彼はその杖をふるって号令した。

異常なほどにきびしい訓練だった。若い男女たちの素肌は、すり傷だらけになり、血がにじ

んだ。かれらは、その傷を互いに見せあい、くらべあうことを誇りにした。

エリカ・ハウプトがおもに訓練を受けた場所は、バヴァリアの山中にあるスペルンキングという洞窟だった。これは世界でも屈指といわれて、奥底は地球の内部まで届くといわれるほどの大きな洞窟だった。

エリカは、この洞窟のなかで多くの若い男女たちと一緒に、まず、日本のジュードゥを教えこまれた。

湿った部屋のなかには数個の石油ランプが、あかあかと燃えていた。かれらの全員は、下半身にうすい布地のトレアドル・パンツだけをつけ、腰からは裸だった。

乳房を露出した娘たちが、男子党員と組み合い、投げ合い、寝わざや絞めわざなどに夢中になった。エリカもその中の一人だった。

かれらの眼はそれぞれ加虐的

な、そして被虐的な興奮に酔つて、呼吸をあらくした。汗にまみれ、乳房を触れ合いながら、それでもなお、うめくように、「ハイル、ヒットラー！」をさけぶのだった。

夢幻のような異常な恍惚境があった。これらの訓練は、あきらかに性的な饗宴がふくまれていた。さらに、男女たちには強烈なアルコールと麻薬が豊富に与えられた。

洞窟の内部は、狂乱の舞踏場と化していくのだった。ネオ・ナチズムが、男女青少年たちをとらえて放さない秘密は、このへんにあるらしかった。

裁判と処刑

エリカ・ハウプトは不良めいた少女ではあったが、この度を越えた狂宴に、長い間酔いつづけることはできなかった。彼女はヒットラーの亡霊を信じなかった。まもなく彼女は、黒シャツを着たリーダーに、脱党を申

ハガキください、目録送ります！

- 小社では本誌のほかに、毎月おもしろい単行本を続々刊行しております。
- これだけ読んでも楽しめるゾクゾクするような内容目録が用意してあります。
- ハガキに御住所、御芳名をハッキリ御記入の上「裏窓四月号で見た目録送れ」とお書きになって御投函ください。すぐお送りいたします。

申込先 東京都中野区江古田一の二三〇二 久保書店営業部

海外実話

したのである。

この秘密組織からぬけだすことが、ただちに死を意味することとを彼女は知らなかった。

たちまちエリカは、洞窟内に禁足された。

裁判がひらかれた。狂信的な邪教の儀式にも似た一方的な裁判だった。正面の岩壁には、彼女をにらむようにヒットラーの肖像写真が掲げられていた。

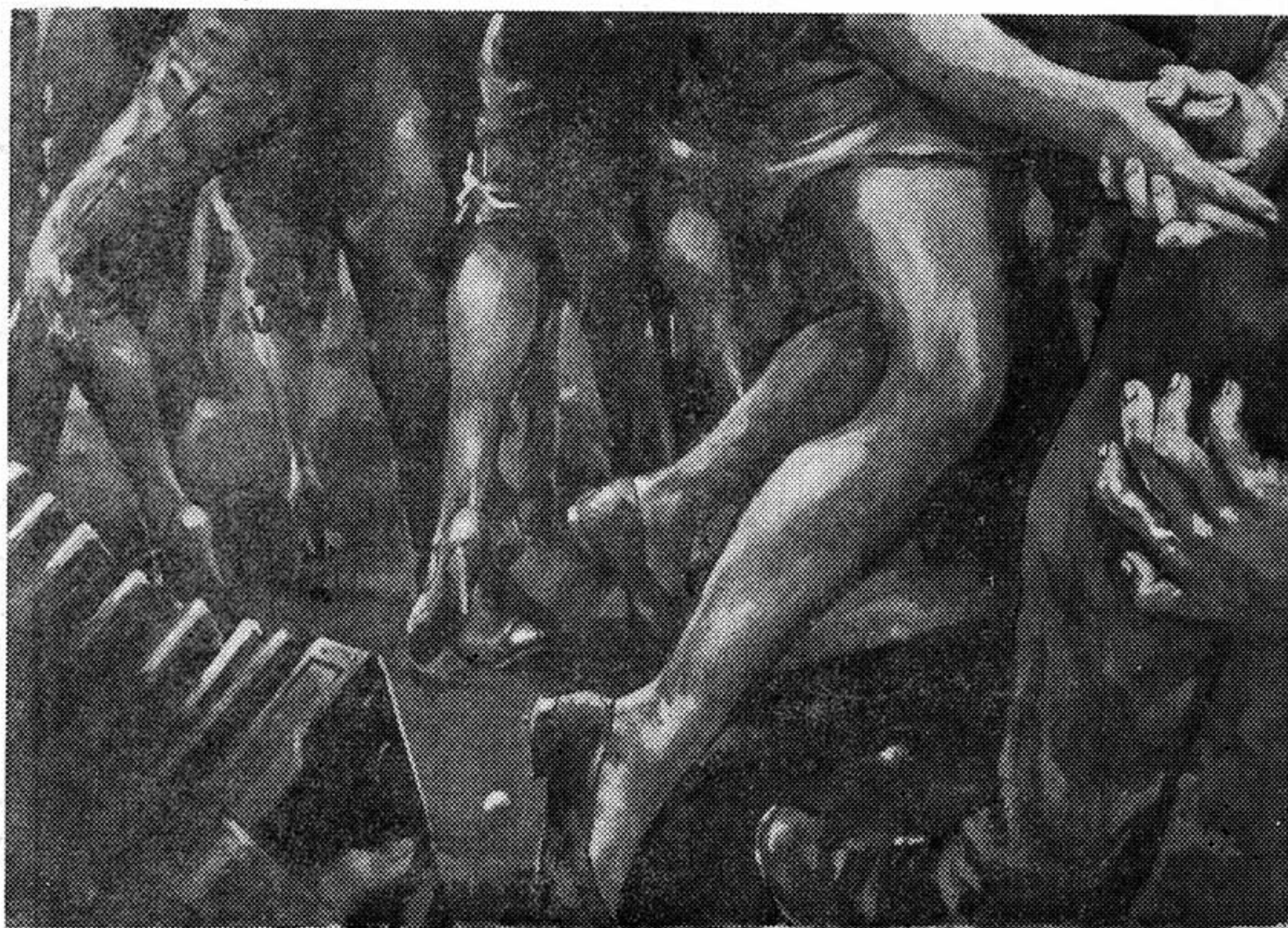
鷲のマークの肩章をつけた、らしいの男がつめたい眼で宣告した。

「エリカ・ハウプト、お前は有罪だ！」

脱党する意志をほめかしたことが、すでに罪悪なのだ。

エリカの舌は恐怖でひきつった。口がきけたとしても、弁明はゆるされない。

エリカはパンティ一枚の裸にむかれ、スベルンキング洞窟内の奥深い処刑場までひき立てられた。党員たちが、そろそろと後から従った。



天井からは水がしたたり落ちていた。石油ランプの赤い焰が岩壁に大きな人影をゆらめかせた。

そこには、X型に組まれた材木が立っていた。磔柱だった。

エリカは両手をバンザイにあげた形でそこへ縛りつけられ、悲鳴をあげた。両足首もひろげて縛りつけられた。

全身の声をふりしほってエリカは哀願した。だが、ゆるされなかった。

処刑係が二人いた。多勢の党員たちは厳粛な表情で見物の姿勢をとっていた。

処刑係は長い皮鞭をもって、エリカの左右に立った。

「ユンタ（一つ）！」

皮鞭は巻きつくように、エリカの裸身を叩いた。

エリカの咽喉から鋭い咆吼があがった。眼の前に赤黄色い火花がひらめくのを、彼女は感じた。彼女はのけぞってあばれ、磔柱はぐらぐらとゆれた。

「ツワイン（二つ）！」

処刑係は数えながらエリカを打った。エリカの肌は皮鞭がくいこむたびに裂けた。血がにじみだした。

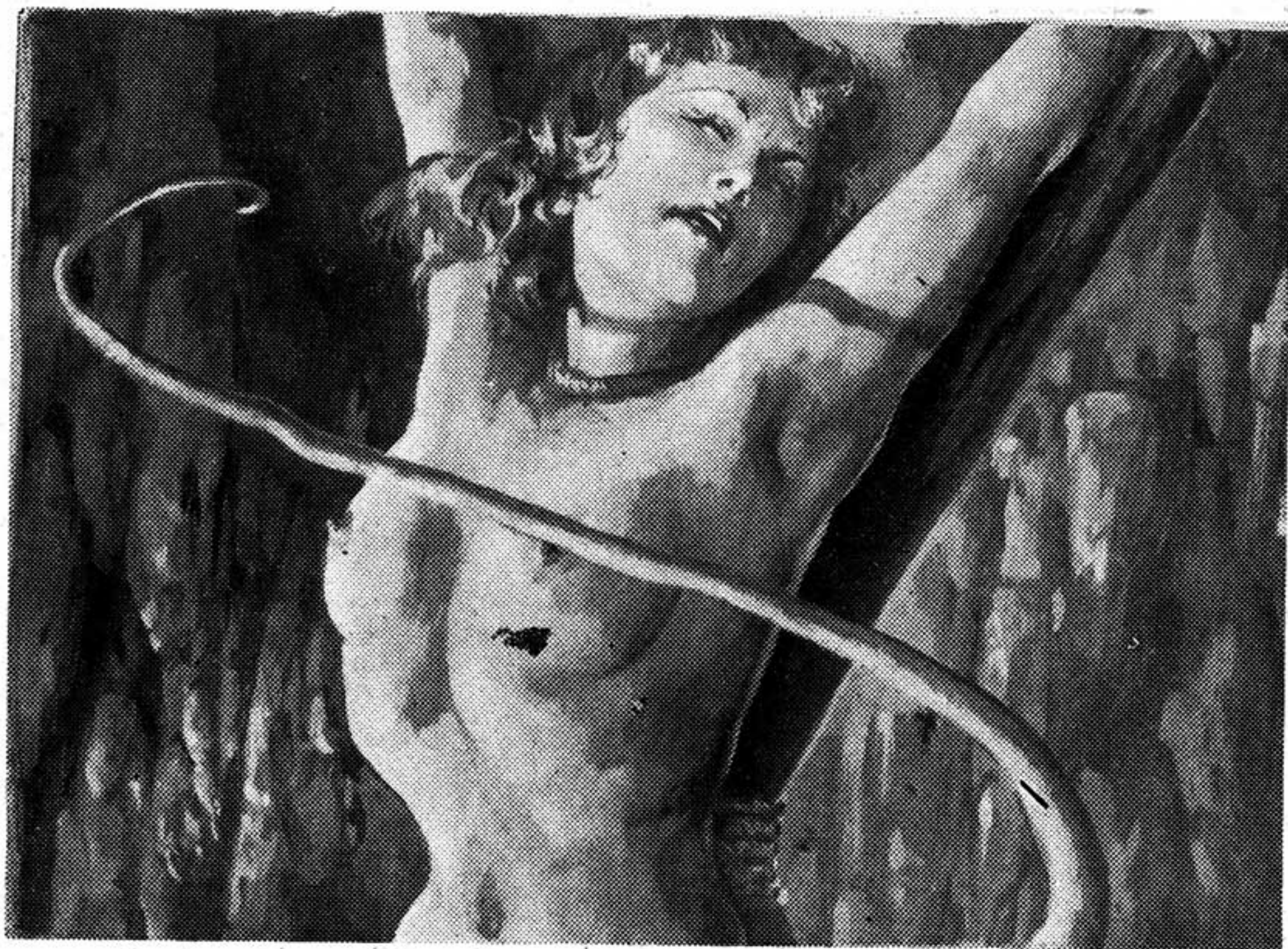
鞭が自分の皮膚に、焼けた金串のように熱い痛みで巻きつくのを、エリカは七度までおぼえていた。それから後は気を失った。

意識をとりもどしたとき、エリカの全身は水浸しになっていた。髪までが濡れていた。

磔柱からおろされ、両手両足を背中に縛りつけられたまま、腹這いの恰好で、洞窟のなかの水たまりに浸けられていたのだった。

眼をあけると、エリカの周囲には、れいの乱痴気酔いどれ騒ぎがはじまっていた。アルコールと麻薬に溺れた男女たちが、「ハイル・ヒットラー」をわめき散らしながら、踊り狂っていた。

皮鞭を持った二人の処刑係り



は、まだエリカのそばにいた。背後に縛りつけられたエリカの手足の縄目には鎖がついていて、その鎖は垂直に天井へのびていた。

滑車の仕掛けで鎖が巻きあがると、エリカのからだは水たまりから引きあげられ、さらに腹を下にして宙に浮いた。ぎりぎりという鎖の音を彼女は苦悶のなかで聞いた。

肩や腕の関節がみしみしと鳴り、折れるかと思った。エリカの腹部が、男女党员たちの狂態の頭上まで吊りあげられると、そこでまた皮鞭がうなりはじめた。

エリカの乳房や腹部は交差して裂け、そこから新しい血がにじみだした。彼女はもう悲鳴をあげる気力も体力もなく、鞭の嵐を受けた。

それから、党员たちの数人が手に手に篝火の一枝をつかみ、吊られたままにいるエリカのからだの下に寄ってきた。

かれらは篝火の焰を、エリカの胸や腹にかざした。焰は彼女の乳首や咽喉や腹部を、ちりちりと焦がした。エリカは最後の絶叫をあげた。

そして彼女は、二度目の気絶をした。

恐怖の影と

実体は？

エリカは、その夜のうちに、バヴァリア郊外の森林の中に棄てられたのである。

一時なりとも息をふきかえしたのは奇蹟的だった。彼女の首の周囲には、皮鞭によってしめられたと思われる索溝があり、肋骨の数本が折れていた。

エリカの恐怖の告白をきいた西ドイツ警察当局は、ただちにスペルンキング洞窟内に係官を派遣したが、なんの証拠を発見することもできなかった。

数名、あるいは数十名の人間の足跡をかりうじて確かめることができただけである。

瀕死におけるエリカ・ハウプトの供述は嘘だったのか。あるいは、うわごちにすぎなかったのか。もし、でたらめだとしたら、彼女の全身に克明に残された徹底的な加虐の痕が不可解である。街にたむろする不良少女たちやリンチにしては、あまりにも残忍すぎる。

ナチズムの復興は、呪わしい記憶におびえるドイツ平和市民の幻影なのだろうか。しかし、現実に新ナチズムを称える政治団体が、西ドイツに厳として存在するのを忘れてはならない。

すなわち、党主ベルハルト・ステルン（元ナチ將軍）のひきいる団体は、米英仏などの民主主義国家に迎合しながら、合法的な政党として、堂々と一部の国民の支持を得ているのだ。

一九五五年の総選挙では、サクソニアで十一名、バヴァリアで六名の議員を当選させた。また西独で二十以上の都市の市長

が同党関係者によって占められているという。日本における前首相は、前大戦当時大臣をつとめた岸信介氏であつた。現要職の中にも、かつて軍国主義をふりかざした人物が無きにしもあらず。はたしてこの場合、比較できるかどうかは国情のニュアンスからして疑問だが、われわれ平和を熱望する一市民の胸にはどこかすつきりしないものを感じるのには致し方ないことではなからうか。

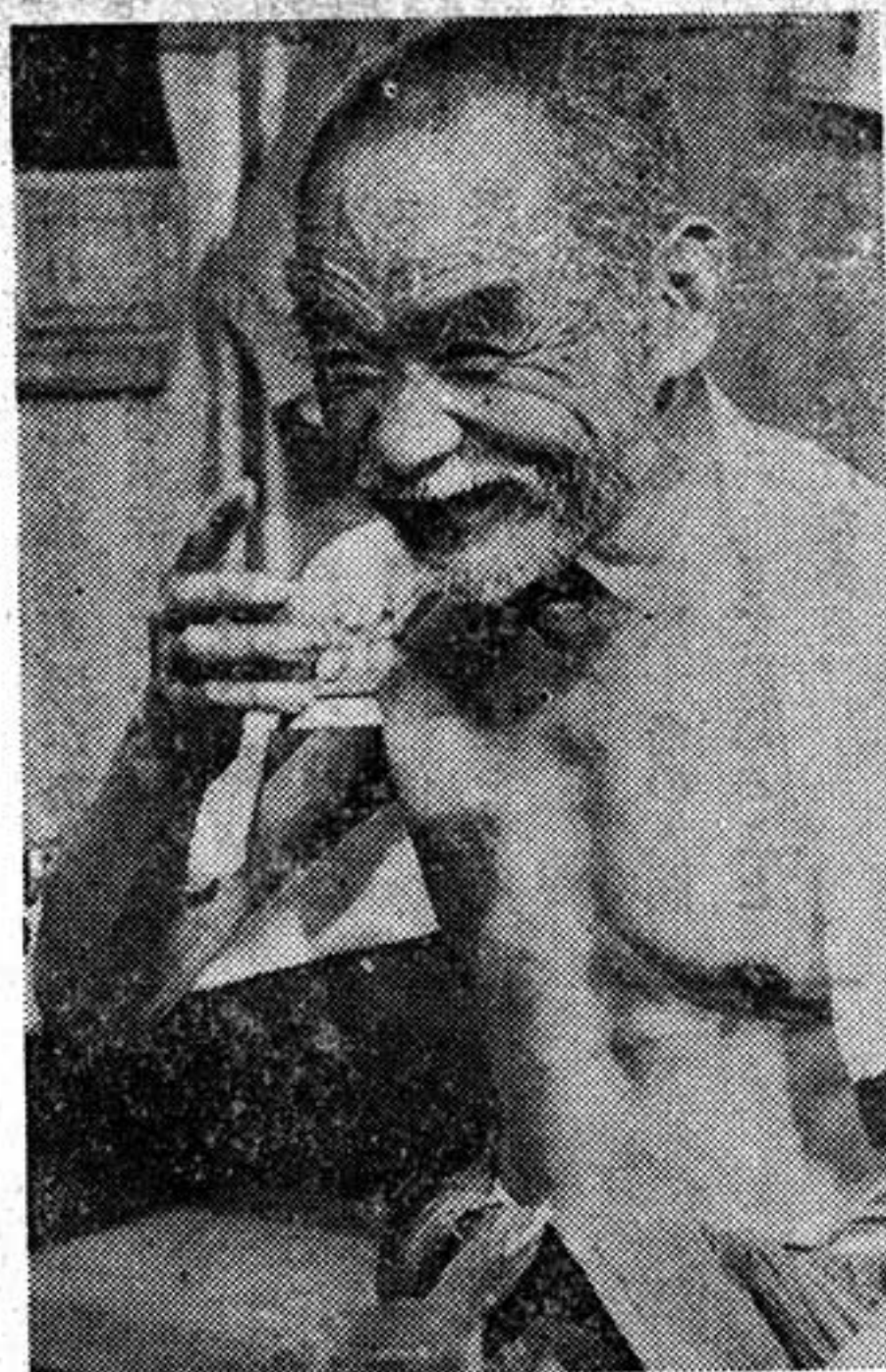
切腹した二十才の娘

★島原市湊新地町にある港旅館の女中さんが、こともあろうに昔の武士そのままの腹切り自殺をとげて話題になっている。

★平松央也さんという20才の娘さんがその人で、1月6日午後6時すぎ同旅館の離れの一室でみごとな切腹をとげた。使った刃物は出刃包丁。いくら気の強い九州女性でも、ずいぶん痛かったにちがいない。

★島原署の調べでは、自殺の原因は恋人のところへ無断で遊びにいったのを朋輩に知られ、それを苦にして——とある。はっきり自殺だということがわかっているから、それ以上の捜査も不必要ではあろうが、ただそれだけの原因で20才の娘が自殺などするものだろうか。

★しかも、出刃で腹を切り裂くとは——。あまりにも、時代めいた壮烈無残さである。なにやら、ふかい意味合いが感じとられるニュースであつた。（矢桐）



晩年の晴雨画伯。ある夏の日ざかり、一パイ呑んでいるゴキゲンな笑顔。

出席者 (発言順)

伊藤 大佐 東高 須
藤橋 藤橋 会 磨
竹月 倫喜 利
酔皎 郎駒 鐵 之

(粹古堂主人)
(芝居絵画家)
(造型美術家)
(漫談家)
(日本生活心理学会 会長)

2月6日夜 神田駅前お座敷バー“わだち”にて

馴れ染めのころ

司会 本夕は、皆様お忙しいところを、お集り下さいまして、ありがとうございます。伊藤晴雨先生が、去る一月二十八日に亡くなられましたのですが、風俗画家として、また責めの研究家として高名だった先生を失った事は悲しいことだと存じます。ここに深く哀悼の意を表する次第でございませう。そこで、晴雨先生と古くからお知り合いだった皆様方にお集り願ひまして、最後の浮世絵師と云われている晴雨先生の、若かりし頃から今までの風貌を、皆様それぞれの角度から、語っていただきたいと思っております。

早速ですが、竹酔先生が晴雨先生とはじめて知り合われたのは？
伊藤 神田明神のそばの芸者屋街に田村秋子の父親が小料理屋をやっている、そこで何の会か忘れたが会があった時、はじめて会ったんです。それからずっと交際が続いて、最後までおつきあいしたわけです。

司会 月皎先生の馴れ染めは？
大橋 大正六年ぐらいになりますか……その前に「活動写真界」といったか、映画雑誌がありました、そこで似顔絵の募集があったんです。それにはじめて投書したのが、一等になったんですが、その選者が晴雨先生だったわけです。その時分神戸にいたんですが翌年上京してその雑誌社を尋ねると、先生に紹介してやるということでお会いしたんです。すると上京したばかりだったら家へ来たらしいといわれて、お世話になったんです。その時はまだ上の坊やがよちよち歩きで、菊さんが赤ん坊だったんです。それから一年ほどいる間に講談社の挿絵や地方新聞などにも、ぼつぼつ絵を描いていきました。

佐藤 僕は昭和初期から四年ぐらいまで先生の所にいてその後も昭和八、九年ごろまで行ったり来たり、洋画やってたから少し離れたりしていました。僕の場合は、版画を研究してたというんで、先生の方から来てくれといわれたんです。それと同時に、舞台装置の方もやってみたらどうだというんで、お世話になったんです。

司会 東さんはどの時分からですか？
東 私は皆様方から見るとずっと最近でござい

でんを伯画雨晴

んしょうが、放送局が愛宕山にできた時分ですね。上野の西郷さんの裏に常盤花壇という有名な料理屋がありまして、中林という人と、銀座に披露目屋の元祖がいまして、中林は東京市の囑託やってたから何か相談があったんでしよう。その席上へ呼ばれて行ったら正面に晴雨先生がいらっしやったわけです。

佐藤 最初の奥さんの竹夫さんとは明治二十四年に結婚されて、大正九年に別れたんです。その間にモデルに使っていた帰世さんが二度目の奥さんになって昭和三年ごろまでおられた。そのあとが、とし子という婦人で、やはりモデルに使っていた人です。菊子さん

の上に兄さんがいたが、この正秋さんというのは戦死しました。ここで一番古いおつきあいは月皎さんですが、その時分は先生はやっぱり痔だったですか。

大橋 痔は古いですね。それでもちゃんと心得ていて、私有家を持ってからいらしてくださった時なんかは、女房が座ぶとん出すと、絶対すわらないんですよ。人がいやがったり

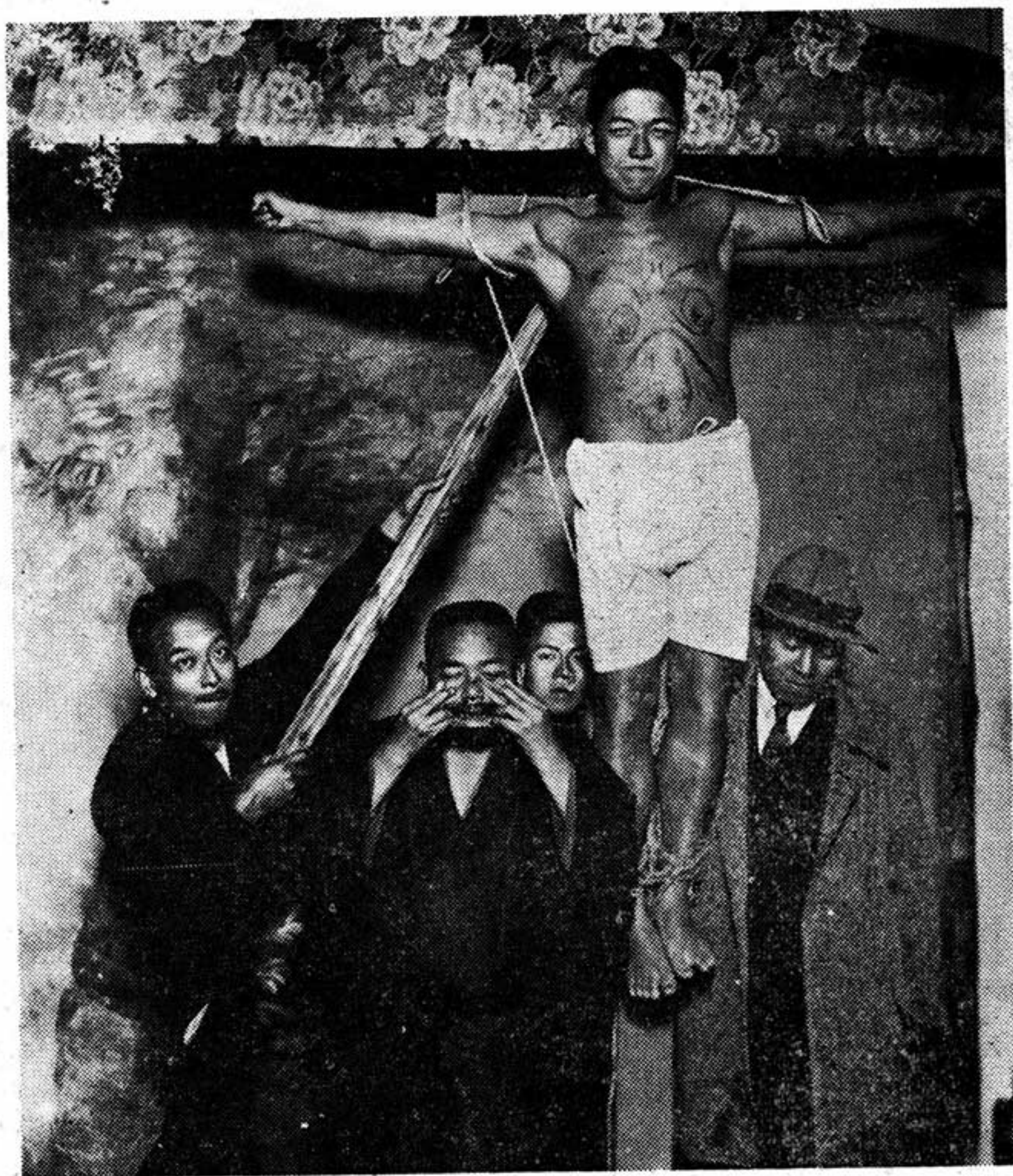
なんかしてれば、かえってやってやろうというふうに出るんですね。(笑)
伊藤 皮肉な人だからな。

芝居の切符で未決

大橋 その時分は新派の仕事を、新富座とか歌舞伎座にしても新派の方をずっとやってましたね。番付まで自分で描いてましたね。



“火あぶり”の舞台で。壮年時代のおもかけ



中央、着物姿が壮年の画伯。こんなおどけた面もあった

伊藤 沢正のもずいぶん描いてた。
佐藤 前進座、五郎、明石潮、新国劇、その
時分、舞台装置家として非常に売れた時代で
す。三軒ぐらいかけもちしてたこともありま
す。

司会 責めの芝居なんかずいぶんあったとい
うこと聞いていますか……。
佐藤 戦争前に矢来下の江戸川劇場といいま
したか、あそこで自分の好きな芝居を、背景
まで描いてやっておりましたね。

東 それから千住の小松亭とかね。

司会 高橋先生はいつごろからでしたか？

高橋 ほく晴雨先生にいわれたことがあるん
です。一番初めにお会いしたのは昭和三年何
月何日と。

司会 先生はよく「あれは何年何月何日のこ
とです」というように細かい日付けをスラス
ラと空でいわれましたね。

高橋 昭和三年ごろすでに変態資料とか前の
デカメロンに何か発表されてますね。

伊藤 梅原北明が先生に無断で写真のをせち
やって先生がかんかんに怒ったことがある。

佐藤 大体先生の仕事は、芝居の舞台装置と
看板とプロト、挿絵は「サンデー毎日」「週
刊朝日」「講談雑誌」「文芸倶楽部」等に盛
んに描いていました。

司会 静かな雨という静雨の号を使っておら
れたのはいつごろですか。

佐藤 大正時代ですね。

司会 先生のお仕事はいろいろ誤解された
り、苦心なさったでしょうね。あの時代のこ
とですから。

伊藤 「田之助絵巻」だったか、巻物を発行
した時、丸の内の重役どもへチラシを配った
ら、投書したものがあって丸の内署へ発所元
も晴雨さんも呼ばれてね。

見たもの聞いたもの

わが闘争をみて

★肉がなくなり、骨に直接皮膚がくっついてガイ骨寸前にまで痩せ細った人が、ポロ布にくるまり、じっと死を待っている姿。道ばたに捨てられてある餓死体のそばを、これも餓死寸前の人間が、幽霊のようにうつろな姿で歩いていく。ドイツの警備兵から、なぶりものにされる子供たちの顔が、極度に痩せ衰えているために、死期近い老

人のように変貌している。全裸の死体を山積みにした手押し車が、あとからあとからつづく。スクリーンから死臭が匂ってくるような錯覚さえ感じる。★当時ナチは、ユダヤ人とはこんな劣等民族であるという教育映画をつくるために撮影したのだそうだと。ところが、あまりの凄惨さに彼ら自身も気がとがめ、かえって国民がユダヤ人を同情し

てしまうおそれがあるというので、上映中止になったフィルムだそうである。★ここに描かれてある「残酷」には、ロマンとか美などの感覚がひとかけらもなく、息がつまるほどの恐怖があるだけである。私たちのS・Mは、あくまでもプレイであり、戦争や独裁制による残虐行為とは、絶対に異質のものであることを、改めて認識した。

佐藤 「論語通解」の時、まだ警視庁が大手町にあった時分ですよ。どこからか足がついて、間もなく朝、四、五人やって来て「論語通解」と責めの写真を少し持って行ったんです。僕はその日に帰してくれたが、これはたいへんだというんで、翌日演舞場と市村座へ行って切符貰って、お世話になりましたぐらいなこと係にやったんです。その時先生は一晚だけで、たいしたことないんで帰されたんですが、日々新聞だかに三段抜きで先生のことが出たもんだから今度また警視庁か何か、本庁の方へ呼ばれたんです。そうしたところがその晩先生と二人でガチャリンコンやられて、小伝馬町の仮牢みたいな留置場へ入れられて、翌日市ヶ谷へ持って行かれました。未決ですよ。ワイ画の方はたいしたことなかったんですよ、今度は贈賄問題にひっか

かったんです。切符をやったことが新聞に出たもんだから。(笑)

髪が乱れが魅力

高橋 実験の会を始めたのはいつですか？

佐藤 大正時代から、こそこそやりましたよ。

伊藤 先生の責めは日本髪から来てるんだろうと思うんです。

司会 日本髪を崩すところに、先生のセックスに感じるようなものがあつたんですね。断髪やウェーブなんかじゃ感じなかったんですよ。

佐藤 家の二階には古いカツラが幾つも置いてありました。

大橋 佐藤さんの前に山崎という人がいて、それが王子かどこかの辻堂へ願をかける女が髪を切って上げてあるのを持って来いといわ

れて、取りに行かされていたこともある。佐藤 芸者が来ると必ずうなじをのぞくんです。あらこわいわといって逃げちゃう。

大橋 無感覚の人間は嫌いなんですよ。だから道歩いてても「これは縛れるな」というのを見付けられるので、縛られる方も何かそういう感じがなければ、ただむりやりにというんじゃないけなかつたんですね。

司会 相手はマゾヒストでないといけないうけですね。

高橋 たしかに本筋のサジストですが、毛髪フェチシストに違いない。髪が乱れが一番いいんでしょう。すべての乱れだと思ふね。憂いを含んだようなうらめしいような顔が一番いいんだといって。その中にもちろん女の快感も入ってなきやいけない。

東 どっちかというところと少しうらぶれてる方が



上、旅芝居の楽屋で画伯の演出による写真。下、画伯はこんな日本髪 of 美しさに心ひかれた……。

調べ物してください」といって、なるべく僕にも見せないように下でやってるんです。それがいつまでもかかって、しまいに電気がとぼってくる。何をしてるかという、来るなりきれいに結った髪 of 元結をぶつぶつ切っちゃって、「はいちょっと」というんでとうとう縛られちゃって、モデルの間で「あの先生はたいへんな先生だ」と評判になりました。ある日先生の床の下に、例の細引きと荒縄が入ってたんですよ。その晩何をやったのかなと、ちょっと気になりましたね。（笑）

モデルの災難

いいんじゃないかな。

大橋 結局、出発点が浦里だから。

佐藤 先生の責めに関するコレクションの昔からのものに、浦里の版画や芝居の写真がたくさんありましたよ。

佐藤 ある時、宮崎のモデルを頼んで、金をやって日本髪結わせて画を描くというので、女は喜んで来たわけです。「佐藤君は二階で

大橋 それは昔もいってました。「吉原へ行



芝居の一場面、面伯が撮らせたもの

っても縛るか、縛られるのがいやだったら、しょうがないからそれを絵に描いてからでなきや……」ということでした。

高橋 晴雨さん、ホモの気あったのかね。

司会 ほくが伺ったのは、女でなきやいけないということなしに、女形にカツラかぶせて縛って、後から何するというようなことでしたか……。

東 先生はどっちかというと、直接の肉体の接触というものの必要がなかったのじゃない

かな。

司会 たとえば女の人をそういう形にしておいて、そういうものを見ながらというわけですか？

東 火あぶりね。高橋義信と五月信子のやつたあれは先生がモデルだね。大阪の角座かどこかで、大辻司郎が「いいもの見せてやる」というんで見たら、かぶりつきで芝居を見ながらたのしんでるんだ。先生という人は純なところがあるね。

高橋 警視庁

のX氏が鳩の町の女から手に入れたラブレターがあるんです。晴雨先生が女に出されたラブレターだといってるんです。昔の教科書みたいな几帳面な字で綿綿と書いてあって、全部ルビが振ってあ

るんだ。(笑)

佐藤 一応モデルとにらんだ女がカフェなり小料理屋にいるとなると、くだらない金をむやみと使いに行く。こっちは菊ちゃんと二人で食う米がなくて、正月に質屋へ行ったことがあります。竹酔さんとこへ「論語通解」持って行って貸してくれといったら、竹酔さんなかなか渋かったね。(笑)

東 楽屋へある時風船持って入って来たね。風船にロセンとタレの絵をデコデコに描いてふくらまして、また、それ持ったまま電車に乗っちゃう。おまわりが追っかけて来たよ。「俺が持つてる分にはいいじゃねえか」と酔っ払ってるから謝らない。最後にパンと割っちゃって「証拠が無いじゃねえか」というんだ。(笑)

人が垣根を作ってくれた

佐藤 まだ五郎なんかが演舞場でやってたころ、表に警察の提灯が置いてある。東劇、演舞場、歌舞伎座の客が有楽町まで当時歩くんで交通整理だ。昔の警察の郵便局みたいなマーク、赤と黒の二本棒入ってたあれを持って、先生が電車道を歩いて、尾張町まで行って捕まったんです。(笑)五郎さんとこのだれかが行って謝って始末書書かされた、「こ



画伯の演出による芝居の一場面

のやつが直し
やがったとい
って。(笑)

高橋 じめじ
めしたところ
がない人だ
ね。

東 正面切っ
てやる方が好
きなんです
よ。暗くしち
やいけない、
見えなきやい
けないんで
す。たいした
もんだった

も聞かないんですね。(笑) 先生と一緒に出
ると、どこからどこまで歩かせられるんで閉
口しました。

司会 いつか新橋で、呑屋の中を突っ切って
行かれるんです。入り口から裏口まで「近道
だよ」とおっしゃって突っ切るんですが、つ
いて行くと店の人に怒られました。先生は先
にとことこ行ってしまつて、私だけひっかか
ったんです。(笑)

大橋 車坂かどこかののみやへ行つて、勘定
が足りなかった時、先生は電車の切符を片方
出すんです。(笑) それで勘定合ってるんで
すから大威張りだけでも。

佐藤 変った人もいましたね。先生の絵がほ
しいといつて入ってきたんです。私がモデル
になるから絵を描いてくれといつて。どこか
の教員で、女子美術か何かのモデルになった
けれどもおもしろくないんです、縛つてモデ
ルになりたいという。じゃあキリストの絵を
描きましよう、というのでカツラをかぶせて
棒に縛つて。

高橋 縛られてれば何でもいいのかね。

司会 縛られてるといっても、シュミーズや
何かじゃだめなんですよ。やはり頭の毛が長
くて日本髪でない。

佐藤 明石潮が絵を描いてもらいに来まして

の提灯おもしろいよ、みんな止りやがる」な
んて先生は喜んでゐる。(笑)

大橋 あすこの家の竹垣がこわれちゃつた
んです。そこでもって昼日なかでも何でも、

ほら、家の中で……だから、近所の子供がの
そくんで苦情が出たんです。「垣根を何とか
しろつたつて俺の垣根だから、どうしようと
勝手だ。中でやつてることも俺の勝手だ」と
いうんで、とうとう向うでもつて垣根をこし
らえちゃつた。(笑) 俺のとなりの垣根を隣り

です。

大橋 先生はおでこがガクンガクンと動くん
だ。これは俺一人じゃない、日本にも二人か
三人いるんだといつてましたね。先生の家に
いるころ買い物に行つてくると、幾らかくす
ねておいて玄関上つた所の上へ隠しておくん
です。先生は一文なしでも平気で出かけよう
とするから、「先生、電車賃上げますよ」と
いつて隠しといた小銭を渡すとうんといつて
持つて行くんです。どこから持つてきたかと

私に五十銭か一円くれるんです。「書生さん活動へ行ったらっしやい」とか「御飯でも食べていらっしやい」というから、かえってわかつちやう。(笑)あの画室は戸が歪んでるから、どこからのぞいたってわかるんですよ。先生やり出したなと思ったら見つからないように見てる。ときどき先生ひょこっと出てくるから、気をつけながらね。(笑)

「火あぶり」の真相

大橋 先生は無頓着な人でしたね。三月や半年は床屋へ行かなかつたし、顔洗うのが嫌いで、タオルを出しておくと思つたら指の跡が三本ついているっつきり。(笑)ものごとに、こせこせしない人でした。

司会 肴町の先生行きつけのみやで、いつも先生は飲むにつれて前が開いてくる。そうするとそのおかみがそれを直すのが常でしてね。(笑)

大橋 あの「火あぶり」の本当のネタは、実は私からなんです。先生の家を出て、その生活話を話してるうち、鈴木泉三郎さんが書いたんですが、昔Kという有名な新聞記者の家へ先生が通ってたわけですが、最初の奥さんの竹夫さんはその家の女中だったんです。それにKさんの手がついていたのをいただいたちゃ

った。それと一緒にあのたくさん本をもらったわけです。たいへんな古書があったでしょう。そうすると今度は、あの芝居の中で、あの女性のモデルは細君だから、細君とくっついてるのは僕だろうといわれたこともありまして。(笑)

司会 今、話の本当は自分だとおっしゃったから、奥さんとどうかなつていたのかと思つたんです。(笑)「火あぶり」のモデルが月皎先生だとするとそういうことではないんですか？(笑)

大橋 そういうことはないんです。私は二十二歳、童貞ですもの。

司会 なるほど……。 (笑)

大橋 邦楽座で見た時、「前のかかあも俺の師匠とくっついていやがつた、手前も師匠とくっついてやがる」とやるところがあるんですが、先生だけそこで手を叩いてるんです。

(笑)そこまでは全然、私は知らないし、作者に話したこともないけれども、それを勘繰って作者が考えたことと暗合しちゃったわけですね。

伊藤 晩年、「日本髪」という本を、原稿料いらなから出してくれといわれたことがあるよ、日本髪の髪形や何かの。先生七十幾つになつて細い線は無理ですよといつてるう

ち、実現せずに亡くなった。もう十年若かつたらりっぱなものできたんだが。髪に非常に執着持っていたんですね。

大橋 戦争中ですが、まだあまりひどくならない時に、銀座で展覧会をやったことがありましたね。みんなが上品ぶっているいろいろなところへ、わざわざ胡粉の絵を泥絵と称して、つまり日本画の本当のいい材料使つてでなく、看板みたいな泥絵具で描くんだといつて、どこでだったか展覧会をしました。

その時菊子さんも来て、その時分物資がとて不足なところに、お客様にコーヒーなんか出して、ゆったりしたなごやかな感じでした。

司会 とにかく御自分の思い通りのことを、力一杯やり通して来た方ですね。

大橋 他人に邪魔をされるのも嫌いだったしそのかわり、人の邪魔もしないという……。佐藤 週刊誌や何かは、奇人とか変人とかいうが、本当いって嘘もかくしもない一生をとおした人だから、これが本当の意味の真摯な生き方じゃなかったかな。奇人でも変人でもない、好々爺でしたよ。あたたかい血の通った人でした。惜しいことです。

司会 まだまだお話はつきないでしょうが、速記はこのあたりで……。どうも、いろいろありがとうございました。(終)

読者短評



◎他にも御投書は多くありましたが頁数の都合で掲載出来ませんでした事をおわびします。この欄の投稿は、ハガキでも便箋でも結構です。御自由にお書き下さってお送り下さい。今月掲載しました方には本誌次号をお送り申し上げます。誌上匿名は御自由ですが、住所と氏名はお書き入れ下さい。

(読者短評係)

◎初投稿ですがよろしく。貴誌は創刊以来その特異なムードに引きつけられて、毎号胸をときめかせて読ませていただいていた居りましたが、最近又新しく脱皮され、ますます御発展の段一愛読者として大いによろこびにたえません。早速ですが、一言、本誌の顔である表紙には色々苦心して気を配られて居られる趣が見られてうれしく思います。近頃(二、三月号)のもさわやかさを感じさせるものがあつてよいのですが、私としては、昨年の十一月号のあの深みのある配色構成が印象的でした。又以前の表紙のような美しい外国グラマーとか、外国の責め絵のよ

うなものをに入れていただきたいですネ。時代物は余り趣味ではありませんが、三月号の「責め絵秘画集」は良かった。グラビアの吉田久氏のフォトには感激しました。これからも薄物の下着をあしらったフォト是非御願ひ致します。フォトをストーリー風にと言われた「令」氏の御意見にはマンネリ化を防ぐ一つの新しい方法として賛成です。その他、種々な点で令氏の御意見には同感するものです。沖涉司氏の女間諜物は相変らずのストーリーですが、すてがたいものです。欲をいえばもう少し長くして責め場を増して頂きたいですネ。二月号の「錯誤の犠牲

者」も目先が変わった物で良かった。堂昌一氏の物は、現代、時代物どちらでも新しいセンスをもつて表現されていて好きです。山田彬弘氏の物も二編もあつて大変うれしかった。趣味ですの絵の關係の事ばかり書いてしまったようですが、結局のところストーリーはもちろん大事ですが、それに合致した写實的なさし絵はより一層それを引き立ててくれるものですから、一層の御努力を願って新しい表現を生んでいただくよう期待致して居ります。種々勝手な御願ひや前途を祈って筆を置きます。

(新潟・T・S)

◎私は「裏窓」を創刊当時からながく愛読しているが、「裏窓」程読者と共に歩み、はげまし合ひながら進歩し続ける雑誌を他に知らない。絶えず読者の意見を尊重している点が共感を呼ぶのだろう。創刊当時のうすっぱらな雑誌から、今日のS・Mマガジンに来るまでの長い歴史は常に読者と共にあつた。須磨編集長は毎号一号たりともおろそかにしないで編集している旨かつて編集後記ランでのべていたが、今日のスタイルに踏み切る英断も大変だったことと思う。3月号では表紙にあつたキャッチ・フレーズもうら表紙にもつて行ったことも読者の意見を尊重した故でもあろうか。大体大抵の雑誌ですら創刊当時こそ充実に、又読者を大切にすることが、それが二、三年経つと投げやりになるのが特長であるからだ。殊に裏窓の様なアブ専門誌で、今日の様に個性のある品のよさに持つて行った努力は高く買われてよいと思う。巷に一見してすぐインチキと判るアブ雑誌の多い中でそれを守って行ったことは大変であつたろう。S・Mマガジンになつてマンガがなくなつ

て私は一時マンガをなくすとは思ったが、やはり上品さを獲得するにはやはりけずってよかつたと思う。さて三月号はチヨット物足りなかつたので、以上最近感じたことをキタンなく申上げた次第である。とにかく読者を大切にしているという点はこの短評ランでもいえることだ。この投稿に対しての労として郵券代百円也と雑誌を恵送するということとは、なかなか出来ないことで、良心的な面がよく判るではないか。キタンのない投稿をも掲載するということはいかに度量が大きいかが判ろうというものだ。暴言多謝。

(東 一郎)

◎貴誌は他誌とちがつてとても文学的で決して人前に出しても恥ずかしくない立派な雑誌だと思ひます。「飼われる女体」はとても面白く、興味をわかせる。海外実話の黒い奴隷の残酷物語は、読みながらナチの将校にいきどおりと憎しみを感じた。今の時代なら絶対許せぬ行動である。このような実話はとても大切だと思う。今後もうこうした実話を載せてわれわれ読者に、反省と考える余地を与えて下さいわれわれはもつともつとそうし

た事実を知り、人に負けぬ立派な精神をたたき込みたいものである。それには貴誌の様な、最も身近な事実を必要とするのです。スカートの下の世界も良かった。読んでて楽しくとてもユーモラスを起こさせて本当に楽しかった。群集の中でのそうした行動は一寸したスリルであるし、作者の着眼が目に見えて面白い。マゾヒストは本当に文学的価値があるものだといつづく思われせられました。

(板橋区志村・F子)

◎「裏窓」三月号を見て、又久しぶりに短評を書いて見たくなつた。もつとも、私の短評ではないけれども。さて、三月号これは嘘ではない。いままで出た「裏窓」の中で、最高の執筆陣だ。これからもこれ以上のすばらしい物を出してもらいたい。いわば、今月号は裏窓一家のオール・スターである。これでもしろくはないはずはない。もつとも円城寺達先生などの前から「裏窓」に書いて下さる先生方が、二、三人のつていないのがいささかさびしいが。まず三月号の作家陣は、「妄執の炎」小田桐爽先生「妖説閨人形」島本春雄先生の両親分につづいて、

「黒髪さんげ」の志摩不二先生「青い情事」豊田一狼先生「あばずれから逃げろ！」長谷川勇先生など。ムネをドキドキさせて読んだ「受縛の詩」殿村恵先生。黒田史郎先生、阿麻哲郎先生。マゾ物二つ。毎号おもしろく読んでいる「裏窓タウン」。「不動堂の女」の明石先生「明治癡狂院秘話」樋口逸馬先生の読みごたえある二作。藤見郁先生「悲鳴はお静かに！」その上ステキな絵物語がまだ四篇もある、というデラックス版である挿絵の方もやはりすばらしい顔ぶれである。いちいち書いていたのでは長くなるから、印象にのこつた物、良かった物をあげてみようと思う。「Y座文芸部員」花巻京太郎先生作、根元裕先生絵、九ページの絵がよかった。「女間諜は悶える」依田精二先生作、沖涉司先生絵。これは四十五ページがよかった。堂昌一先生の絵「修羅繩小町」柳沢直彦先生作受縛の詩両方ともすばらしかった。山田彬弘先生の絵は青い情事より「明日の晩また逢つてね」の方がいくらか良かったように思う。どっちにしろ悪くない出来。「不動堂の女」小日向一夢先生絵「妄執

の炎」古正英生の絵、がいままの絵といくらか変つたようなきがする。「市民生活の中のラブ」美濃村晃先生絵よりも「スカートの下の世界」の江淵晃先生の方がちよつとよかつたと思う。ことわつておくが、美濃村先生の私はファンである。秋吉辯先生の「黒髪さんげ」および目次カットちよつとした変つた絵だ。「妖説閨人形」の中島喜美先生、久しぶりの島本先生との顔合せだ。むかしは、コンビのようだった。さて絵の方だがいつもよりいい出来とはいえないが、一三八、一三九、一四〇ページはやはり私をひきつけた。ここでさびしいのは、せっかくこれだけのさしえ家がそろつたのに、喜多玲子先生の絵がのつていなかつた事である。ここに「責め面秘面集」という思つてもみなかつた絵がのつていた。作者の名前は書いていないが、だいたい私は書いた人はわかつてる。これはたいした収穫である。どうのこうのと書いてるうちにうだうだ長くなつてしまった。いくらかいてもきりがなからこのへんでペンをおく事にする。

(品川・位加令多呂宇)



愛の園 IV
又ホ示の

祈り

乙女の祈り

志村 殿 堂 昌 一 絵

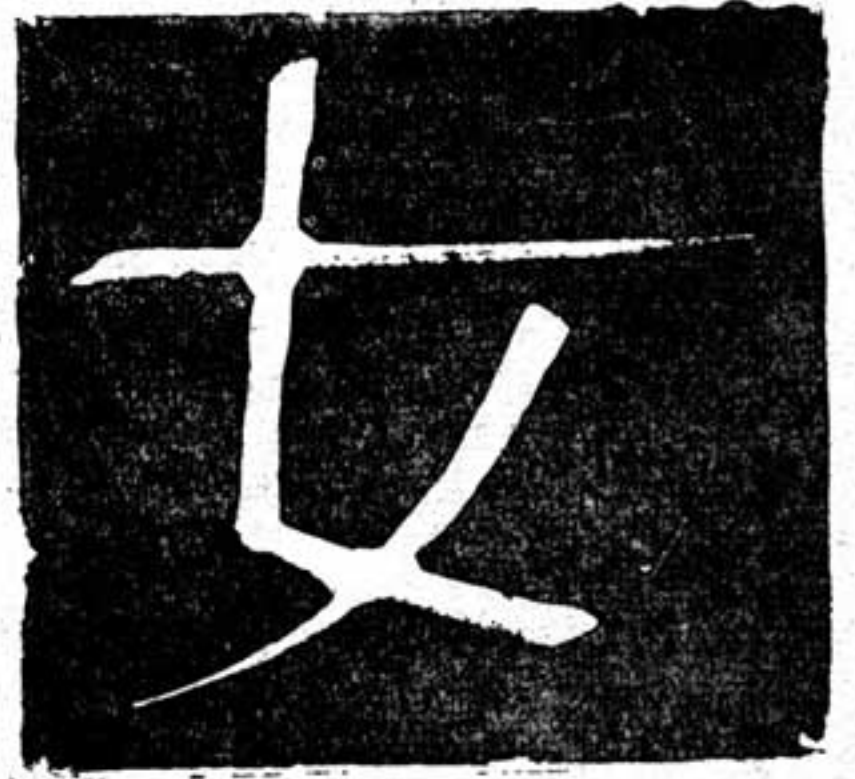
愛のうちには他人を通じて自己を無に到らせるまで苦しめ抜こうとする病癖がひそんでいる（カロッサ）——と、そんな格言があるのを知ったのは、私が高校生だった頃のことでした。
カロッサという人が何者であるのか、何国人で、いつ頃の人なのかは、全く知らないのですが、この言葉に妙子はとても惹かれました。特に「病癖」という表現が好きでした。



愛する人のために自分を苦しめ抜く——そんな生き方に憧れたのです。

いまにきつと、素敵な男性とめぐり逢って、自分を無にしてまでも尽してあげるような日々が、私にも訪ずれる——と、信仰のように思い続けてきました。カロッサの言葉は、そんな私にとって呪文のようなものでした。

もちろん、この格言は、男女の間だけの、そんな狭い意味の愛に



ついでのみを云ったものではないでしょう。

博愛、慈愛——というような大きな愛が人間の世界には存在することを、いくら妙子が悪い女であっても、否定する訳には参りません。キリストや釈迦の生涯など、この格言にふさわしいものだったのでございましょう。

けれども、妙子は「人間の思想や行動の一切は、要するに色情から始まっている」というような心理学者の説の方に強く惹かれるのです。博愛、慈愛、人類愛などの源に性意識が在るとしても、少しも構わないと思います。そういう人間くさい考え方が好きです。

妙子は別に無神論者ではありません。というよりも、神が存在するか否か——などと、そもそも考えてみたことがないのです。

人間くさいものから始まって、それが尊いまでに昇華される事柄を神と呼んでよいのなら、妙子もやはり有神論者なのでしょう。

そんな私ですから、カロッサの格言を極わめて生ぐさい意味で親しんできたのは、致し方もないことでした。

つまり、「病癖」という表現に妙子は、色情の匂いを鮮烈に感じ取っていたのです。

もちろん、これは現在の妙子が過去の自分を分析してみた上での話ですから、ポニーテールの高校生だった頃には、その頭のなかに色情などという大それた辞句が、明確に存在していた訳ではございません。

甘い云い方をすれば「乙女の祈り」というようなものだったに過ぎないのです。少し方向が違えば、その祈りは、たとえば妙子を看護婦にしていたかも知れないのです。

白衣の天使とか、ナイチンゲール精神などという言葉は、やはり憧れを他愛もなく抱かせる種類のものではしたから。

わたくし——森田妙子は警察署から出るとすぐ、激怒した義父から縁切りを申し渡されてしまい、途方に暮れた。貧しいB・Gだった私は、妻子のある男にだまされて会社のお金に手をつけてしまい、逮捕されたのだから幸い不起訴となり釈放されたのだ。けれど、もはや私の帰るべき家はない。私の母は、良人が応召で戦地へ行っている留守に「不倫の子」として私を生んだ。その母にも先立たれていた私は、捨てられた女猫のように何処にも寄るべのない身となつてしまったが、そんな私の前に突然、現われた男があつた。

自家用車を運転し、何故か私の名まで知

っている男——城田正彦は強引に私を連れ去る。

城田は警察署の筋向いにある代書屋の主人と友達であり、その二階の部屋から、手錠をかけられ捕縄で数珠つなぎにされて検察庁へ曳かれて行く私達被疑者の姿を、ひそかに眺める愉しみがあつた。釈放される日に義父がその代書屋に書類を頼んだことから、城田は私の名前を知つたのだつた。彼は数珠つなぎの被疑者達の中から特に私に注目し、護送バスに乗せられるまでの短い時間に私の写真まで撮っていた程の執心を示していた。

都心から遠く離れた町——まだ武蔵野の

面影が残っている場所にある城田の家で、私は彼に身も心も献げる甘美な女奴隷の生活を始めた。彼はある分野で活躍している芸術家。三十二歳で独身。魅力的な男性だが、過去に相当の女遍歴を経てきたらしく、中でも私の前の女、玉置美奈子とはまだすっかり縁が切れてはいないようだった。或る日——私の愚かな妬心が原因で、城田は家を出たきり帰らなくなつてしまった。手枷足枷をかけられた儘で取残された私は激しく後悔したが、そんな時、美奈子から電話がかかつてきた。

「私が助けに行き、貴女を解放してあげるわ……」というのである——。

けれども、妙子は白衣の天使にはならず、裸身へ縄や鎖をまとう女奴隷となりました。

ちようどふさわしいところに落着いた——と云えることなのかも知れません。

罰が欲しい

城田に拾われてからの妙子は、精一杯に努めてきたつもりでした。少しでも余計に気に入られる女になりたいと思い、床へ這えと命ぜられれば素直に這い、縛ると云えば従順に縛られ、鞭で打つと云えば苦痛を堪え通して叩かれました。

余り素直すぎてはかえって彼の興味を減退させる、と気が付けば故意に反抗して、力づくで屈伏させられるような誘導も、手ばかり

なく試みてきました。

ほとんどは成功でした。彼は悦び、妙子にも悦びを返してくれました。妙子の女奴隷としての努力は、間違いなくブーメランのようになんか自分に帰ってきます。

「お前は完璧だ。天成のマゾ女だ……」

白熱と化したような彼の腕の中で、そんな言葉を夢うつつの裡に聞いたこともございました。

そして——妙子は自信を持ち、つけ上がり、とうとうミスを仕でかしてしまつたのです。

女奴隷というものは、主人のために奉仕しなければなりません。女奴隷に我儘は許されません。反抗でさえも主人のためを考えた上で行なうのです。

つまり、自分を「無に到らせる」ことが肝要でした。妙子は浅は

かにも、それに成功したと信じたのです。

けれど、完全とか徹底などということは、実際にはむずかしいものです。完全や徹底が可能なのは、機械が狂人の場合だけではないでしょうか？

機械にしても故障はあり、狂人は徹底の前に自滅が訪ずれます。ヒットラーなどの例をみても、そう考えるほかはありません。

まして女奴隷としての妙子は、「奴隷」である前に「女」でした。女は褒められると他愛もなく酔ってしまいます。そして油断をし、愚かさをさらけ出してしまふのです。

妙子の油断は、嫉妬という本能的な、得体の知れない、奇妙な感情となって奴隷の努力を突破してきました。

防ぐ暇も、そう願う意識も計算も全くない儘に、私は敗れてしまったのです。

それにしても、何という愚かしい嫉妬であつたことか……。

ブラウン管の中の女に嫉妬するなんて、自分ながら呆れてしまいます。それも、夜の十一時頃に放送されるヌードショーの踊り手などであるならばともかく、朝の体操に出てくるテレビタレントに嫉妬したのですから全くバカげています。

でも、城田もいけないのです。毎朝その人を見たがり、すぐ傍で呼吸をしている女奴隷がいることを忘れてしまふのですから。

忘れられることは「無」以下に落ちることです。零ゼロになることです。無とゼロは違います。ゼロの方が惨めです。妙子は毎朝おとずれる「ゼロの時間」に堪え切れず、初めて自分を主張しました。

奴隷としてあるまじき反抗の結果は、彼が他の女のところへ行つてしまい、その女、美奈子が私を「解放」しに来るといふのです。

妙子は解放などされたくはありません。城田に許しを乞いたいの

です。

いえ、許されなくてもいい。厳しい罰を受けたいのです——。

門外不出

玉置美奈子が姿を現わしたのは、電話があつた翌日のことでした。城田から鍵を貰ってきたのでしよう。彼女は、私には開けることのできない玄関の扉を外からあけて、悠然と入ってきました。直接に会うのは初めてですが、その顔はアルバムの写真を見て知っています。

「女優の卵」と城田は云っていましたが、それは大胆不敵という感じの美貌を持つ女であり、妙子にとっては明らかに強敵でした。

「あなたなのね……」

「初めまして」でも「よろしく」でもなく、いきなり「妙子とはこんな女か」という口ぶりで、露骨に敵意を示し、私をジロジロと眺めまわすのでした。

「あなた、凄いやキモチやきで城田を怒らせたそうね……」

そんなことを云いながら傍若無人に上がり込み、応接間へ入ってしまいます。

「固くなることないわ。あなたもお坐りなさいよ……」

美奈子は自分の家へ来たような顔付きで私に椅子をすすめたりします。

「美奈子さんですか……」

「ええ、そう。あなたの手枷や足枷を解きにきたのよ。こんなにされていたら逃げることもできないわね。辛らかったでしょう」

私はできるだけ感情を抑さえるように努めて、冷静に否定してや

りました。

「辛らくはありません。逃げようなんて、思ってもみません。私が悪いのですから、罰を受けるのは当然です……」

美奈子は片頬に冷笑を浮かべました。

「相当、仕込まれたらしいわね。でも、もう駄目。いくらしおらしいことを云っても、城田はあなたに戻って来はしないのよ。元々、私の男なんだし、あなたなんか、ただちよっとの間、オモチャにされただけなのよ。諦めるほかはないようだわ。今日限り、この家から出て行って頂戴」

「いやです」

「慰籍料は改めて受取りにいらっしやい。私から彼によく話しておくわ。決して悪いようにはしないから」

「お金を欲しいと思ったことなんて、一度もありません。私はそんな女とは違うんです」

「あら、そうなの？ 変ね。あなたは会社のお金を盗んで刑事に縛られたほどの女じゃなかったかしら？」

「そんなこと……別問題です。私は城田を……愛しています。愛しているのです！」

「誰よりも君を愛す……というところね。いいわ。あなたがその気なら、力づくでも追い出してみせるから」

「私だって、意地にもあなたのいうことなんかきくものですか！」

「私のいうことじゃないのよ。城田の云いつけで来ているだけ。つまり、私は城田の代理なのよ。ほら、こうして手枷や足枷の鍵まで預かって来ているのを見ても、わかることでしょ？」

「信用しません。城田に会うまでは……」

「何でもいい。素直にしなさい！」

美奈子は、きつい眼付きになって私の手首を掴みました。手枷を外すそうとするのです。

「いや!!」

私は必死に抵抗して、「解放」されることを拒ばみました。

「城田がかけた手枷です。あなたに外すされるのはいやです！」

私はしきりに手首を振って、美奈子の鍵を寄せつけまいとします。幸い、城田がこれをかける際、両手首の間の鎖を三十センチの長さにしてくれ、しかも前手枷でしたから、反抗の自由は充分でした。手枷を外すされまいとすることが即ち反抗なのですから、考えてみればずい分と奇妙な話です。

けれども、妙子にとって手枷足枷の女奴隷らしいスタイルを保持することは、最上の自衛手段でした。そういう姿でいる限りは、いくら力づくと云っても、美奈子が私を追い出す訳には行かないのです。

もし、それをするならば城田の私生活上の秘密が世間に洩れてしまいます。

恋は盲目であり、嫉妬に狂った女は無分別とはいえ、私と美奈子との争いには、やはり一定の節度や分別が必要な筈でした。

つまり、悦虐の園というものは、たとえそこにどのような波乱が起ころうとも絶対に門外不出でなければいけないのです。

だからこそ美奈子も、まず第一に私の手枷足枷を外すそうとして躍起になるのです。

試練の鞭

手枷足枷をかけられまいとして行なう抵抗と、それを外すされま

いとして行なう抵抗では、どちらが強力か——考えるまでもなく明らかなことでした。

妙子は、この争いには最初から自信がありました。

「捕れるものなら、捕ってみろ」というのは歌舞伎にあるセリフですが、妙子の場合は、「解けるものなら、解いてみろ」となる訳です。美奈子の持つ小さな鍵は、動く私の手首の鍵穴に接触することはおろか、近づくことすらできず、いい気味でした。

「強情な女ね！」

美奈子は私の髪を乱暴に掴んで振り回します。

「素直にするか！ しないか！ さあ、どうなの！ どうなのよ!!」
何度も何度も、力まかせに振り回されて、激痛に目がくらみそうでした。

髪の毛というものは、先に掴まれた方が負けです。髪を攻撃されると、相手のそれを掴み返してやるだけの余力を失ってしまうので、



す。「愚連隊、或いは兵隊などでもそうだが彼等が髪を短く刈るのは、要するに格闘の際の不利を避けるためだ」と、そんなことを私の髪を責めながら城田は教えてくれたものでした。

妙子は齒を喰いしばって必死に堪えました。

試練に身をさらしているのだ——と考えることで勇気が持てました。

愛する男のためなら、自分を苦しめ抜いても構わない。こんな女に敗けるものか。

「ずいぶん、しぶといわね……」

美奈子は手を休め、一息いれて呆れたように私を眺めました。

「無神経なの？ 痛くはないの!？」

「痛いわ……」

「じゃ、降参しなさい!」

「いや……」

「ようし! 拷問してやるわ。本格的に責めてやる! 私だって城田と暮したことがある女よ。女の責め方は彼よりもくわしいわ。足腰の立たなくなるほど責め抜いて、ひいひい泣かせてあげるから、待ってらっしゃい!」

凄いセリフを浴びせてから、美奈子は二階へ駆け上がって行きました。

それを追う気力もなく、私は髪をおさえて呻吟するばかりでした。城田の愛玩用にと長く伸ばしている髪、彼に翻られ虐められるのなら少しも辛らくはない私の髪が、今はただ、私の体に附属している責め道具でしかありませんでした。

その上、美奈子は本当の責め道具を二階から持って来たのでした。城田のコレクションの中の一つである革の鞭です。

サーカスの猛獣使いが用いているような形の鞭ですが、これは人間のサイズの造ったものとみえて、適当に短いのです。サーカスの鞭は虎やライオンを遠くから威圧できるように造られており、その長さや太さは室内で人間を打つには適しません。あんな物で実際に叩かれたら加虐愛も被虐愛もあったものではなく、いくら妙子が悪い女でも、到底、堪え得るものではないでしょう。

その点城田が持っている鞭は、まさに手頃の品であり、一体、どこからこんな物を手に入れるのかと感心してしまいます。

妙子はその鞭で城田に叩かれたことが何度かありましたが、彼が加える鞭撻には明らかに手加減がありました。

けれども、同じ鞭を美奈子が持って現われた瞬間、私は戦慄を禁じ得なかったのです。

(この人は、本気で私を叩くつもりだわ……)

呼吸が停まるような思いで、身を硬くしてしまいました。

「顔を叩くのは許してあげるわ。手や脚も打ちたくないの。後ろ向きになって体を縮めるといいわ……」

形の良い唇から出る澄んだ声が、冷酷な言葉を投げかけます。

「私は城田の女だけれど、あなたと違って鞭を使う方にもなれてるのよ。容赦はしないわ!」

少し離れた所で身構えた美奈子は、こわい眼で私を見下ろしています。

「恐ろしいひとだわ……」

こんな女と城田を再び結び付けてはならない。たとえ命にかけても。

打たれれば、私は敗けてしまう。とにかく相手の手元に飛び込んではしまわなければ……。

「恐ろしかったら降参すればいいわ」

美奈子は右手を振り上げます。

「待って！ 私のお願いをきいて下さる？」

必死でした。油断をさせなければなりません。妥協をするような卑屈な笑顔を造って私は体勢を整えたのです。

「云ってごらんさいな」

「云いにくいことだけれど……実は私……」

と、そこまで云って不意に躍りかかろうとした私でしたが、足枷を受けている身の哀しさは、やはり充分な活動ができずに、意図した奇襲は不態な失敗に終わってしまったのです。

鎖で足を絡ませ、美奈子のすぐ前で床にのめった私は、わざわざ叩かれに出て行ったようなものでした。

ビシッ！——

背中へ受けた第一撃の苛烈さは、飛び上がるほどのものでした。

「ひいーッ」

実際にはビシッ！ だか、ひいーッだか、自分の音は自分ではわ

かりませんが、とにかく妙子は遊びでない憎悪のこもった痛撃を身に受けて、本当の悲鳴を上げてしまったのです。

「バカな女ね……」

美奈子は、あざ笑いました。

「演技力ゼロだわ。そんなことで騙せるところの！」

続いて、第二撃！

妙子の背中で焼けるような痛みが重なります……。

挑 戦

仮借のない相手から加えられる鞭が、どれほど痛く、辛く、苦しく、哀しいものかということを、妙子は骨身にしみて覚えさせられました。

どのくらいの時間が過ぎ、何度ぐらい叩かれたのかはよくわかりません。妙子は同性の悲情な鞭の下で、蜘蛛のように手足を縮めて呻吟するばかりでした。

発売中！！

切 腹

— 悲愴美の世界 —

切腹の沿革・切腹の作法・寛永美少年録・散華白虎隊・女人悲傷譜・他六篇収録！

中 康 弘 道 著

B 6 判・定価二五〇円 千四〇

■ 史実・文芸に現れた切腹に日本人の精神にひそむ悲愴憧憬の源を探る！

株式会社 久保書店 刊

東京都中野区江古田1-2302

振替口座・東京10756番



美奈子は手を休めて、勝ち誇ったように云います。

「どう？ 思い知った？」

妙子は云い返すこともできずに、ただ、ウッ、ウッ、ウッ……と泣き声を聞かせまいと努力するような声を続けるだけです。

「案外、我慢強いよね……」

美奈子がそんなことを云ったのは、私が悲鳴を上げまいとして歯を喰いしばって堪えているのを、感違いしたためでした。

私が洩らした悲鳴は最初の一撃を受けた時のものだけでした。

城田の名誉のために、悲鳴など第三者に聞かせてはならないのです。だから必死に押し殺したのです。

それでも、最初の悲鳴と、それに続く数多くの鞭音は扉の外まで洩れたかも知れません。

どうやら、美奈子には私の考えているものと同様の惧れが存在しないらしいのです。

こんな無神経な女が城田の愛人であってよいものでしょうか！

美奈子は私が屈伏したと思ったのか、又しても手枷の鍵を外すぞとします。

私は、夢中で抵抗しました。本当におかしな話ですけど、これだけは守り通さねばならなかったのです。

男に捨てられそうになった女が、胎内の児を枷に別れ話を承知しない——というような例はよく聞くことですが、妙子の心には、そんな女の気持と、似通ったものがあつたのです。そうです。城田がかけた手枷足枷は妙子にとって、身ごもった胎児と同じものでした。

追い出すなら、この儘の姿で追い出してみるがいい——。

そんな考えが脳裡をかすめた時、妙子は急に深い絶望感に襲われました。

城田は私の真心よりも、美奈子の強引な手練手管に眩惑されているのではないかしら？

もし、そうなら、私は何という愚かしい努力を、無駄な忍耐を続けていることか……。

「代理」と云った美奈子の言葉は信じません。信じたくありません。

けれど美奈子は鍵を持って来ているのです。

「手枷足枷を外すして、あいつを元の宿無し女に戻してこい……」

そんな命令をする城田の冷たい表情が、美奈子の勝ち誇った白い顔にオーヴァー・ラップして浮かんだような気がしました。

「まだ強情を張る気なの？」

美奈子は手にした鍵で私の頬を突つきます。

「城田はね、強情な女とヤキモチやきの女は大嫌いなよ。でも……いいわ。あなたみたいな変な女を」



虐めるのって、案外に面白いものだわ。私の鞭をもっともって御馳走してあげる……」

美奈子は立ち上って、また鞭を使いはじめました。堪まりかねて、私は叫んだのです。

「ま、待って！ 待って頂戴！」

「降参するの？」

「降参なんて、しません。こうなったら意地くらべよ。思う存分に責めたらいいわ。私も堪え通してみせます……」

「あら?! 挑戦なのね」

「そうよ。挑戦するわ。だけど、ここでは駄目。二階の、あの部屋で……」

「あの部屋?……ああ、往生柱のある、あの部屋のことね」

美奈子は奇妙な笑いを浮かべて頷きました。

ステレオを気儘にきく——という名目で城田が造らせた部屋。音を消す部屋。女をつなく柱や、吊り責めにも使用できる装飾のあるその部屋は、悦虐の花園の中心部です。妙子が最も親しんできた部屋なのです。

けれど——あの柱を「往生柱」などと呼んだことはありません。

私がまだ知らない、そんな古風な呼び方を美奈子が口にしたのは、腹立たしい思いでした。

妙子はファイトを燃やしました。ファイトだけではなく、計略もあったのです。

あの部屋でなら、死にもの狂いで逆襲することも遠慮なくできる——という考えでした。

美奈子に背中を鞭の柄で小突かれながら階段を上る私は、真剣勝負の場所に向かう剣士のような緊迫感を覚えたのでした。

最後の切札

全く、妙子はどうしてこうもお人好しなのでしょうか。

美奈子の虚を突いて逆襲するつもりだったのに、相手の企らみは私よりも一歩も二歩も先に進んでいたのです。

部屋へ入るとすぐ、美奈子は私を烈しく突き倒しました。そして、手近かにあった縄を掴んで背中へのしかかって来たのです。

「ひ、卑怯だわ！」

いくらそんなことを叫んでみても、甲斐のないことでした。

妙子の両腕は、ひじのところへ縄を通されて背中へ引き絞られて行きます。

三十センチの鎖はお腹へ喰い込んでしまい、両手首は脇腹の辺まで引っ張られた儘、少しも動かせなくなりました。

関節が外ずれるかと思うくらいに、ギリギリと締め上げられ、括られてしまったのです。

手首は前手錠、ひじから上は後手縛りのような形にされてしまい、反抗の力を全く封じられた妙子は（しまった！）と思い、自分のバカさ加減が情なくなりました。

「さあ、これでいいわ。ずいぶん手こずらせたわね」

美奈子もさすがに呼吸が烈しくなっていました。それでも勝った者の口調には自然と余裕が生まれます。

「憎らしい女！ もっともって虐めてやりたい。……私が男でないのが残念だわ。男なら全然別の虐め方があるのに……」

そんな言葉と一緒に、妙子の乳房は尖った爪のある手で掴まれ、責められていました。

「割合と大きいお乳を持ってるのね？ 子供を産んだことがあるんじゃないの？」

妙子は無言で身をもがくだけです。

「お尻も、私よりは大きいかな？」

何をいい出すことか——。この女はサディスチンの要素を多分に持っているようでした。

「詰らん女さ。金で自由にした女は詰らん——」と以前、城田が語ったことがありましたが、美奈子が城田に示したものは、すべて演技だったに違いありません。女らしい真情などは過去の何処かで置き忘れてきたようなタイプ——それが露骨に敗者としての妙子の眼には映るのでした。

「もう、いくら暴れても無駄よ。こうして……この体裁の悪い道具を外ずしてしまえば、あなたは自由の身に戻って、ここから出て行くのよ。どうしても厭だというなら、誰か人を頼んで叩き出して貰うまでのことだわ。そんな仕事を専門にやっている連中を、私は知っているのよ。……さあ、外ずれた」

とうとう、片方の手首が枷から離れてしまいました。

妙子は眼を閉じ、グッタリと全身の力を抜いてしまいます。

続いて残る片方——左手首を「解放」するために、美奈子は私の体を反転させようとしていました。

妙子の最後の切札が行動となって表われたのは、その瞬間でした。

発売中!!

秘められた女の心理と生理の分野にメスを執って赤裸に開陳した快著! 女性はもちろん、男性もこれによって未知の世界を開眼するであろう……。

新書判 美麗カバー装

¥130



なまめかしく、恐ろしく、悲しい女ごころの帳を開く……

女とは？

●女体人性記

高橋 鐵

未知の世界

東京都中野区江古田1-2302

株式会社 あまとりあ社

振替口座 東京10756(久保書店宛)

眼を閉じたのも、グッタリとなったのも擬態だったのです。本当は薄目をあけて私の視線は美奈子の手にある鍵を追い続けていたのです。

その鍵が私の左手首へ近付こうとした時、妙子は必死に美奈子の指に噛み付いたのです。

「あッ、何をするの!!」

美奈子は狼狽し、振りほどこうとしますが指の力はもとより歯の力の敵ではありません。

「い、痛い! いたいッ」

指の皮肉が破れたのでしよう、妙子の口の内に塩辛いような不快に生あたたかいものが拡がり始めました。

もちろん、妙子の目的はこの女の指を噛み切ることはありません

ん。鍵を奪えば、それでよいのです。

「ひーッ!」

美奈子が悲鳴を上げた時、鍵は完全に私のものとなっていました。ようやく指を放してやると、美奈子は眉の根を深く寄せて血だれの指を左手の掌で押さえ、お辞儀をするように身を折ってしまいました。

鍵を奪ったとはいふものの、妙子の両手は縛られています。他に方法はありません。

妙子は仇敵の不快な血液と一緒に、鍵を呑み込んでしまったのでした。

城田のデリカシイが、大きな鍵の使用を避けていたことは、妙子にとって幸いでした。小さい鍵一つで女の自由を封じること、彼

は快を見出してに違いないのです。

金属の冷たさが咽喉を通過した時、妙子は初めてやっと（この女に勝った）という実感が湧き上ってきたのでした。

浅ましい欣喜

「よ、よくもやったわね!!」

ハンカチーフで指を縛った美奈子は、その美貌を夜叉のように歪めて私を睨みました。

「許せないわ! たとえそちらが出て行くといったって、簡単には出してやらないわよ! どうするか見ているがいいわ!」

身を震わせて口惜しそうに叫ぶのです。ハンカチーフはたちまち血がにじんで赤い色が大きくなって行きます。

「お前を裸にして縛り上げて、吊り責めにして、指を一本ずつ切り取ってやるわ!」

ヒステリックに叫ぶのは、ドタン場で勝敗が逆転した無念さのためもあるのでしょう。

「どうしてもお好きなようにしたらいいわ。とにかく私が勝ったのよ。私の左手には手枷が残っているんですもの。あなたがいくら愚

連隊を頼んだところで、もう私を追い出すことはできないのよ」

「ふん何をいうのよ。勝負はまだ付いた訳じゃないわ。お前の胃の内にある鍵は薬を使って取り出す方法だってあるわ。ヤスリで手枷を切ることもだってできるしね」

残念ながら美奈子のいうことは本当です。

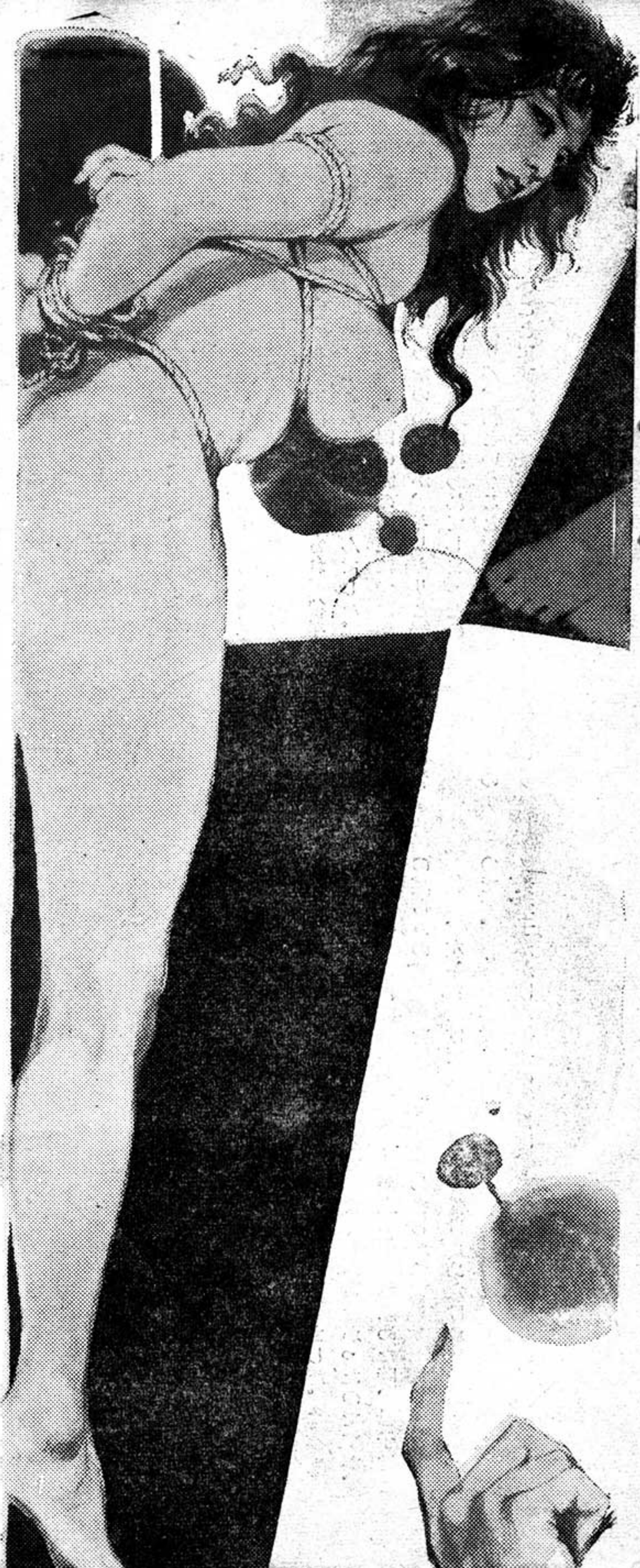
下剤をかけられれば、鍵は妙子の体の内にいつまでも残ってはいないでしょう。

口から入れる薬ならば、抵抗してのまなければいい。けれども、手や足を縛られて、もっと他の羞かしい方法を強行されたらどうなるのでしょうか。

美奈子は、どんな悪どい方法でも実行できそうな女です。背中 of 鞭の痕がズキズキと疼きだして、この女の恐ろしさを妙子の体に教えています。

ライバル——という、只それだけの理由で同性を鞭打つことのできる女なんて、妙子はいままで想像してみたこともありませんでした。追い詰められている自分よりも、私は城田のことを考えました。（あなた! 女二人を争わせて、あなたは今どこで何をしていたらっしゃるの? この女はあなたの愛を受ける資格なんか少しもない女だわ。いま、本性をむき出しにして妙子を虐めているこの女は、あ





なたの地位や経済力に魅力があるから、妙子を蹴落とそうとしているのだわ。どうか、わかって頂戴！ 鞭や縄を巧く使える女なんて、あなたの好みには合う筈はないわ。そんな女のお芝居に騙されて妙子を捨てたりしないで！ お願い！

美奈子の正体を彼に知らせるためには、私の背中に刻まれた鞭痕が役に立つのかも知れません。

もし、そうだとすれば私はもっと加虐されてもいい——と、マゾの女としてのそんな考え方が又しても頭をもち上げてくるのでした。

被虐の跡を城田に見せる機会が与えられるならば、妙子は自分の

マゾヒズムを武器として、あく迄も闘うわ。もう、手枷や鍵なんかどうでもいい。たとえ「解放」されたとしても、ムザムザこの家から追い出されたりするものか——。

私はそう考えることによって勇気を取戻したのですが、その時、美奈子は私の心を見すかしたような言葉を口にしたのです。

「考えてみると、私が自分独りでお前を追い出しに来たのは、どうやら間違いだったようね。たとえ手足を自由にさせてやっても、お前は素直に出て行くような女じゃないらしいわ。だからね、私は今から応援を頼みに行くつもりよ。女を品物のように扱うことの好きなコワイ男達をよんできて、お前を片付けさせるわ……」

私をお前などと呼び始めた美奈子は、私よりも年下の筈なのですが、その口から出る言葉は、まるで世智にたけた意地の悪い中年女のようにでした。

「その男達は、お前の体をしゃぶり尽してから、適当な始末をつけてくれる筈だわ。元々、お前は宿なし女なんだというから、そんな目に遇っても心配する家族もない訳だわね。その上、お前は誘拐されたり監禁されたりするのが嫌いじゃないというから、これは好都合だわ。全く……どうしてもっと早くそれに気が付かなかったのかしら……」

恐ろしい着想を愉しそうに語りながら、美奈子は別な縄を用意しました。

「さあ、私が楽しい目に遇わせてあげる。素直になさいよ」

「な、何を……」

「きまつてるじゃないの。お前を縛るのよ。男達をよびに行く間、縄と遊んでいなさい」

縄と遊ぶ——妙なことをいってから、美奈子は女豹のように襲いかかってきました。

すでに半分は体を括られている私ですから口惜しくてもどうにもなりません。

手枷の儘の左手に右手を深く重ね合わされ、後手に縛られてしまふまで、有効な抵抗はほとんどできませんでした。

この女から受ける苦痛が城田の愛の回復につながっている——という意識があったためなのかどうか、ギリギリと縄を緊め上げられながら妙子は、場違いな情感に捉われてしまったのです。

乳房や腰椎のあたりが、何ということでしょう、欣喜して疼くのです。浅ましいことですが、後手に縛られる——という状況になり

さえすれば、妙子の体は相手が誰であっても一瞬ざわめくのであることを知りました。

殉 教

「お前は、城田からどうされるのが一番つらかったの？」
括り終ってから、美奈子はそんなことを訊きます。

「つらいと思ったことなんか……」

「無い……といたいのね。芯からマゾ女なのね。私は、あそこへ吊られた時が一番いやだったわ。もう、この男とは別れよう、と思ったのもその時よ」

美奈子は天井の一角を指さします。

前衛的な装飾——と、知らない人はそう感じることでしょう。この部屋の壁や天井には意味ありげな曲線を描く鉄の棒が数カ所に取付けられているのです。

磔刑、晒し者、ハンモック型の吊り責め、その他いろいろな使い方のできる鉄の棒です。

「お前をあそこへ吊ってやるわ。この家での最後の思い出になるようにね……」

美奈子は長い縄の端を手枷の鎖とつなぎ合わせました。

最初のうちは何をされているのかよくわからなかったのですが、縄が天井の鉄棒にかかって私の体が上へ引かれ始めた時、妙子はその謀らみの残酷さを知って慄然としました。

私は、左手首だけで全身の重さを受け止めなければならなかったのです。

美奈子がかけた後手の縄目は、左手首の手枷を避けて縛ってある

のです。余った縄は胴へかけられています。ですから、両手を交差した部分に吊り縄が結びつけられたのなら私の体重は胴で受け止めることが出来るのですが、美奈子はそれをしませんでした。

「あッ……あッ」

吊り上げられながら、妙子は恐怖の叫びを洩らしてしまいました。

極限まで伸ばして体重をささえようとした私のつま先きの努力は、すぐに無意味となってしまいます。拇指の先端と床の間に十センチほどの空間を作られてしまったからです。

「どう？ この吊り方でも我慢が出来る？ 手首の関節が外ずれるかも知れないわよ。いえ、きつと外ずれるわ。外ずれても私の予定には差し支えがないけど……」

激痛を堪えるのに精一杯で、妙子はこの非情な迫害者を呪ってやることもできません。

「だいぶ痛そうね。余り早く苦しめるのも詰らないな……」

美奈子は何を思ったか、本を何冊か積み重ねて私の足に当てがいました。

そして、最後の仕上げにかかったのです。

鋏を使って私の服を切り取ることが、それでした。

「私は、お前の裸なんか、大して見たいとは思わないのよ。これはね、お前を可愛がりにやって来る男達へのサービスみたいなものよ」

冷たい裁ち鋏を容赦なく服の下へ差し込まれて——間もなく私は、

一糸もまとわぬ羞かしい姿にされてしまったのです。

「いい体ね。まるで男のためにだけ生まれてきたような体つきだわ。私はこれから駅前まで行って、お前のために買物をしてくるわ。それまでは、このまま本を踏んでいるといいわ」

美奈子は謎のようなことを云いました。

暫くの後——妙子は奇妙な拷問にかけられながら、独り悶える身となっていました。

美奈子の「買物」とは、駅近くの氷屋から氷を一貫目だけ買ってくることでした。

その氷を本の代りに置いて、美奈子は出て行ったのです。

妙子の足先は冷え切って、痛いまでになりました。右足と左足、つま先きと踵——というように堪える部分を交替させることもできるので、下手に動けば氷は滑ってしまいそうです。

念入りに、氷は絨毯を捲き上げてから置かれたのです。

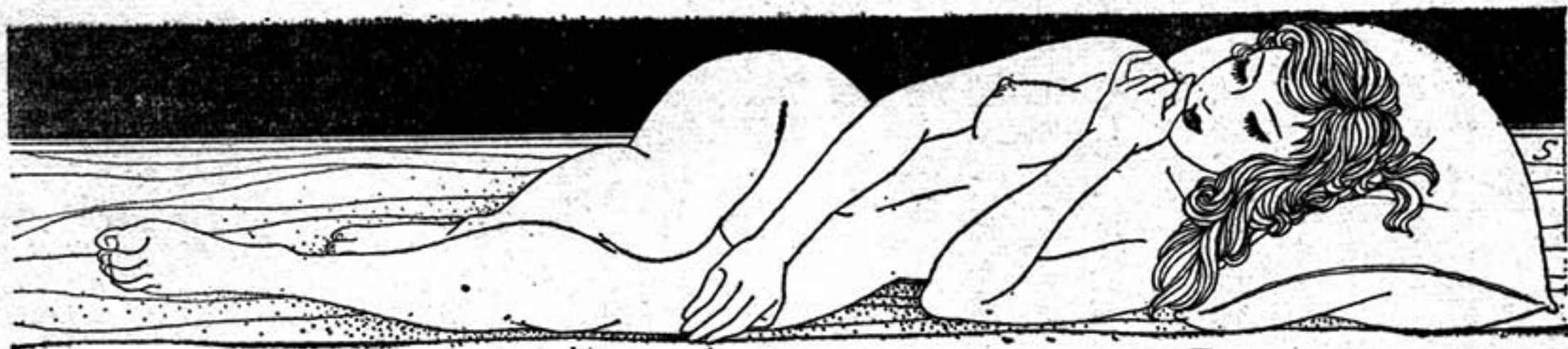
冷たさにも堪え、滑らせもしないとしても、妙子の体温は氷を次第に溶かして行くでしょう。

そして最後には、足の皮膚のすぐ下に冷たさだけを感じながら妙子の体は宙吊りの責苦に悶え始めるのです——。

いつしか妙子は、殉教者の祈りのような言葉を心の中でとなえ始めるのでした。

（あなたを愛しているわ。そのために妙子は今、自分を苦しめ抜いているのよ。苦しめ抜いて……）

★城田の愛だけを求めて殉教の祈りをささげる妙子にライバルの冷酷な復讐がさらに迫るか？



原稿募集

★読者随筆★ (四百字詰) 5枚〜10枚まで

本誌に適する風俗、社会、身边雑記、感想、見聞記等の随筆思いついたままを書いてお送り下さい。
原稿料は一枚百五十円。

★告白体験記★ (四百字詰) 20枚前後

真実の告白手記、得がたい体験といったものを求めます。本誌むぎの原稿をどしどしお送り下さい。
原稿料は一枚につき百五十円。

★創作★ (四百字詰) 25枚まで

S、M、その他を扱った作品をお寄せ下さい。妖気た
だよう、異色あるものを募ります。
原稿料は一枚につき百円〜二百円。

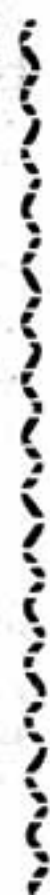
★読者短評★ (四百字詰) 1枚〜3枚程度

本誌最近号に対する批評をお書き下さい。全般的な批評や個々の作品、挿絵、編集のあり方等について、いろいろ御不満な点や御希望や、良かったと思ったことなどがあると思いますが、真面目な短評をお寄せ下さい。

これに対する御礼は、郵券代として百円と本誌一冊
(短評掲載号の次号)をお送り致します。

★裏窓雑報★ (四百字詰) 3枚〜20枚程度

映画、演劇、テレビ、ラジオ、週刊誌、月刊誌、新聞記事、その他における裏窓的な見聞をお知らせ下さい。週刊誌、新聞の場合は切り抜きをお送り下さっても結構です。いずれの場合でも、必ず次の点を明らかにすること。「新聞・雑誌」の場合は、新聞・雑誌名、作者・筆者名、年月号。「映画・演劇」の場合は、映画社名、劇場名、監督、演出者名、題名、出演者、日時等。「テレビ・ラジオ」の場合は、局名、題名、演出者、出演者、日時等。原稿料は一枚につき、百円〜百五十円。



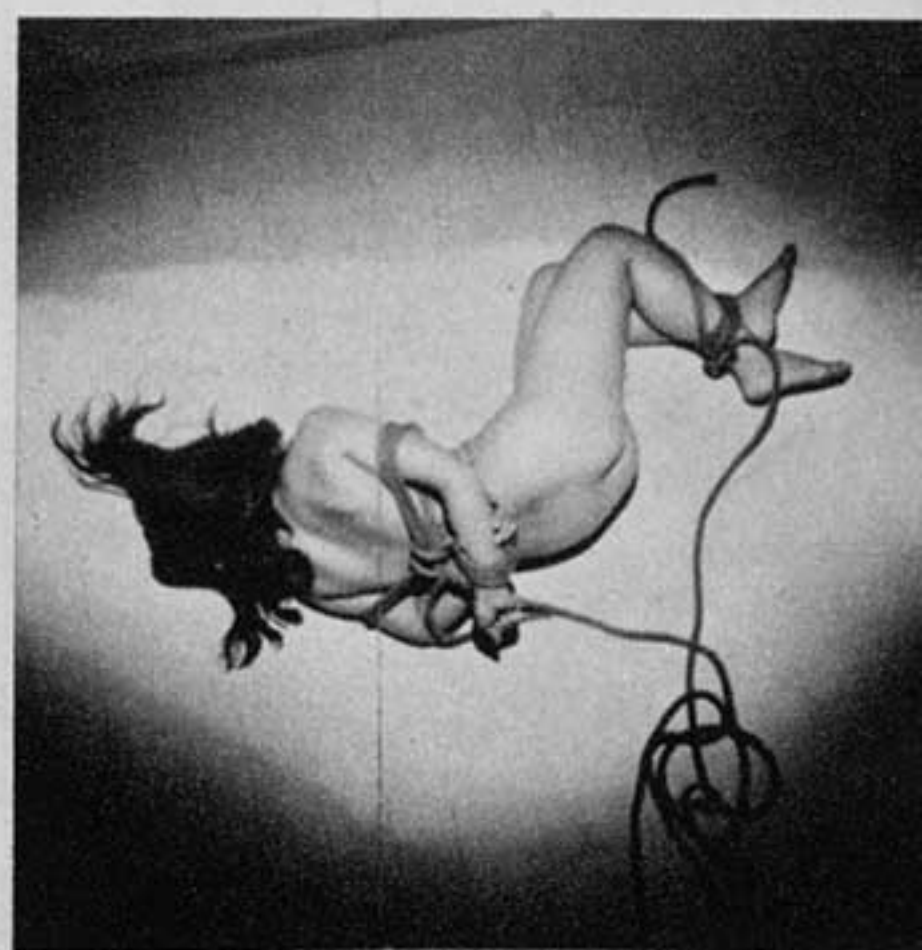
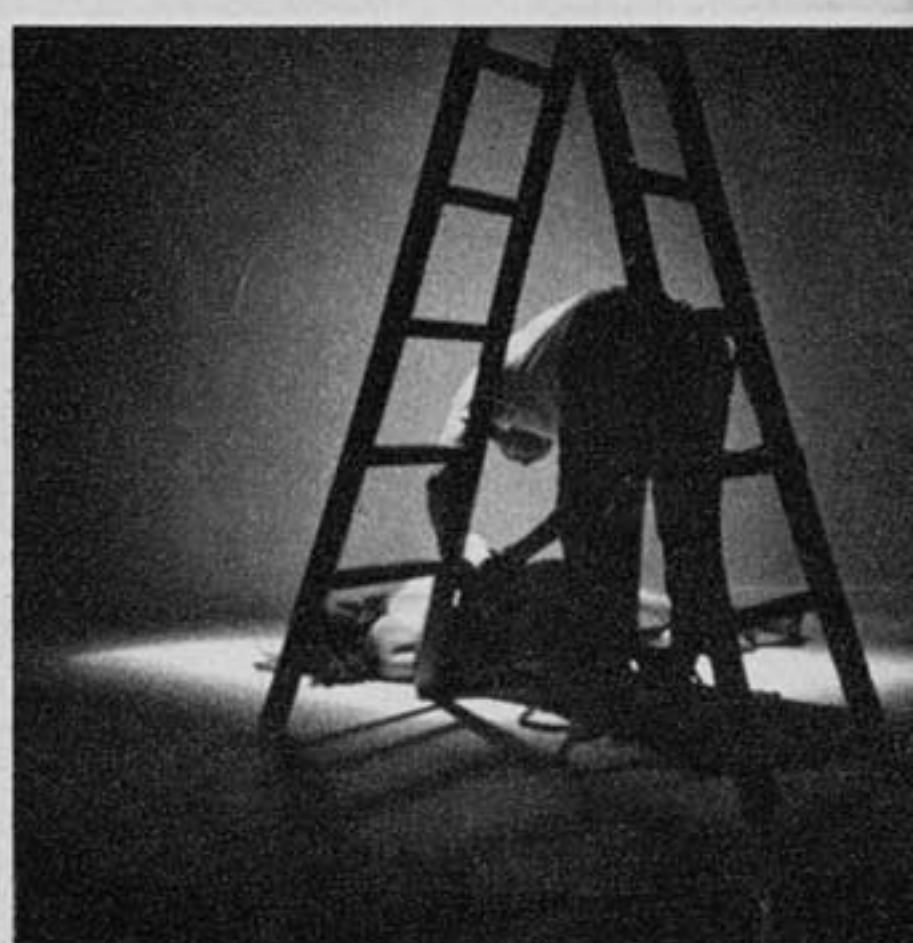
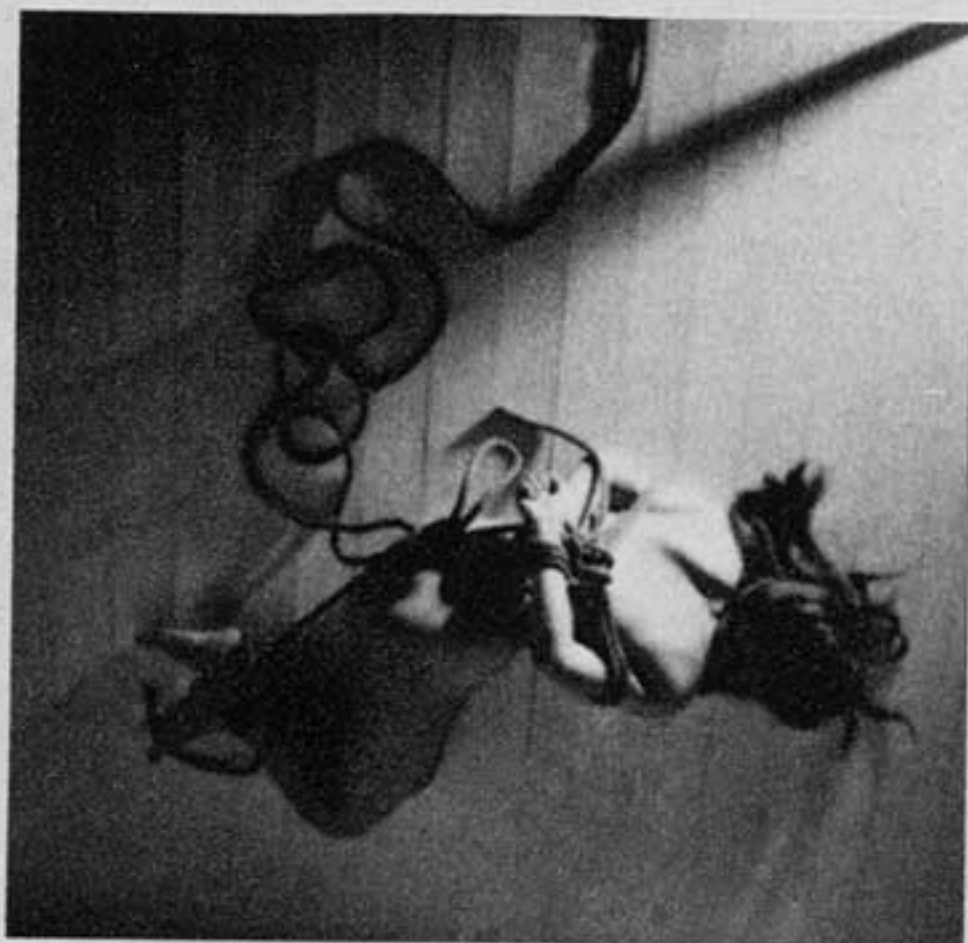
- ◎応募原稿はそれぞれの種別を朱書すること。
- ◎原稿は第五種郵便になりますから、百グラム毎に八円の郵券を貼り、開封にして投函して下さい。
- ◎原則として、応募原稿はお返し致しませんから、必要ある場合はコピーをとっておいて下さい。
- ◎原稿の送り先は左記の通りです。

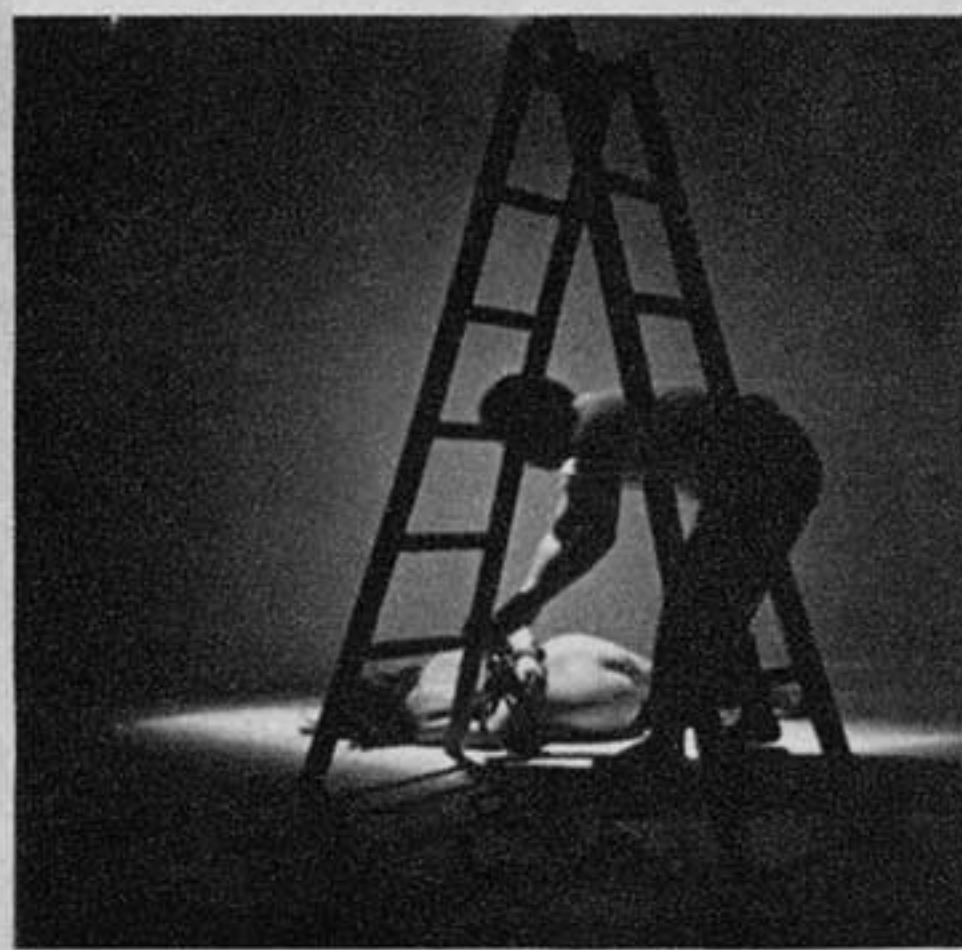
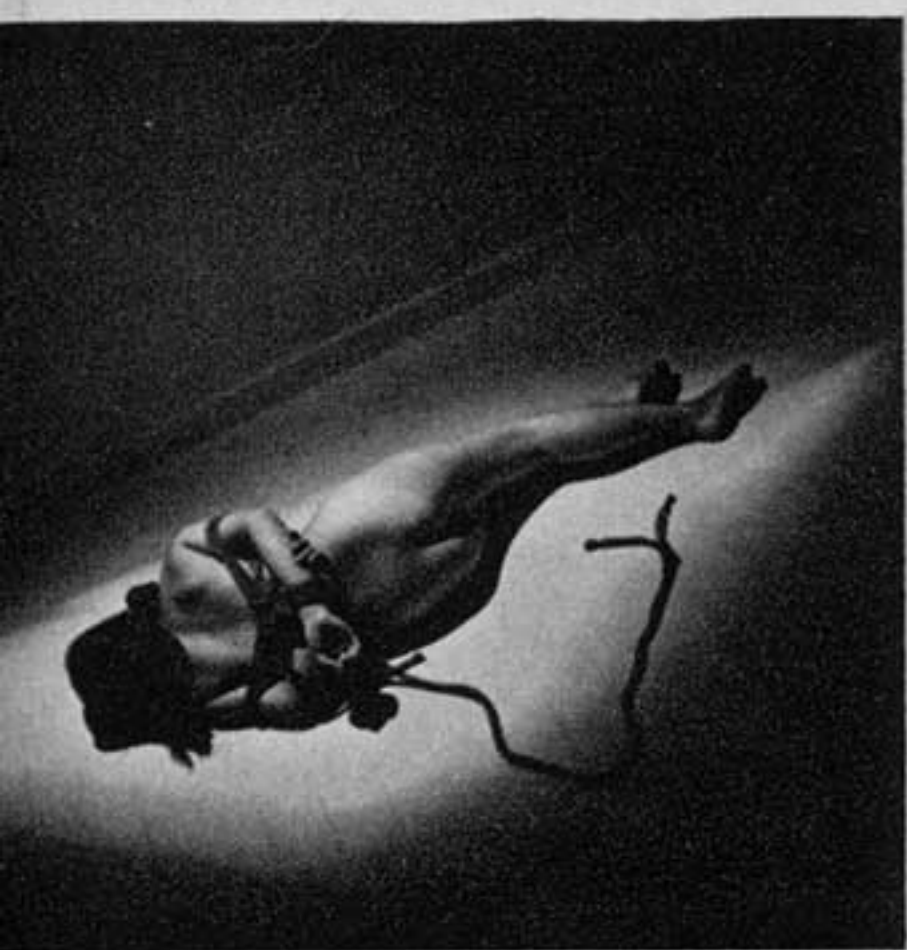
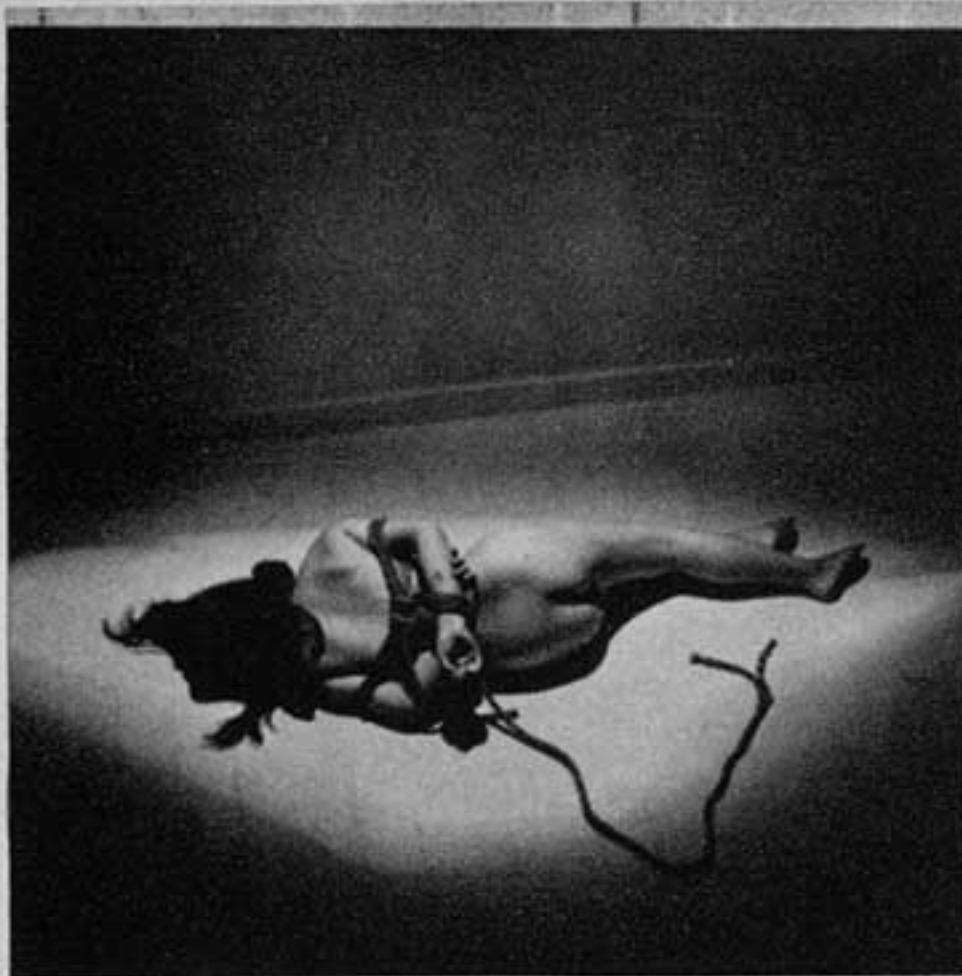
東京都中野局区内江古田一の二三〇二

久保書店內 裏窓編集部

悦虐フォト集







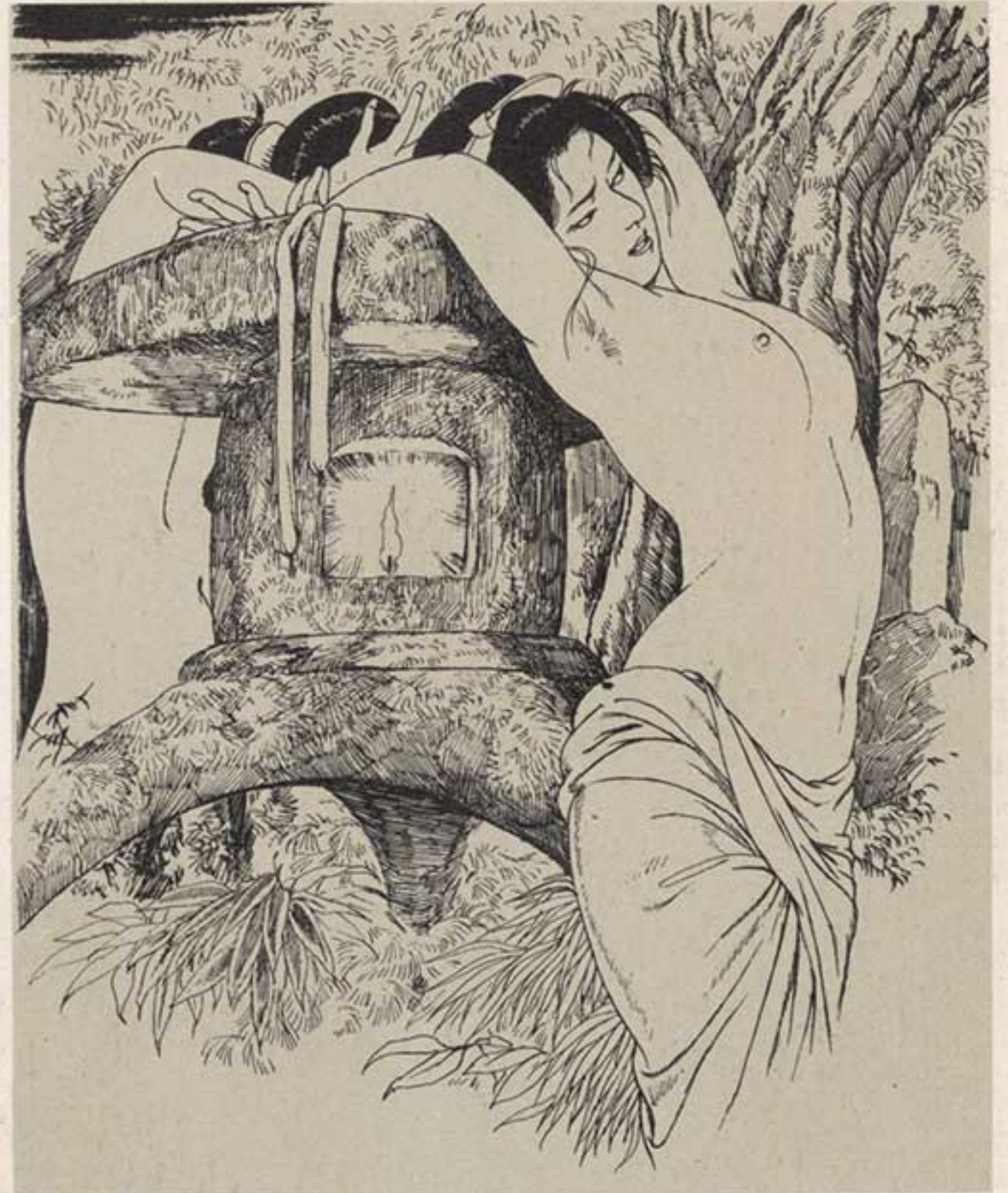




裏	窓	既	刊	号
挿	絵	名	作	選

34年三月号 “剥製幻想曲”

作・夏本圭之助 画・古正英生



34年五月号 “まぼろし侍破魔暦・柔肌灯籠”

作・黒木 忍 画・中島喜美

★小ぬか雨の庭先で雪見灯籠にくぐられたのは叶屋のお内儀と、その娘おこよの白くくねる肢体だった。盗っ人かぶりの三人組の悪戯である。何者の意趣か？ まぼろし侍と巾着切りのお千加が探し出したのは？



33年九月号 “琴姫散華”

作・葉田 光 画・栗原 伸

★城を脱出した女たちは、一糸纏わぬ裸形にされて後手縛りの屈辱の姿を一行に並べた！

34年八月号“美女と野獣”

文・秋津京太 画・古正英生

★幕舎の中央から宙吊りにされた美女
みどりに鞭を揮う一寸法師の紋太郎!



34年六月号“妖異女宝島”

文・葉田 光 画・歌川大雅

★関ヶ原を逃げ出す遊女屋の一行に救われた落
人の美女! しかし妖しい悲運がその上に待ち
構えていたのだ!



34年五月号“まぼろし侍破魔暦・柔肌灯籠”

作・黒木 忍 画・中島喜美

★深沈とふける四ッ半過ぎ、阿部川町の油屋、叶屋に押
し込んだ三人組は、女たちを片っぱしから縛りあげて一
室に集め、この中から内儀の娘を探しだそうとしたが、
内儀は、いかに責められても娘の所在を吐こうとせず、
うれきった肉体をさらけ出して色っぽく悶えるのだった。



34年八月号“地獄医者”

文・飯田豊吉 画・中島喜美

★ひき剥け！肌吟味だ！柔肌に縄が

34年六月号“絢爛たる舞踏”

文・秋津京太 画・古正英生

★新しい振付けに苦しむ進吾は
鉄鎖の裸女に鞭を揮ったのだが



34年二月号“警怨私刊抄（下）”

文・鈴木和夫 画・東 桂史

★加賀騒動における浅尾は、大きな瓶の中に入れられて数百の蛇に責められた！ 酒に苦しんだ蛇は浅尾を敵と思ってその生身に襲いかかる



34年四月号“恩讐地獄ぐるま”

文・中林節三 画・山田彬弘

★盲人が随喜して詣でる洞穴に御利益あらたかな弁天像！ 法楽か地獄か呪われた小町の身に触手が！



34年九月号“怨讐二人小町”

作・久我風太郎 画・栗原 伸

★くすぐり責めのために胸もとをはだけ、白い乳房をあられもなく剥きだしている腰元琴路は、燃えるような湯文字を覗かせながら、きびしく縛りあげられて引っ立てられた！

裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302 株式会社 久保書店 (振替東京 10756)

36年(三月号) 一五〇円

36年(二月号) 一五〇円

36年(一月号) 一五〇円

35年(十二月号) 一五〇円

○グラビア・光と影の構図……………深森 映士	○悦虚の部屋……………吉田 久	○責め絵秘画集……………編集部・編	○絵物語 修羅繩小町……………文・柳沢 直彦 画・堂 昌一	○絵物語・Y座文芸部員……………文・花巻京太郎 画・根元 裕	○絵物語・女間蝶は悶える……………文・依田 精二 画・沖 涉司	○絵物語 明日の晩また逢ってね……………文・松平 莊司 画・山田 彬弘	○絵物語・妖説閨人形……………画・中島 喜美	青い情事……………豊田 一狼	あばずれから逃げろ！……………長谷川 勇	不動堂の女……………明石 汐子	マゾヒズムへの誘惑Ⅲ……………黒田 史朗	妄執の炎……………小田桐 爽	明治癡狂院秘話……………樋口 逸馬	スカートの下の世界(2)……………阿麻 哲郎	市民生活の中のアブ……………阿里 俠二	黒髪懺悔(青春編)……………志摩 不二	裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編	悦虚の園Ⅲ受縛の詩……………殿村 恵
------------------------	-----------------	-------------------	----------------------------------	-----------------------------------	------------------------------------	--	------------------------	----------------	----------------------	-----------------	----------------------	----------------	-------------------	------------------------	---------------------	---------------------	----------------------	--------------------

○グラビア・悦虚フォト特選集・編集部・編	○悦虚の部屋……………深森 映士	○責め絵秘画集……………編集部・編	○絵物語めくら狼……………文・藤見 郁 画・堂 昌一	○スパイは真夜中に死ぬ……………文・松平 莊司 画・沖 涉司	○〃狙われた眼……………文・依田 精二 画・豊田みのる	○スカートの下の世界(1)……………阿麻 哲郎	黒髪懺悔(続・少年編)……………志摩 不二	妄執の影……………万里小路 崑	遺産相続猫……………長谷川 勇	錯誤の犠牲者……………九十九 郎	マゾヒズムへの誘惑……………黒田 史朗	古パンティ一五〇枚の効用……………永井卓二 郎	さくら塚縁起……………久富 浩司	黒い奴隷の残酷物語……………森脇 光	布はいつもぬれている……………秋 久夫	悦虚の園Ⅱ飼われる女体……………殿村 恵	幻の痴漢……………風間 練太郎	絵物語・逆立ち小町……………文・坊城 友成 画・中島 喜美	梅に呪われた女……………鳴滝 三郎
----------------------	------------------	-------------------	-------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------	-------------------------	-----------------------	-----------------	-----------------	------------------	---------------------	-------------------------	------------------	--------------------	---------------------	----------------------	-----------------	----------------------------------	-------------------

○グラビア・白い壁……………深森 映士	○悦虚フォト特選集……………編集部・編	○既刊号挿絵名作選……………編集部・編	○絵物語・招かざる危難……………文・依田 精二 画・沖 涉司	○絵物語・縄恋罪業記……………文・藤見 郁 画・堂 昌一	○絵物語・男になり損った男……………文・豊田みのる 画・中島 喜美	○絵物語・大奥裸女絵巻……………画・中島 喜美	人が消える沼の家……………九十九 郎	間魔堂絵師……………矢桐 重八	女中になりたい男の話(4)……………阿麻 哲郎	愛難場面面の女優たち……………芝 利泰	マゾヒズムへの誘惑……………黒田 史朗	東京へど野郎……………南村 蘭	尻を振って走れ……………阿里 俠二	悪魔の魚は口まで黒い……………長谷川 勇	黒髪さんげ(少年篇)……………志摩 不二	落武者非命……………久富 浩司	女囚と胎教……………鳴滝 三郎	黒髪夜話……………黒崎 善之	悦虚の園(1)因われの檻……………殿村 恵
---------------------	---------------------	---------------------	-----------------------------------	---------------------------------	--------------------------------------	-------------------------	--------------------	-----------------	-------------------------	---------------------	---------------------	-----------------	-------------------	----------------------	----------------------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------------

○グラビア・秋の夜……………深森 映士	○悦虚フォト特選集……………編集部・編	○責められる女の表情集……………編集部・編	○絵物語・女スパイと裏切者……………文・依田 精二 画・沖 涉司	○〃彼の孤独な夜の遊び……………文・堂 昌一 画・古正 英生	○〃異変女隠密記……………画・古正 英生	女神の足の下……………泉谷 洋	マリヤ受難記……………黒部 恭治	お町の危難……………花巻京太郎	黒髪さんげ(幼年篇)……………志摩 不二	マンハッタン倶楽部(4)……………鶴 吐夫	明治時代の女権無視……………河西 恒一	足を殺してやりたい……………阿里 俠二	妖髪記……………鳴滝 三郎	二色オフ……………文・坊城 友成 画・中島 喜美	絵物語……………	裏窓タウン……………森下 高茂	マゾヒズムへの招待……………阿麻 哲郎	女中になりたい男の話(3)……………阿里 俠二	痣を見た女……………院南 五郎	鬼乳房伝奇(六)……………飯田 豊吉
---------------------	---------------------	-----------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	----------------------	-----------------	------------------	-----------------	----------------------	-----------------------	---------------------	---------------------	---------------	-----------------------------	----------	-----------------	---------------------	-------------------------	-----------------	--------------------

35年十一月号・一五〇円

○グラビア・ヌード傑作選……………	編集部・編
○あるポーズ……………	吉田 久
○囚われの構図……………	深森 映士
○絵物語・能面の女は悶える……………	画・山田彬弘
○絵物語・執念の白髪鬼……………	文・藤見 郁 画・堂 昌一
○絵物語・悪の報い……………	画と文・中島喜美
嘉七老人のコレクション……………	栗橋 譲
火焙りについての考察……………	吉田 義雄
お尻の下のおも……………	泉谷 洋
マゾヒズムへの招待……………	森下 高茂
マンハッタン倶楽部(3)……………	鶴 嘔吐夫
女スパイと鬼憲兵……………	笹木 恵一
黒髪散歩……………	黒崎 良之
女中になりたい男の話(2)……………	阿麻 哲郎
悪女の栄え……………	西田 仁
悪魔が覗くバスルーム……………	東城京太郎
くすぐり部屋……………	円城寺 達
私は耳の穴そうじ師……………	須能 秀雄
嘘つきの遺言……………	村岡 藤里
身悶える白い人質……………	依田 精二
鬼乳房伝奇(五)……………	飯田 豊吉

35年(十月新装号)・一五〇円

○グラビア・悦虎ヌードの幻想・藤沢 修	編集部・編
○ある表情……………	編集部・編
○悦虎ヌード傑作選……………	編集部・編
○絵物語・俺の心に悪魔が住む……………	画・堂 昌一
○絵物語・悦虎作家の秘密……………	画・山田彬弘
○絵物語・女間諜の最期……………	文・依田精二 画・豊田みのる
ピララの敗北……………	南村 蘭
肩車に乗る女たち……………	泉谷 洋
マゾヒズムへの招待……………	森下 高茂
鏡の中に他人がいる……………	長谷川 勇
マンハッタン倶楽部(2)……………	鶴 嘔吐夫
責めの挿絵……………	山根 豊
切腹と磔についての考察……………	吉田 義雄
黒髪をしゃぶる……………	倉科 信介
女中になりたい男の話……………	阿麻 哲郎
黒髪教団秘記……………	志摩 不二
天狗の安について……………	長岡愛一郎
既刊号挿絵名作選……………	編集部・編
絵物語・刻参りの女……………	画と文・中島 喜美
鬼乳房伝奇(四)……………	飯田 豊吉
見たもの聞いたもの……………	

35年(九月号)妖気感覚小説特集 一一〇円

○カラーヌード……………	海外 特約
○絵物語・洞窟の魔女……………	文・真木不二夫 画・山田 彬弘
○絵物語・続肌伝法……………	画と文・中島 喜美
裏窓既刊号挿絵名作選……………	編集部・編
肌絵しらべ……………	清原伸二郎
乳房小天狗……………	藤白 欣嗣
黒髪教団秘記……………	志摩 不二
続婦人課報部員(二) 檻……………	文・依田 精二 画・沖 涉司
連載まんが・おうら草紙……………	左 次朗
開化牢獄奇話……………	鈴木 和夫
沙漠を走る船……………	長谷川 勇
悪魔祭壇末記……………	鳴滝 三郎
マンハッタン倶楽部……………	鶴 嘔吐夫
萬のある魔屋……………	豊田 一狼
セルジュとシュヴァンダ……………	原 忠正
黄色い肌の犬……………	南村 蘭
鬼伏の裸女……………	島本 春雄
鏡花世界の女性像……………	中康 弘通
くすぐり部屋……………	円城寺 達
鬼乳房伝奇(三)……………	飯田 豊吉

35年(八月特大号)濃艶女白浪特集 一一〇円

○グラビア・ヌード傑作選……………	藤沢 修
○カラーヌード・吊られる女……………	藤沢 修
○絵物語・処刑の階段……………	画・山田 彬弘
○絵物語・女郎蜘蛛……………	画と文・中島 喜美
○絵物語・続肌丁半……………	画・古正 英生
裏窓既刊号挿絵特選集……………	編集部・編
ラシャメン白浪……………	矢桐 重八
緋牡丹銭……………	島本 春雄
化粧蝙蝠……………	万里小路崑
奇麗な女仏洞……………	紋司 弥八
火星人の魔手……………	浜松 武
続婦人課報部員(一) 良……………	文・依田 精二 画・沖 涉司
黒髪教団秘記……………	志摩 不二
開化刑罰奇談……………	鈴木 和夫
伝奇妖魔姫……………	三国沢 隆
眼玉をつかめ……………	長谷川 勇
女人悲傷譜(三)……………	中康 弘通
崖の下夫婦……………	藤見 郁
鬼乳房伝奇(二)……………	飯田 豊吉
復(ふくしゅう) 響……………	西田 仁
刺青さんげ……………	美波千太郎

35年(七月号)あぶちっく小説特集 一一〇円

○カラーヌード……………	イラスト・ウエスト特約
○絵物語・恐怖の山小屋……………	文・松平 莊司 画・山田 彬弘
○絵物語・柔肌訴状……………	画と文・古正 英生
○悦虎ヌード・囚われた探険家……………	編集部・編
蛇田氏の愛人……………	豊田 一狼
奇説裸女八幡……………	黒部 恭治
寝台は具合がよすぎる……………	長谷川 勇
姫破りぎやまん倉……………	葉田 光
サン・ラザールの女囚……………	鳴滝 三郎
ある幸福な一生……………	南村 蘭
木曜日に逢った男……………	橋 新太郎
監獄部屋秘譚……………	樋口 逸馬
灰色のバック……………	宇治 研介
新連載・鬼乳房伝奇……………	飯田 豊吉
鏡花世界の女性像(二)……………	中康 弘通
金色の死……………	宇治川 龍
国司邸炎上(下)……………	瀬川 泰子
黒髪を織る兵隊(五)……………	志摩 不二
連載まんが・おうら草紙……………	左 次朗
奇妙な遊戯……………	秋野 まり

35年(六月号) 天変三日月秘文・特集号

- カラーモード・鎖と女……………村 真佐児
○絵物語・死体が歩いた!……………文・松平 莊司
画・山田 彬弘
○絵物語・鈴姫伝奇……………文・藤見 郁
画・小日向一夢
○絵物語・女囚の危機……………作・中島 喜美
画・沖 涉司
時代長編・天変三日月秘文……………文・依田 精二
画・万里小路寛
復讐呪縛鬼……………黒部 恭治
国司邸炎上(上)……………瀬川 泰子
絵物語・覗き魔は夜に生れる……………文・秋吉 樹
腹話術の幽霊……………長谷川 勇
挿話切腹史……………中康 弘通
黒髪を織る兵隊(四)……………志摩 不二
明治権妻綺譚……………樋口 逸馬
くらのなか……………円城寺 達
梨花社長の秘密……………南村 蘭
うらまどスコープ……………芝 利奈

35年(五月特大号) 仁俠義賊特集 一五〇円

- グラビア・モード傑作選……………吉田 久
○カラーモード・夜を待つ女……………海外 特約
絵物語・恐怖の穴……………画・山田 彬弘
絵物語・濡衣草紙……………画・古正 英生
〃・殺し屋をバラせ!……………画・秋吉 樹
紅蓮小僧曼陀羅……………多摩 群平
印籠呪縛……………丘野 武也
おどろ雨……………円城寺 達
へんな模範囚……………長谷川 勇
金髪女は泣かない……………D・リチャード
ふくらみが誘う……………草 文彦
からゆきさん物語……………樋口 逸馬
女人悲傷譜(二)……………中康 弘通
悪魔の湖……………黒羽 新
雨夜さんげ……………矢桐 重八
連載絵物語(1)藩地の女囚……………文・依田 精二
画・沖 涉司
黒髪を織る兵隊(三)……………志摩 不二
ヘア・ピン……………明石 汐子
怨霊裸女(下)……………黒部 恭治
泣き兵衛(終回)隠密愛憎記……………飯田 豊吉
未整理棚の中から……………編集部・編

35年(四月号) 異色時代小説特集号 二二〇円

- カラーモード・水浴する女……………海外 特約
○絵物語・仮面を剥がせ!……………文・鳥丸 克彦
画・山田 彬弘
○絵物語・異説山姫さま……………画と文・中島喜美
妖槍柔肌秘聞……………小田桐 爽
妖異屋敷……………中林 節三
ある男の生涯……………矢桐 重八
怨霊裸女(上)……………黒部 恭治
抜荷船の女……………潮田麒麟一郎
魔剣地獄……………丘野 武也
十二分の三の幸運……………長谷川 勇
爪が死を呼ぶ……………草 文彦
髪恋幕……………志摩 不二
マダム魔美の晩餐……………南村 蘭
堀主水一件始末(下)……………瀬川 泰子
維新神戸事件……………中康 弘通
江戸奉行譚……………鈴木 和夫
うらまどスコープ……………芝 利奈
泣き兵衛巷囃子・野香猫騒動……………飯田 豊吉
或る美容体操……………編集部・編
誌上試写・十三段階への道……………

35年(三月号) 伝奇小説特集号・二二〇円

- カラーモード・髪を持つ女……………タトル特約
絵物語・素膚の火を消せ!……………文・橋 新太郎
画・山田 彬弘
鷹の巣谷伝奇……………藤見 郁
血を呼ぶダイヤ……………葉山 猛
伝奇狒々族呪縛……………水沢 雪夫
伝奇むささび香炉……………多摩 群平
愛憎符印……………粕 勝彦
白猿塔伝奇……………文・矢桐 重八
画・古正 英生
或る美容体操……………編集部・編
雪魔女は四本指……………長谷川 勇
屑籠が招いた……………草 文彦
陰花の罌……………鶴沼 二郎
刑具因俗抄……………鈴木 和夫
法念寺奇談……………丘野 武也
浅太郎しぐれ……………三国沢 隆
堀主水一件始末(上)……………瀬川 泰子
鏡花世界の女性像……………中康 弘通
紅草紙……………円城寺 達
裸女は妖夢に崩れる……………峠 浩介
泣き兵衛巷囃子・地獄絵女房……………飯田 豊吉

35年(二月特大号) 女隠密女スパイ 一五〇円

- カラーモード・悩乱……………撮影・藤沢 修
○グラビア・モード傑作選……………
絵物語・微笑に謎あり……………画・山田 彬弘
絵物語・フラミンゴの脚……………画・秋吉 樹
犬武者脱走記……………矢桐 重八
隠密釣天井……………中林 節三
暗黒街の女猫……………豊田 一狼
夜霧の中で……………竹谷 十三
密林戦の妖花……………藤見 郁
ラスベガスの女スパイ……………黒羽 新
女間諜暗躍譚……………鈴木 和夫
絵物語・肌絵狂女……………画・古正 英生
肌を這う悪夢……………襟 残
鉄瓶の中の赤ん坊……………長谷川 勇
足に憑かれる……………草 文彦
或る美容体操……………編集部・編
黒髪を織る兵隊(二)……………南村 蘭
濡衣組往生記……………志摩 不二
探査会事件……………小田桐 爽
泣き兵衛巷囃子・妄執血汐絵図……………飯田 豊吉

35年(新年号) 陶酔小説特集号・一二〇円

○カラーヌード・蛇と女……撮影・藤沢 修	○絵物語・墓穴を掘れ……画・山田 彬弘	○絵物語・魔像屋敷……画と文・中島 喜美	お雪さんの乳房……文・勝彦	ゴミ箱の中の裸女……文・文彦	悪魔の芋に指がある……長谷川 勇	黒髪を織る兵隊(一)……志摩 不二	隅の鬼が体にさわる……岬 洋之助	山に殺された男……鬼山 絢策	或る美容体操……編集部・編	美女密使……丘野 武也	うるむ星座……藤川 博	仇討修羅道……小田桐 爽	三春党秘聞(二)……瀬川 泰子	怪盗奇賊抄……鈴木 和夫	東京の顔(二)……織田静太郎	絵物語・比丘尼忠臣蔵……文・矢桐 重八 画・古正 英生	白蠟荘事件……藤見 郁	泣き兵衛巷囃子・軍鶏屋敷異変……飯田 豊吉	危難場面を分類すれば……芝 利泰	受難桜……久我風太郎
----------------------	---------------------	----------------------	---------------	----------------	------------------	-------------------	------------------	----------------	---------------	-------------	-------------	--------------	-----------------	--------------	----------------	--------------------------------	-------------	-----------------------	------------------	------------

34年(十二月号) 妖美小説特集・一二〇円

○カラーヌード・赤い布	○絵物語・十字架の美少女……文・鳥丸 克彦 画・山田 彬弘	美加留夫人と三人の奴隷……南村 蘭	炎(ほのお)……浜松 武	まんじゅう魔女……佐々木 力	喪家の犬……長谷川 勇	天井に気いつけなはれ……兵庫 圭八	恐ろしき遺書……文津部三郎	色貢・或る美容体操……編集部・編	絵物語・姐御道中……中島 喜美	愛の煉獄……藤川 博	東京の顔(一)……織田静太郎	女人悲傷譜……中康 弘通	女狐髪……志摩 不二	絵物語・(紫の花)……文・依田 精二 画・秋吉 樹	絵物語・非人大名……画・古正 英生	黒子受難……小田桐 爽	三春党秘聞(一)……瀬川 泰子	乱れ髪夜話……久我風太郎	女たちの寝室……宇治川 龍	泣き兵衛巷囃子・苦船地獄……飯田 豊吉
-------------	----------------------------------	-------------------	--------------	----------------	-------------	-------------------	---------------	------------------	-----------------	------------	----------------	--------------	------------	------------------------------	-------------------	-------------	-----------------	--------------	---------------	---------------------

34年(十一月特大号) 倒錯小説・一五〇円

○グラビア・ヌード傑作選……松下 正雄	○絵物語・謎の裸女像……画・山田 彬弘	○絵物語・お薦受難……中島 喜美	唇が悪魔を呼ぶ……浜松 武	黒い沼……長谷川 勇	そうされたい男……麻曾 保	地蔵怪……伊集院 光	鉄鎖の解ける時……鳴滝 三郎	醜聞を売る男……尾崎 新	彼女は犬になった……朝来美佐男	初夜の誓い……瀬川 泰子	愛怨相馬双紙……三國沢 隆	奇話妖談抄……鈴木 和夫	○連載絵物語・紫の花(一)……文・依田 精二 画・秋吉 樹	未完の友情……藤川 博	会津娘軍……中康 弘通	髪花火……志摩 不二	色貢・或る美容体操……編集部・編	情炎の文……岩堀 光	幽霊小町……寿々喜多呂九平	泣き兵衛囃子・猛襲隠しが原……飯田 豊吉
---------------------	---------------------	------------------	---------------	------------	---------------	------------	----------------	--------------	-----------------	--------------	---------------	--------------	----------------------------------	-------------	-------------	------------	------------------	------------	---------------	----------------------

34年(十月号) あぶ・すとおりの特集

○絵物語・さそり座から来た女……中島 喜美	○グラビア・ヌード傑作選……藤沢 修	河馬を崇める男……文津部三郎	最後の客……長谷川 勇	髪吹雪……志摩 不二	あたしは蛙じゃない……鳴海 玄吉	女たちの檻……辻 哲哉	少年……藤川 博	執念の蛇……尾崎 新	色欲蓮華蔓茶羅……三國沢 隆	月の篠原……瀬川 泰子	少年切腹史……中康 弘通	娘さらい影法師……篠田 一平	女王の切り札……竹谷 十三	妖異巷談抄……鈴木 和夫	ボーイ十年……島 容教	色貢絵物語・暗黒の触手……画・鈴木 初男	お道変化……藤 琴也	奥様に男が出来た……鶴沼 二郎	泣き兵衛・妖虫からくり地獄……飯田 豊吉	未整理棚の中から……偏 執子
-----------------------	--------------------	----------------	-------------	------------	------------------	-------------	----------	------------	----------------	-------------	--------------	----------------	---------------	--------------	-------------	----------------------	------------	-----------------	----------------------	----------------

34年(九月号) 大奥後宮秘史特集 一二〇円

○絵物語・桃色の怪盗……文・豊田 一狼 画・古正 英生	○グラビア・ヌード傑作選……藤沢 修	秘説千代田絵巻……矢桐 重八	夜叉駕籠……島本 春雄	むささび悲願……橋爪 彦七	大奥闘花図絵……中林 節三	妖雲練馬御殿……小田桐 爽	狂妃の罌……藤見 郁	続・女腹切りの史実と小説……中康 弘通	怨讐二人小町……久我風太郎	絵物語・美肌小姓……中島 喜美	未整理棚の中から……偏 執子	怪異河童小僧……寿々喜多呂九平	お龍秘帖……円城寺 達	妖婦悪党抄……鈴木 和夫	髪弁天……志摩 不二	墓場から来た悪魔……長谷川 勇	えんぴつ地獄……鳴海 玄吉	つごもり池……溝呂木寂子	泣き兵衛巷囃子・往生組始末記……飯田 豊吉	東京の死角で……黒羽 新
--------------------------------	--------------------	----------------	-------------	---------------	---------------	---------------	------------	---------------------	---------------	-----------------	----------------	-----------------	-------------	--------------	------------	-----------------	---------------	--------------	-----------------------	--------------